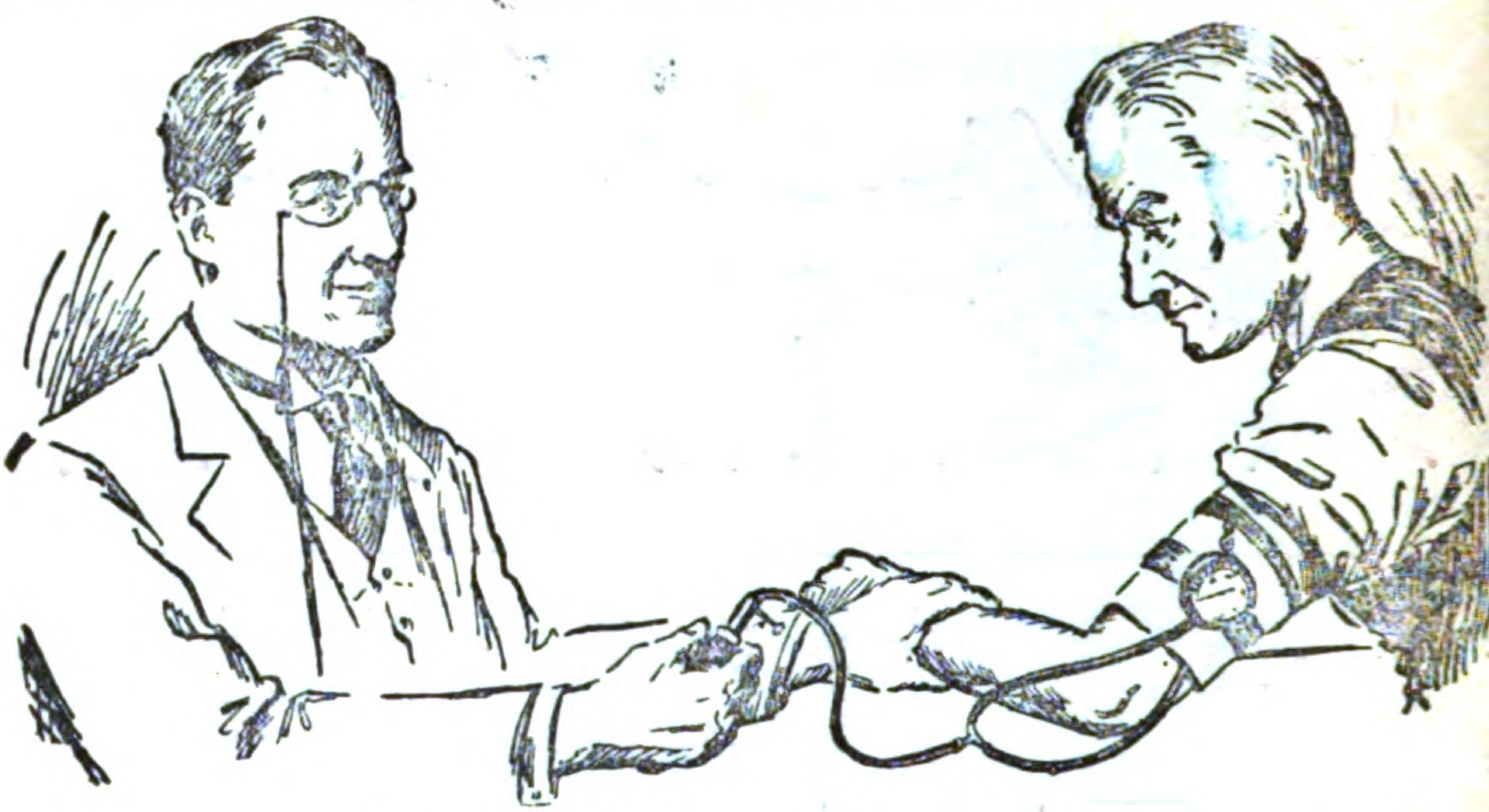
KAIZO

改造

七月號

1925


プラトン
萬年筆
プラトンインキ
萬年筆用
プラトンインキ
舶來品に優る最新最
良のプラトン萬年筆



血管の硬化と……腦溢血の危險

その治療及豫防内服藥

アニマザ

血壓を低下し諸症狀を輕快す



動脈の硬化は怖る可き腦溢血の誘因となり、壯年期にある貴重の人命に急死の不幸を與ふ。その治療と豫防は世界各國の醫家が最も苦慮するところなりしが、健康なる幼若動物の血管内膜及中膜より得たる臟器製劑アニマザの内服が、最も信賴し得る藥劑として獨逸ギーゼン大學グリースバッハ教授を始め多數醫家により高唱さるゝに至れり。

本症は特殊の生活狀態にあるもの例へば、大酒家、美食家、體格肥滿者、腦力過勞者、白粉(鉛)中毒者、腎臟炎、糖尿病患者、煙草中毒者、梅毒黴患者等を襲ひ、眩暈、不眠、頭痛、呼吸促進、心悸亢進等の症狀を訴へ、血壓の昂進を來すものなり

アニマザは動脈硬化症の進行を阻止し、延いては腦溢血をも防止し得る有力なる治療劑たるのみならず、血壓亢進し易く動脈硬化症を續發すと考へらるゝものに對しては貴重なる豫防劑として近時盛んに賞用せらるゝに至れり。

說明書進呈　三〇錠入 貳円四拾錢　一〇〇錠入 六円八拾錢　各地著名藥店にあり

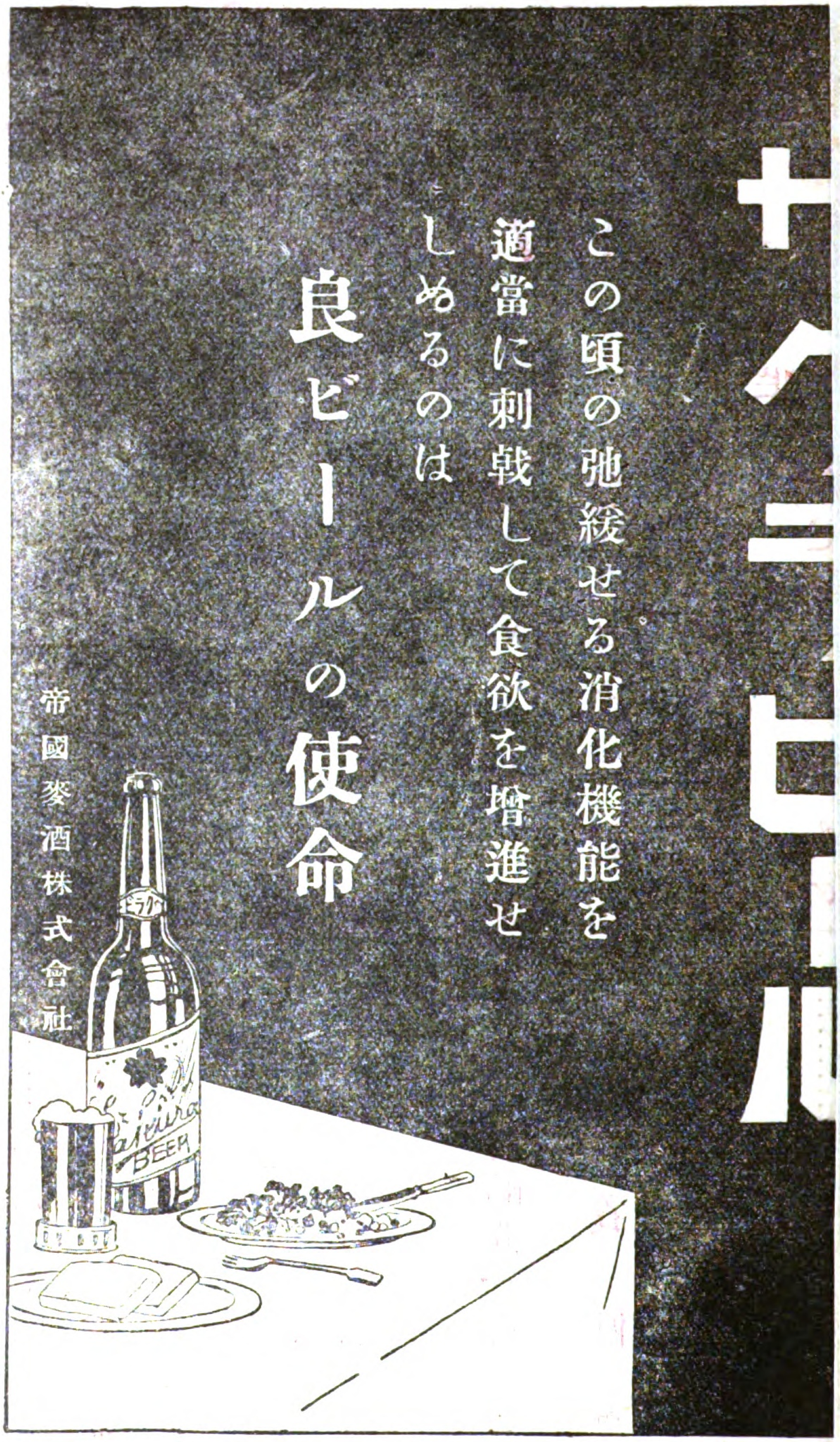
獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

日本總代理店　東京市日本橋區本町　株式會社 田邊元三郎商店



改造 七月號目次

現下學生の諸問題


サクラビール
この頃の弛緩せる消化機能を
適當に刺戟して食欲を増進せ
しめるのは
良ビールの使命
Sakura BEER
帝國麥酒株式會社

文士の眞蹟十二

文士の眞蹟十二ケ月短册頒布會

今回「文士の眞蹟十二ケ月短册頒布會」を催します。之は我文壇の第一人者たる、左記十二先生に上等の短册へ俳句を揮毫して頂き、それを十二ケ月に組合せ特別低廉の會費にてお頒けするので御座います。どうぞ左の趣意及び規定を御覽の上御入會下さいまし。

尾崎紅葉、正岡子規、夏目漱石、諸先生の遺墨は非常に珍重され、短册一枚が六七十圓と云ふよい價であるのみならず却々得られません。只値が高いだけなら宜敷いが、さうなると必ず僞物が澤山出來まして、無辜の愛玩者を大にわざはひ致します。此の間も德田秋聲先生のお話しでありましたが、紅葉山人の短册なりと稱するものを見るに百枚の中九十九枚までは僞物だとのことでした。

全く人格者の筆蹟程高雅なものはありません。殊に色紙や短册へ和歌又は俳句を淸楚に書きましたのは、何とも云ひ盡せない趣きがありますから、數寄者は非常に愛好致します。されど何人も不用意で、それ等の先生が、在世中は强ひて御願ひしようともせず、一度び故人となると皆樣が其の筆蹟をあさり出すゆゑ、忽ち前記の如く破格の價を生じ、隨て僞物、贋物が無數に出るので御座ひます。

此の苦い經驗に鑑みて、是非現今の諸大家には、御健在中に出來るだけ多く書いて頂き、之を眞の愛好家にお頒けして、幾何なりとも後世の同じ憾みを減じたいと思ひ、諸先生にお願ひ致しましたが、煩はしい揮毫などはいやだと申し、却々應じて下さいませんでした。然し前に述べたやうな眞面目な趣意により是非共御承諾願ひたいと、再三再四懇請致しまして漸く短册の揮毫を承知して頂き、此會を催したので御座います。

此の如く我文壇の驍將ばかりが揃つて贊成して下さつたのは空前のことにて、將來のため誠に喜ぶべきであります。折角諸先生の諒解を得たのですから、當中央美術協會は、所期の目的を達成するやう最善の力を盡します。短册は模樣も色も總て吟味して古代趣味の最上品を十二種作り、各月共變つたのへ揮毫して頂くことにしました。この十二先生のを一枚宛十二ケ月に組合せますと非常に風雅なよいものになります。

頒布の方法は、毎月二枚宛配布し、六ケ月で十二枚全部配布濟みとなるやうにしました。一枚々々丹念に揮毫する肉筆をお頒け致すのでありますが、全く營利的計畫でないゆゑ會費はかやうに低廉なのです。

若し此の機會を逸すると五六年經たない中に又一枚何十圓と云ふ高價になり容易に需められなくなりませう。御希望の方は左の規定により至急御申込み願ひます。

ケ月短冊頒布會

規定

一、本會の筆者は左の十二先生なり（いろは順）

泉鏡花先生　德田秋聲先生　小山内薰先生
上司小劍先生　永井荷風先生　長田幹彦先生
室生犀星先生　久米正雄先生　久保田万太郎先生
芥川龍之介先生　佐藤春夫先生　里見弴先生

二、會費、毎月（二枚分）金八圓　送費 内地五十錢 鮮外八十錢

但し毎月二枚宛（即ち二先生分）配布するゆゑ、十二枚即ち十二ケ月（十二先生分）全部の配布は六ケ月間を要す。尙ほ一回に全部配布希望の方は其の旨申込み書に記入を乞ふ。此の場合は會費四十八圓送費五十錢也。

三、申込金等一切不要、會費及び送費は揮毫出來たる分より毎月二枚宛代金引換郵便にて送附し、現品と引換へに頂戴す。東京市内は郵便によらず毎月御屆け致し其節會費を頂戴す。

四、短冊は、特別製のものにて、各先生が得意の俳句を揮毫し、それを適宜に組合せたる十二ケ月（十二枚）なり。此の十二ケ月は必ず前記十二先生の筆各一枚を以て組合せたるものなり。

五、此の短冊は短冊帖に挾むもよし、屛風、襖等に貼合せ又は茶掛の小幅に仕立つるもよろし。尙ほ短冊掛に入れる時は毎月一枚宛掛替へて丁度一年中樂まる。短冊帖及び短冊掛は普通品上等品各種あり、御希望の方には實費にて御頒けす。

六、申込み期日は、七月七日限りとす。但し期限内と雖も申込餘りに多數なる時は謝絕することあるべし。

七、短冊は申込みを受けたる月より揮毫出來順に配布す。發送の際は毎回必ず書面を以て御案内す。

八、申込は、普通の葉書又は手紙に『文士の眞蹟十二ケ月短冊頒布會に入會す。揮毫出來の分より毎月二枚宛代金引換郵便にて送附相成度申込み候』と記し住所姓名を明細に記入、なるべく姓名の下に認印を捺して（東京市麴町區元園町中央美術協會）宛投函のこと。

別に印刷せし趣意及び規定書あり。御希望の方は郵券二錢封入御申越下さらば送呈す。

東京市麴町區元園町一ノ一九

中央美術協會

電話四谷五一九二番
振替口座東京二九七番

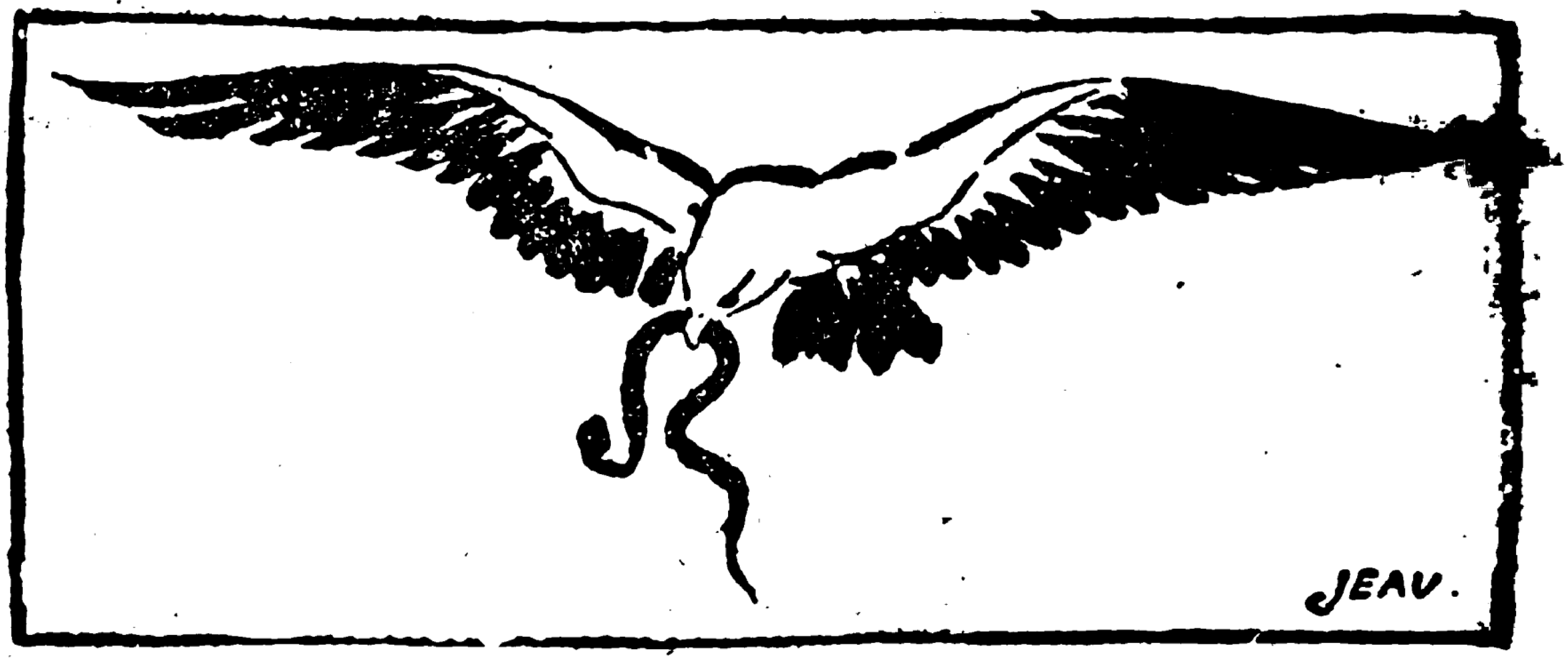
オノトは
新人の
萬年筆

金八圓以上
送料 金拾八錢



東京日本橋通三丁目
丸善株式會社
神田・芝・三田・丸ビル

大阪 京都 神戸 名古屋
横濱 福岡 仙臺 札幌



(七月號)

支那新人の「新支那運動」

支那の人々が、特に支那の學生團が事あるごとに國權の回復、不平等條約の撤廢を高唱するのは、情理よりして當然のことで、我々も彼等の意中に同感を禁じ得ぬものがある。今回も上海事件を導火線として彼等は列強の支配下より離脱せんとするの策を樹て着々運動を進めつつあることは推察するに難くはないが、しかし不平等條約の撤廢といひ、そこまでの風雲を惹起するにはモット外國の強い壓迫が新に加はり、軍閥の虐政がモット加はるのでないならば駄目だとも思ふがただ、單にロシア革命の成功を見て直にその跡に則らんとするのは、未だ以つて支那國民性を正解せるものでなく、要は彼等の提唱する支那プロレタリア革命が眞に現下の分離支那を救ひ、且つ支那の前途に對してどれ程有意義の結果を將來するかにある。

我々をして卒直に云はしむれば、支那が廣大なる領土、無盡藏の富源を擁しながらその經濟的能力の全く缺乏せるより、それ等の利權が悉く強國の支配下にあることが、現在支那を劣弱國たらしめているのであるから、この奪はれたる經濟的權利の回復については大に考慮を廻らす必要があらう。加之、支那人が政治的にも無能力であることは彼の行政權の不統一、軍權の不統整によりても暴露してゐる。支那が今後國際的に重要なる發言權を獲得するには背後に何かの威力がなくてはならぬ、それは必らずしも武力の後楯であることを要しないが。由來、支那人は宣傳に巧みである、電報戰に巧妙である。今回のこともいくらか不發の空彈を投げてゐるやうに列強より割引して考へらるるのはその準備に於て缺ぐる所があるからである。我國は今回の上海事件に關して決して英國の尻馬に乘ることなく、あくまで我國の權威を以つて隣邦に對すべきだ。支那に於ても決して強國の後援を頼みとすることなく或中傷に惑はさるるなく、純乎たる一獨立國の權威を以つて、自國の永遠の福利より算へて、此事件の解決に當らんことを冀求する。

新政治意識の倫理的基礎

大山郁夫

序論　無產政黨運動に附帶する政治教育上の重要問題

一　無產政黨問題に關する世論の諸相

無產階級政黨に關する諸問題は、最近約一個年に亙つて、樣々の異つた方面の人々から、殆んど一樣に、異常の緊張味を以て、間斷なく議題に上されて來た。この意味に於て、それは當面の政界——廣義に解されての——の注意の焦點をなして居るものだと言つても、恐らく誇張でも見當違ひでもあるまい。兎に角、近年の我國の政治生活若しくは一般社會生活の上に生滅して行つた多くの新問題のうちで、これほど一般的に——しかも比較的永續的に——一般世人の關心の標的となつたものは、他に類例が多くありさうにも思へない。

かうした狀況が生じたことには、我國の政界に取つては始めての無產政黨の出現の徵候に依つて挑發された一般世人の好奇心が手傳つて居る程度の決して少くないといふことが、當然のことゝして先づ第一に我々に考へ附かれる。それは何よりも殊に、問題の性質が新しいといふ事實に關聯してゐるものである。けれども、單純に問題の性質が新しいといふ事實だけでは、或る程度に於て、それに對する興味が一般的であることの說明にこそはならうが、その興味が永續的であることのそれには少しもならないことは、いふまでもないことである。

そこで我々は第二段に、近き將來に於ける無產政黨の出現が當然政界に惹き起すべき或る程度の激動の豫想に對する既成諸政黨の恐怖、若しくは少くとも危惧の實在に聯想する。そして、この恐怖若しくは危惧が、普選實施後に於ける既成諸政黨の地盤の動搖の明かなる可能性に對する彼等の不安よりは、遙かに根柢の深いものであるといふことも、同時に我々には無難に推測し得られるのである。もとより、地盤の動搖といふことは、各政黨——殊に各政黨の幹部——に取つて、決して輕視すべきことではないのは無論である。けれども、既成諸政黨の分裂合同騷ぎが既に完全に彼等の慢性的症狀になつて來てゐる今日に於ては、それも最早根本的重要性のものと見られて居なくなつて來てゐることが、明白に認識し得られる。從來殆んど他の何物にもまさつて根本的重要性のものと見られてゐた地盤の動搖といふ現象を伴ふやうな、或る程度に深刻な性質の分裂合同騷ぎが、最近に及んで比較的氣輕るに演ぜられて顧みられないやうになつた形勢が、少くとも一部分は、彼等の共同の敵として目指されようとしてゐる無產政黨出現の徵候に依つて馴致された事情が明かに看取される現狀の下に於ては、後者に對する恐怖若しくは危惧こそ、既成諸政黨に取つては、地盤の動搖に對する不安以上に、一層根本的重要性のものと見られるやうになつて來てゐることが容易に論斷し得られるのである。

けれども、このことに關する我々の論斷は何等の據りどころのない單なる臆測に基いたものであつてはならない。少くとも我々は、それを旣成諸政黨に屬する政治家たちの政治上の言動に關聯せしめない譯には行かない。でなければ、我々の論斷は畢竟一片の妄斷に陷る虞れがあらう。

が、この點に關しては、我々は少くとも二重の困難に直面する。まづ第一に、一般的に旣成政黨の人々の政治上の言動に表裏反復の測られざるものがあることは、今日では世人の常識となつて來てゐるほども普通な現象である。次に彼等の政治上の言動にも、枝葉末節に屬するものと根本的若しくは決定的のものとがあつて、しかもそれらが互に複雜に絡らみ合つて居て、何れを何れと鑑別することが常に容易なものとは限つてゐないのである。で、我々が今手にしてゐる問題であるところの無產政黨の出現の機運といふことに關しても、彼等の或るものはそれを相當に重大視してゐることを表明してゐるが、しかし或る他のものは、それを大した問題としてゐないやうな口吻を漏らしてゐるのである。しかも後者の部類に符ち來たされ得る人々が、それを大した問題としてゐない理由としては、無產政黨が擡頭したところで、或はそれの物質力の缺乏してゐることから、或はまたそれの人的基礎の薄弱なこと――たとへば、我國の場合では、當然無產政黨の基礎となるべき組織されたる勞働者の數が非常に少いこととか、或はそれが有効に働き掛けることが出來る工業勞働者數が、さうは出來にくい農業勞働者數に比較して非常に少いこととかに關聯して――から、少くとも今後相當に永い期間は、比較的無力な狀態の下におかれなければならないであらうといつたやうなことを擧げるのを常とする。が、時とすると、彼等の或るものは、尙ほそれに附加へて、無產政黨の出現は、無產階級の主張や要求やを直接に議會に送り込む通路となるに違ひないから、旣に溷濁し切つてゐる我國の議會の空氣を多少なりとも淸新化する効果を伴ふであらう、といつたやうなことを言ひ立てるとに依つて、寧ろそれを歡迎しようとするやうな態度を示すことも、

決して稀れではないのである。今無産政黨の出現を重大視する側の人々の言動は暫らく問題外として、單にこれを輕少視し、時としてはそれを歡迎しようとする意向をさへ仄めかす側の人々の言動に就いて考察するとき、無論それが明かに僞善若しくは虚勢であることが見え透いてゐるやうに思はれる場合も甚だ屢々であるが、しかし必ずしも一概にさうとは斷定が出來ない場合も決して少い譯ではない。かうなつて來ると、我々は我々の當面の問題に關して、どれが既成諸政黨の本音であるかの、少くとも何ういふのが彼等の根本的若しくは決定的の立場であるかの判斷に迷はさゝるを得ないやうな氣がしないでもない。

がしかし、我々は決してそれに迷ふ必要はないのである。我々は既成政黨政治家たちの個々の場合の平常時に於ける政治上の言動を見るときは、その裏の裏までを見通さなければならない必要を感じることもある。或はまた、彼等の政治上の言動が裏も表もないやうな、彼等の眞意志の正直な表現であることが明白な場合でも、――しかもさうした言動に出るものが可なりの多數に上ぼつて居る場合でも、――それが直ちに彼等の所屬の政黨が黨全體として取る立場を如實に反映して居るものと見ることは出來ない。個々の黨員の或る問題に對する意志の總和が、直ちに當該政黨がその問題に對して黨全體として取らうとする立場を決定するものではない。かういふことは、無論、個々の黨員の意志が、當該政黨の黨全體としての立場を決定する上に於て、少くともサムシングとしての實效價値を持つ場合があるといふことを否定するものではない。そしてまた、それのさうした實效價値は、期間を長くして見れば見るほど增大する傾向を示す場合があるといふことすらも、私には全的に肯定が出來る。が、それにも拘らず、一定時の平常狀態の下に於ては、個々の黨員の意志は畢竟個々の黨員の意志であり、そしてまた當該政黨の黨としての立場は同樣に當該政黨の黨としての立場であつて、兩者は必ずしも常に一致して居るに限つて居るものでもなければ、また兩者の間に必ずしも常に緊密

な有機的關係の存してゐることを必要とするものでもないことは、政黨界の實情の觀察から歸納し得られる結論であるといふこともまた、同樣に爭ふべからざる事實である。

否、各政黨の黨としての立場を決定するものは、直接にはそれの蔭から糸を牽く幹部の意向であるには違ひないが、しかし間接には、そのまた幹部の蔭から糸を牽く或る社會力の命令である。そこで問題は、まさに産まれ出ようとしてゐる無産政黨が否でも應でも最初から直面しなければならない既成諸政黨の背後に控えてゐるさうした社會力とは果して何を指すものであるかのそれへ轉換することになる譯であるが、今はそれを細論するに適當な場合でない。が、ただ大體論としていへば、既成諸政黨が今日の社會思想上の通用語に於て、總括的にブルジョア政黨と呼ばれてゐる事實が、それからの背後に潜む一の共通の社會力の何であるかを、最も明白に示唆してゐるものと見ることが出來るのである。兎に角、最も廣い見地からいへば、各既成政黨の黨としての立場を決定する最後の力は、現代に於て殆んど全能の主宰者であるかのやうに見られてゐるブルジョアジーから出るそれである。個々の黨員の意志は、それの命令に違反しない範圍内に於てのみ、それぞれの程度に於て、黨全體の態度の上に影響し得るに過ぎないものである。そして萬一彼等がその命令に服從しようといふ意志を有しない場合には、各自その所屬の黨派からは勿論、一般にブルジョア政黨からも見離されるか、或はまた自ら進んでそれを見離すかの、二つの一つを出ないものである。

が、一般に周知されてゐる通りの斯うした内的關係を的確に表示する外的標識は何であるか？　若しくは、もつと直接的に言ふと、或る問題に對する或る政黨の黨としての立場の位置及び性質を外間の傍觀者に向つて精確に表示する指針と見做され得るものは何であるか？　この點に關して、個々の黨員の政治上の言動がその目的のために毫も信頼し得られるものでないことは、既に述べた通りである。が、私は尙ほそれに附帶して、同樣のことが當該政黨の幹部を構成

する個々の黨員の場合に關してもまた適當に言ひ得られるものであることを書き添へておかなければならぬ。もつとも、幹部を構成する個々の黨員の政治上の言動は、或る場合には、黨全體の立場を明示的に若しくは暗示的に表示するために行はれることもあることは事實であるが、しかし同時に或る他の場合には、それとは全然反對に、それを故意に隱蔽するために行はれることもあり勝ちである。しかのみならず、或る政黨が黨として正式に發表する公然の聲明若しくは宣言の上にすら、同樣の目的を持つた技巧が加へられることも決して稀れにでなくあることは、一般世人の周知して居る通りである。けれども、各政黨は屢々事實の論理の進行の過程に於て、黨としての立場を多少の程度に於て明確に標識する種類の行動に出なければならないやうな、拔き差しのならない一の重要なる『心理的瞬間』——若しくは或る限られたる意味に於ける『悲劇的瞬間』——に逢着することがある。さうした瞬間が何時到來してゐるかは、——若しくは何時到來したかは、——事實上の問題ではあるが、注意深き觀察者に取つては、それを眼ざとく看取することも、決して困難なことではない。そして、さうした瞬間に於て各政黨が、たとへ餘儀なくにもせよ、決定的に採用する行動は、當面の問題に對する當該政黨の黨としての立場なり意圖なりを、他の何物にもまさつて最も明確に表示することを誤らないものである。もとより、さうした重要な心理的瞬間に於けるさうした決定的の行動が示されるに至らない間は、ただ類推の方式に依つて內觀的に當該政黨の立場なり意圖なりを探求するとが、我々に殘されてゐる唯一の手段である。が、いふまでもなく、それは已むを得ざる場合に於てのみ採られるべき手段に過ぎないものであつて、しかも判斷の正鵠を期するといふ目的の上から言へば、それは決して安全な手段だとはいへない。それ故に、我々が一旦右に舉げたやうな行動が示された瞬間を看取した上は、さういふ類推的內觀的手段を一擲して、直接にその行動そのものを捉へ、それを端緒として、當該政黨の黨としての立場なり意圖なりの中核にまで辿り着くことを試みるのが、最も正當

な行き方とすべきものであらねばならぬ。

　茲で問題は再び無產政黨の出現の豫想のそれに立ち歸ることになるが、既成諸政黨はそれに關して、平常時に於ては彼等自身にもそれとは明白に感知されないまでに彼等の意識の底に奥深く巣喰うてゐるところの、黨としての立場なり意圖なりを、俄然として外面上に決定的に表示する種類の行動を取らなければならない衝動を感じたやうな心理的瞬間に逢着したことがあつたか？　そしてまた彼等は、その衝動のまゝに、決然としてさうした行動を取つたことがあつたか？　この問ひに對する私の答へは、肯定的以外の何物でもない。

　もとより、私は既にこの點に關して、既成諸政黨の殆んど何づれもの黨員たちの或るものの口から、無產政黨の出現に對する寛容的な言葉が――時としては好意的な言葉さへもが――屢々發せられたことは、たとへその動機に於て僞善若しくは虛勢から出たものでないことが明瞭な場合に於てすら、既成諸政黨の何づれもの、黨としての立場なり意圖なりには無關係なものであることを述べた。しかもそれは、さうした言葉が各黨の責任的地位におかれてゐる領袖株の人々――時としては當路大臣――の聲明の裡に、事實上屢々起つた通りに、一再ならず發見された場合でも、矢張り同じ筋合ひのものである。私はかういふことを率直に認識してゐるにも拘らず、その本質に於てブルジョア政黨に外ならない各既成政黨の、無產政黨の出現に對する或る警戒的態度を反映する眞の立場若しくは眞の意圖を、赤裸々に暴露した機會が事實上に於て起つたことのあることを主張しようとするものである。

　さうした機會は、今までのところで、少くとも二度起つた。その一つは、治安維持法が制定された場合であり、他の一つは、普選實施後の政界に對應するための所謂新政策樹立の聲明が發せられた場合であつた。

　治安維持法が國體及び私有財產制度を否認する目的の下に於ける團體組織の禁遏、及びそれを中心とする一切の豫備

的行爲の處罰に關する表面上の規定に依つて、實際は、無産政黨の出現を阻示しないまでも、その活動の場面を極度に限局しようとしてする意圖の下に制定されたものであることは、樣々の根據から的確に論斷し得られるものである。そして、それは、資産階級の無産階級に對する共同戰線としての性質を、可なり露骨に、その表面に浮び出させてゐるものである。それ故に、すくなくとも、普通選擧法の議會通過に努力した諸政黨は、その普通選擧法とは全然反對の性質を有するこの治安維持法の制定を翼贊することには、流石に一種の矛盾を感じたに違ひはない。また事實上、それらの諸政黨の個々の黨員たちのうちには、個人としてそれに絶對反對の意志を表明したものも、決して少くはなかつた。が、この場合に於ても、それらの諸政黨の各々は、黨としては、個々の黨員の意志の方向の如何に拘らず、それ自身の必然不可抗の進路を辿つたのであつた。そして、あの劃時的の普通選擧法にすら反對した在野黨は、無論一も二もなく、それに調子を合はせたのであつた。それから先きの、それの貴族院に於ける運命は、いふまでもなく明白なことであつた。かうして、第五十議會は少數の例外を除き、殆んど全會一致の姿で、その實質上に於て無産階級を共同の敵とする治安維持法を通過させたのであつた。

各既成政黨の所謂新政策の樹立の聲明は、治安維持法ほど積極的に無産政黨に敵對の意志を表明して居るものではないが、しかも、縱し幾分消極的意味に於てにせよ、矢張り無産政黨の發生の意義を稀薄にし、且つまたそれの活動の餘地を狹ばめようとする意圖から發せられたものには違ひないのである。もつとも、各既成政黨がこれまでに揭げて來た所謂新政策は、大體上たゞその輪廓が示されて來ただけのものであつて、その内容が具體的に擧げられて居る譯ではなく、且つまた、その概括的項目の中にも、例の『産業立國』と言つたやうな、明かに資本階級の利益の推進を主眼としたやうなものも含まれてゐるが、それと同時に、無産階級に媚びるための社會政策的主眼が可なり盛り澤山に並べられ

てあることも事實である。各既成政黨が普通選擧法の議會通過後に於て、急に慌てゝかうした新方向に出ることを公衆に向つて宣言しなければならなくなつたことは、無論我國の產業進化の過程を背景としてゞなければ解釋し得られないことだが、しかし同時に、それが一つには、無產政黨の出現を見越して、豫じめ先手を打つておかうとした動機から出たものであることは、玆に列擧するには餘りに煩はしいほど多くの根據から、確實に推斷し得られることである。

かういふ諸點を考へても、我々は無產政黨問題に對する議論が、既成諸政黨の側からも、樣々の形式で、絕えず持ち上げられて來たことの決して偶然でないことを知るのである。けれども、本文の劈頭に於て擧げた一般世人の無產政黨出現の徵候に對する好奇心から出た興味といひ、また今までに縷述した既成諸政黨のそれに對する不安若しくは危惧の念慮から來た關心といひ、さうしたものは、何づれも皆、畢竟受働的に示された態度に外ならないものである。で無產政黨の問題に關する世論が沸騰して、今日でもなほ一般世人の——殊に廣義に於ける政界の——注意の焦點としての位置を失はないでゐる事實は、根本的には何と言つても、我國の產業進化過程の現在の地位が、無產階級の諸勢力の政治的生存表現を——そしてそれの政治的組織をも——必然的なものとしてゐる事實から來てゐるのである。從つて、無產政黨論の中心點は、何と言つても、この事實を直接に認識し肯定してゐる側の人々の立場から起つた論策の上に集中してゐるのである。私自身もまた、從來一貫してこの立場から、その議論に參加して來たのである。

それにも拘らず、私が本文に於て、以上主として、無產政黨組織の必然の趨勢に對立し抗爭しようとしてゐる社會的諸勢力の側に屬する既成諸政黨の立場を觀察の對象として來たのは、全く論述の便宜上の考慮から出たものに外ならないのである。私は本文に於て、無產政黨運動の途上に於ける政治教育上の重要問題を取扱はうとしてゐるのであるが、

その目的のためには、既成諸政黨の無產政黨に對する立場の眞の性質の考察から出發することが、私に取つては最も勝手の好い順序なのである。それ故に私は、本節に於ては、主としてその點に私の注意を集中した譯である。

二　無產政黨運動途上の難關

無產政黨問題に對する議論が從來に於て盛に闘はされて來たことは、決して無益なことではなかつた。第一に、無產階級の勢力の政治的組織の必然性も、それに依つて相當の程度に究明された。第二に、無產政黨の前途の可能性に關する豫測も、それに依つて少くとも漸次にそれの前提諸條件を得かけて來るやうになつた。第三に無產政黨の職分の本質及び限界も、――主として無產政黨の綱領の討究を通じて――闡明されるやうになつた。第四に、無產階級の政治行動とそれの經濟行動との關係も、從來より、一層確實に掴まれるやうになつた。等、等――と數へて來ると、無產政黨問題に關する從來の討議が我々に齎らし來つた收穫は、決して輕視すべきものではない。そして尙ほそれが、この上引續き眞面目に行はれるであらうことは、寧ろ望ましきことだと言はなければならぬ。

しかも、無產政黨問題に關する從來の討議が與へた利益は、かうした理論上の方面の收穫だけに限られてゐるのではない。尤も、かうした理論上の方面の收穫も、殆んど全部が早晩實行の範圍の中へ流れ入るべき性質のものであるから、それは決して全然非實際的のものだといへないのは、いふまでもないことである。がしかし、さういふことよりも更に直接的意味に於ける實際的方面でそれが與へた利益としては、我々は先づ第一に、それが無產階級運動に從事する人々の眼界を擴めて、その運動を一層大衆化せしめる必要の實在を意識せしめ、それから延いて、それが無產政黨運動の實行的段階への突進の時期を一層早めた、と言つたやうな事實を數へなければならないのである。無論、無產政黨運動に

參加してゐる人々の立場からいへば、無産政黨問題討論期といへども、この運動の實行期の一段階——少くともそれの準備的段階——であつたには違ひないが、しかし一般的の——そして同時に客觀的の——立場から見て確實にそれの實行期といひ得られる段階は、最近に及んで漸く到來したものである。政治研究會が今春四月に擧げた全國大會に於て、それが從來行つて來た研究調査及び政治教育事業以外に、無産政黨促進運動の具體的計畫の第一歩として、勞働組合及び農民組合への交渉開始を決議したことも、かうした機運の認識から出發したものである。また、二三の地方——たとへば八幡や足尾などの——に於て、最近無産政黨の地方的組織が實現されたことなどは、同じ機運を小規模に於て——だが一層具體的に——表象したものだといはなければならぬ。

無産政黨運動の行程は、決して當初から樂觀されてゐたものでない。が、それが、實行期の第一段階に第一歩を踏み入れたと同時に、それの上に横はつてゐる困難や障碍やが、既に一層痛烈に實感され、意識され始めた。今假りに政治研究會の場合から一例を取つて言ふと、同會が新らしき出發點として計畫した工業及び農業上の勞働團體との交渉事業にしても、日本勞働總同盟の内部の紛擾のために、甚だしき停頓狀態の上に彷徨してゐる。假りにこの難關が早晩突破し得られるにしても、第二第三の難關が更らにその背後に控えて居ることが、今日のうちから何となく鋭く感知されてゐるのである。

更らにまた、同じ政治研究會は、それの創立當時（昨年六月）以來續行して來た無産政黨促進運動を中心としての研究調査及び政治教育などの諸事業の分野に於て、この際ます〳〵その活動を進捗せしめて能率を擧げようと計畫してゐるが、そこにも豫期されて居た通りの——若しくは豫期されてゐた以上の——樣々の障碍が、それの途上に横はつてゐることが發見されてゐるのである。しかもそれらの障碍中には、他の方面に於けると同樣の諸事業に共通の性質のも

のもあるが、しかし無產階級運動に限つての特殊の性質のもの——若しくは無產階級運動の場合に於て殊に眼立つて著るしく現はれてゐるやうな種類のもの——も決して少くないのである。たとへば、物質上の資力の薄弱といふやうなことは、必ずしも特別に無產階級運動を特徵づけて居る障碍だとは限らないが、しかしそれが殆んど常に無產階級運動に不可分的に結び附けられてゐるものであることだけならば、安全に指摘し得られるものである。殊に、無產階級が現在の社會構成に於て占めてゐるそれの地位のために受けないでは濟まされない各種の社會的及び政治的壓迫から來る多大の不便及び困難に依つて斷續されてゐるといふ一點に至つては、それこそ全く無產階級運動に特有の障碍だと言つても、決して不當ではないのであつて、從つて無產政黨運動もまた、現在それのために極度にその進路を塞がれてゐる形になつてゐるのである。

かうした樣々の障碍は、無產政黨運動の各部門の上に降りかゝつて來てゐるものであるが、私自身は政治研究會に於て政治教育事業に參加してゐる關係上、特にこの方面に於ける難關の下に苦き經驗を嘗めなければならない機會に絶えず遭遇して來た。で、私は次にしばらくの間、その點に關聯する二三の要點を語る自由を要請したい。そして、私がそれを試みるに際して、主として私自身の個人的經驗を基礎として物を言はうとしてゐるものであることは、斷るまでもないことであらう。

三　無產政黨運動に於ける政治教育（上）

——それの一般的難關——

一體私のやうな單なる一學究にすぎないものが、書齋から街頭へ引出されて、非常に實際的性質を帶びた無產政黨運

動といふやうな、私には極めて不向きな——少くとも極めて不慣れな種類の仕事の渦中へ身を投じて、そこで多くの共働者たちの驥尾に附して、微細なものながらも一の役割りを負擔する運命の下におかれるやうになつたといふことからが既に、廣い見地から言へば、矢張り無産政黨運動の途上に横はる一種の難關から來てゐるものだといはなければならぬ。即ち、それは何よりも殊に、無産政黨運動には、一般の無産階級運動中の他の部門に對してと同樣に、物質上の資力が非常に缺乏してゐる結果、任意に適材を適所に置くことが出來るほども、無限に多數の働き手が得られるものでない、といふ點から來てゐるのである。尤も、私が政治研究會に於てその一部分を擔當してゐる政治教育事業の如きものは、過去に於ける私の境遇、素養、及び生活習慣から見て、全然緣がないものでもないと言はば言はれないこともないやうであるが、それでも實際その局に當つて見ると、意外の困難が私に向つて厭進して來るのを痛感せしめられるのであつて、少くとも私が意識的にそれを克服する必要を自覺せしめられるのは、始終のことである。殊に私は、私自身が生れながらの大衆相手の働き手でないことを知つてゐる故に、無產政黨運動の政治教育事業に關しても、私がそれのすべての部分に亘つての適任者でないことを、私自身が誰れよりもよく意識してゐる。尤も、この事業の或る部分には、私でもそれに對する適任者であることを思はせる種類のものもないではないが、無產政黨運動の現狀の下に於ては、各自手前勝手にその仕事の好きな部分だけを引受けるやうなことを私たちに許さない事情がある。で、私たちが一旦それの或る仕事に携はることを決心した以上は、場合々々の必要に應じて、その仕事の樣々の部分に手を着けなければならない破目に陷ることが絕えずある。かういふ譯であるから、右の政治教育事業の方面に於ても、私自身がそれに對する不適任者だと思ふやうな活動へも突入しなければならない機會に遭遇するのは、私に取つては始終のとである。それにも拘らず、私が『自ら揣らず』といふ誹りをも冒して、敢てこの仕事に携はつてゐるのは、一つには、私自身の今後の意識的

努力次第で現在より以上にそれの適任者となり得るであらうといふやうな、多少の自信に似た淡い氣持からも來てゐないとはいへないが、しかし根本的には何よりも殊に、その仕事への志願者數が無限に多くある譯でないといふ事實の認識から來てゐるのである。かういふことは、單に無産政黨運動に關してばかりではなく、政府若しくは一般の有産者階級に屬する事業若しくは運動などの場合とは異つて、物質的に酬ゐられるよりは寧ろ犧牲を要求されることの多い一般の無産階級運動の各方面の仕事に關聯して共通的に見られる現象であつて、そして恐らくは、さうした仕事に參加してゐる殆んどすべての人々が痛切に實感してゐるところのものであらねばならぬ。

だが、さうしたこととは別に、現在のブルジョア社會の法制上の規定及び政治上の習慣から來る壓迫が、無産階級の政權獲得を目標として進む必然性を持つ無産政黨運動の上に、絕大な障碍を投げかけてゐるものであるとは、今更ら玆で取り立てゝ細說するまでもないことである。そして、この事は、殊に、無産政黨の綱領設定の際に痛感されるものであるが、それはしかし、無産政黨運動に附帶する政治教育事業の方面に於ても、同樣に深刻に、しかも現在ではおそらく一層直接的に經驗されてゐるものである。殊に第五十議會に於て制定された治安維持法の効力發生以來、この點に於ける困難が幾層倍に加重されて來たのである。

かうした法制上の規定及び政治上の習慣から來る壓迫と相呼應して、社會的僻見から來る一種の心理的壓迫が、無産政黨運動に於ける政治教育事業の途上に於ける難關を構成してゐる程度も決して少くはないことは、誰れもが知つて居る通りである。兎に角、現代社會の法制的及び政治的障壁に依つて手厚く擁護されてゐる上に、今日の大衆の間に傳統的に植ゑ附けられ培はれてゐる國家觀、社會觀、及び處世觀の上に於ける一切の既成概念をそのまゝ利用することに依

つてその大衆に訴へ得る便宜を持つてゐるブルジョア政黨運動の政治教育事業若しくは宣傳事業に比較すると、さうした保護とさうした便宜との殆んどすべてを缺いてゐる無産政黨運動のそれが、言ひやうのないほどの苦境の上に立つてゐるのは、當然だと言はれなくはない。一と口に言ふと、それらの兩者の間に於ける差異は、守成者と創造者との上に別々に置かれてゐる困難の程度の間に於ける差異である。たゞ創造者は、守成者とは比較にならないほどの努力を要求されるものであることの代りに、その努力への意氣を鼓舞されたり、またその努力の効果に悦びを感じたりする機會を、遙かにより多く持つてゐるのを普通とするものであるが、これはこの場合に關しても適切に言ひ得られることである。

けれども、右に擧げたやうな樣々の外部からの壓迫に基づく受難の境地は、無産政黨運動上の政治教育事業に參加する人々に取つては、まだしも比較的容易に堪へ得られるものであらう。が、彼等はまだこの上に、無産階級の內部に於ける樣々の僻見や誤解などから來る批難攻擊とも戰はなければならぬ。しかもそれから來る彼等の心理的苦痛が、前者に比して一層深刻なものである場合さへ屢々ある。

私は最近、或るひとりの勞働者から、彼が『政治教育』といふ言葉そのものに對して抑へ難き反感を藏してゐることを告白してゐるのを聞いた。それは『教育』といふ言葉が、從來の慣例によつて、支配階級がそれ自身の統治上の目的のために一般世人に課する教育制度に關聯するものとしてばかり用ひられて來た傾向があるところから來てゐるものである。けれども、冷靜に考へると、眞の意味に於ける教育といふものは、人類の社會生活の存するところには、必ず存して居るものであり、また存して居なければならないものである。否、單に人類の社會生活の上にばかりでなく、我々に有理に推論し得られる限り、少くとも群居的高等動物の間にも、その社會生活が可能とされるための一條件として

の、或る意味に於ける教育が存してゐるのである。のみならず、若し我々がクロポトキンなどの倫理上の學說を信頼することが出來るのものとすると、人類の間に於ける倫理性は、その本源に溯つて考察すると、さうした群居的高等動物の生活の或る一面から與へられた或る意味に於ける『教育』から學び得られたものである。如何にも近代國家制度の下に於ては、『教育』といふ言葉は、支配階級がそれ自身の統治上の便宜から設定した教育制度——殊に所謂『國民教育』制度——に依つて獨占されてゐる傾向があることは事實であるが、しかしさうしたものは、少くとも人類社會生活の歷史の上から見れば、決して本源的のものでもなければ、唯一存在的のものでもない。現代社會生活の下に於ても、我々は我々が國家教育を受ける以外に、——そして屢々これ以前に、——或は家庭生活からの、或は交友の生活からの、或はその他の樣々の集團生活からの教育を間斷なく受けてゐるものである。それ故に私自身は從前から、教育の社會性をそれの國家性から區別して、前者を以て本來の教育とし、社會生活に必然的なるものとして見てゐる。そして、『教育』をかういふ意味に理解するときには、國家性の教育を強制的に賦課する機關であるところの學校に於てすらも、教師と學生と、及び學生と學生となどの社會的接觸の裡から社會性の教育が何等の強制的手段なしに、極めて自然に釀成されてゐるのが見られるのである。我々は常に壓迫される地位におかれてゐる社會層に屬する人々が、感情的に『教育』といふ言葉に對して反抗心を懷いてゐる氣持に同感することが出來る。が、それは、我々の理性を通じてその言葉の意味を正しく理解することに依つて消散せしめることが出來る種類の誤解である。そして、無產階級側の人々がそれを正しく解釋する限りは、彼等はそれがために既成諸政黨側から出る政治教育に對する敵意を一層強めこそすれ、直ちに無產階級運動のために行はれる政治教育に對して反感を燃やす理由を持たない筈である。

かういふ譯であるから、單なる言葉に對する反感から來る無產政黨運動上の政治教育への抗議は、比較的容易に取扱

ふことが出來るが、それよりも一層始末に終へないのは、或る特殊の立場から來るそれへの批難である。もつとも、無產階級運動に於ける一切の政治行動を絕對的に否認する側の人々が、同時にそれのための政治教育をも排擊するのは、その根本に於て主義の問題から來たものであるから、我々もまたそれに對しては、簡單に『主義の相異』と挨拶するより外に途はない。けれども、それとは聊か趣を異にしてゐるのは、無產階級の政治行動を主義に於て肯定しながら、眼前現實の社會關係及び政治關係の下に於て行はれ得る限りの無產政黨運動の上の政治教育の程度に對する憤激から、その事業に參加してゐる人々のその方面に於ける言動を攻擊してやまない所謂少數左翼派の態度である。それは根本的には、我國に於ける無產階級の政治行動が、それの現在到達してゐる發達段階に於ては少くともそれの大衆運動としての形式に於ては、議會政策採用の立場を取るより外に途がないといふ事實から來てゐるものである。しかし、眼前現實の社會關係及び政治關係の下に於ては、大衆運動としての無產階級の政治行動は、その目的に於てその階級的利害の政治的表現を唯一の立脚地としてゐるものでこそあれ、その外的形式に於ては、合法的若しくは立憲的手段の外に逸出することは不可能である。それは、『議會利用』といはうとも、『議會への進入』といはうとも、『議會政策』といはうとも、或はまた『議會主義』といはうとも、いづれにしても渝らないことである。尤も、最後に用ひた『議會主義』といふ言葉は、嚴格にいへば意味をなさないものである。議會は有產階級に取つてと同樣に、無產階級に取つても、目的ではあり得ない。それは一の手段に外ならないものである。しかのみならず、同樣のことは、政治行動そのものに就いてもまた、適當に言ひ得られる。それは究極に於ては、一般に政治生活といふものそれ自身が、人間生活の限られたる一面にすぎないものであつて、しかも人間の全生存の上から見れば、それも矢張り一の手段に外ならないものだといふ事實から來てゐるものである。いづれにしても、無產階級の政治行動は、無產階級解放運動の進行の途上の或る地點に於て必

要とされる一種の手段にすぎないものであつて、議會政策は更らにまた、その政治行動の進行の途上の或る地點に於て必要とされる一種の手段にすぎないものである。がしかし、それにも拘らず、その政治行動の手段としてにもせよ、苟くも議會政策が必要とされる間は、それは、それの範圍内に於て、合法的若しくは立憲的外形を取るより外に途がないものであることは、誰れにも自明のことでなければならない。從つてまた、それに附帶する政治教育にしたところで、矢張りその點を考慮に入れて、それに順應しつつ進められて行くより外に途がないのである。

所謂少數左翼派の人々のうちには、かうした自明の事理を無視して、眼前現實の社會關係及び政治關係の下に行はれてゐる無產政黨運動上の政治教育事業の『革命的』でないことを指摘して、或はそれを嘲罵し、或はそれを批難し、時としてはそれを妨害しようとさへするものがある。少くとも、私自身の直接經驗からは　さう言へる。無論私は、私一個のためには、毛頭辯解の必要を感じない。がしかし、無產政黨運動全體の上からは、攻擊者を攻擊しなければならない氣持に誘ひ込まれる。もとより萬一、無產政黨運動上の政治教育に參加する人々の中に、無產階級解放の終極目的を忘れて、ひとへに政治生活を人間生活の全部と見るやうな態度の上から、議會を以て熱願憧憬の聖地とするやうなものがあるならば、さういふ連中こそ極力批難されても仕方がないものであるが、しかしさうでないものまでが、一律に批難されるべきものではない。少くとも私自身はさう考へる。

所謂少數左翼派の人々が、彼等自身の行動の水準を大衆運動に引下げるとを潔しとしないで、その革命讃美の精神を實際の行動の上に移すために一切の犧牲を拂つて顧みない態度を取つてゐるならば、我々は我々の立場から彼等と同行することは出來ないが、しかし彼等に向つて無上の相應を拂ふことを躊躇するものでない。が、今若しこれに反して、彼等が實際上に於て行動意思を缺き、單なる口舌の雄として立つことに甘んじて、高見の見物的態度から、眼前の現實

的諸關係の下に於て實行し得られる限りのことを實行することを以て、直ぐ次の將來への進一步の段階としてゐるものを見下だして、口の枇の掛らないままに、恣まに嘲聲罵聲を浴びせかけて居るのを見るときは、毫も彼等に好意を持つ氣にはなれないのである。彼等は口に革命的言辭を唱へてゐるから、一見極めて危險の地點に立つてゐるやうに見えるが、しかし實は彼等の高見の見物の地位こそ、極めて安全の地點であり、一種の高踏的隱遁の場處である。そして、そこに避難して空虛な壯語に陶醉してゐる彼等は、實質上に於て、無產階級の政治行動の妨害者でこそあれ、それの促進者ではあり得ない。

四　無產政黨運動に於ける政治教育（中）

——政治行動の目的と政治教育の職分——

無產政黨運動の直接目的は、その言葉の表面上に現はれてゐる通りに、無產階級の手に政權を獲得する目的を以て政黨を組織し、維持し、擴充し、活用して行くことに依つて、無產大衆の階級的利害關係を、議會を通じて合法的に代表し主張することの上に存してゐるのである。

もとより、無產政黨運動が、眞にその名に副ふものであることを期する限りは、それは、無產大衆の階級生活に基礎づけられた社會觀に依據する社會改造にまで進み續けて行くといふことを以て、それの終極目的として揭げない譯に行かないものである。しかしながら、議會政策に即する無產階級の政治行動が、果してそれ自身單獨で、無產階級解放運動を、さうした終極目的にまで進めてゆくほどの偉力を示すであらうか否かは、今日のところでは、尙ほ未知數に屬してゐるものである。否、それは單獨では、それほどの偉力を具備してゐるものでないことを主張する側の方に、寧ろ、

より有理な――それ故により有力な――論據があるやうにさへ思へる。けれども、それは縦し單獨ではそれほどの偉力を具備してゐるものでないにもせよ、無産階級解放運動を右の終極目的にまで推し進めることに向つて貢獻する可能性のある諸要素中の一つと見られるべきものだとだけならば、有理に確説し得られるのである。一體、無産階級解放運動の終極目的の實現と言つたやうな遠大な事業は、何等かの單一の要素の活動に依つてだけで達成し得られるものでないことは、有理に言はれることである。否、それは、いふまでもなく、それに向つて合流する多岐多端の諸要素の活動の集積の成果として、しかも今から殆んど豫想が出來ない程の時日の經過の末に至つて、始めてそれへの到達の曙光が見られることが期待されるべきものだと言はなければならないものである。そして、無産階級の政治行動は、さうした諸要素中の一つであるにすぎないものである。しかもその政治行動は、我國の眼前現實の社會的及び政治的諸關係の下に於ては、議會政策の採用から出發するより外に途がないものだといふこともまた、極めて當然と考へられることである。が、さうした意味及びさうした形式の政治行動の採否の決定は、一にそれの價値の認識の如何の上に繋るのである。であるから、さうした政治行動の採用が決定されたといふことは、或る程度に於けるそれの價値の認識の結果でなければならないことは無論である。けれども、それの價値の認識といふことは、必ずしもそれを一の萬能力として價値づけるといふことと一致するものでなく、屢々それを或る限られたる効力の範圍内で價値づけるといふことをも含むものである。今このことを事實上の問題として見れば、現在我國に於て、議會政策に即する無産階級の政治行動を計畫する人々のすべてが、決してそれを一の萬能力として價値づけてゐる譯ではなく、寧ろ彼等の多くは、――或は彼等のうちの最大多數者は、――それを或る一定の限られたる効力の範圍内で價値づけてゐるのである。がしかし、如何なる見地からにせよ、一旦それの採用が決定された以上は、それは本節の劈頭に於て掲げられた通りの直接目的の下におかれ

た無産政黨運動から出發しなければならないものである。そして、その運動の下に於ては、その目的に副ふやうな政治教育事業が、實際上必要視されなければならないものでもあり、また、それに於て相當の重要地位を占めるべきものと見做されなければならないものであることは、何人にも承認されなければならないことであらう。

以上に述べて來た諸點を綜合すれば、我々は玆で一應次の通りに結論することが出來る。――すなはち、無産政黨運動に附帶する政治教育事業は、一方に於ては無産階級運動の終極目的に依つて指導されなければならないものであると同時に、それはまた、他方に於ては、無産政黨運動の直接目的に依つても制約されなければならないものである。そのうち、前者に屬する諸要點は、無産大衆の階級的生活を基調とする今日の一部の社會思想に於て反復論議されて來たところのものであるから、玆で特別にそれに觸れる必要はないであらう。私はそれ故に、玆では主として後者に屬する樣々の事項に關する範圍内に於て、無産政黨運動に附帶する政治教育事業上の重要問題の諸點に觸れてみようと思ふ。

無産政黨運動の直接目的は、前に述べた通りに無産大衆の階級的利害關係を、議會を通じて合法的に代表し主張するために、それの基礎となるべき諸勢力を政治的に組織することの上に存する。從つて、この運動に伴ふ政治教育事業もまた、第一次的には、この目的のために役立つものでなければならない。だが、かういつただけでは、ただそれの輪廓を髣髴せしめるだけの概括的説明にしかならないのであつて、それの本質を今少し具體的に闡明するためには、その上幾分の細説を必要とする。で私は今、次にそれを試驗的に提供してみようと思ふ。そして、それを企てるに際して、私はこの問題を、無産政黨の運動に於ける政治教育の對境、それの職分、及びそれの内容の三つに分つて、順次にそれらを略説して行かうと思ふ。

五　無産政黨運動に於ける政治教育（下）

――それの對境、職分、及び內容――

A　對境　　最も廣い見地からいへば、無産政黨運動上の政治教育事業の對境といふものは、無産大衆の階級的利害關係の政治的表現及び主張を支持するために出來るだけ有力な一政治的勢力を組織する目的の下に、知的及び道德的啓發を主眼として働き掛けられる社會的諸集團の全範圍を指すものである。この點からいへば、それの對境は國民全體だといはなければならぬことになる。けれども、無産政黨運動に於ける政治教育事業上の當面喫緊の實際問題として考へるときは、それは何よりもまづ、無産政黨の構成要素の數量的供給の分野として有望と見られる社會的諸集團の上にその主力を集中しなければならないものであるから、我々はそれらの社會的諸集團を、それの狹義に於ける對境として取扱ふことが出來る。そして事實上、無産政黨運動に於ける教育事業が、それら以外の社會的諸集團に對しても積極的に働き掛けるほどの餘力を有してゐようなどとは、少くともそれの初期に於ては、到底期待し得られないことである。だから、差し當つて我々の問題になるのは、右の狹義に於ける對境だけだと言はねばならぬ。

かういふ風に限定された意味に於ける無産政黨運動に於ける政治教育事業の對境としての社會的諸集團中に於て、最も有望な分野として見られるものは、いふまでもなく組織されたる工業上及び農業上の勞働人口であつて、それからまだ組織されてはゐないが、將來組織される可能性のある勞働人口が當然それに次ぐものと見られなければならない。が、尙ほ、それら以外の無産階級の諸分子――たとへば自由勞働者の群團の如きもの――も相當に重要視されなければならないと同時に、中産階級の項下に總括し得られる社會的諸集團の中にも、決して輕視してはならない部分が可なり

多く包含されてゐるのである。

これらの社會的諸集團は、無產政黨運動に於ける政治教育事業の現狀の下に於ても、それが直接積極的に働き掛けなければならない對境として見做されなければならないものである。もとより、これらの社會的諸集團のうちに於て發見され得る無產政黨の構成要素と見做されるべきものは、直接には、第五十議會で制定された新選擧法の下に於ける有權者から成り立つたものである。がしかし、さうした有權者でない諸分子――それらの社會的諸集團中の二十五才以下の男子幷にすべての年齡の女子を含めての――もまた、或は將來の有權者として、或はまた現在の有權者の向背を決する上に於て或る程度の影響を與へ得る隱然たる一勢力として、無產政黨運動の各部門に於て相當に重要視されるべきものである。從つてそれらの諸分子もまた、その運動に伴ふ政治教育事業に於ても、それの對境のうちに屬するものとして、無產階級本位の立場からの政治知識的及び政治道德的啓發が向けられるべき貴重な素材として取扱はれなければならないものである。

B　職分　概括的にいへば、無產政黨運動に於ける政治教育事業の職分は、すぐ前に示唆した通りに、それの對境に向つて、無產階級本位の立場から根本的重要性のものと見られる政治知識及び政治道德の普及のために働きかけることの上に存するものである。この意味に於て、それは無產政黨運動上の研究助成事業及び宣傳事業と大體上一致するものである。が、ただ玆で一言注意しておかなければならないことは、その宣傳事業は、當然のことゝして對大衆的のそれを包含すると同時に、對集團的及び對個人的のそれをも共に包含するものである。そして、これらのうち、いづれが最も重要視されるべきかといふことは、一律的には決定し得られるものでなく、寧ろそれらのすべての樣式の宣傳

が、相互的補償關係の上に立つてゐるものだと説明するのを、最も適當とすべきものである。

以上は、無產政黨運動に於ける政治教育事業の職分を、それの能働的作用に立脚して性質づけた試みであるが、我々はそれと同時に、それの一種の『受働的作用』ともいふべき方面にも注意を拂はなければならぬ。といふのは、かういふ意味でいふのである。——すなはち、無產政黨運動に於ける政治教育事業は、それの對境と見做される社會的諸集團のうちから、出來るだけ多數の人員を無產政黨組織の方へ送り込む目的を以て行はれるべき筈のものであることは無論であるが、それはその反面に於ては、その同じ對境へ向つて働き掛けて來るブルジョア諸政黨の宣傳の侵入を防止することのためにも、多大の努力を拂つて活動しなければならないものでもある。そして、さうした活働を、私はそれの受働的作用と呼んだのである。

この意味に於けるそれの受働的作用が如何に大切なものであるかは、既成諸政黨が現在に於て既に、當然將來の無產政黨構成要素の供給の分野と見做される社會層に切り込むとの上に、絶大の努力を費さうとしてゐる證跡を示してゐる事實の考察から來る當然の歸結として、論斷し得られるのである。私が本文の初めの方で特に强調しておいた通りに、それがために既成諸政黨間の分裂合同騷ぎが際限もなく持ち上げられ、またそれがために、國家の立法機關を動かすことに依つて、將來の無產政黨の活働の場面を極度に限局するための治安維持法が、既成諸政黨の共同一致の支持に依つて制定され、更らにまたそれがために、普選法通過後に於て、既成諸政黨の側から、社會政策を匂はした所謂新政策の樹立の發明が、それの實行の可能不可能の檢討の遑もなく、遽然として發表されたのである。この點に關して確固な對策を立て、且つそれを有効に運用することは、無產政黨運動に於ける教育事業の上に課せられた當面の急務中の少くとも一項目をなすものだと言ふことは、强ち誇張の言葉だとはいへないであらう。

C 内容

無産政黨運動に於ける政治教育事業の對境とそれの職分は、直接にそれの内容を決定する。で、まづ第一に、それは政治知識上及び政治道德上の啓發事業を包含するものであつて、そしてまた この啓發事業は、當然のこととして無産階級本位の立場から行はれなければならないものだといふとは、自明の事柄であらねばならぬ。のみならず、それが無産階級本位のものであるといふ以上は、それは殊にその知識的部分の關する範圍内に於て、無産大衆の階級的生活に基礎づけられたる社會學説及び社會思想の方面から持つて來なければならない幾多の項目を包含して居るといふこともまた、同様に容易に認識し得られることである。が、今この點に關して一二例を擧げると、たとへば無産階級の現代社會構成に於て占めて居る地位とか、それの將來の社會改造の活働要素としての可能性とか、それの政治的勢力としての組織化の必然性とか、經濟的勢力の政治的表現への不可抗的趨勢とかいつたやうな諸問題に關して、政治的知識の啓發運動のために必要な説明は、現在に於て既に、一部の社會學説及び社會思想の方面に於て、非常に豐富に供給されてゐて、無産政黨運動の政治教育事業に從事する人々に、それをそのままに用ふるに任かせてゐる狀態にあるのである。

けれども、無産政黨運動に於ける政治教育事業の場合に於ては、我々は尙ほそれ以外に、新政治意識の發生及び成長の促進及び助成の必要といふことを、全問題の基底に置いて考察しなければならないのである。無産政黨の出現といふことが、既成諸政黨の分裂合同とか、または新ブルジョア政黨の勃興とかいつたやうな諸現象とは、全然別個の社會的及び政治的意義を持つて居るものと見られなければならない理由は、究極に於ては、後者の因つて以つて立つところの傳統的政治意識が、前者の因つて以て立つところの新生の政治意識とは、根本的にその本質を異にするものだといふ事

實から來てゐるのである。

もとより、既成諸政黨の傳統的政治意識が、その根本に於てブルジョアジーの階級的意識の政治的表現である通りに、將來の無産政黨の政治的活動の源泉となるべき新政治意識——それは既に現在に於ても着々醞釀されつゝあるものである——もまた、その根本に於てプロレタリアートの階級的意識の政治的表現である。かういふ風に、何れの場合にしても、それぞれの政治意識は、それぞれに獨自の階級意識の政治的表現であるといふ一點は全然同一であるが、しかしながら、その基底となつてゐる階級意識が、それぞれに根本的に本質を異にしてゐるものであるが故に、從つて、既成諸政黨の傳統的政治意識と無産政黨の新政治的意識との間に、互に相容れることの出來ない本質上の差異が生じて來てゐるのである。そして、既成諸政黨と無産政黨との間に必然的に起らうとしてゐるものと豫期され得る政治鬪爭（縱し議會をその舞臺とするものにもせよ）は、それらの新舊兩政治意識の鬪爭の反映であるべきことは、いふまでもないことであらう。

私は今まで殆んど無意識的に、政治鬪爭に於ける意識の作用を非常に强調して來た。がしかし、私は今それに氣が附いても、別にそれを取消さうとも、訂正しようとも思はない。私はもとより、マルクスが敎へた通りに、人間の意識が彼の存在を決定するものでなく、彼の存在が彼の意識を決定するものだといふ原理を拒まうとするものでない。少くとも私は、『經驗世界の諸事實の因果的說明』の一樣式として、——そして私自身の解釋に從つて、——それを受け容れてゐる。更らにまた私は、歷史派の法學及び政治學說に於て示唆されてゐる通りに、民衆の傳統の中に培はれてゐる無意識の心理が、彼等の社會的行動の上に偉力を及ぼすものだといふ立場を否定しようとするものでもない。少くとも私

は、それを無意識の意識化及び意識の無意識化の過程に關する觀察に結び附けて肯定する。けれども同時に私は、人間の社會的行動に於て、人間の意識の創造力が強調されなければならない譯を――そしてそれが實際上常に強調されてゐる譯を――知つてゐる。私は嘗て、本誌に於て政治過程に於ける意識的統制を論じた際に、その點を力說したから、それを玆で再說はしない。けれども私は玆でも、人間が社會的行動に際して意識の創造力を無意識的にでも尊重するといふことを認識するのでなければ、少くとも何故に無產階級運動に於て、無產大衆の階級意識を喚起する聲が連呼されるその根據を突き留めることが出來ないといふことを一言しておく、更にまた、古來屢々支配階級から民衆に向つて與へられて來た政治道德訓に於て、命令服從の傳統的關係の盲目的承認に從つて行動することが政治倫理上の美德として慫慂されてゐるのは、一見恰かも支配階級が、習慣に依つて無意識行動に化成され切つてゐる民衆の服從的奉仕だけを專ら重要視することから來てゐるかのやうに考へられるが、しかしそれも實は、一方に於ては、支配階級の政治意識を民衆の上に強課しようとする意圖から來てゐるものでもあれば、他方に於てはまた、新政治意識が民衆の現實生活の裡から自發的に湧き出て來るのを豫め阻止しようとする意圖から來てゐるものでもある。私は尙本文の續篇に於て、更らにこの論點を展開せしめようと考へてゐるから、玆ではたゞ、無產政黨運動に於ける政治教育事業に於て、無產大衆の階級生活の上に基調を持つ新政治意識の發生及び成長の促進乃至助成の問題が、それの中心的問題の一つとして重要視されなければならないことを言ふだけに止める。

私は今漸く、將來の無產政黨の活働の源泉となるであらうところの――そしてさうならなければならないところの――新政治意識の倫理性を示唆する準備が出來たやうに思ふ。人間の意識的行動は畢竟『價値あるもの』――若しくは『價値あるもの』と思惟されるもの――に向けられるものである。それ故に、人間の意識的行動を衝動する直接の動力

は[illegible]要請する。[illegible]個人的生活[illegible]に於[illegible][illegible]て[illegible]価値の[illegible]あるし、更にまた[illegible]には必[illegible]これに[illegible]理[illegible]ある[illegible]の[illegible]もの[illegible]それ[illegible]なければならない。然[illegible]おいて人間の生活の[illegible]し、[illegible]的な行動に[illegible]ある限りは、それの倫理性が最も多く強調されることを必要とするものである。

新政治意識の倫理的の主張の必要はそこから発生する。けれども新政治意識の倫理性の主張の必要といふことには、それの倫理性の意味の発見といふことは[illegible]社会でないことは、いふまでもないことであるとすると、[illegible]倫理的真理に対する我々の探究の努力は、直に新たな[illegible]向けられなければならないのである。

私は[illegible]の結論だけを言ふとにすると、新政治[illegible]倫理[illegible]て、アリストテレスの[illegible]人類、必然的に人類的性質のものであるといふことは[illegible]をその[illegible]に[illegible]し、そ[illegible]的[illegible]を力説したクロポトキンがいふべきもの[illegible]やうに[illegible]ボトキニズムの上に見られる倫理は、[illegible]我々の[illegible]社会[illegible]と[illegible]ないものであらうか？[illegible]ものとすれば、それは[illegible]されるものであるか？[illegible]得ないまでに[illegible]すれば、[illegible]すべきであるか？——といふやうな[illegible]ざるを得ないが、それに対[illegible]題の[illegible]は、私に[illegible]ることにするので[illegible]

ラヂオ文明の原理

[illegible]

ラヂオ文明とわれ〳〵が呼びたすべきところの時代[illegible]は、[illegible]
それは一つの革命である。一つの世界革命である。今や、われ〳〵の眼前において展開されてゐるところの世界の[illegible]は、言葉の如何なる誇張もなくしていひえられるところの、一つの世界革命である。レニンの世界革命が失敗に終つてから、一つのさらに大なる、そしてより根本的なる世界革命がきたのである。

世界戦争の果実が今に熟したのである。それは[illegible]世界戦争の以前に[illegible]してゐたといふことはできるであらう。[illegible]の[illegible]ね、遠く[illegible]に[illegible]ことのできる[illegible]代文明人にとつては、アリストオトルとともに見てのものいうちの[illegible]部分はそれ[illegible]以前に[illegible]いふことで[illegible]

[illegible]ら。それは世界戦争の終末においては、[illegible]のユトピアであるとも考へられたところのものであるが、[illegible]が今や現実である。ウエルスの[illegible]ユトピアがすでに現実である。世界戦争が終つてから[illegible]に[illegible]にして、そのユトピアがわれ〳〵の目前に[illegible]されて[illegible]に至るまで[illegible]、[illegible]、苦しみつゝある間に、[illegible]い時代、一つの[illegible]な新しい時代がきたのである。[illegible]のごとくに見えたところの[illegible]は今は一つの昔語りであり、世界戦争は[illegible]の[illegible]における[illegible]である。この[illegible]を[illegible]として、歴史は[illegible]にそのきたのである。[illegible]のくわし[illegible]の[illegible]はまさに[illegible]の[illegible]であつた[illegible]この[illegible]大なる[illegible]が、この世[illegible]の[illegible]はなしとげられ、[illegible]をなしとげ[illegible]る。

ラヂオ文明の[illegible]されつゝ[illegible]のであつて

[illegible]
[illegible]
[illegible]ない。
こ[illegible]は[illegible]の[illegible]は[illegible]十[illegible]
[illegible]して、[illegible]石油の時代[illegible]、今[illegible]
[illegible]であ[illegible]として、自動[illegible]
技術しく[illegible]あるべく、其他の[illegible]して[illegible]
[illegible]して石油[illegible]してきた[illegible]のである。石油は[illegible]
であり、そして[illegible]である。[illegible]
とが、其有名な[illegible]ある間に、石
炭の時代が[illegible]よつて、石油の時代が[illegible]である。
それは[illegible]のうへにおける[illegible]である。世[illegible]技術
においては[illegible]の[illegible]であり、若しくは[illegible]
[illegible]であるとしか見えなかつたところの自動車と[illegible]
[illegible]とが、[illegible]命してきたのである。こゝに時代
までは[illegible]に[illegible]れてきた[illegible]なかつた石油が
[illegible]にも[illegible]ある。
[illegible]はたやなる[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
して[illegible]
[illegible]つてきたことは[illegible]
つてゐることを[illegible]
[illegible]して[illegible]く[illegible]
として[illegible]なく、その[illegible]の[illegible]
ある[illegible]たゞに石油の[illegible]
の革命であり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]つて[illegible]
[illegible]と、この[illegible]
[illegible]
もつてことくに[illegible]、今日は[illegible]
の時代といつても[illegible]がといふ[illegible]
だといふよりは、ラヂオ文明[illegible]る。

三

今日はラヂオ文明の時代である。[illegible]
くラヂオ[illegible]時代の時代と[illegible]
界の他の個人に[illegible]であるか、何[illegible]されて居るか[illegible]
け、けれども、[illegible]て人々の常識にまで[illegible]
ことである。

ラヂオ文明は、もとより、今は[illegible]つて[illegible]
ある。ラヂオ、それ自身の[illegible]
時間におけるリイ・ド・フォレスト[illegible]
いも、欧洲に於けるマルコニイ[illegible]
人間の[illegible]ものも、[illegible]日のことよって[illegible]
ラヂオの[illegible]
[illegible]くの[illegible]
を[illegible]
は、それは[illegible]
アメリカの[illegible]
ラヂオ[illegible]

[illegible]

33

[illegible]ではない。[illegible]

[illegible]それで[illegible]

[illegible]用し官僚を[illegible]

[illegible]に、[illegible]の政治に、商[illegible]に、法律に、教育に、[illegible]と

[illegible]べきではない。時代[illegible]

[illegible]イギリスに、ドイツに、[illegible]

[illegible]に「個」の[illegible]

[illegible]のであることに[illegible]

[illegible]時代が[illegible]のである。

四

[illegible]の欲するを[illegible]

[illegible]人も[illegible]

[illegible]ラザ[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]世界のラテン化は[illegible]

[illegible]の条件は既に世界の[illegible]

[illegible]が近づき[illegible]

[illegible]の間に[illegible]

[illegible]との共存[illegible]

[illegible]において、[illegible]人[illegible]

ではない。[illegible]においてさえ、[illegible]

[illegible]時間[illegible]

[illegible]のである。

時代[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]人目[illegible]とを[illegible]
[illegible]目の[illegible]ことでも、ラジオの[illegible]
[illegible]して時代の[illegible]その理由は少しも[illegible]しないのである。
[illegible]交問[illegible]であるっ[illegible]ラジオのこれ[illegible]
[illegible]である。[illegible]交問[illegible]見てはない。時間を[illegible]
くラジオの電波[illegible]同伴へのところ[illegible]
[illegible]のラジオの[illegible]けられてき[illegible]一つの地方に伸へるとこれを[illegible]
[illegible]と[illegible]とは今日は何るかである。
[illegible]にするごとに、ラジオと新聞紙とは今や手を携へ[illegible]から[illegible]
ておる。日日の新聞紙は[illegible]におりラジオ・プログラムの[illegible]の進歩、そしてまた[illegible]ことに
において[illegible]の条件は、そし[illegible]るのである。エドマンド・バ[illegible]
[illegible]同しめたところの新聞紙、[illegible]
[illegible]一つのものが対に[illegible]するといは[illegible]
り、そしてその他[illegible]ないのである[illegible]疑もなく[illegible]代の中心[illegible]
[illegible]との[illegible]が、その重大な[illegible]において同一である。[illegible]
とくに、ラジオと新聞との[illegible]も、またその[illegible]について如何なる[illegible]なものであらうとも、若しくは[illegible]
[illegible]ないであらう[illegible]如何なる[illegible]
[illegible]ほして記事となり、[illegible]時には、[illegible]人の
[illegible]で[illegible]人も[illegible]のもこの威力に打
の[illegible]ないのである

にあり、彼等には自由文明であり新聞紙の時代があつた。[illegible]

[illegible]時代が早く[illegible]終りを告げ[illegible]

の[illegible]がいかむきたの[illegible]である。

[illegible]の[illegible]は、次の[illegible]方面によつて、彼等のレェッ
ン・デェトルを[illegible]せんとするであらう。[illegible]ジオにおいて
[illegible]新聞[illegible]の新聞に[illegible]し、[illegible]の新聞に[illegible]十分の機
[illegible]私はこの問[illegible]
[illegible]はない[illegible]である。[illegible]
あるごとくに、新聞紙[illegible]オの精神に[illegible]するのであら
[illegible]が日刊新聞[illegible]時間[illegible]する
ごとくに、[illegible]その[illegible]
[illegible]

ラ[illegible]が[illegible]
[illegible]
[illegible]これ[illegible]の[illegible]
[illegible]し、ここに[illegible]文明が生れて[illegible]
今日の大社会[illegible]である。今日の[illegible]
[illegible]であることである。それは[illegible]
であることがかく[illegible]に存在するとこ[illegible]もので[illegible]
今日は常に[illegible]である。かかる不時代においても、
そこに[illegible]、そこに大社会がある。大社会なくば[illegible]
ありえないのである。文明とは社会の文化を[illegible]するから[illegible]
る。そして社会的分化とは、大社会において[illegible]
り、[illegible]ところのものであるからである。
・文明[illegible]の[illegible]
あり、そしてスペンサアの複雑化[illegible]、分化といふ[illegible]
たといふも、けれど、大社会の[illegible]にある[illegible]文明の[illegible]には、
分化の[illegible]であり、[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]トのー[illegible]

[illegible]に掲載し[illegible]

[illegible]である[illegible]のことが論究され、[illegible]

[illegible]へて、[illegible]ある[illegible]

[illegible]は[illegible]ストイツクを[illegible]トルストイはインタナシ[illegible]

[illegible]を表象[illegible]なる何ものも[illegible]

[illegible]時代の[illegible]物[illegible]トルストイ[illegible]

[illegible]場面にを化したのである。[illegible]の[illegible]で[illegible]

[illegible]ところのものは[illegible]

[illegible]表現[illegible]によつて[illegible]ところの若しくはトラアを、[illegible]

[illegible]くの[illegible]に[illegible]を明によ[illegible]ありとしたところの[illegible]も、

[illegible]の海[illegible]つゝある。[illegible]

[illegible]の神の[illegible]

[illegible]ない。[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

我[illegible]

それは、けれ[illegible]、既に昨日のことにし[illegible]

自然文明の[illegible]ではあり[illegible]と、一[illegible]

てはありません、のであるが、然[illegible]するところ[illegible]

[illegible]自ら[illegible]たりしとするの[illegible]

相談は、過去の[illegible]と[illegible]しや[illegible]ない[illegible]

[illegible]代の[illegible]あるところの[illegible]は[illegible]にありつゝあ[illegible]

新聞紙は時代の[illegible]であることゝ[illegible]に、今や一つの[illegible]

時代を之と化せんとす。

新[illegible]紙の[illegible]的[illegible]かは[illegible]は、[illegible]ために、一つ[illegible]

の[illegible]ることは[illegible]いから[illegible]

的である。[illegible]ば[illegible]、[illegible]

にとされるのである[illegible]

よ[illegible]何である[illegible]新[illegible]紙[illegible]

行はれるものも、[illegible]行き[illegible]、若しく[illegible]

[illegible]れるのも[illegible]等しく、[illegible]時間であり、一[illegible]

[illegible]つ[illegible]れ、[illegible]

る、[illegible]ウイック・ソファ[illegible]

[illegible]エウンのごとき[illegible]

に、ラヂオは[illegible]をもって[illegible]入ることが[illegible]

できるのであって、時代が[illegible]

味するのである。[illegible]

これに對するのである。[illegible]

[illegible]求して[illegible]

ラヂオは[illegible]統一者である。時代の[illegible]

その[illegible]統一者である。ここにラヂオがあり、今日[illegible]

[illegible]文明は一つ[illegible]なったのである。[illegible]

[illegible]たけれども、ラヂオは[illegible]

ここに二十世紀文明の[illegible]が[illegible]して、現代文明は[illegible]

頂上に達したのである。[illegible]ラヂオ文明と[illegible]

ラヂオ文明[illegible]文明の[illegible]發展[illegible]ないのである[illegible]

[illegible]して、ラヂオ[illegible]に代るべき[illegible]の[illegible]

[illegible]があ[illegible]的[illegible]されないであらう[illegible]

時[illegible]に成立[illegible]

さるところのものではない[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]いふのである。[illegible]

[illegible]のである。[illegible]

蓄積的で[illegible]

あり、[illegible]時に、[illegible]

[illegible]化し[illegible]

[illegible]にはによく[illegible]のである。

[illegible]彼の名には[illegible]であり[illegible]

[illegible]に[illegible]スは瞬間[illegible]失

[illegible]聞いて[illegible]は[illegible]。見て[illegible]なし

[illegible]リ[illegible]に[illegible]

[illegible]は、見て[illegible]

[illegible]に創造され、そして刻々に[illegible]のである。瞬間

[illegible]生活に[illegible]や何等の

[illegible]、[illegible]都市の[illegible]、生活に[illegible]であ

[illegible]近代都市の世界都市人にとつては、[illegible]瞬間的

瞬[illegible]るのである。センチメンタリイである。[illegible]リイ一は

なくセンチメンタリイなのである。

都会人は[illegible]瞬間[illegible]し、文明人は[illegible]消する。[illegible]

[illegible]人の生活は瞬間的である。[illegible]瞬間[illegible]くき文明であ

る。[illegible]リイ・ニュウ

[illegible]ない[illegible]センチメンタリイ・[illegible]がセメン

[illegible]

[illegible]

い[illegible]大きなる。時代の[illegible]

[illegible]である。ラヂオはセンチメンタリイ・

の新聞[illegible]の新聞である。[illegible]

[illegible]するところの新聞であり、[illegible]

先に時代[illegible]くところの[illegible]新聞なのである。

六

ラヂオは時代[illegible]である。精神のための精神であ[illegible]

時代にあつて、[illegible]である。時代を創造するところの[illegible]

[illegible]して[illegible]ところの精神である。[illegible]

精神である。時代が[illegible]つて、ラヂオは時代の精神と[illegible]

のである。[illegible]が[illegible]くきところにおいてなしとげ[illegible]

のを、ラヂオは高き文明においてなしとげんとする[illegible]

[illegible]の[illegible]がなさんとしてなしえなかつたところのもの

を、ラヂオの高き能力がなしとげようとしつつあるのである。

[illegible]ラヂオの歩むところに世界は今[illegible]とす。ラヂオの貢献

するところに世界は存在を規定せられんとす。ラヂオは[illegible]

[illegible]の[illegible]り、[illegible]のが滅亡する[illegible]

[illegible]ラヂオに[illegible]る[illegible]。[illegible]れに[illegible]

これ[illegible]の[illegible]となんとする[illegible]するならねばならない。彼の[illegible]はラヂオとと[illegible]

ラヂオの時代は[illegible]的に[illegible]。その[illegible]間には如何なる新聞もなく、ラヂオ[illegible]しない。人々はただラヂオの與へるところのものを受取らなくてはならぬ。ラヂオは何を與へ、何を報道するとも、人々はそれを[illegible]ることはできない。人々は[illegible]傾けなければならない。その欲すると欲せざるとにかかはらず、人々は[illegible]にそれに耳を傾けねばならない。新聞文明の時代において、人々が日々の新聞紙を読まずにはゐることができない如くに、ラヂオ文明の時代に於ては、人々はラヂオの設するラヂ[illegible]の聲に耳を傾けなくてはならないのである。新聞文明の時代において、新聞を読まざるものが社會に[illegible]後れとなり、そして正に時代のほかに[illegible]せられるごとくに、ラヂオ文明の時代においては、ラヂオに耳を傾けざるものは時代のほかに驅逐されるのである[illegible]ないのである。時代に生きんとするものは、ここにおいて、ラヂオの一言一句のうちに機會を捕へなければならないのである。ラヂオにおいて[illegible]の機會を見出すべく、凡ての人々が[illegible]、マニアであり、傾聽者でなければならないのである。ラヂオの[illegible]ところへ導かれ、ラヂオの語るところの一々に耳を傾け、それの與へるところ[illegible]として[illegible]なければならないのである。[illegible]ラヂオとともにあるのである。[illegible]ラヂオとともにあるのである。彼の[illegible]一つ〳〵ラヂオとともに打たるるのである。世界のラヂオ化であり、[illegible]ラヂオ化であり、凡てのもののラヂオ化である。[illegible]それ〳〵の名づくるところのものは、世界の人[illegible]凡てのもののラヂオ化を意味する。ラヂオ[illegible]で、精神の機制を統裁することを意味する。ラヂオ的[illegible]の機制が創造され、そして[illegible]られてゆくことを意味する。ラヂオ[illegible]價値が創造[illegible]ラヂオ的評價のもとに、ラヂオ的な[illegible]され、[illegible]この社會の成立を意味する[illegible]ものに到達し、文明に[illegible]のである。ラヂオ的大社會、ラヂオ的[illegible]てきたのである。

七

[illegible]ことにラヂオ的精神の機制である。ラヂオ的[illegible]が完成されて、ラヂオ文明、ラヂオ的[illegible]成[illegible]するのであ[illegible]

[illegible]御用であり、同時に[illegible]自由なる[illegible]

[illegible]を引き出すその時に[illegible]ものを[illegible]

[illegible]

[illegible]自由である。

そこに中心はない。[illegible]

の役をはたす。その中心は[illegible]

りに包括的な一つの[illegible]

組的なものの役目に、[illegible]

はもう一つの中心が歩み出すのではない。[illegible]中心から[illegible]

きあがるのであるが[illegible]

[illegible]のではない。[illegible]

論理は一つの偉大なる精神の産物である。[illegible]

つの積み重ねであるごとくに、また必然なる一つの精神の[illegible]

[illegible]も、[illegible]

も、[illegible]いふ大なる建物[illegible]

[illegible]各々[illegible]は、木の枝にふくみつつ[illegible]

[illegible]が、枝の下に[illegible]なって[illegible]下の枝に繋がって[illegible]

存在し、[illegible]てきたに[illegible]

[illegible]せられた自由ではない[illegible]分である。各[illegible]

八

[illegible]

[illegible]のであ[illegible]そこに[illegible]

[illegible]化の理[illegible]、自由と[illegible]

革命であらうか。[illegible]化は自由への道であらうか。[illegible]は

人格的価値[illegible]の上に[illegible]であらうか。[illegible]

[illegible]

うか、ナチス文化の反省とともに、我たちは今や理想として[illegible]

く、[illegible]についての論議としてではなしに、現代の問

題、今日の問題の最も切実な問題として、この問題に[illegible]しなければ

ならないのである。

九

ナチス文化の原理はナチス[illegible]ものの原理で[illegible]

[illegible]、耐[illegible]他[illegible]関係であるといふのでもない[illegible]

[illegible]の凡ての条件[illegible]するのである。これ等の[illegible]からし

てナチス[illegible]へ[illegible]求されたので[illegible]

[illegible]において[illegible]的の[illegible]

これについてナチスの[illegible]は、[illegible]

[illegible]

十

ナチス[illegible]的使命[illegible]とともにナチスの[illegible]

[illegible]は、[illegible]的[illegible]

[illegible]ところの[illegible]

く存在するのである

ナチスはたとへ[illegible]命であるのに[illegible]

革命[illegible]して[illegible]革命へと[illegible]であるし

存続は個人的である。無[illegible]は[illegible]であるし[illegible]個人主義

[illegible]、[illegible]は、レクチオ[illegible]ズムを代表する。[illegible]

[illegible]後者は[illegible]的である。前者は自由であり[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible] ることと [illegible] 前 [illegible] 向。[illegible] 人々 [illegible] もこ [illegible] ない [illegible] けれ [illegible] すのごとくに [illegible] 國と [illegible] しての [illegible] する。しかるにその [illegible] 役割 [illegible] に [illegible] 理解することと [illegible] いできる性質的概念ではない。ナポレオン [illegible] 合を存在せしめ [illegible] この構成的 [illegible] 段のごとくに、[illegible] れ [illegible] はならないところの [illegible] たのである。彼 [illegible] それの一つの [illegible] もなく、[illegible] には [illegible] の一つの [illegible] ない。[illegible] 々として、シ [illegible] ザオの [illegible] とこの [illegible] して、[illegible] 々に [illegible] なければならないのである。

ラ [illegible] 的 [illegible] 界の [illegible] に於いて、[illegible] の [illegible] である [illegible] 如くに [illegible]、[illegible] への [illegible] られる [illegible]、[illegible] ものの [illegible] には [illegible] 時代の [illegible] のは [illegible] の [illegible] で [illegible] のことを [illegible]

[illegible]

…は…おいてあるの…[illegible]

…ならないことく、…[illegible]

…[illegible]…組織…[illegible]

…[illegible]…らの大衆…[illegible]

…[illegible]…ラヂオ化の…[illegible]

…である

…の…[illegible]…が…[illegible]…に…[illegible]

個人的なものが…[illegible]…なるもの…[illegible]…のである

…[illegible]…多くの

…に於て…[illegible]

…[illegible]…のである

…[illegible]…である。二つの…[illegible]

…を中心…[illegible]

…ごとくに、ラヂオを中心として

…ブルジョア文化、プロレタリア…[illegible]

…くにブルジョア・ラヂオとプロレタリア・ラ

…でもある。ラヂオ…[illegible]

…ある。…は既に始まつてゐる。ラヂオ…[illegible]

…に於ても…の所有者と…[illegible]…に離

然として…を分つてゐる。ラヂオ時…[illegible]…の対立

…を如何として…[illegible]

…ごとく…[illegible]…には、…[illegible]

いか。…[illegible]…大衆の…[illegible]

…支配階級の…[illegible]…には…。…ブルジョア…[illegible]

…プロレタリア…[illegible]…も、…[illegible]

はないか。プロレタリアと農民とにとつては、…[illegible]

る。支配階級の…[illegible]…が、…[illegible]

一切の…[illegible]…に耳を傾けなくてはならない…[illegible]

は、かくして…[illegible]

…[illegible]…そして…[illegible]…たのであ…

…[illegible]…ラヂオ…[illegible]…を主張するであらう。ブル

ジョア…[illegible]…として…[illegible]…この時代は…[illegible]

…[illegible]…へ、…からトラストへ、

から…[illegible]…しつゝあるといふことを…[illegible]

に、…[illegible]

…には既にこのことは…[illegible]…あるのである。それに、

れど、…[illegible]…のに…とつ…[illegible]…ない。ラヂオ

化である。ブルジョア・ラヂオに対する…[illegible]

ジャーナ…[illegible]…つて「…」が独占せられる…[illegible]

に、ラヂオ…[illegible]…かによつて…[illegible]

[illegible]ましし[illegible]ることになるか[illegible]

[illegible]てより、民衆の大[illegible]ラジオ[illegible]ある。[illegible]れば固有

ラジオは、最も合理的[illegible]

[illegible]である。民衆の[illegible]化は[illegible]において[illegible]

まれるのである。

十二

ラヂオの[illegible]の一つ[illegible]機械化の[illegible]は

いった。

文明はもと[illegible]一つの[illegible]である。近代文明は既に多く

の方面において機械化をなしとげたのである。今や個々の部類

なる人格、個々の[illegible]、思想、目的、[illegible]として

て存在し[illegible]ディゼル[illegible]部分のごとく

に、人々は今や[illegible]一部分であり、機械的秩序の

[illegible]として、[illegible]に[illegible]し、[illegible]的に[illegible]

[illegible]個の自由な[illegible]であることの[illegible]的、作用に

を喪したのである。

それにもかかわらず、そこには[illegible]

[illegible]が、[illegible]

[illegible]

て、[illegible]化の世界、[illegible]たる[illegible]

も、[illegible]の一角には、人間的なるものの、[illegible]

もの、自由なる[illegible]てきたのである。[illegible]

の[illegible]たる機械的秩序、[illegible]において[illegible]

それは[illegible]の[illegible]、[illegible]に、[illegible]たもの

は、[illegible]かくのごとき[illegible]、[illegible]

であつたのである。[illegible]的秩序[illegible]自由の[illegible]

が、[illegible]にお[illegible]自由人の[illegible]のである。

それは、けれども、今や[illegible]て、[illegible]の

の上から、[illegible]、[illegible]の、[illegible]

[illegible]しているのである。

ラヂオ[illegible]的であると[illegible]、[illegible]、そ

しこまた[illegible]的である。

[illegible]であるとも、[illegible]

する一つの側面にすぎないのである。それに、けれども、最も見易きの誤謬である。獨裁は大衆的である場合において可能である。大衆的であるものはまた常に獨裁的である。機械化の世界においては、大衆的なるものと、獨裁的なるものとが、ともに二つの要素である。これなくしては機械化の可能が保たされるところの二つの要素である。機械化の發展とは、この二つの要素が、それ／＼に自己發展をなしとげたことを意味するのである。それ／＼に自己發展をとげつゝ、相互に助け合って機械的秩序を築きあげるのである。ラヂオにおける機械化の實踐は實にこの二つの原理の作用にほかならないのである。

ラヂオは一方に獨裁的である。個々の思想と人格と從って自由がそこに[illegible]、代表せられるのではない。一つの意見がそれを支配する。一つの思想が他の凡てのものを押しのけて存在するのである。思想と思想との自由なる戰ひこはなく[illegible]、一つの思想の獨占である。タアルドの所謂自由討論の時代がこゝにあるのではない、一切の自由競爭の勝出である、ラヂオの背後にあるところの一階級の意思、政黨の意思、そして、ラヂオ的なる思想が獨占し、征服し、支配するのである。こゝにおいては凡てのものは常に單純の道を行かねばならぬ。時間たる[illegible]相談及び單純なる[illegible]が行はれるのである。

「思想の統一」[illegible]こゝに可能である。思想のトラスト、宗教のカルテル、[illegible]のシンヂケートがこゝに可能なのである。一つの思想[illegible]によって[illegible]皆科學を統一し、一つの政黨の[illegible]によって[illegible]の獨占をなすことも可能なのである。

こゝに人々は最早如何なる治安維持法も、如何なる特別なる言論取締の方法も必然ではない。凡ての支配階級はラヂオを支配し、それによって思想を支配することが可能であるのである。凡ての支配階級はそれによって一切の言論の[illegible]い。從って何等の危險思想の[illegible]をなすことは出來ないのである。思想の獨占があり、また一般化があるからである。

その一般化に、それに、たゞなる階級鬪爭のこゝへに於ける方法として役立つものであるといふことは勿論ない。ラヂオを通じて行はれるところの政治も思想も藝術も若しくは教育も宗教も、それの存在は第一義は、何よりも先きに、ラヂオ的であることでなければならない。

ラヂオ的であるものは大衆的である。最大限度における大衆的である。大衆的であるもののみラヂオ的である。大衆の講演、高級なる論文、高遠の思想、そして瞬間なる藝術はラヂオ的であることは不可能である。それ等の一切のものは時代の中

[illegible]凡ての頭要[illegible]

の階級[illegible]なるもの[illegible]

夕刊新聞的なる[illegible]が標語を掲げなければならな[illegible]

[illegible]しり一つ新聞文化と呼ばれしたところのもの[illegible]漸々低下

して[illegible]らしい[illegible]文化[illegible]るものがとって代るのである。

[illegible]にキネマなど[illegible]ある

[illegible]とかダオ体操とか、今の時代の一つの見である。凡ての古る

[illegible]こゝに一つの新らしい見が、二十世

[illegible]よ、[illegible]

ジャン・ジョレス

世界平和の四大使徒として基督、カント、[illegible]と並び称せら

るる彼の思想、生涯、事業に[illegible]

[illegible]の社会主義内閣が成立した[illegible]の大偉人としてパ

[illegible]るるに至った。彼が社会主義の為めに[illegible]

力[illegible]人道の闘士として戦った功績は[illegible]

キ[illegible]アナト[illegible]影響を受けてあの[illegible]

社会[illegible]はれている

者のために[illegible]

[illegible]して今[illegible]

農業の將來

中島九郎

一 農業の將來 一

産業革命は始め工業界に起り、其方面に向つて最も威力を逞うし大微なる變革を發生せしめたものであるが、農業界は産業革命の影響を直接受けることは薄かつた。それ農業は其性質として天然及び勢力に依賴する所が多く、機械を中心とする資本主義的文明の侵入する餘地が從來乏しかつたが爲めである。さりながら産業革命を生み出せる資本主義的組織が、かくも普遍的に且つ相當の期間に亘つて行はれる時は、如何に農業も久しく無關係に留ることが出來ず、今や直接間接に資本主義化を少なからず受くるの餘儀なきに至つた。即ち積極的に於ては個人所有の土地の上に大規模の排水、灌漑を施して土地の面積を全く一變せしめ、或は大農機を農場に入れて作業の面目を一新せしめた場合多きを見ても分る。

此くの資本化の形式には色々あるが、其の中でも特に農業界に機械使用問題となつて來たのは今述べた使用機械の應用である。外國の内では取り分け亜米利加に於て其の發達著しく、例へばトラクターなどが諸所に向上に活動して居る。けれども農業界に於ける機械の應用は工業界に於ける場合と比較すれば尚ほ微々たるを免れぬ。これ農業界に使用する機械は從來多くは耕作用であつたが爲めに移動性を有するものでなければならず、彼の工場内の据付機械が取扱に便なで、且つ巨大なる裝置の下に生產能率を極度に發揮し得るのとは其の趣きを異にする。而も作用機械は工業機械と違ひ、其の或は年中間斷なく運轉せしめることは出來ず、[illegible]不利めるといふやうな關係から來て居る。

工業界に於ける機械の使用は全く生產力增進の目的であるけれど農業界に於てはこの目的の外更に農業の季節的性質（季差 (Character) に基く勞力需要の年内分配の不平均を緩和する目的をも有して居る。彼の播種機や收穫機等のなき

農繁の時期に機械を用ふるのはこの第二の目的を達する所以である。米國の如く農家の耕作面積廣く、且つ勞働者に乏しくして賃銀の高い處に於て、戸外作業の機械が盛んに用ひられるのは當然である。

我國に於ても最近農用器具機械の發明使用の問題が大分世間を騒がせるに至つた。政府本年度の農村振興費豫算中農具の改良普及費として約二十二萬圓が計上された、又昨今各地に開かれる農用機械講習會の如きは常に盛況を告げて居る。さりながら翻つて現在如何なる種類のものが最も能く其の使用範圍を擴大しつゝあるかを見れば、こゝに聊か警戒すべき事實を發見することが出來る。即ち其の機械たるや栽培用のものは少く、其の多くは脱穀、調製等の如き農閑期になし得る作業に應用されて居るからである。それは如何なる譯か。

我國では田の面積が畑を凌ぎ、水田の割合の大なること世界無比ともいひ得べく、この稻田に於ては田面の狀態や、畦畔の關係等から有効なる大農具を容れるに適せない。畑はこの點に於ては缺陷少く、相當に機械が入つては居るが大勢を支配するに足らず、結局我國農業全般の上から見て農耕機械の普及を見難く、屋内作業用のものが大部分を占める次第である。但し水田の耕耘及び除草に對しトラクターの適用法を昨今頻りに研究中であるが、若しこれが成功したならば農業經營上も大いに利益を及ぼすであらう。神戸高等工業學校では昨年來水田用トラクターの製作に工夫を凝しつゝある。瑞典や伊太利等では電氣耕耘を實施しつゝあるを見れば、我國でも少くも畑地に於ては其の一部に遠からずこれが實現するものと察せられる。

我國農村に於ては前述べた通り、原動機は目今主として屋内作業に入り込み、農閑の狀態を益々助長するやうな嫌がある、これは餘程注意すべき所ではなからうか。單に經濟上から之を見れば、そんな人手の餘る閑散な時期に高價な機械を入れることは假令多數の農家が組合を作つて共用使用を實行し、又動力も安價に得られる途があつても利益とはいはれぬ場合が多いであらう。然しながら翻つて考ふるに今日は時代思潮も變化し來り、餘暇のある生活を樂むといふ風が社會各層を流れつゝあり、それが農村住民の間にも及ぼして來たことを認めねばならぬ。農民の知識や富度の高まるに隨ひ、晴耕雨讀の餘裕を作り出し、人生を有意義ならしめたいと思ふに至るのも自然の勢であらう。カウツキーは餘暇は今日肉や麵包にも劣らぬ程重要なる生活資料となつたと極言して居る。

又機械に就き同書中に彼れは農業界に機械の使用を奬めることは過渡經濟（Übergangswirtschaft）の重要職分の一であら

うと曰つて居る。かやうにこの農業の機械化運動は、外國では社會主義的思想の發達と大關係を有することを知らねばならぬ。資本主義は工業の機械化を根柢とし、社會主義は農業の機械化——土地の公有と大規模經營とを前提として——を基礎として居るのは面白い對照である。近來露西亞では農用機械の問題が頗る注意せられて居る。我國に於ては最近農具機械が漸く普及せんとするや、早くも之れを以て一種の流行と看做し、餘りに熱中するの危險を說く人がある。一理は勿論あるけれども、今後我國農村には種々の事情より見て新式機械の使用が益々高まるものと思はねばならぬ。數年前迄は我國農村に於て殆んど見るを得なかつた發動機が今日は既に二萬臺を突破するの勢ひである、これに依つても我が農村機械化の將來をトすることが出來やう。社會主義者は社會主義的社會に於て機械の使用を奬め、機械其のものには普通反對せないやうであるが、或極端な人になると、資本主義的社會であらうが、又は社會主義的社會であらうが、大機械は人をして奴隷化せしめるといふ理由の下に一切の大機械に反對する。併し此等は餘りに頑固な意見ではなからうか。

農村の電化問題は今日世界的問題の一に數へられ、瑞典の如きは耕地の約四割は電化されたといはれて居る。我國に於ても最近急速の勢を以て研究が積まれ、且つ實現に向つて來た。二年前既に農事電化協會なるものが設けられ、本年に入り更に「新農村」と題する機關雜誌を發行して、盛んにこの方面の宣傳に從事しつゝある。今實際界を見るに、灌漑や排水などの圃場作業に對して電氣を使用するものが增加すると同時に、屋內作業にも或は電熱を孵卵器や、溫室內の促成栽培に用ひ、或は電力を利用して籾摺や精穀や豆粕の粉碎や繩綯等を行ひ、又は扇風機を動かして蠶室內の溫度を調節するが如き、又電光としては誘蛾燈に用ひ、或は農繁の時期夜に入つて圃場作業を照らすなど各種の方面に實用されて居る。現在我國にも俗に電化農場——electrifying farm から名稱を取つたものであらう——なるものが愛知、岐阜、三重の諸縣を通じて所々に現はれ主として收獲物の共同調製作業を實行して居る。

尙ほ又農家の家庭生活に對しては、特に最近數年來非常な勢ひを以て、電燈が入り來つて寒村僻地にも及ぼし、この點に於ては殆んど世界第一といつても差支ない程となつた。其他電熱を調理に利用するものも生じた。或米國人は農村に電氣が這入る時は、嘗つて米國に於てリーパーやバインダーや綿繰機に依つて起されたよりは、一層大なる革命を發生するであらうと述べて居る。電動機は發動機と異り如何に小なる馬力でも、其の

場所に應じて使ひ得る許りでなく、取扱法が極めて簡單だといふ利益があるので、農村の小經營には至極適當して居るのである。レーニンは特に農村電化を力說したが、今日も依然として露國はこの方針を踏襲して居るやうだ。

次に述べやうと思ふのは農村工業の復活問題である。産業革命以來資本主義的經濟が隆盛に赴き、分業が愈々發達を遂げて物質的文明は玆に爛熟の期に達した。然るにアダム・スミスが何人も知る如く、最も明快なる筆を以て分業の利益を國富論に發表してこの方、僅かに百五十年のその間に、分業の弊害は累積して容易ならざる文明の暗黑面を作り出すに至つた。その暗黑面にも色々ある。工場勞働に起つた弊害は甚しかつたには相違ないが、而かもこの弊害たる工場といふ一の限られたる場所に現はれたるものであるから、世人の耳目に觸れ易く、間もなく種々の制度施設に依つて、之れが救濟に着手したのであつた。然るに分業の弊害たる頗る重大なるにも拘はらず、その來るや漸進的であるが爲めに世の注意に漏れ、後に取り殘された方面が存在した。それは即ち農村工業が田舍から姿を消したことである。

外國でも日本でも同じであるが、昔は農家が殆んど總て自足經濟を營み、一家の要する食物は申すに及ばず、常服に至る迄自家で生産したものであつた。然るに例へばその機織の如きも分業の發達と資本の勢力とに押されて次第に都會の工場內に移つて仕舞つた。初めの程は新進氣鋭の機械工業の作り出した製品は割合廉價で、且つ體裁の良いものが得られたので、農家は却つて喜んだのであつた。然るに其後工業品に對する國際競爭が年を逐うて激烈を極め、外國市場掠奪の爲めにダンピング等の非常手段を用ひて、國內の市價を釣上げ、以て自國消費者を苦め、或は商業の繁榮に伴ひ、餘りに多く中間機關の發生を促したるの結果無益の費用を高めるなど、次第に商品生産、營利經濟の弊害を認めるやうになり、玆に農村工業を恢復せんとするの運動が萌え出して來たものである。

凡そ農業と工業とが今日の如く劃然と互に分離對立したことは古來未だ見ざる所であるが、この餘りに離れ過ぎた兩者をして互に接近握手せしめ、又成るべくは社會各人の間に生産者と消費者との區別を消滅せしめんとするのが、即ちこの運動で比較的近頃起つたものである。クロポトキンは十九世紀の末に出した著書「農場、工場及び作業場」に於て最もこの點を力說して居る。又この書と殆んど同年に現はれたカウツキーの「農政問題」の中にもこの邊の事を論じて居るが、其の他の人々の著書にも同種の議論を屢々見受ける。我國學者の間にも最近この

方面に觸れる人が現はれて來た。カウツキーは工業を再び農村に分散せしめることは社會主義の職分に屬すと述べて居る。

今日の工場制に於ては分業が極度に發達し、勞働者は全作業中のホンの一小部分に終日携はり、全く其の他の過程を知らぬ爲めに、己れの作業に對して興味と責任とを感ずること少い。然るに今若し農家が耕作の傍、小工業を兼ね營むとすれば、原料の調達、加工から仕上、販賣に至る全過程をば自分一身でなす所から非常な慰樂と滿足とを得るのみならず尚ほ獨創力を高める結果となる。よしや又手工品の製作を始めから終り迄全部成し遂げることはせず、單に一過程の一部に携はるとしても、それは農業の傍やるのであるから田園生活をして變化性に富ましめる、此等社會的及び教育的利益の外に、尚ほ農村工業が農閑の餘剩勞力の利用――これが農村工業の主なる目的ではある――或は一般に農業勞働に携はり難き家族員の常時の勞力利用に役立つか、或は耕作面積餘りに狹くして、農地の經營丈けでは一家を支へ兼ねるやうな場合であるならば、更に經濟上の利益を與ふるものである。農村に於ける勞働時間の制限が實施された曉には、一層農村家内工業を注意するの必要が殖える。獨逸や白耳義の如く釘の手製、又白耳義、墺太利、匈牙利、諸國に於ける手織、佛蘭西の絹織などは盛んなものである。

我國では信州に起れる農民美術研究所は副業奬勵の趣旨を以て、農家の間に適當なる手細工を教へ、又「農民美術」といふ機關雜誌を出して居る。私も其作品たる額縁、更紗、お面などを見たことがあるが、古雅淡泊で野趣掬すべきものである。その製品は目下何れも世の好評を博し、展覽會などの席上では飛ぶやうな賣行を示すといふことだ。

露西亞の農民は元來手先きの器用なのと、雪中生活の長いのとの爲めに――彼國農民の貧困といふことも可也手傳つて――この種の農民藝術、田舍に於ける家内工業が早くから發達して居るのであるが、近來我が農村にも同一の思想が流れ込まんとして居ることは注意すべきである。

農村小工業の地方的存立を目的とする所から獨逸の社會民主黨は之れに反對を唱へた。即ち田舍小工業が亡ぶること早ければ早い程、資本主義的中央集權を盛ならしめ、軈て資本主義の破滅を來すであらうと彼等が信じてゐたからで、隨分微妙な考へ方と謂はずばなるまい。又現在の如き社會組織の下に於ては、家内工業は幾多の弊害を有することは、既に過去の歴史の示す所で、殊に今日の青年思想では、僅か計りの金錢收入の爲めに、慰樂に必要なる餘暇を割き取るが如きには反對が多く、今更中世期主義に復歸するでもあるまいと非難する向きもあり、

寧ろ農村工業の前途は多難といはねばならぬ。又實際に於て從來の農村小工業の狀態は慘めなもので、小工業が今迄存續するを得たる一理由は、農家の經濟的境遇が非常に不良な爲め、副業を取るべく餘儀なくされたといふ事實、又無能力者の隱家となり易いといふ事實は少からず農村工業復活運動に禍することであらう。

以上は農村工業中農家各自の家庭で實行し得る種類のものに就ての話であるが、又農村工業は家庭を離れて、組合經營の作業場でもなすことが出來る。更に進んで大規模の工場で生産さるべきものもある。甜菜糖業の如きは農産工業で、原料の栽培地域に工場の分散さるべき適例である。甜菜根は水分の含量多く、これを普通の工業の如く、都會に製造所を設けて遠距離輸送をなしては經濟上引合はぬ爲めに、自ら農村に工場が散在するものであるが、其の生産したるパルプ（搾粕）は直ちに家畜の飼料となり、加之製糖事業の始まるのは農閑の時期に入る頃であるから、附近農家の餘剩勞力を利用して工場に出て働く上に頗る便益である。農工業が原料、勞力並に副産物利用の諸點から見て、かくも密接に結び付いた適例は他には多くあるまいと思ふ。其他農村に設くべき工場工業の種類は少なからぬ。煉乳及び之れに伴ふ牛酪の製造、或は蔬菜、果實の罐詰、壜詰などは其一例だ。併しながら若し從來都會に適當して居た工業の種類をも農村に持ち來るとすれば、不當に都會工業を壓迫して、そこに失業者を多からしめることゝなるので、反對の運動が起るであらうから、斯樣な工業の地方的分散は前途の望みが少いであらう。

工場の地方的分散を容易ならしめるものは交通機關の發達と、電氣殊に水力電氣が進歩して、自由に動力を農村に供給し得るに至ることとである。露西亞に於て工業の田舍分散の未だ起らぬのは交通機關の不備の爲めといはれる。然るに我國は交通線路網の張り方が隨分密で、且つ又世界有數の水電國である。農村電化の將來は刮目して見るべきものあると同時に農村工業も或程度の發達を見るであらうと思ふ。瑞西に於て農村小工業の盛んなるは動力の安價供給に原因するといはれて居る。

農工業の結合を高調する論者の中には、現今世界先進諸國の工業は將來永く其の隆運を持續することは不可能である。何となれば今日後輩の諸國と雖も、遠からず國内に工業を發生して先進國と競爭を試むるに至るからだといふ人がある。クロポトキンは嘗つて農工業の結合に關する前揭の著書中に曰く、支那人は今は尙ほ眠つて居る。併し自分は彼國民が一旦歐洲の機械の助力を藉りて、製造工業を起した曉には――之れが端緒は既

に開かん日本人よりも遙かに大規模の事業を行ひ、且つ一層の成功を示すであらうと。

クロポトキンのこの言、特に最後の言は果して何時に至つて實現されるか、頗る危まれる所ではあるが、何しろ後進國が將來次第に工業化するであらうことは推量が出來る。即ち彼等は工業原料の供給者で、同時に又製品の需要者たるの位置に永く甘んじて居るものではない。依つて先進工業國も今にして農業を、盛んにし、食糧及び工業原料に對する國内の需要を滿たし、且つ工產品の販路として外國市場に頼ることを廢せねばならぬといふ議論に落ちて來る。ベンテイーは曰く、一國工業が外國市場を頼みとする限りは、それは投機に頼るもので、社會改造と一致しないと。此等は一見退嬰消極の議論ではあるが、一面の真理は之れを認めねばならぬ。クロポトキンは、これは世界交易を減ずる意味ではない。國民的技藝の產物や、新發見新發明や、又知識、思想等の交換を大いに增進せしめるものだと稱讃する。が併し農工業が一國内で結合して、主なる生活必要品以外は、之れを他國に求めぬ方針を取る以上は、當然の歸結として國際取引の減退を招くことは否み難いであらう。さりながら或學者の唱ふる如く、田舍工業の種類を限定し、輸出品の製造は之れを都會勞働に任せる時は、貿易は尚ほ相當に行はれるであらう。上述の食物自給說を唱へるもの丶内には、單に營利經濟の弊害から自國の一般公衆を救はんとする許りでなく、國と國との間に於て、强國が弱國の膏血を搾らんとするを防がうとする意味を含めるものもあることは見逃してはならぬ。

次に大農經營と小農經營とが夫々有する利害得失の諸點に就ては、既に世の學者に依り論じ盡され、茲に再說するの必要を殆んど見ない。兩形式間の優劣問題に關しては、今日迄百年以上も論爭繼續し、未だに解決が着き兼ねて居る。古くは英國のアーサー・ヤングの大農論は有名なものであるが、近くは獨逸でゼーリングは小農論者の錚々たるもの、然るにカウツキーは内國植民の如き小農奬勵策に反對を唱へて居る。又露西亞のクロポトキンは小農を愛し、日本や支那の穀作の集約なるを讃美して居る。次に國として見る時は大體論として、英國は大農制を賛し、歐洲大陸の諸國は小農制の主張に傾いて居る。

唯茲に考へねばならぬことは、大經營、小經營といふも主として面積の上から區別したものであるから、國と國との間に農業組織の異る時は、一國の大經營は他國のそれに匹敵せずして、或は中經營に、甚しきは其以下のものにしか相當せぬといふやうな場合も起り得ることである。英國は放牧地や牧草地が廣く、穀菽栽培の畑地が割合狹いことが、自ら大農經營に傾か

ある一円となり、隨つて彼國には大農論者が多いのに反し、佛蘭西、白耳義其他歐洲大陸諸國は概して畑地が割合に多いので、比較的小面積にて一家を支ふるに足り、その結果小農贊成論者の多いものとも見ることが出來る。それ故上の例に就いて考へれば、大農を可とするか、小農を可とするかの議論を見て、直ちに國民性の然らしめる所とのみ早斷する譯には行かぬ——大農贔屓や小農贔屓を以てそれ〴〵國民性の然らしめる所と看做す西洋の學者はあるけれど——更に又彼の英國には牧畜が盛んで、歐洲大陸は同國に比し畑作が盛んであるのも直ちに國民性に歸せしめることは出來ぬ。それは英國は昔小麥作が重きをなしたが、自由貿易採用の結果、爾來穀作漸く衰へ牧畜國と化し去つたのであつて、何も先天的に英國は穀作を退けて牧畜を迎へた譯ではない。斯様な事情であるから、單に大農經營だとか、小農經營だとかいつた處で、更に其の内容に立ち入つて土地の狀態を緻密に研究して見ねば眞味を捉へることは出來ぬ。さりながら同一の國に於て農業組織が大變化なきに拘はらず、農家平均經營面積に增減を起す時は、大に注意するの必要がある。

然らば我國では一戸平均耕作段別は將來如何なる方向に進むであらうか。これは頗る難問題である。經營面積の大小は耕地總面積と農家總戸數とに依つて定まる。現在我國は田畑合計約六百萬町歩の耕地の上に、約五百四十萬戸の農家を保つて居るから、農家一戸平均約一町一段となる——これは經營規模の大なる北海道をも含めての計算であれば、彼地を除いた府縣では面積が一層縮小する譯——その狹いことに於ては世界文明國中他に類例を見ない。

然るに最近大正十二年末の我國耕地段別六、〇三九、〇二二町に對し、農家戸數五、四四〇、〇二〇戸であるが、十年前の大正二年末の耕地段別は五、七九三、八〇八町、農家戸數は五、四四三、七一九戸であつた。即ち過去十年間に耕地は二十四萬五千町歩を增加せるに反し、農家戸數は却つて三千七百戸を減少した。之れを農家一戸當りとして見れば、十年間に約一町六畝から一町一段一畝に進み、約五畝歩の增加を示して居る。斯くの如く經營規模は假令僅かとはいへ擴大を起したが、果して將來この勢を持續するであらうか。或は單に一時の現象に過ぎぬであらうか。これに答へることは容易の業ではない。

耕地は年々開墾に依つて、其面積を擴げはするが、これとて微々たるもので、北海道を除いては尙更ら振はぬ。依つて一戸當り面積にして目立つ程の擴張を見せやうとすれば、勢ひ農家戸數に於て可也の減少を起さなければならぬ。このことが果

して可能であらうか。今日我國の學者識者の間には經營面積擴大論者が却々多い。中には農業人口半減論を唱へる人がある。或は一戸少くも二町歩位は作らせ度いと論ずる者もある。此の兩者の意見は結局に於て大體一致する譯である。然らば果してこれ程迄の耕地の大擴張は望まれずとしても、せめて多少の增積は期待し得られやうか。これが判斷に向つては我が農家の土地に對する愛着心の冷熱如何を研究して見ねばならぬ。

カウツキーは物價騰貴と失業との爲めに無産階級が苦みつゝある今日ですら、土地所有權の獲得は農村勞働者に對し、以前程の强き魅力を最早有しなくなつたと近著に述べて居る。けれども小農が土地欲の尙ほ相當に、熾んなることに就ては、同書中他の個所に於て次の如く記して居るのでも知れやう。農家が小經營を選ぶのは小經營を以て最も合理的な經營規模と信ずるからではなく、全く自己の貧困の結果である。若し幸ひに貯金をなし得た場合には、第一に土地を求めんとする。即ちこの際先づ第一に彼れのなすことは所有地の擴張であつて、在來の土地の改良事業ではないと。カウツキーのこの前後の言葉では、農民の土地に對する熱情の高下如何は一寸判斷に惑ふ、幾分冷めかゝつたやうには取られるけれど。

土地獲得に對する欲望は國民に依つて相違がある。例へば米國民は歐洲よりの渡米移民に比べると、土地に對する執着心が薄い。又在米日本移民は在米アルメニア人と共に最も土地熱に犯され易い。況んや我國民は母國に在つては、更に一層土地に戀々とし、尺寸の耕地と雖も之れを得んと熱望する。これは日本國民の遺傳性とも稱すべきであらう。然るに最近に及び、我が農家の頭腦が幾分打算的に變り、無法に高い價格を以て土地を買ひ取つたり、法外に高い小作料を拂つたり地主の土地を小作することはつまらぬといふ考を起し、或は重き公課のかゝる自作の土地をも機を覗つて賣却せんとするものが出るやうになつた。特に最近小作爭議發生以來農民の間に土地を冷視するの傾が殖えて來た。

英人ゼームス・ロングは土地の耕作者は富を作らうと望んではならぬ。これを望んでも求め得られぬからだといつて居る。又我國識者中にも、農家に向つて彼等の經濟の實際を示すに收支計算の結果を以てしてはならぬ。若し然かするならば農家は自己の經濟の餘りに慘目なるに驚いて、居村に安住し難くなるからだと說くものがある。併しかゝる消極論の行はれつゝある一方には、農民の頭腦は前申す如く日に改まりつゝあることを覺らねばならぬ。又彼等の生活程度も次第に高まつて來たことも事實である。この時に當り、若し一方に都會の職業或は

洋への移植民……この海外移植民事業は將來とも我國民に取り、大なる希望を繋ぎ難いやうには見えるが——が一段有望なるを示す時は、農村人口はその方面に次第に吸收され、其の必然の結果として經營面積の增加を伴ふことであらう。

我國に於て農家の耕作段別が世界無比な程狹いのは、土地に對する愛着心が古來强烈であつたことは最も重大な原因をなすには相違ないが、尙ほ我國民が頗る低い生活程度に甘んじて居たことも少なからぬ關係がある。フォート博士に依れば、丁抹人の有する愛情の中、土地に對する愛情ほど熱烈なものはないとのことであるが、それ程土地熱の高いにも拘はらず、一戶平均約十五町步といふやうに農場面積の廣いのは——同國は飼料作物の栽培が盛んで、自ら相當の地積を要することも考へに入れねばならぬが——農家が貧弱なる生活を潔しとせぬが爲めであらうと私は思ふ。

我が農家の平均耕作面積が僅か一町一段一畝位では如何に二毛作をなし、肥料を多く加へ、高度の集約栽培を實行したところが、到底餘裕ある生活を營み難いであらう。斯樣に農家の經濟力は隨分薄弱なるが爲め、浮腰のものが可也多い。然るに我が對岸には亞細亞大陸を控え、就中支那、露西亞兩國の如きは、我が工業品の販路として將來相當に有望なるべく、隨つて我が都市工業が勃興して、農村人口を今日以上に吸ひ込むであらう。此等の點から考へれば、我國農家の一戶當り經營面積は現在以下に下ることとなく、今後は逆に多少殖えて行くかも知れぬ。然しながら前にも述べた如く、後進諸國もだん〳〵工業化するであらうから、我が都會の農村人口吸收力にも自ら限度が生ずるであらう。又、我が人口の增加率も所謂文明に向ふにつれ、多少の減退は示すであらうが、大したことはあるまい。それに我が耕地の半ば以上は水田で、其の產米は一種獨特の風味を有し、數千年來我が國民の嗜好に適して居るが故に、外國米に依つて壓倒される心配はなく、唯日本米が國民の需要に對し不足を告げた場合に補充として、外國米の輸入を見るに過ぎない。現在我が領土內では、台灣及び朝鮮から、外國では英領及び佛領印度から米が這入つて來る。又將來滿蒙、西比利亞や米國加州等に於ても、稻田開拓の可能性はあるであらうが、何れも內地米の領分を犯すの危險はなさそうに見える。彼の十九世紀の後半歐洲舊開諸國の小麥作が、新開諸國から廉價な小麥の輸入を受けて、瀕死の窮境に陷つたやうな先例を追ふの憂ひはない。

斯樣な譯から米價は平年に在つては相當の價格を維持して農家の經濟を少なからず潤すものである——小農は出來秋の米價

低安の時期に收獲米の多くを賣り拂ひ、後日米價の昇騰する頃に、自家用として再び米を買はねばならぬので、米價の高いのは却つて小農に禍ひすると論ずる者が多いが、極く細農は兎も角、普通の農家に向つては必ずしもさうはいへぬ――かゝるが故に米作農家の耕地面積の大擴張を起す程多數米作農家の離村を起すことは困難であらう。

一經營の平均面積の縮少は少くも近頃迄は世界の大勢であつた。米國の農場平均面積は一九一〇年に至る數十年間は低下したに拘はらず、最近一九二〇年の國勢調査の結果によれば、同年は前期の一九一〇年に比し却つて增積を來した。これは或特殊の事情が存したからである。又米國玉蜀黍地帶中地味最沃の地方に於ては、役畜及び機械が多く入つた爲めに、一九〇〇年より一九一〇年に至る間に、農業人口が減少し、一戸當り平均經營面積を擴大した。かやうな例がない譯ではないけれども世界の大勢は上述べた如く、地積の漸減を辿り來つたのである。して見れば假令我國に於ては獨特の事情により將來多少增積して世界の趨勢に逆行するとしても、又もや其運動を停止して依然小面積の栽培を續行することゝなりはせぬか。

カウツキーは如何に農村勞働者の爲めを圖るとも、向都をして歸村に方向轉換させることは、資本主義的生産方法の下に於ては不十分であらうといつて居る。又社會主義的國家に於ては、都會よりも農村に向つて人口の逆流を見るであらうとは能く唱へられる所ではあるが、併し濠洲の如く國家社會主義が行はれて、完全に近き民主主義の實現されて居る處でさへ、都會生活の爲めに農村人口の奪はれるのを見る時は、我國の如く資本主義旺盛の處に於ては、農村人口稠密の程度は今日あたりが即ち其の絕頂に登りつめた所であつて、これから後は多少とも下り坂に向ひ農家平均經營面積を擴大するものではあるまいかと察せられる。併し繰返し述べるやうに、我國は主食物や其他の關係上、今迄の英國の如く穀作を閑却することが出來ぬ爲めにこの農民離村の現象が將來起るとしても、どこ迄も其の步を進めるといふことは出來ぬであらう。其の間に前述の如く停止するかも知れぬ。

「十エーカーで充分」(Ten Acres Enough)、即ち我が四町步、あれば結構だとの標語は、米國の如き規模雄大な國に於てさへ早くから叫ばれて居る。特に佛蘭西や白耳義の蔬菜園に在ては、僅か一エーカー(約四段步)を以て經濟的の大さとされて居る。我國でも大都市附近では、高價な作物の爲めに極めて極少の地積を耕す農家を見受ける。併し此等の例外を除き人間の常食に供すべき普通作物の栽培に從事する我國一般の農家に於

ては、僅々一町內外の面積では生計を維持すること却々緩くない。

同じく農家と云つても、專業農家と兼業農家との別がある。兼業であれば他に何等か副收入を得る途があるから、農地面積は比較的狹くて濟む。けれども我國現在の統計では、專業及び兼業の農家を取り混ぜ、一戶平均の耕作面積を割り出すより外なく、兩者の間に區別を立てることが出來ぬのは學問研究上遺憾である。若し兼業農家或は副業を有する農家が增すものとすれば、現在以上に耕地經營が零細化する可能性が存在するかも知れぬ。又生產費は左程增さぬに拘はらず、農產物の價格が非常に昇騰することがあつたとしたならば、其の時も亦同樣の可能性がある。併し玆に一層問題として大切なのは前の場合である。

最近我國專業農家は三、七八四、四〇〇戶、兼業農家は一、六五五、六二〇戶で、之れを十年前に比ぶれば、專業農家に於て約七萬七千戶を增し、兼業農家に於て約八萬一千戶を減じて居る。そして大正二年より同八年に至る七年間は專業の方は年々增加するに反し、兼業の方は漸減したが、大正九年以降最近大正十二年迄、即ち農界不況の時期に在つては、專業は漸減し、兼業は漸增し、兩者互に反對の方向を取つて居る。これは意味のある現象である。右の如く近年の例外を除き、大勢は專業農家の漸增を示す所を以て見れば、將來も專業農家の割合を增加するものと思はれぬではない。然るときは經營面積の擴大に對して力を添へるものと見ねばならぬ。更らに我が農家の耕作段別を階級別となし、最近十年間の趨勢を見ふに、其の他のものは著しい變動はないが、五反步未滿の農家數は實數も比率も共に年々減少し、一町步乃至二町步經營のものは年々增加を見せて居る。一戶當り經營面積の多少なりと擴がり行く有樣が、これでも判るであらう。尙序に耕地所有者─これには農家以外のものも含まる─に就き最近十年間の統計を取れば、五段未滿の小所有者と五十町以上の大所有者とは、年々增加す家が、五段乃至一町及び三町乃至五町の中所有者は漸減の傾向を示す。かく耕地の經營者と所有者との間に、五段步未滿の農家の割合が、前者に於て減少し、後者に於て增加するといふ反對の現象を呈するのは面白い。

カウツキーは「農政問題」中に、小農經營が立ち行くには、二三つの形式より外にはない。即ち工業的副業に依るか、或は大農經營の下に賃銀勞働に從事するか、或はこの二つとも出來難くして、小農は純然たる農業者でなければならず、隨つて大農經營に對しては賃銀勞働者としてゞはなく、彼れの競爭者とし

て立ち向ふ場合には、過度の勞働と消費節約とに依つて、僅かに命脈を維持するの外はない。併しかゝる純粹の小農經營は既に都會の無産階級者の地位に及ばぬ爲め、青年の小農は相爭つて離村すること、農業勞働者の場合と選ぶ所がないと論じて居る。有益な觀察であらうと思ふ。

之れを要するに、我國農業經營の規模は今迄述べ來つた理由と、且つは農業機械の導入と相俟つて將來多少の增大を起すべきものと察せられる。

次に農業の將來は如何に成り行くべきかといふ問題を考へて見たい。無機的方法に依つて食糧及び衣服が盛んに製造される時期に到達せぬ限りは、衣食の原料は主として農地から擧げねばならぬことは當然である。この見地から觀察すれば、世界人類が增殖を續ける限り、農業の生産は世界全體として增加するに相違ない。さりながら全世界より見たる農業の運命が、國々の其れと必ずしも一致するものでは固よりない。後進國に於ける農業の發達とは反對に、工業國の農業は他の産業に比し衰頽の途を辿ることがある。その極端な例は前述べた如く英國である。資本主義が隆盛となり 隨つて商工業が繁榮に向へば農業は衰微に傾くもの、換言すれば都會の發達は田舍の沒落を意味するものであるとは、能く論ぜられる所である。この現象は英國に於ては最も明白に出現したが、其の他の文明國に就ても同樣のことがいはれるかどうかは疑問である。商工業發達の速力には及ばぬとしても、商工業勃興の爲めに、却つて農業が絕對的に、言ひ換ふれば實數に於て退步したといふが如きは、多くの國に於て認められぬと思ふ。農業界も漸進的步調を以て進みつゝあるのではあるまいか。

一國農業の將來發達の可能性に就ては、非常に之れを過大視する者がある。クロポトキンの如きはその一人である。この種の論者に依れば、食糧生産と人口增殖との間の關係に對するマルサスの說は畢竟杞憂に過ぎない。一國の農業が其國民を支ふることが出來ぬとすれば、それは其の國農業の環境が不良な爲めである。依つて現代農業の資本主義的特徵たる土地所有權と賃銀勞働制度とを撤廢して、社會主義的農業經營法に依る時は、新式有効なる機械の使用に依つて、農業生産力をして極度迄進展せしめることが出來る。その時には人口過剩などいふ現象は起り得べくもないと論ずる。クロポトキンは英國が國産食糧を以て、自國民を養ふことが出來ぬとは、俗人のみならず、學者までも唱へる所であるが、これは毫も根據のない說で、全く農業を等閑に附したが爲めだといつて居る。斯樣に方法如何に依つては、各國の農業には隨分發達する餘地が殘されてゐる

に[illegible]ないが、果してクロポトキンの言の如く、農業の生産力が無限なるを得るやは、土地報酬遞減の鐵則の存在を吾々が認める以上、頗る疑問といはざるを得ぬ。

　然らば我國農業の將來は如何と尋ぬるに、我國民が主食物に對する傳統的習慣を改めず、依然米食の民である以上は、前述の理由により農業生産額を低減するやうなことはなく、却つて收穫量の增加を來すに相違ない。これ稻作は度々述ぶる如く、現在耕地の半ば以上を占める程の重要さを有し、其の他の畑作物も多くは、外國競爭を受けること强からぬものであるため、農產物其のものゝ位置は比較的安固と思はれるからである。そして我國は將來產業組合的色彩は、各種の農業方面に、濃厚にはなるであらうが――農業の個別經營の代りに、共同經營、共同耕作が入り來るであらうかどうか。後者は既に愛知、岐阜、新潟、岡山、福岡等の諸縣に於て多少試みられては居るが、大なる發達は望まれぬやうである。クロポトキンは最も能く共同耕作の利を認めた一人である。――其の大本に於ては依然として個人主義的、資本主義的營利經濟の組織を保つて行くものとすれば、農村或は農家をして自給自足の古巢に多く復歸せしめんとするも容易のことではあるまい。

　我國の小農家は主として自家用の作物を取り混ぜて栽培して居る。これ土地が狹い爲めである。そは勿論我國に限つたことではない。外國でも小農に對する原則の一は「出來る丈け自給せよ」"Be as self-contained as possible."である。さりながら我國に於ても其の利害は別とし、營利經濟の空氣が農業界に向つて浸潤して來たことは、之れを認めねばならぬ。これをそのまゝに放任する時は、農業經營中或一部の方面に向つては相當に其の勢ひを高めることであらう。我國の農業者は時勢に無頓着な時代は今日既に通り過ぎ、時の思潮に對し隨分敏感となつて來た。農民組合運動は其の先驅者たる勞働組合運動に比し一層の活氣を呈して居る。これ運動指導者の力が大ではあらうけれども、小作農の頭腦がこの方面に進んで來たのでなくば、これ程の急速な發達をなすことは不可能であらう。この農民心理の變化は農業經營の方面にも當然現はれて來なければならぬ。

　ペンテイーは曰く、大戰中全世界の農業人口は工業人口の谷落せるに反して、富を作り得たことは不十分ながら認められる。それ故資本主義は恐らく都會に衰へて、農村に復活するであらうと。更に我國に就て見るに資本主義を我が農村に徹底せしめねばならぬと主張する者もあれば、又一方には資本主義化に適せぬ我が農村は宜しく之れを堅實なる自給狀態に引き戻

し、營利（プロフイツト）より寧ろ必要（ニース）を以て經濟の本義とせねばならぬとて、復古說を採るものもある。歐米の先進諸國は旣に農業界にも資本主義が徹したる其後に、社會主義的思想が乘り込んで來たものであるが、我國には農業の資本化の未だ能く行はれざる前に早くも新進——見樣によつては舊式ともなる。併し時勢の進步したる今日のことであれば、昔のまゝの狀態に歸る譯ではなく、昔と今とは活動の平面が異り、隨つて螺旋狀を描いて變轉するの差はあらう——の思想に見舞はれんとして居るのは注目すべきことである。けれども資本の勢力は我が農業界にまだまだ波及するものと私は思ふ。さはいへ、自給的要素を多く含み、家計と生產とが餘り能く分離しない所の、現在のやうな小經營の我が農家が歐米先進諸國の農家に比し、問題の點に就き遠く及ばざるは勿論である。

最後に私は本論文に於て、一般農業特に我國の農業が將來如何なる運命を迎ふものであらうかを、各種の方面より推測したに止まり、如何なる方向に農業が進んだのが喜ばしいか又は悲しいかといつたやうなことを餘り述べる積りでないことを斷つて置き度いと思ふ。（六、八）

在歐通信（第三）

ウッドブルック・セットルメント

河合榮治郎

一

R君、

僕がロンドンに着いてから三ヶ月間、前便に述べた様な生活をして、此の生活は更に夏迄續くものと思つて居た。然るに端なくも不思議な運命が僕の前に思ひも掛けぬ生活を展開せしめた。實を云ふと僕はロンドンに於て色々の人に會ふ毎に、之から一年英國で、かくかくの目的で勉強をするのにどうするのが、一番良いかと云ふ質問を到る處に試みた。之は其の問に對する答其のものよりも、かうした問をどう扱ふか、其の態度に中々面白い得る所があるので、到る處で之を試みたのである。其の中にロンドン・スクールの講師バルト氏があつた。友人Kさんの紹介で知合になつたクェーカーの信者である。此の人に對しても前の質問を試みはしたが、さまで僕は眞面目な答を豫期した譯ではなかつた。バルト氏は初對面の時以來ぢつと僕の志す所を聞き入り、其後兩三回僕を散歩に誘つては、色々な事を僕に尋ねたりした、後から考へれば、之は思ふ所あつて僕なるものを探つてゐたのであるが、神ならぬ身の僕は知る由もなく、普通に返答をして濟まして居たのであつた。三月下旬突如としてバルト氏から、貴下の將來の生活に對して、意見を申上げたいから、至急に會ひたいと云ふ手紙を受取つた時は一寸驚いた位である。早速氏を訪問すると、氏はあなたの先日來の御相談に對して、自分は色々と考へ、人にも問合せたりした結果、今自分はあなたに一案を申出したい。バーミングハム市の郊外四哩の田舍に、ウッドブルック・セットルメントと云ふクェーカー信徒の學校がある、私も妻も其所に數日を送つた事がある

が、それは自分等が此の生涯に於て經驗した、最上の思出深い生活であつた。兩三回あなたと御話しして、略あなたの人となり、なさんとする事柄も分つた樣に思ふから、切に此の學校へ入つて一學期を送ることを御勸めする、奧さんの爲には一層好都合でせう、教頭ウツド氏には詳しい手紙を書きましたからと云ふ。打明けて云へば、僕には少し迷惑であつた、ロンドンに於て夏迄三ケ月爲すべきプログラムは殆に出來上つて居たのである。然しバルト氏の勸説は中々強い。ウツドブルツクはクエーカー信徒の世界的中心の學校です、此に全世界のクエーカーの青年が集まつて散るのです、其所には氣高い一種の空氣が漂つてゐます。それは必ずあなたを惹付けませう、あなたが求めてゐるのはそれです、自分は切に御勸めしますと、熱心は面に溢れた。僕はともかく一考を約して別れたのである。數日後ウツドブルクに關する色々の文書が送られたのを見ると、美しい校庭の寫眞があつて、其の傍に此の校庭に於て迷ある多くの人の迷は覺め、多くの惱める人に希望が湧いたと書いてあつた。多大の躊躇の後に、僕等夫妻は四月十二日一度バーミングハムを訪うて樣子を見た上でと云ふ事にして、教頭ウツド氏を訪れたのであつた。

ウツド氏はウツドブルク・セツトルメントの教頭室に慇懃に自分を迎へて、バルド氏から詳しい事は承知しました、どうか學校の中を充分に御覽下すつて、御定め下さいと云ふ。室の周圍には實に澤山の書類が並べられてあつた、大變澤山の本ですねと云ふと、私は何でもやで到頭スペシアリストにはなれませんでしたと云ふ。氏に案內されて教室、食堂、寢室、校庭等を見て廻つた時、自分は固く決心した、之は一日も早く來るべきであると。かうした學校の寄宿舍で樂しい外國人との共同生活をすることを、自分は永く憧れた。今眼の前に表はれた學校は、夢に描いたそれよりも遙に美しいそれではないか。自分の胸は躍つた、此に驚くべき意外の生活が自分を待つて居てくれたかと。

午食をウツド氏の家に招かれて、家族の人々と一緒に濟ましバーミングハム停車場まで送りに來られながら、氏は寄宿舍には是非入つて、外の人の生活を知つて戴きたい、然し勉強の爲には校外に一室を特別に借りて、あなたに御貸ししませうと云ふ。又實は此には朝鮮人Y氏が居ます、若しやあなたの爲には不快な事が起つてはと思ひ、又一方は氏の爲にも靜な生活が亂されては氣の毒と思ひ、先日あなたが來られるかも知れない由を述べて、意見を聞きましたら、さういふ人なら自分も會ひたいからと云はれましたが、あなたは差支はありませんかと云ふ。

R君、

僕は眼の前に開かれた、大きな生活の變化に、興奮しながらロンドンに戻つた。そして愈々四月二十一日ロンドンを引上げて、ウツドブルツクの寄宿舍に入つた。立つ前知人メツス氏に會つて此の話をしたら、あすこに英國のある一面があります、あれはある種の理想家の集まる所です。然し多くの理想家がさうであるやうに、彼等は美しい人ではありますが、頭のいゝ人達ではありません、然しそれを承知の上で往らつしやいと云つた。Nice but not clever と云ふ語が頭に殘つた。Cleverではないかも知れない、然し、nice な友人と云ふのはどんな人を云ふのであらう。ロンドンを立つ時に僕の興味は更に唆られた。愈々寄宿舍に入つて泊つた第一夜、此の新らしい生活を樂しく暮したい、そしてどうか日本及び日本人と云ふものに、自分等の爲めに、出ない汚名を付けたくない、どうか朝鮮人とは靜かな和いだ交がしてみたいと、僕の心はしんみりした氣持に溢れて居た。

二

R君

僕は今此でウツドブルックなるものが、果して何であるかを說明しなければならない。然し充分にそれを說明することは中中難しい、以下各方面から說く所によつて知つて戴くの外はない。元來西洋でセツトルメントなるものに二つの種類があるらしい。一つは主として勞働者の爲めに作られた設備で、勞働者の教育、子供を預ること、家庭を見舞ふこと等をするもので、ロンドンのトインビー・ホールが丁度之に相當するものであらう。此の外に學校と云ふには少し統一が欠けるけれども、然し多數の人が集まつて共同生活を爲し、多少の講義を聽くが、主として御互の接觸によつて向上を圖ると云つた樣なセツトルメントがある。ウツドブルツクをセツトルメントと云ふのは此の後者の意味に於てである。さうして今少し學校と云ひたい樣な統一と組織がある。

元來バーミングハム市の郊外の此の附近をセリー・オークと云ひ、此の近所に此の種の學校が都合五つある。其の内でキングスミードは教員を養成する爲であり、ケアリーホールは東洋に宣教師として往くものを養成するものである。又フアークロフトは勞働者教育の爲に建てられたもので、各勞働組合から選拔された幾人かの勞働者が、起臥して勉强する。將來の組合の幹部の地位に就くものが多い。此のフアークロフトに付ては、他日勞働者教育の事を述べる時に、オツクスフオルドのラスキン・コレツヂと共に詳く語る事にしやう。此の外に最近に出來たアングリカン、チヤーチの學校がある、都合五つのものを總

稱してセリオーク・コレッヂスと云ふもので、ウッドブルックは其の中で、最も大きな整つたものとして、中心の地位を占めてゐるのである。

學校の出來たのは今から廿一年前で、英國のクエーカーの信徒達が、自分等の教育的中心機關が欲しいと云ふので、チエコレート工場主として、有名なカドベリーやローントリーなどが主になつて、ウッドブルックは作られた。然し必ずしもクエーカー信者のみが集ると限らない、其の紹介あれば信仰の如何を問はず、共同の生活を許す事にしてある。歐洲戰爭は色々の意味に於て、クエーカー信者に問題を提起した、元來が平和主義を以て立つて居る彼等は、勿論此の戰爭には反對した。社會の迫害の内にウッドブルックは多艱の歷史を經て來た。其の爲であらう、現在に於ては各國のクエーカーの青年を集めて、國際心を養つて眞に美しい世界を作る一助にしやうと云ふことに努力を傾けて居る。

バーミングハム市其のものはいかにも汚い工業都市である、然し其の郊外に出て、此の附近に來ると、ワーウイック州特有の美しい自然がある。之れから小さい半徑で圓周を描けば、其の中に英國の名所が澤山に入る。ワーウイック・コベントリー、沙翁の生地ストラットフオード・オン・アボン、舊い寺院で有名なウースター、稍遠いけれどもダーウインの生地で美しいセバーンの流に沿つたシユルースベリーがあり、南にオックスフオードがある。かうした遠足にはもつてこいの澤山の名所を遠くに控へて、又直ぐ近くにはリツギーの岡がある、其の麓に有名なニユーマン僧正の墓があつて、僕等は散策によく杖を曳いたものである。それよりもウッドブルックの廻りの一體の土地は殆んどヴイールと云はれて、田園都市の先驅として有名である。カドベリイのチヨレート工場主が勞働者の爲に理想的の住宅を作らうとして、附近一圓の村落を此の計畫の下に改造したものとして、都市問題の研究者に見逃しえない所である。工場を視察するものに、カドベリーは大きな自働車を提供して呉れて、全村落を説明付きで巡回させる。學校あり、集會所あり公園あり、ともかく素晴らしく大規模なものである。若し少し誇張して云はせれば、アメリカでフオルドの工場を見、英國でカドベリーの工場を見なければならない。之將に廿世紀のラナルクである。話は又例の如く横に逸れたが、ウッドブルクはかうした周圍の中に建てられたのである。寄宿舍は都合大小四棟、之に講堂、食堂、會議室を合せて、かなりに大きな地面を占める。然しそれよりも廣いのは、學校の庭である。大きな池があつて舟を漕がせる、美しい芝原が續いて、向ふにテニスコートが六

つある。學校の垣の外は牧場で牛や馬が點々として遊んでゐる、ヘッヂは遠く列なつて眼の及ぶ限りに續く。

僕の着いた時は丁度四月の末であつた。夏の學期はウッドブルックの一番美しい時なので、寄宿舍は滿員であつた。此の自然の中に身を入れた時、僕の心は慄へるを覺えた。英國人が自慢する美しい芝生、其の中に咲いたデージーの花、花壇には芍藥が咲きかけてゐる、池を廻ると寒さを覺えるやうな木陰にダフオデルが咲く、英國の花としてローヅロースに謳はれた此の花は、どこやらに寂しさを思はせるものである。更に牧場をみると、其處には、タンポヽとバターカップが日本の春を思はせる。それよりも僕の好きなのは校庭のエルムの木である、英國の代表的の樹と云つたら、恐らくエルムを云ふのであらう。赤い新芽が出揃つて、もう芝生の上に横になつて話をする人々に大きな樹蔭を與つて居た。舍の二階から眺める野原の遠望はよい、五月は英國の最も美しい時であり、ロンドンですら、蘇る新しさがある、況して田舍に出ると英國の五月は實によい。それに離せない點景の主題はヘッヂである、牧場の界に廻らされた垣根の樣な森である。さる英國人と野を歩きながら話をしたら、大陸ではヘッヂは殆伐られたが、英國では殘された、それは英國の農民がまだ富んで居た爲かも知れないと云つて居た。英國の風景畫になくてならないヘッヂは今、丁度新綠の粧を付けた時である、ウッドブルックの自然は實に美しいものであつた。

三

R君

僕等の入つた時、此に集まるものは六十餘人で、其の國籍は多種多樣であつた。英國人は一番多いが、オランダ、獨乙、フランス、瑞西、スウエーデン、デンマルク、ノルウエー、オーストリア、トルコ、アルメニア、アメリカそれに東洋人として我々の外に朝鮮人を數へる。英人はナショナリチーを擧げる時に直に、ウエールス、アイルランド、スコットランドをイングランドと區別するから尙更大變である。スカンヂナビアは割合から云ふと多かつた。それにクエーカー丈あつて獨乙人が敵國とは云ひながら、かなりに數に於て多かつた。此の澤山の人々が一應は皆英語を話す、然し此の中に入ると外國語の拙い僕等も必ずしも恥づかしく思はなくて濟む、と同時に歐洲人同志の語の上達の早いのは、到底我々の及ぶ所ではない。一月か二月かうして共同の生活をしてゐる内に、譯なく其の國の語を物にして往く、泌々と語脈の違ふ自分等が國際場裡に受けつゝある、不利

欲を感ぜざるを得ない。

扨此の學校に於て送つた毎日の生活を君に書くには、一日の日課を示すに如くはない。次にそれをお目にかけやう。

七時十五分　起床の鐘
七時五十五分　聖書朗讀
八時　朝食
九時　默禱
九時半より一時まで　講義及び研究
十時四十五分　コ、ア
一時　午食
一時半より四時まで　運動
四時　御茶
四時半より六時四十五分まで　研究
七時　夕食
八時より九時四十五分まで　研究
九時四十五分　讃美歌
十時　コ、ア

此に擧げた日課を僕が忠實に行つたと云ふのではない。僕のやうな不信者はめつたに聖書朗讀と祈禱に出た事がない。聖書朗讀の時刻に漸く床から起きて、大急ぎで顏を洗つて、食堂に驅け込む、それが丁度オートミールが終つて、ハムでも食べ出す時分である。餘り遲れると皆に拍手されることを覺悟せねばならない。否それよりも僕が精出したのは、朝テニスの番組を作る黑板に、自分の名を書き付けることであつた。此の爲にこそ無理に早起をしたこともある。午食の濟んでから御茶までのテニスは、毎日食る様にしたものである。それから庭の芝生で喉をうるほす御茶の旨さと云つたらない。僕の一番好きなのは、夜寢る前のヒムの時間であつた。此頃の英國の日の暮れ方は晩いから、九時四十五分と云つてもまだやつと夕日が落ちる時分である。ホールの西側の窓の向ふに眞紅に染まつた夕日が見える。美しいじやありませんかと、双方が外國語の英語で誰やらに囁く、そして御互が別々に自分の國を想ひ出す。それから各々にヒムの本が配られる。ピアノの音につれて歌のヒムは、自分を何所か現ならぬ世界に連れて往く、それは神の國か或は昔しの幼かりし時の世界か、何か此の時ばかりは今ならぬ世界に自分が導き入れられる。

無精な僕でも、眞面目に勤めあげたのは、テーブルの掃除と皿洗である。食後には學生の中から當番を設けて、食器を片付けたりテーブルを掃除させる日曜にはナイフ、フオークや皿を洗はせる。之等の勞働は極めて愉快である。皆御互に輕い戲談

を云ひながら、湯の中でザブ／＼洗ふもの、コップやスプーンを拭くもの大變な騷ぎである。それも土曜と日曜の夜は手早く片付けてホールへ集まる。英國の學校は皆さうであるが、土曜は肉體の休養日、日曜は靈の休養日として何れも休みになる。ウッドブルックでも、金曜の夜はホールに集まつて、次の週の仕事を議する。それで其の週の切が付いて、土曜の午後は誰か先生が中心になつて、遠足する組が幾つもオルガナイズされる。そして夜はホールで假裝劇や音樂會をする。何しろ各國の者が集まつてゐるので、其の國の特長を見せた芝居など中々面白い。宗教に關係した學校でありながら、隨分思ひ切つた事までさせる。日曜の夜はバーミングハム市邊りから、音樂の上手な人を賴んで、靜に一夕を送るのである。

四

R君

僕は講義に付て一言も述べなかつた。此でする講義の種類を分けると、大體三つになる。一つは神學に關するもので、教會史宗教哲學、新舊約の解釋等がそれで其の次に、宗教から見た社會問題と云つたやうなものがある。之に基督教の社會思想史、經濟學、社會問題等がある。今一つは國際心の成長と云つたやうな種類のもので之に國際聯盟の研究、國際干係より見た十九世紀の政治史等が入る。何れにしても學校がさまで高度の學生を集めたものではなく、最低日本の中學校女學校位を出さへすれば入れるのであるから、決して高尚なものではない。社會問題に關するものや、國際問題に關するものは、聽いてゐて、あゝも話が出來るか、かうしたらどうであらうかなどと、極めて批判的に聞く丈で、我々が耳よりの話だと思ふ程のものは少い。唯神學に關する部の方には、久振りに昔の高等學校時代にも返つた積りで、永い間別れてゐた色々の本を手にして、宗教に關する考へに戻つたやうな事もあつた。

然も僕の重を置いたのは、講義ではなかつた。元來强制的に聽講させるのでない上に、僕の無精は又特別に寛大に見て呉れた。僕は主として先生方との個人的の談話を樂んだ。教頭のウッド氏とは一週何回と時間を定めて、其の時間には、幾つかの質問を用意しては氏に提出した。博學の氏は色々に之に答へて呉れた。必ずしも質問そのものに對する剴切の答がなくともよい。何かそれに關連した話が廻轉されればそれでもよい。僕は此人との問答によつて、得る所は實に尠くなかつた。

ホールの側に各々に宛てた箱が一つ宛あつて、郵便物が之に入れて置かれる。大抵每週一回は、誰か先生から一通の招待

が來る、何曜日の食事とかお茶とか、一人或は數人一緒に招ばれる。かうして先生が近所に住んでゐて、學生の數が少いからこそ、かうした事も出來るのである。食事もお茶も實に質素なもので、決して御馳走と云ふべきものではない。然しかうも始終誰かゞ誰かの先生に招ばれると云ふことは、實に良い事である。先生の爲めにも生徒にも双方にあつて欲しい事である。自分は夙に大學に於ても何かかうした事があつて欲しいと思つてゐたのであるが、ウツドブルツクに於ては實によくそれが實行されて居る。僕は其の後オツクスフオードに往つて、更に此の事を感じたのである、要は實行問題にあらうけれども、今少し日本の學校の教授と學生との關係に、友情的の色彩を點じてみたいものと思はれる。

かうして數多の人に呼ばれた中に、一入僕の記憶に忘れえないのは、宗教哲學のハリデー氏であつた。氏は牧師であつて同時に、ウツトブルツクに講義をする。僕は一日氏から食事に招かれた。終つて書齋に入つて二人で、ソフアーに倚りながら、ストーブの火を眺めて居た。英國の室內生活になくてならないものは、恐らくストーブであらう。實用から云ふと極めて不便であるが、英人は中々あれを止めない、ストーブの火が神祕的で溜らないのださうだ。ともかくあの火を眺めて居る時の氣持は、英國ならでは持てない、セントラル・ヒーチングではあの役は勤まらない。扨ハリデー氏は突然僕に向つて云ふ、私はあなたがどう云ふ經歷で育つて來られたか、殊にどんな內面的な變化があられたか、それが伺ひたいのですが、御差支へなかつたら御話し下さいませんかと。勿論敢て遠慮する理由はない、然し英語で自己の傳記を話をしやうとは今迄夢にも思はなかつた。それから三四回時を定めて氏を訪うて、生立の物語りをしたものだが、之は氏にはある意味に於て非常に興味があつたらしい。それは僕等位の年齡の青年が大變西洋的の考へ方をしてゐるのに驚いたのであらう。一面に於て余りに日本そのものの思想の影響の少いのに驚いたと共に、かなりに歐洲の思想が日本の青年に相當の深さに味はれてゐるのを意外に感じたものの樣である。同時に氏は突き射すやうな鋭さで僕の說明に質問を試み、異つた心理的解剖をした。之は又僕をして自己の分析に非常に得る所あらしめた。僕は此の談話に於て、我々が思ひも知らない所に、日本在來の思想が己れを構成しつゝあることを意識せざるを得なかつた、之を外國語で發表することの到底至難であるを感ずると共に、又他方に於ては、已の內にあるものがよく相手の人に分つて貰つた時に、それが外國人である丈、一入世界の人と人との人間的の親しさを覺えた。ユニヴアーサ

ル・フラターニチーといふのは之をこそ云ふのであらう。

學生との話は又別樣の面白さがある。各國民に亘つて居る丈。思ひもかけない話が開ける。よく晴れた日に庭の芝生に、デツクチエアを持ち出しては、四方山の物語をする。デンマルクの人とブランデス、キールケカード、ヘフヂング等の噂をしたり、國民高等學校の仕事を尋ね、ノールウエー人とイブセンやビヨルンソンの話をする。殊に僕に興多かつたのは、獨逸の若い婦人とゲーテやシルレルの事を論じた時で、偉い學者と話をする時と違つて、普通の人々にどれ位に、之等の詩人の思想が入つて居るかをよく分らせて呉れた。多勢が車座に集つた時、僕がさる英國の婦人に、英國の詩人で誰が一流と思はれて居ますか、誰か此の二三十年間に評價の變つて來た人はありませんかと尋ねた事であつた。其の婦人は言下に、シエークスピアを飛抜けた地位に置いて、外はミルトン、ワーヅワース、ブラウニングでせう。若し近頃に評價の落ちて來た人を擧げればそれはテニソンで、反對に段々高く見返されつゝあるのは、シエレーでせうと云ふ。すると獨逸の人が口を挿んで、何故バイロンを一流に入れないのかと抗議する。獨逸から云へば、シエークスピアとバイロンが一流でせうと云ふ。之は如何にバイロンが大陸に於て評判で、本國に於て尊まれないかをよく示して居る。之等の話は其の學問的の價値は別として、各國各々の人の立場を語つて、僕等には一段と興味があつたのである。

五

R君

僕はかうした空氣の中に、四月下旬から七月の始まで、二ケ月餘を過したのである。此の間僕の專攻の學問に受けた裨益は少くはなかつた。然し此の生活の最大の賜物は、其の點にはなくて、ウツドブルツクに漂ふ一種の空氣であつた。如何にすればかうした社會を作ることが出來たのであらうか、僕にはそれが唯驚異に値するものとしかとれなかつた。立校以來僅に二十一年で、此に集まる學生は、多くは每學期變り、甚しきは一ケ月位で、始終更替してゐるのである、それで居て一つの空氣が動かすことの出來ない重さを以て、各人の上を支配して居る。僕は此の社會に入つた時、心の美しい人の集團と云ふものが、かうもあるかを始めて感じさせられた。皆靜かないゝ顏をしてゐる、必ずしも美しくはない、然しどれもがいゝ顏と云ふのがあゝ云ふのを指すのであらう。クエーカーは靜な凉しい眼を求めると云ふが、本當に其の人達は優しい眼で、始終自分を見守つて呉れる。僕の樣な心の碎かれない疑ふ念の強い、片意地の

ものでも、此の空氣の中に居る間は、優しい砕かれた心を持たずに居られなかつた。すべての人が自分のするすべてを善意にとる、いかなる事も他人を疑ふ氣になれない。此には競爭がない、他を押し除ける自我がない。すべての人が他に讓つて已が持たうとしない。かうした空氣がある條件を具つた時に、此の世に實現することが出來るのだと云ふ事は、自分にとつての大きな發見であつた。僕は必ずしもすべての人がかうあらねばならない、かうなることが今すぐ出來るのだとは思はない。此に複雜な社會問題がある、然し人の心の奥底にかうした集團を作る力があると云ふことは大きな一つの事實である。僕は其の後一夏をフエビアンとＩＬＰの夏期學校に送つて、社會主義者の集團的生活が何であるかを見た。ウツドブルツクとフエビアンの生活の對照の妙を感じた、共に現在社會の多數者の思想と異つた思想を持ち、其の多數者に何等かの働をしかけやうとしてゐる人達である。然し人間として與へる感じに於て、其の集團の空氣に於て、兩者の間には、何と云ふ大きな差違があるであらう。僕を考へさせる一つの問題が此にあつた。僕がロンドンを立つ時に、メツ氏はウツドブルツクの人達を評して nice but not clever と云つた。ある意味に於て此の批評は當つて居る、彼等はすべての事を必しも徹底して考へる人達ではない。殊に現在の社會の構成、由來、其の將來等を批評的に解剖する頭の人達ではない。然し又各々が夫々個性を持つた一見識を具へてゐる。僕は此に英國の青年男女のよい點があると思ふのであるが、彼等には必ずしも深い學問はない、又學問を必ずしも學問自體として、尊重しない。自分の物の見方、人生の送り方、あることを判斷する識見とか、さう云ふものを構成するものとしてのみ之を尊重する。從つて博識と云ふ意味に於ては彼等は淺薄であらう、然し一度何かある一つの問題が提供された時、各々にハツキリした一つの判斷が出來て居る、其に對する彼等の態度には、平常の優しさに似もやらぬ、凛乎とした強さがある此の意味に於て彼等は唯、nice 丈の人達ではない、相當に clever で、そして strong な意見の所有者である。

此の事は必ずしも學生のみではない、此に居られる先生に付て更に強くさう云へる。先生は校長レンデル・ハリス博士と教頭ウツド氏とを除いては決して知名の人々ではない。何れもオツクスフオルド、ケムブリツヂ出身のマスター・オブ・アーツではあるけれども、學者としての水準から云へば、三流の下か四流の上位の所にあるであらう。學界に於て誰でも其の名を知る樣な人は一人も居まい。其の學友が母校の教授フエローにでもなつて居る時に、激しい學界の競爭を避け云はゞ功名を捨て

て、かうした靜な土地に退いて、若い青年と一緒に暮し、其の余暇に好む勉强でもしやうと云ふのである。大學の教授でも訪ねて、出會の樣な鋭利な頭はない。然し各々が相當の專門的研究を續け、廣い教養を持つて、いかにも溫な心で學生を包まうとする。と云つていざとなると、其の平素の優しさに似もやらぬ、どうでも屈せない强さを表はす、それが此の戰爭中に表はれて、有名なる Conscensious objecter となつたのである。

六

「良心的戰爭反對者」に付ては僕は曾てI、L、P、を語つた時之に觸れた。大戰中平素の平和主義を固執して、飽迄も戰爭に反對し、牢獄に下るも辭せなかつた所謂「良心的戰爭反對者」は凡そ二つの方面から表はれた、一つは社會主義者の方からで、國際資本主義に反對すると云ふ平和主義者であり、他のものはクエーカー信徒の方からで、宗教上から來る平和主義者である。社會主義者とクエーカー信徒と云ふと、如何にも對照の妙を感ぜしめるが、それが少しも奇妙でなく、却て其の組み合せが自然である所に、英國社會主義の特質があることは、前便に於て、詳しく之を書いた。政府は極力此の二つのものの聯合を割かうと努めたやうであるが、求むることなしに、I、L、P、の側から來るものと、クエーカーのものとの共同的動作は保たれると云ふことである。さうして前者の代表者として、陣頭に立つたのがクリフォード・アレンとフエンナー・ブロツクウエーで、アレンが牢に入れば、ブロツクウエー之に代つて、會長となり、ブロツクウエー牢に入れば、アレン之に代ると云ふ風で、全國的に反戰爭の宣傳を休まなかつた。而してクエーカーの側の策動的中心を爲したのが、此のウツドブルツクの關係者である。僕は偶然の事情から、期せずしてI、L、P、の人々と、クエーカーの信徒とに多くの友人を持ち、段々と話が戰爭に及ぶ毎に、自分も自分もと、下獄の人々に出會つたのであつた。打明けて云へば、僕は必ずしも絕對的の戰爭反對者ではない、僕の心の中にある疑惑は、不幸にしてまだ絕對的の反戰者たらしむるに至らない。僕の此の人々に付て敬服するのは、其の採つた意見の性質でなくて、其の平素の意見に忠誠なりし態度にある。勿論すべてのコンシエンシアス・オブジエクターが、果して良心的のものであつたか或は所謂「卑怯臆病」なものであつたかは、僕の斷言し得る所ではない。唯其の中に態度の一貫を疑ひ得ないものが、多數あつた事は否み得ない事實である。此の戰爭に於て此の種の人を、數千人持つことが出來たのは、英國の誇とすべきであらう。若し此の事に興味を持つ人

があつたなら、其の人はグラハムとブロックウエーの共著"Conscience and Conscription" を讀むべきである。

コンシエンシアス・オブジエクションは戰時戰後に於て、社會哲學上に喧しい論爭の問題となつた。個人は社會の緊急の場合に於て、かくの如き主張を爲し得る權利があるかどうか、國家は個人の良心的の行動に對して、之を處罰し得るか否か。此の問題は個人對國家の權利義務の根本に觸れて議論となるべき恰好の題目である。若し人が戰爭後に出た國家學、社會學等の書物を繙くならば、言必ず之に觸れずばやまざるものあるを見出す。僕は今之に對して學問的の議論を書かうと云ふのではない。唯僕の云ひたいのは、クエーカーの人々が、戰前に於ては、數にも足らぬものとして、其の存在さへ知られなかつたのが、戰爭中其の確信に忠であつた事と、そうして平和回復するや否や、眞先に獨墺の窮乏を救ふべく、救恤の企を起した事である。一身の利害を棄つるは、云ふに易くして行ふに難い。彼等が其の平生の謙虚な動作に比較して、一反事ある時に固く執つて下らざる其の徹底した態度に推服せざるを得ないのである。而も之が一國帝都に集まつた所謂識者と稱せられる名士ではない。其の何れもが國全體は勿論小さな村に於てさへ、其の名を知られない無名士である。名もなき人々の各々が一個の人として何であらねばならぬを眞劍に考へて、信ずる所を確く持する。それが字に幾人、村に幾人、州に幾人かあつて、少し宛の周圍の人を動かして往く。さうした人が英國の各地方地方に散つてゐる。僕は思ふ、此に英國の强さがあると。少數の識者を滅すこと決して至難ではない。然しかうして下の方から段々と積み擧げられた社會を亡ぼすことは、到底不可能と云はねばならぬ。僕は兼て英國は個人〳〵が出來てゐると云ふ事を容には知つて居た。然し實際其の國に來て、之等の事實を視るに及び、眞に根柢固い大國たるを認めざるを得なかつた。

七

R君

ウツドルツクの話から轉じて、少しくバーミングハムを語りたい。バーミングハムと云ふ土地が不思議に英國の急進思想史に關係が深い。フランス革命前の急進思想家であつた彼のプリーストレーは此の土地の人であつた。革命思想に反動が起つた時、氏の家はバーミンガハムに於て民衆から燒かれて了つた。今も大學前の廣場には氏の銅像がある。其の後に於ても、選擧法改正運動、穀物條例反對運動、チャーチスト運動等、何れも社會運動が此の地から策動して居る。さうして今英國中に於て、

無二の保守黨の堅壘だから尚更面白い。バーミングハムに來て、故チエンバーレーンの業望の大に驚く。町の少し端れにあるバーミングハム大學の大きな時計臺は故總長たりし氏に捧げられたものであるが、其の時計臺が又素晴らしく大きなもので、方數里から望まれる。巍然たる時計臺がチエンバーレーンの偉業を語つてゐるやうに思はれる。今でも十二三名の選擧區に於て、勞働黨僅に一名、殘りは悉く保守黨であつて、此の地計りは勞働、自由、如何とも指の染めやうがない。一つは氏の令息アウスチン、ネヴイール兩チエンバーレーンとも、何れも俊秀の譽ある爲でもあらう。バーミングハムが古來急進運動の策源地であつたことを思ひ、而して現在保守黨の堅城たることを考へると、一應多樣に感ずるが、又他方に於て必ずしも不自然でないと云へる。帝國主義なるものが、千八百八十年代に於て、急進思想であつたのではないかと考へられるからである。ベンサム、ミル等の個人主義に對して、社會主義が急進思想であつたと同じく、帝國主義も亦、進步思想であつたに相違ない。新舊思想と云ふものが、いかに相對的のものであるかは、此を見ても分る。ある時に新思想たりしものが、段々本質が分つて來ると保守思想に分類される。世の中の思想上の分野と云ふものは、實に面白いものである。

町の中央の廣場に、市の公會堂がある、之が南阿戰爭の時、ロイド・ジョージがチエンバーレーンの牙城に突進して、有名な非戰論を辯じた所である。其の時氏は聽衆の猛烈な迫害に會つて、命からがら逃出したさうであるが、ロイド・ジョージにも二十年前には共れ丈の意氣があつたから面白い。往年の非戰爭論者大戰內閣の首相となり、往年自由黨中に於て、リベラル・インペリアリストと云はれたアスクイス、グレー、ホルデーン等がロイド・ジョージと反對の立場に立つたから又面白い。勿論同一人の眼前に展開した舞臺も違ふし、戰爭理由も違ふと云へやう、然し又以て時の經過が、人の思想を整理する一例とするに足るであらう。

公會堂の向ふ側に中央郵便局があり、共の中にサー・ローランド・ヒルの石像がある。氏の父君がバーミングハムの學校の先生をして居た關係から、氏は此に紀念されたのださうである。ローランド、ヒルの郵便制度の改革がある前の、郵稅は今日のやうに均一でもなければ、又廉價でもなかつた。ある時某雜誌に一つの記事が載つた。詩人コールリツヂが田舍を散步してゐた時に、主婦と郵便配達とが何やら爭つて居る、窺つてみると手紙代が拂つてないから拂へと云ふと主婦が其の手紙は宛名は自分になつてるが、裏が白紙で何にも書いてないから、拂

ふ必要がないと云ふのである。此の押問答を聞いて、コールリッヂが主婦に代つて、郵便代を支拂つて、悶着は落着したが、配達人の立去つた後で、主婦は詩人に向つて、あなたは餘計な事をなされた、自分はいつもあゝした手紙は拂はずに返すのです。此頃の樣に郵便代が高くては、我々貧民にはとても拂へないから、遠方の弟と約束して、裏が白紙の時には無事と云ふことにして、代を拂はずに安否を報じ合つてゐるのですと云つたさうだ。此の話がある雜誌に載つた時、澤山の人に讀まれて、そして其の儘忘れられた。唯ローランド・ヒルのみは之を默つて居られなかつた。姉弟がかうまでして安否を報じ合はねばならない郵便制度には、改革すべき必要があるとして、彼は起つたのである。爾來多くの苦心の結果、遂に現在世界各國で採用してゐるやうな、廉價なそしてどんな遠方でも均一の郵税で往ける制度が實現されたのである。僕は此の物語をマツカーシーの「現代史」に於て讀んだものであるが、社會制度の改革と云ふものは實に面白いとしたことから始まるものじやないか。

八

R君、

バーミングハムを語ればバーミングハム大學を述べねばならない。英國プロヴインシアルの大學でも有數の大學である。此には最近日本の三井が十萬圓かを寄附して「三井講座」なるものが出來、多分財政學の講座になるだらうと云はれてゐる。其の講座の擔任者スミス教授、勞働立法の教授フランク、チリヤード等何れも僕の一夕會談した人々であるが、更に關係の深いものに經濟史の大家サー・ウイリアム・アツシユレーが居る。氏がカンニングハムと並んで、英國經濟史家の双璧たることは、人の知る所である。今バーミングハム大學の副總長をして居る。氏は經濟史家として、抽象的研究の經濟學に反抗し、保護貿易の主張者として、自由貿易に反對し、又歷史學派の立場に立つて、經濟原論を建てやうとしてゐるやうである。僕が氏に招かれた時、丁度スウエーデンのストツクフオルムの教授某氏が來て居た。其の日令孃に案內されて、庭を散步する、さまで廣くない庭一杯がテニスコートである。考へてみると令孃その人が「ビスマルクの社會政策」と云ふ著述をした事があり。僕も學生時代にそれを繙いた事もあつたのであつた。スウエーデンの學者が歸つた後、アツシユレー氏は云ふ、此の戰爭に於ける獨逸の敗北は、スウエーデンの學者をして、去就に迷はしめた、切に英國の學界に求めて來るのは其の爲であると云ふ。御茶の後でそれではと云はるゝまゝに、書齋へ入る。長方形の素

晴らしく大きな室で、一方にずつと棚が据ゑられて、書物が一杯つまつて居る。要談一時間餘の後、氏は日本の學者から贈られた論文書籍等を見せる、新渡戸博士、福田博士等のものがある。自分は下層階級の出身であるのみならず、英國傳統の經濟學に反對して終始して來た爲に、今でも自分は學界の異端者と目されて居ると云はれる。そしてどこやらに現狀維持に反對な慷慨の氣と、少數者であると云ふ意識に伴ふ反抗の心を表はされた。氏は確に英國經濟學史上に於て名の殘る人である、氏を前にして四十年來の變遷がずつと眼の前に浮ぶ、十九世紀の始めに抽象的研究に對して歴史の研究に重を置かんとする要求は、先づ獨逸の法律學に表はれた、サヴイニー、及びプフタはそれであるが、之に伴うて直に經濟學に影響が及んで、四十年代の舊派歴史學派、七十年代のシユモラー等の新派歴史學派を爲した。恰も之と似て英國に於ても、歴史學派はサー・ヘンリー・メーンによつて先づ法律學に表はれ、次でクリツフ・レスリーによつて經濟學に表はれた。レスリーの後を繼いで其の立場を大成したのが、カンニングハムと此に云ふアツシユレーである。氏等が歴史の研究の上に立つて、經濟理論を作らんとする企は、僅に舊派經濟學に幾分の補正の作用を爲したるに止まつて、夫自身に於て成功したとは云はれまい。然し寧ろ事實の研究として、それは經濟史の範圍に於て、立派な業績を遂げられた。獨逸に於ても果して氏以上の力作を殘したものがあるかどうか。僕は經濟史家として充分氏を評價するのであるが、氏自身は之に滿足されない。マーシアルが爲しつゝある傾向を打破しやうと云ふにある樣である。氏は其の立場に立つて、近く氏が停年で隱退されるを待ち、方針を變へやうと計畫してゐるさうである。

話の終りかけた時分に、自分が兼て色々の人に尋ねた質問を氏にも提出してみた。それは獨逸では社會政策とか勞働問題とかの研究に、澤山の概論的の書物がある。例へばヘルクナーの「勞働問題」、ボルグの「社會政策概論」とか、其の他無數にある。然し英國には之に相當したものが何であらうか、英國で勞働問題の講義をする時に、教科書の參考書として、何を舉げるか、といふのが趣旨である。氏は之に對して答へられた。英國にはさうした本が一冊もない。ない所に英國の學問の特長がある。英國ではあゝした教科書的のものを讀ませずに、直にウエツブの「勞働組合史」「産業民主々義」を讀ませ、澤山の政府の調査書に就かせるのだと云ふ。僕は之に似た答をかなり澤山の人々から得た、其の後オツクスフオルドのマツグレガー教授に尋ねた時にも、氏は政府の出版物しか舉げなかつた。勿論英國にも多少の概論的書物が缺げては居ない。殊に最近思想家の著

述に少くない、例へばタウネーの「獲得の社會」コールの「勞働の世界」等は、表題こそ異れ、先づ概論的のものとして、差支ないとは思はれる。然し、それにしてもアツシユレー氏の云はるゝ様な傾向が英國にあることは確に事實である。

九

R君

　此に我々にとつて考ふべき一つの問題があると思ふ。勞働問題にとつて、獨逸人の書いた概論的の書物を讀ませると、いかにも段取が出來てゐて、組織的に智識が作られる。第一章に勞働問題の意義を述べて、第二章に其の成立の由來と云ふ風に來る。之で仕上げた學生の頭は、讀んだ本に出て居る問題を出して、質問すると、即坐に出來上つた答をする。然し少し自分の確信に基づかねば立たない答を求めると、到底出て來ない。言を換へれば、所謂教場の試驗に向くやうに作られて、社會へ出ての實際の試驗に向くやうに出來てない。之に反して、英國の學生はウエツブのあの大きなそしてダルな本を讀む、千八百何十年かの調査委員の報告書を讀ませて、そして自分で問題に對する一つの意見を作らせる。從つて教場の試驗に出るやうな問題を出すと當惑する、勞働問題の定義を擧げて異れ給へと云つたら、答へられないに違ひない。然し自分の腹の中には勞働問題とはこんなものだと云ふ事が本當に了解はして居る、唯直ぐ發表出來るやうな仕組がない丈である。少し考へれば自分で考へ、自分で檢べる方法を解して居る。

　僕は此に英獨間に大學教育の目的の差が表はれてゐると思ふ。無論兩方に、夫々澤山の例外があるので、一概には云へない。唯大體の傾向を云ふに過ぎないが、英國の大學は人間を作るにあつて、獨乙の大學はある他のものを作るにある。英國人は前に述べたやうに學問を學問自體として尊重しない、個性の發展の爲にあるものだと見る。獨乙では役人を作るか、會社員を作るか、何か人間を作ると云ふ事以外に重を置くと云ふよりも目的をハツキリと意識しない、從つて其の結果は夫々の往先によつて、違つた目的の手段となつて來るのであらう。僕は其の後ウイーン大學のミーゼス教授に此の話をしたら、氏は確に英米佛と、獨墺露の中央東部歐洲間には、大學學生の出身が違ひ、其目的も違ふと云つて居た。英米では治者階級のものが大學へ入る、從つて教育の目的は如何に政治を行ふべきか、如何に産業を指導すべきか、又如何に他人に調査を命ずべきかに重を置く。之に反して中央歐洲の國では、貧民が大學へ入る割合が多い、又貧民は大學へ入るより外には社會に頭角を表はす方

法がない。一方政府なるものが頗る大仕掛に役人を必要としたので、皆政府の組織の中へと入つて往つた。そこで大學でもどうすれば役人として會社員として成功すべきか、どうすれば調査が出來るかを敎へるのだと云ふ。

かうした傾向の差は、著述をする態度にも表はれてゐる。人の云ふ所によると英國人は曾て哲學史と云ふものを書いた事がないと云ふ、英國人の書いた哲學史で、どれが之ぞと云ふものか擧げて見給へと云ふ。之には僕として多少の異議がある。ソウレー、セッス、フオルシース等の英國哲學史は、夫々著者がさまで重を置いた作ではないかも知れないが、ともかく英國史とは云ふものの一個の哲學史である。まるで哲學史が英人によつて書かれないと云ふのは稍誇張ではあるが、此の言には中々味ふべき眞理がある。つまり英人は人の思想の歴史などを編む氣になれないのだ、思想史を編むには、大家の作を讀むと共に、二流三流の人々の拙作も讀まねばならない、そんな事をする位なら、自分の體系を作つた獨自の哲學書でも書いた方がよい、哲學史などを書くのは、獨逸人のする仕事で、英人の仕事ではないと云ふのである。成程哲學史は、ツエラー、フイツシヤー、シエウエーグラー、ユーバーウエツヒ、エルトマン、ウインデルバンド等皆獨乙人の本を英譯で使用して居る。

更に書かれた書物を見ると、其の體裁英獨の間にかなりの差がある。獨逸の本を見ると、獨逸で書かれた本たることが氣付かれない位に、ローカル・カラーを脱してゐて、世界のどの國の人が讀んで其の儘頭に入り易い樣に書かれて居る、之に反して英人の本を見ると、第一に英國と云ふ特有のローカル・カラーが澤山に出て來る、自由の歴史、地理等自己の環境に例を引く、從つて其の環境の理解のない人には、讀み辛い。其の次に敍述が如何にもシステムがない、こちらに入るべき分類があちらにあつたり、同じ事が繰返されたりする。システムと云ふことを最大の價値だと思ふ人から見ると、如何にも統一がなくて頭が悪いと思ふ。然し繰返しがあつたり分類が變だつたりしながら、結局ある結論へ導く、それは著者ならで出せない見識を示して居る。そしてその結論に來る爲には、彼の反復や無系統が却て有效であつたのではないかとさへ思はれる。此に英人の書物の長所がある、之を見逃す所に、反對傾向の欠點がある。

少し冗いが今一つ人の話を引かう。ある經濟學者は云ふ、一體獨逸で經濟學に付て前世紀の後半以來、喧しく云はれたが、我々の個人主義の經濟學に代るべき何物が出たのか、又吾々のマーシアルに匹敵すべき何があるのかと云ふ。議論の喧しい割に業績の擧らない國民だと云ふ。又ある社會主義者は云ふ、獨

乙社會民主黨は唯物史觀や勞働價値說に付て、澤山の書物を書いた人を出して居るが、千九百十八年の革命に、あれ丈の機會が與へられたに拘はらず、結局つまらぬ議論を續けて、ブルジョワーに政權を取られたじやないか、英國勞働黨には本やパムフレットは少いが、あゝした場合には、必ず立派な業績を擧げて見せる、政黨は大學の研究室じやない、獨乙人にはイマジネーションが足りない、學問としても骨を解して居ないのだらうと云ふ。

R君

僕は今此で此の議論を僕の意見で結ばうと云ふのではないが、要するに、取るべきものが英獨二大國民の各々にあると思ふ。兩方共が偉大な國民だと思ふ。奈邊に着眼すべきかを教へる所に英國の長所があり、向ふべき所に thorough-going である所に獨逸の長所がある。此の何れもを逸しては誤である。前者を欠く所に學問が方向を失ひ、後者を欠く所に淺薄に墮するの怖がある。我々は此の二つを併せ持つべきだと思ふ。唯從來の我々のデンク・ワイゼは余りに獨乙人的に偏して居なかつたか。嘗て日本で僕の所にアメリカの新聞記者が訪ねて來た。其の人は社會運動を檢べに來て、多くの日本の青年にも會つたらしい。僕に向つて日本の青年と話して驚いた事が二つある、一つは彼等がマルクスやクロポトキンの學說や傳記をよく知つて居る事で到底アメリカの學生等の及ぶ所でない。今一つは彼等が日本の問題に對して、何等の自己の意見を持つて居ない事であつたと云つた。確に日本學生の欠點を突いた一つの觀察である。

十

若しバーミングハム市から汽車に乘つて、ロンドンへ出ると、二時間絶間なしに牧場が續き、牛馬羊が遊び戲れて居る。僕は何回となく此の間を往復したが、其度に此の光景を興味なしに見られなかつた。此の光景の中に英國經濟の發展が髣髴として居る。始は原野、其の次に田園、更に牧場に返つた、其の變遷の中に、何百年の經濟組織の推移が縮められて居る。そして此に之丈大きな土地を牧場にして置く爲に、又言を換へれば、かうして之丈を牧場にしてある爲に、世界の各地に散在する殖民地を必要とし、殖民地と本國とを往復する數千萬噸の船舶を要し、幾十萬噸の軍艦と、ジブラルタル、マルタ、アデン、シンガポール、香港、喜望峯等の要樞を必要とする。一言にして云へば此の中に英帝國を考へずには居られないのである。其の英帝國の將來はどうなるかは實に興味ある問題である。マクドーナルドは嘗て我々が英帝國をどをするかを眞劍に考へねばなら

ぬ時は刻々として近づきつゝあると云つたが、確に英國にとつての一大問題である。

元來英帝國の中にも三つの種類がある、カナダ、オーストラリア、ニユージーランドの三つは殆完全な自治を持ち、南阿が之に稍類似した地位を持つ。第二は印度帝國の地位で、之が一番大きな問題である。第三は海峽殖民地、香港とかの所謂殖民地で、之は文化の劣つた土人を相手とするので、當分問題にならない。此の外に埃及の樣に殆完全な獨立を得て、英帝國の中から脱したものがある。差當り大きな問題は印度がカナダの所謂ドミニヨン・ステーツスに入るか、埃及の獨立國になるかの差にあらうと思ふ。今英帝國の政治的議論は別として、目下の英國に於て學問上一つの興味ある事柄は、英帝國と其の構成分子との法律關係が盛に議論される事である。何れは英帝國の分子がすべてカナダ峽のドミニヨン、ステーツスに立つとして、其の各々が殆完全な自治を僞しつゝ、共通の事項丈をロンドンで開かれる帝國議會で決定するとすると、其の會議の性質と各國の權利義務の關係を、學問的に說明しやうと云ふのである。更に此の問題を興味あらしめるのは、すべての社會制度は先ず英國に出來て、やがてそれが他國に擴がる。英人は制度創造の本能があると思はれる。そして上述の英帝國の狀態が、やがて來らんとする世界の狀態を暗示して居るのだと云ふのである。世界の將來は、一つの國の統一によらないで、各國の云はゞドミニヨン、ステーツスを有しつゝ、共通事項を國際會議で議して行くことにならう。それが先ず逸早く英帝國の構成に表はれた、だから充分研究の値があると云ふのである。一寸面白い議論ではないか。

之を思ふにつけ、僕の興味を感ずることは、英人が各個のものに最大の自由を與へ、其のヴアライエチーを許しつゝ、全體としての統一を維持して往く一種の妙諦である。現にあれ丈自由を尊ぶ個人と、之を統一する國家との關係に付て、之を見ることが出來。アイルランド、スコツトランド、ウエールス、イングランドとの關係に付て之を見、更に今の英帝國の構成に付て、之を見ることが出來る。社會と個性を沒する結合と考へないで、個性を有するヴアライエチーの集合と見る所にアングロ、サキソンの特徴がある。United Kingdom とか United states とかの言は、嚙みしめると無限の味がある。(四月十三日)



産業再建の原理

ギー・デイ・エッチ・コール

所謂「産業革命」と呼ばれてゐる經濟變革の時代は、工場組織を生み出し、それと共に近代勞働階級を造り出した。十七世紀及び十八世紀の典型的の勞働者は、雇主の小職場か、又は、家庭工業制度の下に於ける半獨立生産者として、自分の家庭内で勞働してゐた。新らしい機械の採用、水力次いでは蒸汽力の應用の結果、手工業よりは大規模生産に於ける收入が多くなつたので、多くの人々は工場に吸ひ寄せられ、工場のまありにはかの厭ふべき新工場町が出來上つた。これらの工場へ蝟集した勞働者は以前の手工業者が主ではなかつた。新しい工場主等は、エンクロジユアス（共有地の私有的分割）のために土地を追はれた農民を徵發し別けても婦人と小供をその工場に搔き集めた。と云ふのは、安い賃銀と酷い勞働規律の下で、長時間の勞働をさせるのに最も都合のいゝのは、婦人と子供だつたからである。勞働階級の生活水準は、十九世紀になつて再び徐々に昂つては來たが、その時代には急激に低下した。産業の生産能力は驚く可く增加

したけれど、この新しい富を造り出した勞働階級に落ちる分け前は、勿論僅少なものであつた。

勞働者の不滿の顯れ、別個の社會秩序に對する翹望の表現としての勞働運動は、右の産業革命及び英國とその聯合國とが佛蘭西に對して起した反動革命時代に、擡頭して來た。佛蘭西革命と、それに伴へる思想の大動搖は、勞働階級思想に深甚な影響を與へた。産業革命による新らしい經濟狀態に對する反抗、「自由、平等、友愛」の福音に對する信仰は、急進的勞働運動の大いなる原動力となつた。政治的にこの運動は先づ、選擧法改正運動となつて現はれ、次いで一八三二年以後には、チャーチズムの政治的要求となつて表はれた。一八三二年の選擧法改正案では、勞働階級は、改正要求運動の仲間だつた中産階級に逃げを打たれて、選擧權を獲得しないで仕舞つた。そこで勞働階級は、チャーチズムに於て、その政治的綱領を表明したのである。然し都市勞働者が選擧權を獲得したのは、やうやく一八六七年のことで、彼等の革命的昂進が既に既に死滅した後であつた。

なぜ彼等の革命的昂進が死滅したか。資本主義的産業制度の初期の數十年の間　勞働者等は　彼等の故郷の田園や村落とは似てもつかない騷々しい環境で、不慣れな勞働を强いられるのに恐怖を抱いて、その制度に反抗した。今日印度や露西亞の百姓が、やゝもすると車輪の間斷なき廻轉を嫌ふやうに、産業主義を嫌つた。しかしかうしてゐる間に、資本家等は、初期のやうな惡辣な壓制では餘り實入りが無く、寧ろ、賃銀をよくし、勞働時間を短くし、勞働條件をよくした方が、――勿論それは最初は、勞働組合の切實な要求か、若くは立法的强壓に應じたものに過ぎなかつたが――利潤を高める上に、確實有効なやり方だと云ふことを知つた。同時に他方に於て、工場組織の中で生れた勞働者の働き盛りの時代が來り、彼等は、工場の單調な日課や峻嚴な規律、さては工場町の暗い狀態をも、彼等の階級の共通の運命として受取つた。一八四八年以後　勞働階級の狀態は全體として徐々に改善され、彼等の氣持は　惡い仕事もせいぜい

利用し、資本主義組織の範圍内で出來るだけの地位の向上を圖らうと言ふにあつた。勞働階級のこの氣持は、十九世紀の七十年代の末頃若くは八十年代の初めまでつゞいた。その時に近代の社會主義運動が興隆し、その影響によつて、勞働組合運動が新らたな、一層進撃的な形態を執つて來たのである。勞働者の教養は次第に高まり、資本主義組織そのものは手を觸れないで、自己の地位の向上を期し得る極限が、最早近づいてゐるといふことは次第に意識して來た。社會主義者等は、一方ではカール・マルクスから、他方ではロバート・オーエンの如き、十九世紀の英國の先覺者から教へられて、資本主義的搾取の代りに協同に基礎を置き、利潤のための生産の代りに厚生のための生産を以つてせんとする産業組織の改造案を樹立し始めた。更に教養の高上は、勞働者等をして、産業に於けるその地位の劣れること 經濟政策がいかに自己の幸福に深い影響を及さうとも、その政策の樹立に何等發言權を有たぬことを痛感せしめた。社會主義は、勞働組合を捉へ それを導いて一個獨立の政黨を組織せしめ、新らしい産業政策を樹立せしめた。勞働者等は、資本主義制度を以つて、賃銀奴隷の制度と思惟し始めた。

英國及び他の工業國の現在の勞働者の狀態を「賃銀奴隷」であると言ふのを聞くと、おせつかい屋は時々、非常に憤慨して、「いや、そんなことは無い。」と叫ぶ。「勞働者は今日、完全な個人的自由を得てゐるではないか。閑な時間を、思ふまゝに使つても誰も干渉しないではないか。雇主に縛り付けられてゐる譯でもないし、通知書一本で雇主を去つて何處へでも行つて職を求めることが出來るではないか。饒多の勞働法制があつて、過度の勞働時間、非衛生的の工場設備、多くの職業では、苛酷な賃銀率に對してさへ、勞働者を保護してゐるではないか。勞働組合があつて勞働者の利益を保護し、しかもその勞働組合は、國家及び資本家から認められてゐるではないか。國家及び資本家は合理的勞働時間を規定し、主要工業の全部に亘つて、標準賃銀率を實施してゐるではないか。最後に、勞働者は雇主と同等な政治的權

利を有つ市民であつて、國家機關を左右し、依つて以つて産業の組織さるゝ基礎的條件を改更することが出來るではないか。」

それらの事柄の若干のものは、凡ての資本主義國家に於て大部分本統であり、その多くは英國に於て概して本統である。然らば、勞働者は「賃銀奴隷」であると言ふ斷定はどうなるか？　今日の勞働者が一個の自由契約者であることは確かである。今日の勞働者と、賣買の出來る動産的奴隷との距離は、倫敦と東京ほどの距離のあることも確かである。然し、―そうした條件の下にある産業勞働者を「賃銀奴隷」と呼ぶことに實質的なものがあり、如上の反對は大部分的が外れてゐる。奴隷廢止論者がよく勝ち誇つたやうな口調で説明した如く、物質的意味に於て不足のなかつた動産的奴隷は多く在つた。しかし主人からいゝ取扱ひを受けたにせよ、奴隷はやはり奴隷であつた。近代賃銀勞働者は、その所屬の勞働組合によつて、立派に自己を保護してゐるかも知れない。或はまた、工場法、勞働者保護法及びその他の近代的勞働法制によつて、立派に保護されてゐるかも知れない。しかし我々は、それであるから「賃銀奴隷」といふ言葉は實狀を表してゐないと、早急に結論してはならぬ。

我々の反對者は之に答へて云ふ。「然し實際に、動産的奴隷と近代勞働者とには、次の如き根本的の差異がある。近代勞働者は、勞働組合及び恩惠的法制によつて保護されてゐるばかりでなく、何よりも先づ、獨立の權利を持つ自由人たる點に於て、動産的奴隷と全く異つてゐる。動産的奴隷は何等の權利を持たず、慣習によつて保護されてゐたとは云へ、法制的には全然主人の好き自由であつた。」と。

まことにさうである。しかし「賃銀奴隷」といふ言葉を使ふ人々は、何もそれによつて、賃銀奴隷と動産的奴隷とを同一視しやうとするのでもなければ、動産的奴隷の狀態と賃銀奴隷のそれとが同一であると言はうとするのでもない。

彼等は、賃銀制度が奴隷制度や農奴制、傭僕制の中間的形態に比して、一大進歩であることを認めてゐる。彼等は、勞働者が尠くとも政治的權利の名目上の平等を獲取したことの重大な意義を認めてゐる。彼等は、勞働者が自己解放の二つの鋭利な武器——政治的行動と產業的行動——を握つてゐることを認めてゐる。たゞ彼等は、勞働者がまだ十分にこの武器を使用するに到つてゐないと言つてゐる。而して彼等は、飽までも近代勞働者を賃銀奴隷なりと定義してゐるのである。何故であるか？

彼等の見解によると、奴隷の本質的特徴の尠くとも一つが、なほ近代勞働者に認められる。近代勞働者は政治的に、雇主と同等の地位に上つて居り、自己及び一般勞働者に責任を負ふ政府を、自ら樹立することが出來る。然し彼は經濟的に、雇主と何等同等の權利を持つてゐない。彼は雇主の下に、支配人及び監督者の下に勞働するが、それらの人々は彼の選んだものでもなければ、彼や他の勞働者に何の責任を負ふものでも無い。まことに彼は、通知書一本で雇主を離れることが出來る。然し彼は、勞働して生活しなければならず、雇主があつて始めて勞働することが出來るのである以上、雇主を變へても、やはり同じ條件で勞働しなければならないであらう。

勞働者は、自己のあづかり知らない規律に服してゐるばかりでなく、自己の意志で勞働を行ふ權利を、雇主に賣渡す。どんな商品を誰のために造らうと、自分の造る商品が有用であらうと無用であらうと、又は實際有害であらうと、その商品がどんな價格で賣られやうと、その價格と自分の賃銀の關係がどうであらうと、彼勞働者の何等あづかり知るところでない。彼は「產業政策」に關係あるものとされてゐない。それは產業的優者の仕事である。一度び工場に入ると、彼は、大なり小なりの熟練を持ち、そのために價値を持つところの、單なる勞働力に過ぎない。彼は、賃銀を受取る代りに、彼の勞働使用上の一切の管理を引渡して仕舞ふ。たゞ賃銀契約に於て所屬の勞働組合の課する若干の條件を

保有するだけである。

彼を雇入れやうとする雇主があり、待遇に不滿の場合、他の雇主を發見し得るものと假定しても、なほ右の一切は事實である。ところが實際に於ては、いつも雇主があると限つたものではない。屢々多數の勞働者が失業して居り、失業者に與ふる國家の僅少な補助で、長い間職を捜してゐる。そう言ふ條件の下では、勞働者に雇主を選擇する自由があるなどと言ふことは、人を馬鹿にした話になつてしまふ。勞働者は再び職を得ることが出來まいとの懼れから、現在の職を離れやうとしない。若し政府官吏が認めて不當とする理由で職を去らうものなら、賃銀を投出さなければならぬことさへある。若し彼が失業手當を受けて居れば、政府官吏の命ずるまゝに最初に見附かつた仕事に就かなければならない。それを拒めば、その僅かな失業手當さへ取上げられてしまふ。比較的割のいゝ職に就いてゐる時でも、失業の恐怖が絶えず彼を襲つて居り、そして時々の特別に好景氣な時を除いては、一個の人間として要求を固守し得るといふ勞働者の論理上の權利などは、大部分無効にしてしまふ。この點や他の多くの點に於て、勞働者の實際上の地位と、英國憲法に規定されてゐるその理論上の地位とは、非常に異つてゐる。彼は事實常に、劣者の地位に在るし、また在ると自ら感じて居る。

消費者としての勞働者の權利は、職にありつき、生産者として賃銀を受取る能力に依存してゐる。一旦職を離れゝば、彼は消費能力の大部分を失ひ、國家の「施物」を受ける危つかしい地位で、僅かに殘つてゐるものを保つてゐるに過ぎない。彼の市民權は、失業が少し長引けば、すぐ脅かされる。と云ふのは、彼は止むなく救貧法に訴へなければならず、そうすれば、最も大切な市民權の若干を失ふからである。動産的奴隸に何等權利を持つてゐなかつたが、慣習によつて多量の保證を得てゐた。賃銀勞働者は多くの權利を持つてゐる。しかし、勞働者としての彼の地位が永久に不安

定であるから、彼の地位は不安定である。

經濟組織に於けるこの不安定と劣者の意識は、勞働者をして勞働運動に宗教的信仰を抱かしめる原因となる。何となれば勞働運動は、社會の全員に對して、人間關係に於て得られる限りの安定を與へ、個人的差異と相容るゝ限りの最大の平等を齎らさんとするものだからである。勞働運動は、萬人の安定と平等の權利のために戰ふ——而してこの原理を政治に適用せんとするばかりでなく、産業社會の經濟的基礎に適用せんとするものである。

こゝで私の取扱はうとするのは、安定と平等といふこの一對の原理を、産業に適用する方面である。この一對の原理は、勞働者産業政策の基礎である。それらは、産業方面に於ける勞働組合及び勞働黨の綱領と要求に意義あらしめてゐる。それらは、現に勞働運動のあらゆる陣營から放たれてゐるところの、産業に於ける民主的自治の要求、別の言葉で云へば所謂「勞働者管理」の要求となつて現はれてゐる。

「勞働者管理」といふ言葉は、はつきりと述べ示し、どんな條件にもどんな産業にも、何等變改を加へず適用の出來る要求の、直截確的な目錄ではない。それは綱領と云ふよりは寧ろ、理念であり、理想である。然しそれは、多くの綱領に具現されてゐる理念である。簡明にこの理念を説明すれば、我々が民主的に政治組織を再建し、現に再建しつゝあるが如く、産業組織をもそれに應じて、同樣の原理に立つて、再建しなければならぬと云ふことである。

「あゝ、しかし、結局、民主主義とは何であるか？現に我々が政治に於て行つてゐる投票、選擧、代議政府の一系列がそれで、十分滿足の出來るものではないではないか。」と反對者は云ふ。實際、それらのものは我々の現在の政治組織に於ける、民主的精神の不完全な表現である。それらは民主々義ではない。しかしそれらのもの又はそれから發展した選擧及び代表制の或る改善された方法なしには、我々は民主主義を持つことは出來ない。その意味に於て、それらは

民主々義にとつて肝要なものである。しかし民主々義そのものは、極めて部分的にしか、その中に具現されてゐない。民主々義はそれらの背後に在つて、それに生命を與へ、我々をしてその政治的表現のためのより良き方法を發見せんと努めさせてゐる。それらは民主々義の政治的機構である――貧しいながらに、我々の案出し得た最善のものである。しかしそれかと言つて、民主的原理を産業に適用せんとするに際して、その政治的表現のために我々の採つた一切の形態を模倣しなければならぬと云ふ理屈はない。産業はそれ自身の獨特の民主的形態を樹立しなければならぬであらう。我々は最もそれに適した形態を見出し、その採用を保證しなければならない。

これは政治に於ける民主々義を容認しながら、産業的管理に於ては民主々義を不適當なりとする人々への答である。彼等は云ふ。政治は各個人に關することであるから、民主化することが出來る。然し産業は、萬人の統治に關することでなく、貨物の生産に關する技術的事象であるから、民主化することは出來ないと。しかし貨物を生産するために、産業は先以て人を統治しなければならぬと云ふことを、誰が拒み得るか？、普通の勞働者が國家の法律から來る壓迫を意識するとなれば、産業組織及び工場から來る壓迫を百倍も意識してゐるといふことを、誰が拒み得るか？、「人間の統治」と「貨物の生産」との區別は、根本的に虚妄である。現在の産業組織は人間統治の一形態に過ぎず、それは近代の諸時代に於て、社會が集産的管理の下に置き損ねた一形態である。

とは言へ、政治と産業との區別は重要である。政治は民主々義に適する領域で、産業はそうでないから重大だと云ふのではなく、民主々義が、別個の問題を取扱ふために、別個の形態を執らなければならぬから重大なのである。我々はたゞ政治議會と同類な産業議會を設立しただけでは、産業民主々義を成就することは出來ぬであらう。我々は、單獨の非常に複雜した統治の問題として、産業界に於ける民主々義適用の最善の方法を、考究しなければならない。

組織された勞働者運動が、特に近年に於て、眞摯に著手しつゝあるのは、是である。勞働者等は、現在產業生活の全野に亙つて彼等を取圍んでゐる不安定と劣者の意識を取除かうと欲してゐる。彼等は安定と平等との欲望を、產業上並に政治上の綱領及び要求に、具現しやうと試みてゐる。而して彼等は、あらゆる形態に於ける一般的努力を、「勞働者管理」の名を以つて、表はしてゐるのである

勞働者の見地からすれば、產業は今日無責任な事柄である。勞働者は雇主のために勞働するのであつて、その雇主が個人であらうと、給料で雇はれてゐる重役や支配人の代表する會社又はシンジケートであらうと同じことである。若しその雇主が個人であれば、彼がその地位に在るのは、誰かゞ選んだからではなくて、雇主たるの權利を繼承したか、それだけの金を受けついだか、又は、何とかして雇主となるに足るだけの金を蓄積したがためである。彼は泥棒して雇主となることも出來れば、企業でそれだけの金を儲けることも出來る。或はまた、全くの運でその地位をかち得ることも出來れば、明らかに反社會的な行動によつて、その地位を得ることも出來る。彼は、善き雇主である場合もあれば、惡い雇主であることもあり、有能な雇主であることもあれば、無能な雇主である場合もある。實際、あらゆる種類のものがある。そこで重要なことは、勞働者の見地からすれば、彼は無責任な者であり、指導者、雇主として自らその地位に就いた者で、勞働者が道德的に認めなければならぬ。雇主たるの權利を何等持つてゐる者でないと云ふことである。若し彼が立派にその仕事をやつて行けば、使はれる勞働者は、友好的な間柄で彼のために働くであらう。しかし彼が善良であるといふことは、偶然事である。特殊な場合に於て、個人的關係が良好であるといふことは、何等一般的權利を確立するものでない。

旣に述べたやうに、たいていの場合雇主は、給料で使はれてゐる首惱者や副首腦者の經營する、非人格的の會社であ

る。この場合、勞働者が實際接觸する代表者等は、屢々その事業に直接の利害關係を持つてゐることもあるが、或る意味に於ては彼自身もまた被雇人である。しかし、彼等を支配人に任命し、勞働者に對する支配權を與へた者は、そもそも誰であるか？名義上、株主全體が重役を任命し、重役會議が總支配人を任命し、總支配人が副支配人を任命することになつてゐる。ところで實際、多數の株主及び多くの重役の管理は單に名義に過ぎなくて、會社の事業は結局、支配人等か又は大きな財政上の利益關係を持つ極めて少數の人々によつて管理されてゐる。財政的權力の所有者が任命し、解任し得る有給支配人は、しばらく問題外とする。それらの財政的權力の所有者が、會社のために働く雇人の全體を支配するの權能を授けられるのは、誰からであり、何のためであるか？明らかに、彼等が代表する投下資本のためである。彼等の權利は貨幣の權利である——彼等は、產業會社に對する投下資本の最高支配權を代表してゐる。而して、配當金に飢えてゐる投下資本を代表してゐるが故に、彼等は、主要株主のために最大の利潤を齎らすやうに、その產業を支配して行かなければならない。

「しかし何故に、投下資本は我々に對してその絕對權を要求しなければならぬか？」と勞働者は問ふ。「その事業によつてつくられた富は、資本で購入した機械をもつてしたとは言へ、我々勞働者の作り出したものではないか。またその機械や原料も、勞働の產物ではないか。貨物の生產に於て、筋肉及び頭腦をもつて勞働する我々が何故にこの大いなる生產の機關を管理してはならないか？尠くとも我々の要求は、金しか出さない資本家の要求と同樣、正しいものではないか。我々は寧ろ、我々の要求の方が優つてゐると主張する。」と。

そこでこれに對して、資本投資者には資本を失ふ危險があり、企業の失敗する場合があり、貨物の價格が生產費以下に下落することがあると抗議しても、勞働者は返答に窮しはしないであらう。彼は次のやうに答へるであらう。「實際、

我々は何の危險も冒さないか？我々は日々に、機械のために傷付けられ殺され、鑛山の崩壞で壓殺されてゐるではないか。產業生活の無數の椿事の犧牲となつてゐるではないか。我々の眼前には、失業の恐しい危險、雇主を見出せない不安、收入の道を失ふ危險、家族の飢餓が橫はつてゐるではないか。あてのない職を探し求めてゐる間に、我々の技能は低下するではないか。準備金があつて、不景氣の時にも配當をとる投資者に、產業の冒險が開いて來れる。」

勞働者の要求の主眼は、生產に於て我々は勤勞を給付するから、合理的勞働時間に對して相當の賃銀を受取る資格があるばかりでなく產業の支配に關與する資格があると云ふにある。更に彼は力說する「生產は、民主的な、本質上協同的な仕事である。我々の使用する凡てのものは、多くの勞働者の共働せる結果である。それを完成するためには、筋肉勞働者、技師、經營者が必要である。これらの凡ての人々が、その給付する勤勞の代償として、生產機構の管理に仲間入り出來ぬと云ふ譯があらうか。我々の生命と幸福は、その機構がいかに管理されるかに依存してゐる。その機構の運用を決定する上に、相當の發言をなすことは、疑ひもなく我々の權利である。」と。

そこで若し君が投資者の獨占的要求を放棄してしまつて、生產は技術的な事象であるから、その複雜なる實務を了解してゐる專門家によつて管理されなければならぬと主張すれば、それに對する答へはかうである。政治も亦專門的な事象である、しかし誰も、普通の投票者が國家の複雜な組織の全部の行政を、その手中に握らなければならぬと主張しはしない。求むるところは、政策を管理し、各人の能力に應じて、行政に參加するの權利である。同樣に、產業に於ても、勞働者の求むるところは、各人が支配人となることではなく、生產者であつて同時に消費者たる大衆の共通の利益を目的に、產業を經營するため、それに應ずるやうに支配を組織し、管理しなければならぬと云ふにあり、本來生產が目的でなく投資々本の利潤率の高きことを目的とする少數者の利益のために組織され、管理されてはならぬと云ふのである。

この理想を實現するに當つては、最高位にある支配人の態度及び責任に變化を求めなければならぬのみならず、勞働者の間に權力と責任とを廣く配分しなければならない。現在の産業組織に對する勞働者の主たる非難の一つは、その組織が浪費的で、能率が上らぬと云ふ點にある。現在の産業組織は、勞働を欲する多くの勞働者を失業させて、利用し得る資源を十分に利用し得ない。そればかりでなく勞働者に最善をつくさせるやうな、確固たる理由と誘引を與へることが出來ない。普通の勞働者は、今日、産業を立派に經營することに對して、個人的責任も協同的責任も感じないし、感ずることも出來ない。經營、政策の責任と管理から全く除外されてゐるから、勞働者は支配者を敵對的權力者と考へざるを得ない。勞働者は自分の働く工場を成功させ、良質多量の貨物を生産するために、全力を盡すやうなことはないし、またそれを期待することも出來ない。然し、生産に從ふ全員が、企業の成功に個人的に責任を感じ、その仕事は選ばれた少數者の利潤のためでなく、全員の共同利益のために行はれてゐることを知れば、生産の能率が非常に増加することは明らかである　雇主等は現在、手當や賞與のやうな金錢的刺戟によつて、この感情を煽らんと努めてゐる。然し、その使用する人間を了解せずその經營する組織の根本的過誤を了解しないから、それは失敗に歸してゐる。人間は物質的刺戟だけでは、その最善を盡さない。各人がその働く會社の政策が強固で協同的であると信じ、その成功と失敗とは或る點まで自分の個人的努力に依存してゐると感じ、己れの最善を盡し、己れの仕事の範圍內で全員の共通のために努力することを名譽と考へて始めて、各人はその最善を傾けるのである。

されば能率の高い、民主的な、産業管理の組織を樹立するためには、最高政策を正しく導かなければならぬ——それこそ産業の社會的所有及び管理の目的である——ばかりでなく、そこに働く全人員に對して、權力と責任を普遍的に分議しなければならぬ。茲に坑夫聯合會が石炭委員會に提出し、下院に於て自由黨と保守黨のために否決された法案の目

的は是であつた。勞働黨及び坑夫聯合會は、炭坑の公有を確立せんと欲したばかりでなく、一切の關係筋肉勞働者及び頭腦勞働者を代表する、全國會議、地方會議、炭坑會議を通じて、石炭業の管理組織を樹立せんと欲したのであつた。この法案の目的は、凡ての頭腦勞働者及び炭坑夫に對して、社會は一個の責任者として彼に炭坑案の全管理を任せて居り、筋肉及び頭腦の最善の活動を以つて之に答ふには一個の市民としての各人の義務であるとの意識を起さしめんとするにあつた。他の多くの產業に從事する勞働者の案出せる提案も、產業の性質によつて勿論その方法を異にしてゐるが、目的とするところは同一である。或場合には國有が計畫の基礎たることとあり、或場合にはまた都市所有又は協同組合所有がその基礎たることとあり、或場合には勞働者自身のギルドが、勞働組合の監督の下に、直接に生產を營まんとする。さう云ふギルドは、尠くとも當分公有の見込のない建築業、機械業、被服業、家具業に於て、既に組織されてゐる。一方、炭坑とか鐵道とか電力業とかの如き大產業では、公有といふ確固たる基礎が確立して始めて、勞働者管理を行ふことが出來る。

その方法はどうであらうとも、目的は極めて明白である。勞働者管理と、個人的利潤のための產業の經營との間には、何等調和の道はあり得ない。勞働者は利潤の分け前にあづからうとするので無く、利潤そのものを撤廢し、公務の基礎に於て產業を再建――利潤のための生產でなく、効用のための生產――せんことを主張するのである。彼等が社會有及び勞働者管理を欲するのは、自己の爲めに利潤を生まんがためではなくて、產業をして萬人の利益のためたらしめ、不斷の生產を基礎としてそれに充分なる能率を與へんがためである。彼等が產業管理に仲間入りを求めるのは、怠慢を見逃さんがためではなくて、公務に對して責任を以つて全力を盡さんがためである。

この新らしい產業組織は、瞬間にして成るものでなく、現在の反社會的な能率の上らぬ方法からそこへ達するには、

困難な過程を經なければならぬが、この組織は勿論、熟練經營者の必要を減じもせず、又は彼等の職能を果たす上に、熟練經營者に廣汎な權能を與ふるの必要を減じもしないであらう。寧ろ反つてその必要を増し、同時にそれに相當する方法を講ずるであらう。それは筋肉勞働者に對すると同時、經營者に對して訴へなければならない。何となれば現在、善き經營者や支配人は、非常な不利の立場で働いてゐる。彼は賃銀を貰つて働く場合でも、彼の仕事は勞働者や社會に最善の奉仕を與へるためではなく、株主の單なる財政上の要求を滿足させんがためである。價格を高くしておくために生產を尠くしておく方が割のいい場合には、彼はこれをしなければならず、その結果勞働者を解雇し、公衆の購買力を減退させなければならない。工場の生產能率を高めやうとする彼の提議、又は勞働者の勞働を輕減せんとする彼の提議も、株主側からは單に、それが配當及び株の相場に與ふる影響といふ見地から考へられる。更に、支配人は資本家の從僕であり、且つ從僕として働かなければならないから、自然勞働者は彼を信用せず、常に心から彼と協同することを拒む。彼と勞働者とが親しい共働關係を保つことが、能率を高める上の鍵鑰であるが、彼はそれをすることが出來ない。彼が正しいことを提議する場合でも、勞働者から自然疑心をもつて眺められる。彼が命令を與へれば、勞働者は服從するが、自分達の選んだ指導者の下に働く人々のやうな氣持からでなく、しかめ顔で不承々々に働くのである。單に指導するだけでよい場合に、彼は勞働者を驅り立てなければならない。

產業の社會有と勞働者管理とは、產業の中に新らしい精神——自らすゝんで奉仕せんとする精神と、あらゆる種類の勞働者の間に於ける親しい協同の精神——を呼び起すであらう。勿論、この組織も變革の翌朝からすぐ完全するものでなく、何の支障もなく圓滑に行くと思つてはならない。どんな新しい組織に於てもさうであらう。勞働者等はボス（會社長）を敵と見るやうになつて居り、重役や支配人をボスの代理者と考へてゐる。いまはしい資本主義的搾取の幾時代

が勞働者に教へた教訓を取除くには相當の時を要するであらう。しかし間も無く彼等は新たに學ぶに異ひない。何となれば人間は道德的雰圍氣の變化に容易に適合するものであり、その寛安な奉仕の衝動は、一世紀以前にロバート・オーエンが立派に云つてのけたやうに、協同の雰圍氣に於ては、迅速に成熟するものだからである。産業の新らしい雰圍氣は、その古い雰圍氣とは似てもつかぬものであらうが、就中次の點に於て全く異つたものである。即ち、古い雰圍氣は人間の下等な感情で訴へるものであるが、新らたな雰圍氣は、男女數人の內部の最善のものに訴へるであらう。

今日勞働者は主としてその貪欲か又は恐怖に訴へて、勞働させられてゐる。彼は手當や出來高拂で宥めすかされてゐるもつともこの手當や出來高拂も、勞働者が生産を增加すると、やがて値下げされて、盗み取られてしまふのである。今日勞働者は失業の恐怖か又は規律的手段で、勞働に驅りたてられてゐる。賃金勞働が奴隷勞働よりも能率の高いことは誰でも知つてゐるが、勞働者管理の下にある勞働は、その何れよりも遥かに能率が高いであらう。それは世界の仕事をより高い道德的基盤にをく時であり、普通の人間は强制するか宥めるかして始めて最善をつくさせることが出來るといふ野蠻な觀念を撤去する時である。我々は一個の人間、一個の市民として、勞働者へ訴へなければならない。而して、己れの勞務が共通善を實現す可きことを、勞働者に確信が出來るやうに、我々の産業組織を組立てなければならない。

勞働者管理の下にある産業では、雇主といふものはない。實際今日、雇主といふものは大多數の産業に於て、廢物となつてゐる。大規模資本主義は、彼に代るに有給の支配人を以つてした。勞働者管理は、現在支配人を選ぶ場合に主として働いてゐる階級的特惠だけを撤廢して有給支配人に適當な權能を與へて存置するであらう。それに必要な專門的資格を重要視すると同時に、眞の指導者なる能力を重んじ、最も有爲な人に、支配を委すであらう。現在資本主義が支配人をしつかりと惹き付けてをくためにとつてゐる諸の手段は一掃されるであらうし、支配人をしてその産業に投資的態

度をとらしめるため、財政的利害關係を有たしめるが如きことも、取除かれるであらう。支配人は、事務員又は筋肉勞働者、使用人と平等に、その勞務を一個の責任ある職業として取扱ひ、最早搾取の手段として取扱はぬであらう。我々は今日既に、國家のみ市政の經營に於て、公平な私情のない奉仕の實例を持つてゐる。勞働者管理は、共同奉仕に於て働き仲間と眞の協同關係を樹立することによつて、これらの人々及び同じ他の人々を今日より遙かに善く働かせることが出來るであらう。

これまで長い間、勞働組合の政策は、この理想によつて次第に生氣づけられて來てゐる。勞働組合は今日非常な不利な立場で活動してゐる。勞働組合及び組合員は、産業に於て、大きな且つ刻々增大して行く認められざる力は有つてゐるが、公に認められた權利及び地位は、何等持つてゐない。産業の管理に仲間入りする權利は何等認められてないのであるから、彼等に當然、消極的活動しか出來ない。彼等は、罷業權を楯にした勞働規律や立法によつて、如何なることは爲してならぬかを雇主に對して語るのみである。これ等の規律や立法の多くは合理的なものであり、必然に勞働者を搾取から保護するものであるが、しかし勞働者の全地位は滿足す可きものではない。産業に於ける眞の力が二つの敵對せる群——一方に一切の命令を爲し意のまゝに組織を運轉する權能を名目上與へられてゐるものと、他方に制限と拘束とを加ふる大きな認められざる力は持つてゐるが、積極的な命令を發する權利は毫末も持つてゐないものと——に分裂してゐる間は、産業の能率を高めることは出來ない。勞働組合が現在かくした地位にあるのは、組合の失敗ではなく、資本主義の直接の産物である。勞働組合の「拘束」に不平を云ふことは全く無用である。勞働組合は拘束をしなければ、組合員の無制限の搾取の手に渡さなければならないからである。全産業組織が組合の協同權の否定を基礎として樹てられてゐる時、勞働組合は雇主と「協同」しなければならぬなどと云ふのは、無意味である。組合が産業の經營に對して何

等か積極的な干渉を敢てしやうと企ればすぐに、雇主等は異口同音に「支配人の職能」を主張し、單なる賃傭勞働者の如き劣れる人間の則を越えたと云つて組合を非難する。これが救濟策は、勞働組合及び組合員に產業に於て公に認められた地位を與ふるにあり、生產組織の指揮に於て積極的に機能を與へ、「拘束」の必要をなくするにある。今日生產費の大部分を吸收する監督の費用の大部分は、公有及び勞働者管理の合理的組織の下に於ては全く不必要となるであらう。その組織の下では職場にゐる勞働者は、生產の細部作業を自由に整調し、自ら指導者を選び、一つの有機的集團として働き、自分等の代表者たる高級支配人から、細かく監督及び管理の如き浪費的な仕事を、取り去るであらう。職場から全國的管理體に到るあらゆる階段に於て、勞働者の發言が聞かれ、その目的は出來るだけ少數の手に權力と責任を集中することでなく、產業の全野に亘つて、廣くそれを配分するにあるであらう。勞働團體は主として拘束的なことをするのを止め、最も有効に、勞働の苦痛の尠いやうに、生產を組織することに共力するであらう。敵對する二つの群の鬪爭の代りに、我々は相携へて、全體としての社會の立場から見て、生產を以つて一つの赫々たる勝利たらしむることに努力するであらう。

　しかしこれらの一切の實現には、所有と管理の根本的變革を條件とする。資本主義は利潤のための生產を意味する。資本主義が權力を得てゐる間は、新らしい勤勞の精神は發起されることは出來ない。尠くとも、大規模資本主義的條件の下に行はれてゐる一切の產業を社會有としなければならない。これは、一切の產業が國有とされなければならぬとか、或る產業が官僚的に管理されなければならぬとか云ふことを意味するものでない。各產業に於て、勞働者管理の或種の形態を確立し、それに適當する責任の配分を行はれなければならない。鑛山、鐵道、商船、造船、製鐵の如き大工業は社會全體の所有としなければならぬ。が、地方的公共事業の性質を持つ多くの仕事は、地方的、地域的公有が最も

適した組織であり、小賣業の如き仕業は、消費組合の所有とすれば最も完全に行はれる。建築業、裁縫業の如きは、私としては、個人的利益のためでなく効用のための生産を基礎として勞働組合が組織した生産ギルドが所有し、社會から信用と財政的援助を得て經營するのが、最もよき組織だと信ずる。社會有の形態に於ても、管理統制の方法に於ても、最大の適應性と變化とが必要である。勞働者は一切の産業を、鑄型にはめた組織につめ込まうと欲するものではない。個人的資本主義の反社會的制度を撤廢し、筋肉及び頭腦の一切の勞働者は結束して、共同勤務を實現せんと欲するのである。しかしこれらの條件の中で最も緊要なるは、諸の方法と實驗とに對して、出來るだけ廣汎な自由を與ふることである。我々は資本主義よりはヨリ良き方法を知つてゐる――それは勞働者管理及び自治的奉仕の方法である。とは言へ我々が、特殊の産業に我々の原理を適用する最善の方法を發見し得るのは、ひとり實驗によつてである。「利潤生産の代りに効用生産」の原理の範圍では、勞働組合の政策は大膽な先驅の一つであり、それは、條件を整へて勸告を立派に爲し得るやうにさへすれば直ちに、大衆はその正しい勸告に立派に應ずるであらうとの、深甚な信仰を基礎としたものである。（終）

現下學生の諸問題

社會の進化と學生生活の現在及び將來

長谷川如是閑

學生と云ふものを何か一つの權威ある階級のやうに考へるのは、强烈な國家的色彩のある國に限る現象である。それはさういふ國では、學生が、支配階級の卵として國家的に、又は階級的に作り上げられてゐる結果である。從つて英吉利のやうなアメリカのやうな商業國家では、學生と云ふものは、個人的にも社會的にもあまり有力でない。元のドイツ、ロシア、支那と云ふやうな軍國的な國々の學生が、一種有力な階級のやうに思はれてゐる。日本では軍國時代に於いても、その軍國國家は文化的の發展を遂げてゐなかつたので、學生といふものを特に持つてゐなければならぬ組織ではなかつた。儒者の徒弟がそれであつたが、それは文化そのものと共に低級視されてゐた。唯その頃の學生自身は、支那の觀念を受け繼いでゐたので、彼自からは甚だ主觀的に高級の地位を保つてゐた。要するに國家が支配階級の徒弟として學生を持つ國に於いては、學生が一般に有力視された。

然し學生は、啻に國家的の產物ではなく、一般社會が、何等かの意味で必ず學生を持つてゐる筈である。學生といふ言葉は近代語であるが、如何なる時代に於いても種々なる形の學生を持つてゐたのである。今日では、その種々なる形の學生が、同じ形の學生といふ集團に統一されたのである。完全に統一されてゐる譯ではないが、昔は嚴重に區別されてゐた學生と徒弟とが、今日は學生として統一されてゐる。從つて今日の學生は大

略三種ある。第一は、國家的の學生、第二は、學問的の學生、第三は技術的の學生である。

國家的の學生は即ち昔の意味の學生であつて、支配階級の徒弟である。支那、ドイツ、ロシヤ等にあつた學生階級はそれである。所謂青雲の志を抱いて、國家的權力の爭奪に從事すべく志すもの、又はその爭奪戰に於ける技術者としての智識階級を養成する組織の徒弟である。日本でも、所謂官學と稱せらるゝ學問的機關は皆それに屬してゐた。今日の官立大學は、他の二つの徒弟をも養成してゐるが、右の傳統的觀念を失つてはゐない。獨逸やロシアの大學は無論さう云ふ意味であつた。イギリスやアメリカでは、市民が國家に對立するやうな組織を持つてゐるので、そして市民の方が國家より有力なので、國家はさう云ふ意味の大學を作ることを出來なかつた。イギリスでは貴族までが、國家から獨立してゐるやうに考へてゐるので、貴族の大學でも國家の支配は受けない。その經費さへも、國家の補助を受けるに至つたのは最近のことである。然し國家的の權力の强い所では、最高學府は國家の使用人を養成する所と考へられる。唯近代國家は、昔の軍國々家のやうに、軍國貴族的に限定されずに、市民國家の性質を帶びるに至つたので、國家的教育機關も市民養成の機關を包含することゝなつたのである。

昔から人民といふものは何等かの意味で國家に對立する關係にあるものである。之は國家の發生事情に依つたものであつて、人民と國家とが混同されるに至つても猶ほ、人民と混同した國家そのものを人民は自個に對立するものと意識する。從つて、人民側に於けるあらゆる意味の徒弟は、何事かの意味で、國家から解放さるべきものと考へる。昔から人民側の學者、人民側の徒弟が儒者の類から工匠や農家の徒弟に至るまで、自分の學生的、乃至徒弟的生活が、國家の制肘を受けないことを誇りとする傾向を持つてゐた。此の意味の學生的生活を受け繼いだものは今日の學問的乃至技術的學生々活である。今日は國家がそれ自身さういふ學者乃至徒弟を養成する機關を作つてゐるが、然しそれ等の人々は、自分達の修業を國家意識で支配されてゐるとは考へない。

第二の學問的の學生々活は、右の意味で自から國家を超越したやうな地位を取ることゝなる。學問的意識は、生活批判の意識であるから、それは凡て生活組織の人間的構成に對して根底的に科學的乃至信仰的意識を働かせやうとする。それは一つの社會生活の意識であつて、如何に拘束された組織の中にも、それが人間の世界であれば必ずさういふ意識が發生する。然しながら、さう云ふ意識が特別なる生活階級を形作るといふこと

は、矢張り傳統的の國家組織に由來してゐるのであつて、支配が特別の階級の上に成り立つてゐるからである。即ちこれ又一方から云へば支配階級内に於ける徒弟組織であるといへる。此の意味の學生々活が最も完全してゐたのはギリシャであつたが、即ちそれは、ギリシャの市民階級の學問の組織であつたのである。農夫、工匠、奴隷の類は、さういふ學生々活に這入ることは出來なかつた。近代の、學問の組織では此の生活が必ずしも右のやうな階級を除外してはゐないが、事實に於いて之等の階級は、その組織の中には這入つていけないことになつてゐる。

第三の技術的の學生は、之は全く昔の徒弟制度の變化したものであつて、之は今日でも國家又は自治體又は私人の團體の組織としての教育機關がその方向に擴大される傾きを持つてゐる。之は昔の徒弟制度が崩れたので、それに代るべき社會組織が必要である所から、當然さうなつたのである。隨つて今日の學生は國家的、學問的のそれ以外に、徒弟としての學生を包含する。

そこで今日の學生の性質は、國家の徒弟としてのそれ、並に社會の徒弟としてのそれの二つに分れる。前述の第一種の學生の全部が國家の徒弟に屬し、第三種の學生は社會の徒弟に屬する。此の範疇の學生は無論國家の使用人となるものも多いが、然しその技術そのものは、一寸も國家觀念に支配されずに、社會生活の科學的組織として發展してゐるのである。國家の命令で、鐵道や橋梁を作り病人を癒することをするが、然しそのこと自體は社會生活の行動であつて、所謂國家的行動ではない。國家社會がどう變つても、その技術的生活はそれと沒交渉に、組織され發展するのである。然して第二種の學問的の學生は、多くの場合國家的の範疇に屬するが、たゞ學問そのものが、社會的行動の組織的の意識として發展した時には、それに依る行動が、時に反國家的となる場合がある。それは國家組織が、社會生活を壓迫した場合に、社會生活の學問的意識が、人間の行動を支配するに至る結果當然起る現象である。從つて第二種の學生は、一部は國家的のそれ、他の一部は社會的のそれに歸屬するのである。

所でその社會的といふ場合が、社會組織の種々なる態樣に依つて種々の形で現れる。國家が人民の生活を壓迫する組織の下に於いては、社會的の徒弟は、中世紀の徒弟制度のやうに、殆んど絶對に國家と沒交渉の地位を採る。その代りそれがギルド的のそれ自體の組織を採る。そしてそれは、反國家的であると同時に、社會に對しても對立的の地位を取ることになる。從つて社會の進化と共にその組織は崩れる。近代の組織では此の

新な徒弟養成の組織は、資本主義組織に從屬することゝなる。從つて資本主義が完全に國家の自治體に結び着いた時には、此の組織は決して反國家的の地位を取ることはない。完全に資本主義に從屬することに依つて國家に從屬することゝなる。故に技術的の學生は、今日に於いては昔のやうな反國家的組織を持つことは困難である。昔の名人と云ふ類の技術者のもつたやうな意識は今日の技術者には乏しい。國家が完全に社會性を帶びたものである場合は此の傾向は極めていゝ傾向であるが、國家の反社會性が社會意識に依つて强制されなければいけない場合は、此の技術者は、中立的態度を取る傾向を持つ。

その點に於いては第二種の學生が同じ傾向に陷入る性質を持つ。學問そのものは社會的の意識であつて、人間のあらゆる生活に對し批判的な又構成的な態度を取らしめる意識であるが、然しその學問をすることの出來る人々は、それ自ら特權的の地位を持つ階級の人々であるとすると、それは既に學問をする前に固定した意識的傾向を持つてゐるのであつて、その傾向に依つて、學問的態度が影響されるのである。學問的意識それ自身は、生活が與へた意識を修正することはなか〳〵難しい。殊に學問は、一定の生活に順應する意識を組立てることの出來るものであるから、特權的生活の意識は、そこから發程する學問的意識を構成することが出來る。故に或る特權を持つた階級が、學問の機關を作つても、そこから生れた學問的意識は、その階級的意識から解放されたものであることが困難なのである。

そこで學問的の徒弟が社會的生活の徒弟であるが爲めには、學問そのものゝ機關が、最も社會的性質を持つた階級から生れたものであることが必要である。特權的な生活の機關としての教育機關でも、各々利害が異ふと自から教育機關が違ふのはそのわけである。日本の私立大學の起源がよくそれを說明してゐる。それは悉く嚴格な意味の支配階級の機關であつたが、それ〴〵利害關係が違ふので、それぞれ別な教育機關を持つに至つた。早稻田大學は、官學が政府の一定の目的に從屬するのに對し異つた支配思想に基いて英國主義を採り、慶應大學は、封建的官僚主義に對し當時既に頭を擡げ出した市民的機關として起り法政明治等は、當時の官僚社會の佛蘭西派を代表して英吉利派に對抗すべく起り、中央大學は同じく官僚内の英吉利派を代表して起つた。それは畢竟當時の支配階級の間に、政府と在野と、又政府内の英吉利派と佛蘭西派といふやうな黨派關係又は學派關係でそれ〴〵徒黨を作つて居つた爲めに、さう云ふ風な別々な教育機關が生れたのである。

所が、前に言つた如く、教育機關はその國家生活を支配する勢力に依存するので、今日の資本主義的勢力は、それ等の思想的根抵を一括して資本主義的組織の中に捲き込んで了つた。教育機關そのものが此の資本主義組織に最もよく順應することに依つて、その機關を持續し發展せしむることが出來るといふことになつた。そこで右のやうな關係からそれ〴〵別の意味を持つて出來上つた私立大學は、一樣に商業主義化してその發生事情を固守するよりは寧ろ資本主義制度に於ける徒弟養成として有効である方がその存立を確かにし繁榮せしめる道であるといふことになつた。從つて今日の私立大學は資本主義社會の徒弟供給所である。

然しそれは社會組織の進化に作ふ必然の順應であつて、一般世の中が變るのに、學校のみが變らずに居られる理由はない。學校も亦近代的組織の下に働くことに依つて、近代社會の歴史を完成する役を務める、その組織の變化する場合にはそれを變化せしむる過程に對してその役を勤めるのである。

そこで此の學生生活の進化は、自から資本主義社會の進化に沿ふて進む筈である。それには二つの過程が進行してゐる。

第一に資本主義の大量生産は自から中心的管理の組織を發達せしめ、それが資本主義自體の自由放任主義の破壊となる樣に、今日の徒弟養成も目下は自由放任主義による大量生産である。初期の生産要求の時代は過ぎ去つて、發達した機關が、恰度進歩した機械が急激に生産能率を揚げたやうに、供給過多となるまで資本主義的徒弟が養育されつゝある。國家も自治團も會社銀行も、全學生を收用するだけの購買力を持たないこと〻なつた。此の事は自ら學生養成の機關に中心的な管理が必要であることを證明しつゝある。而してその中心管理は如何に組織さるべきかは、社會そのもの〻管理に就いての問題がそれを決するのであつて、一般經濟組織の管理に依存する。が一定の固定組織が新らたな轉化を取る時には必らず、先づ過渡的過程として分化的傾向が起るのであるが、現在確かに認められることは、結局、現在の組織が成立困難になつてゐるといふこと、それに伴ふ分化的傾向が起りつゝあるといふことである。

第二には、第一が求心的の問題であるに對し遠心的の問題であつて、今云つた如く、社會の中心組織が動搖する時には分化的の組織が發達する。社會教化を支配してゐた中心勢力の組織自體が成立困難となると、社會生活の種々なる集團が分化的にその組織を發達せしむ。中央集權が衰へれば地方分權が發達するやうなものである。教育の中心勢力が、その分化的組織の各の勢力に分割される。昔のギルドがそれ〴〵自分だけの教育

組織を徒弟制度の形で持つてゐたやうに、有力な社會的要因がそれ自體の教育機關を要求する。近代に於いて、最有力な市民階級が先づ國家に對して對立的の教育機關を持つたのも同じ性質の過程であつたが、現在及び將來に於いては、市民中心の集權組織に對し分立的地位を取るのは勞働階級の組織である。從つて此の勞働階級の集團に於いて特別の教育機關が發生する。昔イギリスの紳士が自分の大學を國家から獨立のものと考へたやうに、今の勞働階級の集團は自分の教育機關を矢張りさう考へてゐる。恐く、此の階級の教育機關は貴族乃至市民の教育機關のやうに、社會生活を超越した、優越な信仰や理智を養ひ、それを以つて社會にのぞむと云ふやうな特別の地位階級を形作る人物を養ふ機關とは違つたものとなるに相違ない。社會生活を超越した意識を云ふやうなものは、勞働階級の集團意識としては成立たない。生産行動を本位とする社會意識が勞働階級の意識であつて、生産行動の無能者が單純な指導意識なるものを以つて君臨することを勞働階級は昔から承認しないのである。從つて此の機關に養はるゝ學生といふものは、同時に勞働徒弟であらねばならぬ。それは、今日資本主義組織の學生が既に資本主義組織の徒弟であるのと同じだが、資本主義組織のそれは、支配行動を主とし生産行動を從屬的の地位に置くので、教育方針としては支配的行動を主とし生産行動をこれに從屬せしむる。支配行動の學生を中心とし、生産行動の學生は隷屬的くは中立的地位に置かれるやうに教化する。所謂法科萬能、又は文學中心の組織はそこから生れたのである。之に反して勞働階級の教育機關は、生産行動の集團が中心となり生産行動者が同時に管理者であること昔のギルドに於けるが如き傾向を持つのは必然であつて、支配意識の嚴格な意味の管理意識とは異つてゐるのである。生産行動の生活を超越した人間的優越を認めないから、さう云ふ意味の法律文學中心主義を承認しない。學生は何處までも支配者の徒弟でなく生産者の徒弟であらねばならぬ。法律文學哲學等の學問だけでは窮迫は免れないので、軍國的國家の使用人として又資本主義的支配の徒弟として始めて繁榮がかち得るのであるが、將來の學生は、矢張り學問的優越を持つて支配者の生活に從屬せずに、勞働徒弟の生活に結びつくのである。學問によつて、社會的生活を超越した優越的地位を占めると云ふことは考へられない。そこに今日學生えつゝある新たな教育組織の特性が存する。

今日の學生は既に、幕府時代の儒者が維新に遭遇したやうな地位にあると認めることが出來る。失業と學問的立場の反社會的性質とに依つて、それ自身を極めて困難なる地位に置きつゝ

ある。
以上はあまり動的方面だけを見ることに偏した傾きがあるが、その靜的方面即、現在に於ける學生の優越的地位は、恐く學生自身が知り過ぎる位知つてゐると思ふので、それを高調することを差控へたのである。

經濟上から見た高等教育並に教育機關

堀江歸一

教育上に於ける能率問題

高等教育なり、教育に關する制度なりを經濟上から觀察する場合には、最小の勞費を以つて、最大の效果の擧げられることに重きを置かなければならない。教育は本來無形の事に屬し、有形の生産物を以つて、其效果を測るを得ない。教育の方面に於て最大の效果と目す可きは、要するに社會に出でゝ、勤勞の上に、優秀の能率を發揮し加ふるに此能率を傷けざるだけの德性を備へることを指すものであると解しなければならず、而して此程度の教育が低廉なる費用を以つて、廣く國民の享ける所と爲つて、始めて教育上の能率が擧つたものと云ひ得られるのである。然るに我國現在の高等教育并に教育制度を見るに、右に述べた經濟上の要求に背反することの甚だしきものがあり、斯くて國民の能率を傷くる弊の極めて大なることが認められる。

先づ教育上に費される勞力と費用とに就て考へる。教育を授ける者即ち教授、教師、講師等の側に就て、之を云つても、勞力の空費される嫌はある。蓋し彼等にして勞する所の多きに拘はらず、教を受ける學生、生徒にして、凡庸の輩であつて、教師の教へる所を咀嚼するを得ず、之を玩味して、更に知識を向上するを得ないならば、教師の勞は其效果の大なるを期する能はざる嫌あるからである。然し此點は之を後段に讓り、教育を受ける學生生徒の立場に就て考へると、我國教育の制度若しく

は學制の不備なる結果として、我國に於て學生生徒が教育殊に高等教育を受けんとするに當つて、空費される時日の多きことは、吾人の觀察を逸する能はさる所である。先年學年短縮の問題が世間に起り、六年の小學校を履修して、在學四年の中學校を修了した者に三年の高等豫備教育と三年の大學專門教育とを授ける計畫が承認され、學齡に達して後十六年の歲月を經れば我國に於て一通りの高等教育の授けらるゝ制度成立し、正則の順序を遂うて、一歩の無駄足をしなかつた者は滿二十二歲を以つて、高等教育を修了し、直に社會に活動するを得ることゝ爲つたのであつて、從來の制度に比較すれば、確に一進歩を爲したるやに認められる。今日世界何れの國を見ても、大學教育を修了する年齡は滿二十二歲である。隨つて一學科を修めた者が更に他の學科に移つたり、或は大學院に入つて、一の學科を專攻したりしても、歲月に充分の餘裕を告げる次第であつて、從來の我國に於けるが如く、一生の一半に近き歲月を學窓に費さしめる學制は國民の生命を短縮し、其活動力を鈍からしめるの甚だしきものであつたと云へる。故に右の如き學年の短縮は我國をして世界普通の程度に近づかしめたものであつて、一の進歩と云へるが、此進歩たる、果して實質の伴へるものであるかどうか、此點に就ては、何人と雖も疑惑を挾むのである。

第一、右の如き學年短縮の實行と共に、高等學校高等專門學校、大學は政府の力に依つて、全國到る所に增設され、私立大學亦大學令の下に統一されて、其地位を向上し、總て高等教育を希望する者をして其希望を充すに遺漏なからしめることを期したようであつたが、實際の結果は政府の期待に反するもの甚だしく、是等諸大學、其豫備校若しくは專門學校の收容するを得る學生の員數に比較して、入學志望者の數は頗る多く、斯くて其大多數は一回の試驗に依つて、入學するを得ず、必ず二回三回の試驗を受け又一人にして一の時期に數個の學校に入學願書を提出し、順次に試驗を受けるの常である。誠に我國に於ける入學試驗は入學拒絕試驗であつて、試驗當事者は如何にして入學志願者の望を充たさうかと云ふことに苦慮せず、寧ろ如何なる難問を課して、受驗者を失敗せしめようかと云ふことに腐心する。斯の如くして眞正の學力が入學試驗に依つて、發揮されざることとも、亦怪むに足らない。幸に受驗者が幾回から試驗を突飛して、入學するを得たとした所で、入學試驗に徒消した歲月は何としても取返すを得ず、有用の歲月を無用に空費して、結局學年短縮の效果を空うするに至ることは、著明の事實である。

第二、私立大學が大學令の下に昇格し、官私兩大學併立して、

以つて教育の效果を收めることが我國教育制度に於ける一の主義と爲り、政府亦官私兩大學に對する差別的取扱を廢止し、又私立大學に對して、若干の補助金を給與するが如き方針に出でゝ居るようであるが、私立大學の内には、設備完全ならず、資力亦豐富ならざるものがあつて、充分に世人の信用を博するに足らないし、又設備財力に於て、官立大學に匹敵する私立大學あれば、其豫科に入學を志望する者の數の收容人員を超過すること、殆ど官立學校に於けると同樣であつて、入學難の結果、自然或る年數を徒消するに至らざるを得ない。

斯の如く制度の上に於て學齡から十六年を經過して、高等專門の學科を修了するを得ると云ふ規定は少數の學生に對しては、適用されて、誤まる所なきかも知れないが、多數の學生に取つては、一個の空文同樣のものであつて、彼等が規定の年限以上に、兩三年の日月を學校内に費すは勿論、健康學資其他の都合に依つては、更に一二年の延長を見るかも知れず、斯くて三十歳に近き年齡に至つて、漸く學窓を辭する者は今日に於ても、依然として其跡を絕つ能はざるが如くである。學校卒業生の就く可き社會の事務は次第に複雜と爲り、緻密に赴き、隨つて之に就く者の一資格として、事物に適應する能力に富むことを必要とする。而して日本人の外國人に比較して、早熟であるが、短命であることは、依然として昔の如くであるに拘はらず、學年短縮の效果は多く實際に現はれるに至らず、學生をして永く歳月を學窓に徒消せしめ、青年の元氣漸く衰へんとするの時若しくは少なくとも自己の接觸する新事物に適應する能力に乏しからんとする時に於て、社會に活動する端緖に就かしめるが如き、國民の能率を傷けることの最も大なる教育制度と云はざるを得ない。

學年短縮を有效ならしめる道

故に學年短縮をして有效のものたらしめんとするには、高等教育を受けんとする希望者の全部を收容するに足る標準の下に、大學以下專門學校を增設せざる可からざることゝ爲る。往年政府が教育機關擴張の計畫を案出し、一擧に諸大學、諸專門學校並に高等學校を增設したことの如き、或は右の趣意に基くものと認められるが如くであるが、當時既に世上に於て非難された所謂學校濫設の弊は今日に於て暴露し、如何に學校は增設されても、適當なる教員を得るに難く、殊に地方に新設された學校に於て、此困難の大なるものあるが故に、無理矢理に所定日數の教員を補充した所で、其學力の標準充分であるを得ず、其不充分であることは、自ら學生の學力に影響に及ぼし、彼等

の内、前途の利害を考へる者は大部分の學校に入學の便を求めようとして、斯くて其競爭の劇烈を致すこと、依然として舊時に異ならない。偶々地方高等學校を修了した者の如き、大學に移るに當つて、選拔試驗を受け、其選に漏れて、一年の歲月を空費することすら珍らしとしない。斯の如きは畢竟當時の政府が地方に利益を與へて、政治上の權勢を與黨に收めやうとする政略一片の考へから、首尾の相伴はさる學校增設計畫を立案した結果であつて、一時の政略に依つて、教育制度は犧牲に供せられた觀なきを得ない。

然らば當時の學校增設計畫から云へば、全國の入學志望者を滿足せしめるまでに、高等學校と云はず、專門學校と云はず、將た又大學と云はず、總ての高等教育機關を增設せさる可からざる道理であつて、此事が行はれて、教育機關の首尾漸く全きを得たものと云へる。然も斯の如きは國家財政上の關係に於て、到底實行に堪へさる所であり、一方に私立大學の起される程度にも亦限度の存するものであるとすれば、學生の入學難、之に伴ふ學校修了年限の延長は何時迄でも我國教育界に纏綿する一の病弊であると考へられるのである。

學生精選の必要

右に述べた病弊を匡救する策として、學校增設を急とするのも、一の考方たるを失はないかも知れないが、私は此際我國に於て、學生殊に高等教育を受ける學生を精選する必要の極めて痛切なるものゝあることを認めたい。或は今日高等學校程度の諸學校に於ける入學試驗は學生精選の方法であつて、此試驗に合格すると否とに依つて、學生の學力に於ける優劣が明瞭と爲り、其優劣は軈て將來高等專門の學科を修得する適否を決定する標準と爲ると云ふ說が唱へられるかも知れないが、今日現に諸學校に於て行はれる入學試驗が果して學生の腦力殊に將來に於ける學問研究に於ける力の伸び方を測る適確なる標準に充てられるかと云へば、私は決して其然るを信ずるを得ない。第一數學は入學志願者の頭腦緻密であり、又正確であるかどうかを知る標準として、入學試驗に於て、重要視される科目である。或る點に於ては、然るものありと云へるであらう。然しながら數學の如き、滿點を占めるに易き學科であると共に、一旦失敗すれば、零點と爲る危險に富む學科である。數學に長ずる者は必ず頭腦緻密正確であつて、諸般の學科に秀づること、數學に於けるが如きものあるかと云へば、數學先生は一の數學先生たるに止まり、他方面に全然融通の利かざる者の多々あるは勿論、數學の全體には長じないが、單に入學試驗標準の數學だけに通ず

るの故を以つて、入學試驗の數學に成效し、他の學科に於ける不成績を掩蔽して、合格する場合の多々あることが實際に認められる。第二に、入學試驗に成效する者の内には、所謂場數を踏んだ老練者流の多いことは、明白の事實であつて、彼等は入學試驗には巧に合格するを得るとしても、其以後の進步の頗る遲々たる嫌を免かれず、幾年の後には、彼等に比較して、入學試驗の成績に於て劣つて居つた年少者の方が次第に才能を發揮し、頭角を現はし、往年の入學試驗成績をして殆ど無意味のもの、又は無意味に近きものたらしめるのである。此點から考へれば或る學校が特に入學試驗を嚴重にして、入學者を嚴選したとした所で、偶々受驗術に巧妙なる者を簡拔するを得ると云へるかも知れないが、之を以つて天下の俊秀を網羅するを得たとしたならば、其間に大なる誤解の存するものありと考へられるのである。入學試驗殊に從來の如き英語、國文、數學等の形式的課題に重きを置く入學試驗の外に、學生の學力――將來に如何なる程度に伸び得るかの點に重きを置く――を適切に考査し、學生を嚴選する道はないものであらうか。私は現在の中學校に對して、官廳又は其他の機關に於て、適當なる監督を加へ、中等教育の效果を充分に發揮せしめると共に、中學四年修了者若しくは中學卒業生の總てに高等學校の受驗資格を與へる現在の制度は之を廢止し、受驗資格は當相程度以上の成績を得た者に限り、其標準以下の學生には高等學校の受驗資格を與へずして、彼等を高等豫備教育以外の方面に向はしめる一方に、右の受驗資格を得た者に對しては現在の如き入學拒絕を目的とするが如き入學試驗を課さず、寧ろ收容能力の許す限り、彼等を收容して、其知能を啓發し、高等學術の修業に堪へしめる方法を取つたならば、如何のものであらうか。中學生徒中、學問上の素養の乏しい者素質の適しない者は中等學校だけで教育を止めしめ、其以上に進ましめない、今日の如く彼等の素見同樣の考へを以つて、入學試驗を受け、萬一を僥倖しようとするが如き弊をも絕つたならば、却つて國民の能率を進める道ではあるまいか。中等卒業だけで、學校を離れには、虻蜂取らずに終る弊があるとしたならば、始めから中等學校に近づかずして、實業學校に赴くのも、一の方法であり、中等學校の教育法を改善して、高等學校の受驗に必要なる教育を授けるものと、公民としての素養を授けるものと、二部に區劃することも、亦他の道であらうと思ふ。

私が以上の如き考へを立てるに至つた原因は如何なる邊に在るであらうか。蓋し今日高等教育を受けんとする風潮が我國に極めて旺盛であるのは、一面から云へば、文運隆昌の一端として、慶賀す可きが如くであるが、同時に所謂猫も杓子も素養

や、能力の如何を問はず、總て高等教育の惠に浴せざれば已まざるが如き、極端なる事相の生じつゝある一事に至つては、何としても之を稱讃するを得ない。如何に間違つても、高等教育を受ける素質の無い者や、受けた所で、教育上の效果を利用する能力を備へざる者が學校教育を濫用し、入學試驗に臨んで學校の門前、市を爲す。受驗者中の或る者は自身成效す可き何等の信念を持つて居らない、唯、父兄に對する申譯から、落第を覺悟して、試驗に應ずると云ふが如きに至つては、悲慘を通り越して、滑稽に瀕するの嘆なきを得ないのである。

玆に於てか私は世上の父兄倂に子弟に對して、濫に高等教育熱に引摺られるの弊風を脱することを勸告したい。人には天賦の能力があり、更に此能力が後先的に發達して、學術に適する場合もあれば、技藝手工に向く場合もある。總ての人を擧げて、必ず高等學術の修業に就かしめて、本來の才能を問はず、本人の素質に適せざる事を强いて、却つて人を生殺し同樣にするが如き、人の能率を壓抑するの甚だしきものであつて、父兄は子弟の爲めに、一切の欲目を離れて、其天分を観破することに勉め可く、子弟亦總ての自惚れを脱して、自己の適する所に就て、成業の道を選ぶ可きである。高等專門の教育を受けざれば、百事成らずと云ふが如き誤まつた信念は一日も早く國民の內から除却したいと思ふ。

教育に對する世間の誤解

然しながら世間の子弟を持つ父兄や、子弟そのものをして高等專門の教育を偏重せしめるに就ては、其原因として見る可きものがある。其れは外でもない。政府を始め銀行會社の如き、多數の吏員を雇傭する機關に於ては、必ず人の學歷若しくは出身學校に重きを置いて、就職志願者の採否なり、採用後に於ける待遇の厚薄なりを決定すること、恰も陸海軍に於て、下士出身の者は何時までも下士官と爲ることを以つて、出世の頂上とする一方に、士官學校兵學校を卒業した者が限りなく立身すると同樣の趣きである。彼の官吏社會の如き、廣く天下の人材に對して、門戶を開放すると稱して、高等文官試驗の制度を設け、特別任用令に依るものゝ外は、總て此試驗に合格した者を高等文官に任用し、而して其受驗者たらんとするものには學校の種類に依つて、何等の差別を設けず、同仁の態度を以つて、總ての受驗者を遇することゝなつて居るが、之れは表面の事實であつて、官立大學の卒業生は私立大學の卒業生に比較して、受驗上に多くの便宜を有し、此便宜を利用して、年々多數の受驗者もあれば、合格者もある有樣である一方に、官廳に奉職し

てからの状態を見れば、官學出身者は中央の要地に用ひられることの多きに反して、私學出身者は地方廻りに幾年かの歳月を費し、其間に兩者の能力に懸隔を生ぜざるを得ざる場合多々あるやに見受けられる。故に我國今日の實際に於て、志を官界に伸ばさんとする以上は、官學の力を籍ることを便利とするは勿論であつて、斯くて官立學校に多數の人士を吸引する一原因を成すに至るのである。官廳と相並んで、多數の勤勞を雇傭する民間の銀行會社に於ても、時に官私大學の卒業生に對して、平等の待遇を認めるものもあるが、多くは官立學校に厚くして、私立學校に薄く、出身の第一段に於て、或る懸隔を付せられ、此懸隔が次第に枝を繁らせ、葉を生じて、他日踰越す可からざる溝渠の兩者の間に築かれことを見るのである。

總て高等教育を終了した者の間に於ても、人の才能に重きを置かずして、出身學校の如何を標準として、形式的差別を設ける風の斯の如きものありとすれば、全然高等の學校教育を受けなかつた者が官界に於て、民間に於て、異端者扱をされるに至るのは、固より異とするに足らない。即ち高等教育を受ける機會を失つた者は單に正則の教育を授けられなかつたと云ふことだけに止まらず、登龍の門を閉鎖されて、之に近づくを得ざることゝ爲る傾向がある。社會上の見地から云つて、斯る不公正は容易に其匹を求めるを得ざる所であつて、社會に階級的反感の生ずるに至るのも、亦怪むに足らない。或は斯く人の才能を見ず、單に學校教育の有無に依つて、就職若しくは立身の上に於ける機會の與奪を決定することに對しては、多少の辯解が行はれるかも知れない。如何なる辯解があるかと云へば、其一は公私の事務を處理する上に於て、高等教育の授ける知識の必要であることであり、他の一は高等教育を受けた者であつて、始めて品性の高尚であるを得ることである。斯る辯解に多少の道理の含まれて居るのは、私の承認するに吝ならざる所であるが、同時に之を以つて絕對の眞とするに苦む。第一學校教育は人に知識を授ける方法であり、大學教育は專門學術の知識を與へる方法であるには相違ないが、唯一の方法でなくして、幾多の方法中の一に止まる。中等教育を經たるものが實務に就いた後に、一方に實務を習得しながら、他の一方に實務の基礎と爲る可き專門の學術を讀書に依り、大學擴張教育に依つて、修得することの如き、確に一の方法であつて、斯くする方が往々にして效果の著しき場合がある。倫敦政治經濟學校の如き、今日は倫敦大學の一分科を成し、晝間の授業も行はれゝば、專屬教授もあり、研究報告の價値あるものも發行され、立派なる學府を以つて、目するを得るが、約三十年前の創立時代に於ては、倫

敎の實務家に學術的素養を與へる目的を以つて、設立された夜間の講義所に過ぎなかつた。現に私の如き二十五年前に同校に入學し、フオツクスウエル氏の通貨論や、アツクワース氏の鐵道經濟論を聽講したことがあるが、聽講者の多數は銀行員や、鐵道會社員であつて、理論や原則論で進まうとする敎授の説明に對して、聽講者側から實際の經驗から應酬し、時に兩者の間に討議の行はれる光景を目擊し、流石に實務家の敎育を目的とする學校の一風變つたことを看取せしめた。而して聽講者が一科目なれば若干、數科目又は全科目なれば若干と云ふ其れぐ定められた金額の聽講料を會計係に拂ひ、會計係から貰つた領收證を持參して、講堂の監視人に示して、始めて入室を許さるるが如き、學校か寄席か、何れとも見分けの付け難き次第であつて、東洋遠來の私をして一種異樣の感を懷かしめたことがあつた。一方に當時英國に於ては、獨逸の敎育制度に贊成したり、又獨逸の實業界に「ドクトル」の稱號を有する青年の多き事實を目擊したりする人があり、其れ等の人々の間に於ては、獨逸の制度を稱揚し、敎育と實業との間に於ける聯絡の密接であることを以つて、獨逸實業の發達に關する大原因であるとする説の頗る高きを例としたのである。獨逸に於ては、或は然りとするを得るであらう。然も此事實を捉へ來つて、一方に英國を貶する材料に充て、英國の實業界に大學出身者の少なき故を以つて、同國の實業界を以つて、無敎育者又は無學者達の寄り集りと思ふのは大なる間違であつて、前記の如く夜間大學敎育を受ける者もあれば、商業會議所や、銀行集會所の檢定試驗に合格するだけの學力を收得する者もある。倫敦政治經濟學校が先年組織を更新したに拘はらず、夜間の講義を繼續して、渝らざるが如き、其實業界に敎育的要素を注入することに、深き關係を有する事實に基くものと認めなければならない。而して此種の機關は獨り右の一個に止まらざると共に、倫敦市のみに限られる次第でもない。實務に就いてから、專門的知識を得ようと欲する者は大都會にさへ居住して居れば、其道に苦まざることは、明白の事實であつて、學校生活を送らなければ、專門の知識を得られないと云ふのは、英國に於ては、全く當らざる議論とするの外はない。

茲に於てか私は我國に於ても、猫も杓子も總ての者を擧げて悉く高等敎育機關に收容する必要を存しないと共に、彼等を收容するに足る程度まで、敎育機關を擴張する必要をも認めない。高等敎育機關の規模なり、其收容人員なりは今日の儘に之を置くことにしても一方に

第一、學生自身等に其父兄が敎育を受ける所は必ずしも學校

のみに止まらず、更に世間の低き場所に存することを認めず

第二、社會の諸機關なり、諸團體なりに於ては、社會教育の振興に力を致し、一年を通じて間斷なく講義を諸方面の學科に關して開設し、志ある者をして就學の方嚮に苦ましめざる用意を致し、

第三、官廳銀行會社等に於ても、高等教育の有無に依つて、人の採否又は待遇の好惡を決定せず、更に深く人の能力を標準とし、給仕上りであらうが、技手職工から出身した者であらうが、現在與へられた職務に堪へるのみならず、將來或る程度まで地位の進められた場合に、之に當るだけの準備を持つて居る者であれば、如何なる地位にも、之を就かしめると云ふことが社會の諸方面に行はれたならば、入學難問題の如きは、假に之を解決するを得るの道理である。今日我國には全國到る所に大學なる名を冠する學府がある。現に東京市のみに就て、之を云つても、大學なるものゝ數は十數の多きに上り、私をして一々其名稱を擧げるの煩に堪へざらしめる。大學の數から云へば、我國文運の隆昌なる、專門教育の振興せる、實に驚くの外なしとす可きであるが、斯の如きは要するに我國民が大學と云ふ空名に憧憬して、其實質を顧みざる風があり、學校經營者亦斯る世間の俗情に投じて、事業の繁盛を謀らんが爲め、文部省の規定する大學の資格として必要とされる條件の寬大なるに乘じて、大學の名稱を濫用するの結果であつて、大學の數の我國に多きが如き、何等誇りとするに足らない。斯る事情に依つて、强いて設立された大學である以上は、其重なる財源は學生の授業料であつて、勢多數の學生を收容して、收入の增加を謀る。然らば斯る大學に對する入學は寬大であつて、隨つて入學難問題を解決するを得るかと云へば、斯る大學には入學希望者甚だ少數であつて、志願者の多數は依然として入學難の甚だしと稱される所に集中する狀態である。茲に於てか私は右に擧げた三種の考へなり、計畫なりの我國民の間に起るに隨つて、現在の大學中には到底維持する能はずして、閉鎖の已むを得ざるに至るものを生ずるであらうし、閉鎖に至らざるまでも、入學志願者を減じ、更に收容する學生を減じ、所謂大學整理の實を擧げることを以つて、當然の數と考へるのである。本來文部省が大學令の下に、私立大學を認めた際に、何を以つて私立大學とするかと云ふ場合に臨んで、私は其條件の嚴峻なる可きことを希望して已まなかつた即ち精神科學の方面に於ては、完全なる圖書館を備へ、專屬教授を有することの必要なるは勿論であるが、圖書館の設備としては、一分科に付き幾萬冊、專屬教授としては全體の教員の四分の三と云ふが如き强き割合を以つ

てする一方に、大學は年々一分科に付き十數萬圓の收入の生ずる基本財産を有し、然も其財産は純財産であつて、何等の債務の伴はざることを必要とし、有形科學の方面に於ては、右諸條件の外に、完全なる實驗的資料を備へることを必要とし、是等諸條件の備はつた綜合大學に對して、始めて大學の名稱を與へることを適當であると考へたのであるが、政府は當時政略上の考へから、先づ單科大學を認めた點に間違つた道を開き、續いて私立大學の資格を殆ど有名無實に近き寛大なるものとする間違に進め、結局我國をして大學の名あつて、其實の乏しき幾多の學府を有せしめることゝ爲つた。然も世人の所謂大學に對して、評價を下す所は甚だ嚴重であつて、多數の學生は設備の比較的完全なる大學に向ふが他を顧みず、斯る所謂大學の增設に依つて、入學難問題の少しも解決されないのは、笑止の沙汰とするの外はないのである。

高等教育と品性

官廳、會社、銀行等が高等教育を受けた者を重用する第二の理由は斯る人でなければ、品性の優秀を保たれない、小僧上りや、教育程度の低い者であつては、其德性に缺陷が生じ易くして、大事を託するを得ないと云ふことが云はれる。此議論にも半面の眞理はある。教育が人の品性を陶冶し、之を向上し、淳化するに至る效果のあることは、何人も之を認める所であるが、今日の諸大學丼に專門學校に於て、果して斯る要求に應ずるだけの教育が行はれて居るであらうか。右の諸機關に於て、授ける教育は極端なる程度まで、智育の一天張りに偏した一種の職業教育であつて、學生の目指す所は一日も早く卒業證書を得て、就職活計の便に充てようとすることであり、學校當事者亦年々歲々卒業生を送つて新入學生を迎へ、其間に校運の隆昌を謀らうとすることに外ならない。斯る學校商賣人に依つて、經營される學校に於て、學生の品性を高めるに就て、幾何の資するものがあるか、疑問とせざるを得ない。西洋諸國の古い大學であれば、出身者中社會に偉大なる功業を遺した人の德風が永く傳はつて、學生に感化を及ぼすこともあり、又衰へたと云つても、宗教上の力の幾分か學生の品性を陶冶するものがあり、殊にケンブリツヂ、オクスフオード兩大學の如き、事實大學當局者の支配下に學校町を營んで居る場合には、此事が學生の道德を誘導するに、大なる利益を齎すを得る次第であるが、是等の長所は我國の學府には殆んど備へられて居らない。專門高等の教育を受けたことは、斯道に關する知識を授けられたと云ふ手形に爲るかは知れないが、此手形は同時に、其人の品性

德操の證明書となるを得ないことを我國實際の事實に見出して、遺憾とせざるを得ないのである。

故に專門高等の教育を智育に止まらしめずして、德育にも及ぼさうとするには、第一當該學校の出身者中から德操の稱す可き偉人の輩出を待つこと、第二學內に一世の師表と爲るが如き鴻儒碩學を網羅すること、第三國民道德の標準を明にして、學生の行動をして之に則らしめることを必要とする。是等の施設の備はらざる今日に於て、大學教育を受けた者は必ず道德の程度が高いと考へて、此教育を受けない者に比較して、差別的待遇を與へることは、前者に取つては、好都合と云へるかも知れないが、社會上の見地に於て、公正を得たものではない

若し其れ實際問題として、銀行會社等に於て、行金社金を費消したとか、拐帶を爲したとか、收賄をしたとか云ふ者が學校出身者に少なくして、小僧上りに多い、大學出身者に少なくして、中等學校出身者に多いと云ふ事實があるとしたならば、其事は寧ろ大學又は高等教育に依つて德性の涵養されたかどうかと云ふ事實に關聯するものではなく、寧ろ學校出身者殊に大學出身者には前途に榮達の道の開かれて居る爲めに、自ら自重せしめるに反し、小僧上りの輩に對しては、其小僧上りである故を以つて、將來立身す可き道が閉塞されて居り、如何に才能があり、又之を實際に現はしても、酬ひられることの淺い爲めに、時に自暴自棄に流れて、不良の行爲に出づる誘惑に陷るものではなからうか。私は銀行會社又は官廳に於ける不正事件が多く學校出身以外の者に依つて、行はれる程、學校出身者たると否とが人の德性に其れ程の關係を持つことを信じないのであるが、若しも斯る傾向が實際に在るとしたならば、其原因は學校出身以外の者に對して差別的待遇を爲し、斯くて彼等の將來に於ける進路を閉塞するの一事に外ならない、隨つて斯る不條理を一掃することを以つて、當面の匡救策とするのである。

就職難問題

就職とか、就職難とか云ふことは、學校卒業生に限つた問題でなく、寧ろ社會に於て、廣く職業に就かうと希望して居る人々に取つての問題である可き道理であるに拘らず、是れが特に學生界に死活問題と爲るに至つては、其處に我國教育界に於ける弱點の潛んで居ることが窺はれるのである。教育は人に知識を授け、其人を社會に於ける有用の人たらしめることを期する。而して其有用の材と云ふことの內には、當然知識を運用するに就て、道德上の要件に服從する制限の伴う可きものである。既に教育の目的にして此一事に存する以上は、人が或る職業に

就いて、學校時代に修得した知識を活用す可きものであるか、其れとも何等の職業に就かず、一生を研究に投ず可きものであるか、將た又父祖の遺した家業に關係して、稍や閑暇ある生活を營む可きかは、人々の自由に決定され可き問題である。斯の如く大學教育を受ける者の前途の悠々たることが西洋諸國殊に英米兩國著名の大學に於ける學生々活に活氣あらしめる所以と爲るのであつて、彼等に取つては學問は修養の爲めにするのであり、敢て活計の爲めにするのではない。然るに我國に於ける大學教育は純然たる職業教育であつて 學生の志す所は學問其ものに非ずして、就職上に必要なる知識である。而して短少の年月の内に使傭者の要求するだけの知識は盡く之を頭腦の内に貯へ、或は高等文官試驗に應じたり、或は會社銀行の行ふ採用試驗に臨んだりしなければならないとすれば、沈着自重、學問に専念し、又は特殊の研究を樂んだりする餘裕を求めるを得ない。一日も早く就職して、學問を活計の方便に充てようとするのが、今日の學生社會に行はれる希望であつて、要するに學生の多數は「手から口への生活」に忙殺されるものに外ならない。

斯る事情に際して、昨今の如き不景氣に伴ふ就職の事相に接するに於ては、誠に學生社會に恐慌を惹起したと同樣の觀なきを得ない。或は學校出身者が職業に就て、特殊の選擇を試みるのが就職を困難ならしめる一の原因と爲るのであつて、今日の如き急迫した場合には、如何に高等教育を受けた者であるからと云つて、職業の種類を選擇する理由はない。車夫であらうが、巡査であらうが、求められる所に從つて其職に就き、以つて社會の爲めに、有用なる勤勞を致さす可きであり、又斯くして來た、一國文明の水準點を向上を見るを得ると云ふ説が唱へられる、現に近來法學士の巡査が出來たとか、何學士の職工があるとか云ふことは、如上の説の實行されつゝある證據とするに足りるかも知れない。然しながら私をして云はしめれば、斯の如きは教育を濫用し、玩弄するの甚だしきものである。巡査と爲るには、普通學の知識を必要するのは勿論であるが、此以上に更に必要なるは强健なる體格であり常識であり、圓滿なる思慮であつて、是れだけの條件を備へたならば完全なる巡査を求めることが出來る。是等の資格の外に、更に高等專門の教育があつたとした所で、警察官として立身出世する場合には兎に角巡査としては、何等の必要なきのみならず、却つて今日の如き教育の狀態であつては、民衆に對する親切心や、常識の發達に對する妨害となることを恐れざるを得ない。

故に不景氣の爲めに、教育を受けた者が教育の結果として、收め得た知識を利用するに緣遠き職業に從ふが如き、教育を濫

用し、國民的能率を消耗するの甚だしきものと考へられる。斯の如きは不景氣時代に於ける一時の事相に止まるかとも思はれるが、我國の不景氣は既に大正九年の恐慌以來今日に至るまで、滿五年の久しきに亙つて、繼續し、今に至つて恢復の端緒にすら接するに至らない。然らば就職難は日一日と酷烈と爲り、學校卒業生をして心ならずも教育と緣遠き職業に就かざるを得ざるに至らしめるであらう。職業教育を授けられて、職業に就くを得ないとすれば、此位學生本來の目的に反したことはない。此點から學生なり、彼等に學資を給與する父兄なりが戒心して、無謀なる就學熱を冷却せしめるに至つたならば、結局教育の整理に資するものあるを得ると考へられる。殊に我國に於て私の不可解とする所は職業教育を受ける目的を以つて、學校に集まる學生が無形抽象の學術を選んで、有形實地の學術を嫌ふ傾向のある一事である。前者の如き其應用の範圍の頗る廣汎である代りに、個人の微力を以つてしては、學術の教へる所を實地に應用するに甚だ難しとする事情の存するものがあり、斯くて其學科を終了した者にして、官廳銀行會社等に出仕するを得れば兎に角、之を拒絕されたならば、失業を嘆ずるの外に道あるを知らないに反し、有形の學術を修得した者は小規模ながら自己の計畫の下に、事業に着手して、生活の糧を得るに難しとしない。所謂腕に職ある者の生活に困ることのないと云はれる所以である。故に私は學生の就職難が問題に上る場合に、之に對する解決の道は

第一、無形の學科から有形の學科に向つて、志望を變更する者を多くすること、

第二、其れには我國民の間に最も缺乏して居る理化學數學の知識を普及すること、

第三、理化學の方面に關する簡易の學校を增設し、高等教育に堪へざる者を收容する工風を講ずること、

の諸點に外ならないと信ずるのである。

學生の學資問題

我國の教育にして職業教育である以上は、一面から考へれば、教育を以て、放資の一種と見ることが出來る。父兄は子弟に學資を供給する、年を重ねて幾千圓の多きに上るであらう。子弟は學校卒業後、收め得る俸給の一部を割いて、年來の學資金を父兄に返濟する、時に之を返濟する代りに、父兄の老後に於ける生活を保證する手段に出るが如きは、多くの場合を通じて、吾人の實見する所であつて、斯る考への下に、教育を受ける者のある以上は、學資金に充てる爲めに、先祖傳來の田畑を

賣拂うとか、山林を抵當に入れて、一時の融通を謀ると云ふが如きことも、亦實際に行はれ得るのである。

然しながら近年の如く學資の著しく增加した一方に、卒業後の俸給の豐富ならざる場合には、右に述べた放資の考へを以つて、學資問題に臨むが如きは、根本より覆されたと云はなければならず、若しも放資の着眼點より見たならば、子弟の就學は之を廢棄し、公債でも購入するを以つて、當れりとするであらう。即ち子弟の教育殊に高等教育は全然營利とか、利殖とか云ふが如き商業的打算を離れ、父兄の子弟に對する義務の觀念を以つて、遂行されるものであるが、父兄をして此義務を果さしめるに就て、一の妨害と爲るものは學資金の增嵩して、已まざることである。何故に學資金が近年遽に增嵩したかと云へば、其原因としては、

第一、世間一般の生活費の增加し、生活程度の向上したこと、

第二、學生とか、書生とか云ふ特殊の階級は今日全然如何なる方面に於ても、認められず、學生が下級紳士と略ぼ異ならざる生活を營みつゝあること、

第三、學生の趣味が多方面に赴き、趣味に適する生活を營むに就て、大なる費用を要すること、

の諸點が擧げられる。第一は一般經濟政策に關聯した問題であつて、特に學生だけに限られた次第ではないから、之に關する議論を省略する。第二の點に就て考へると、私共が學生々活を送つて居つた時代即ち今日から三十年若しくは三十數年前に於ては、我國の社會狀態も明治の初年に比較して、餘程進んで居つた筈であるが、其れにしても尙ほ書生とか、學生とか特殊の階級の存在することが社會的に認められて居り、書生流の生活を營むことが一の誇りであると共に、其生活が社會の承認する法則に遵つて居つても、尙ほ一般から寬恕されて居つた。當時學資の低廉であつたことも、固より一般經濟狀態の然らしめたとは云ひながら、尙ほ學生をして學生として特殊の生活を行つて、平然たるを得せしめたことに歸着する。現に私の如き明治二十七八年頃、毎日曜日三田の寓居から、朴齒の下駄を引摺りつゝ、上野の圖書館まで徒歩で往復し、館内の食堂で小使の販賣する三四錢の麵麭を喰つて、中食に充てたことの記憶がある。然るに今日の學生に至つては、殆ど紳士と異ならざる服裝を整へ、文明の利器や、設備を利用し、一方に有形的快樂を貪りつゝ、他の一方に修學の目的を達しようとし、所謂螢雪の苦學と云ふが如きことは、何人の念頭にも上らざるやに思はれる。

殊に今日我國に於て、高等教育を授ける學府は大都會に設立されてゐる。官立大學は大都會に於ける施設を完成する爲めに、特に其所在地を大都會に選んだのであらうし、私立大學は學生吸收の便宜上、矢張り大都會に其根據を置くことゝ爲つたのであらうが、其結果として學生をして最も生活上に費用を要することの多き都會に居さゝしめることゝ爲る。此一事が學資金增加の一原因たるは論を俟たない。或は大都會こそ、最も低廉なる費用を以つて、生活し得る場所であると云ふ說もあり、紐育や倫敦の實例に徵すれば、其然るを見るを得るが如くであるが、是れは學生自身が餘程堅忍不拔なる意思の下に、今日の文明都市の供へる總ての享樂を離し、物質的幸福は之を避ける覺悟を以つて、生活を營む場合に、始めて行はれる所であつて、斯の如きは當世の學生に望み得られない。世間一般の生活程度の上進する其上に、學生の趣味が到る所に發展し、音樂に、美術に、衣服に、飲食に其欲求するもの、增大した結果として、益々學資金に增加を來し、大都會に於ける學資の月額百圓以下の者は寧ろ少數であつて、臨時の費用を加へたならば、大多數の學生は百圓の學資を費消するの有樣である。

之を經濟上の見地から云へば、斯る學資金の增加は

第一、地方の資金を高等教育機關の所在地である大都會に吸收し、人工的に資本集中の勢を促進すること、

第二、教育を一部有產者階級の獨占に歸せしめ、其普及を妨げ、斯くて社會に於ける知識の分配を不平等ならしめること、

を免かれない。即ち今日の學生は入學難に苦しめられると共に入學後に於ては、學資金の增加に惱まされるのであつて、其苦痛は大部分彼等の爲めに學資金を調達する父兄に於て、之を荷はざる可からざるに至る。斯る困難を排しつゝ、尙ほ今日の如く盛に就學し、卒業の後に於ては再び就職難に接し、更に就職後に於ける報酬の非薄であるを免かれないとすれば、高等教育なるものは、結局有產者階級の消閑の一方法に充てられるに至りはしないであらうか。固より今日の如く猫も杓子も擧つて、高等教育を受けやうとするのは、間違ひの甚だしきものであつて、之に對して或る制限を施す必要の存することは、曩に述べた所であるが、其制限が學生の學力殊に今後に於ける才能の伸張せんとする程度に依つて、行はれずして、學資金の高きことの爲めに、働き出すが如きは、事の宜しきを得たものとするを得ない。秀才有能の者は之を高等教育機關に導き來ると共に、鈍才無能の者は勉めて之を排斥す可きは勿論であるが、我國に於ける實際の事實に徵すると、有產者階級の子弟には多

くの鈍才を見受ける一方に、無産者階級の子弟に却つて秀才の多きを見出す。然るに今日の如く學資金に多額の支出を必要とする以上は、秀才たるに値する者は就學の機會を逸する一方に、鈍才が其有産者階級に屬するの故を以つて、高等教育を壟斷し、却つて教育上の能率を劣等ならしめるに至るのである。

之に對する矯正策としては、第一學生をして勉めて儉素の生活を送らしめることで、第二彼等の自發的意思を以つて、之を爲すに難しとすれば、社會一般に斯る氣風を釀成するに勉めることの如き必要と考へられるが、更に必要の大なるものとしては、

第三、大學に於て、大規模に奬勵金制度を設け、學問上の才能の豐なる者に對して、學資に相當する金額を給與すること、

第四、大學を都會の中心を離れた郊外又は田園に移し、寄宿舍制度の下に、多數の學生を收容し、低廉なる費用の下に、學生々活を送らしめる道を講ずること

の二案を擧げなければならない。

要するに我國現在の高等教育なり、若しくは之を授ける教育機關なりは無用の所に發展して、其爲す可き所を爲さず、相當の費用を費しながら、其利益の及ぶものゝ大ならざるが如く、極めて無統制の儘に、伸び來つた趣きの著しきものがある。之に整理更新を加へる必要のあるは勿論であるが、其間に於て、閑却す可からざるは經濟上の要求であつて、私は我國教育上の能率を増進することを以つて、最も重要なる着眼點としなければならないと信ずるのである。

大學町の學生々活

安部磯雄

日本人の貧乏生活も隨分氣の毒なものだが、日本學生の慘めな生活を考へる時私は何としても悲哀の感に打たれざるを得な

い。同じ學生といふても東京以外に居る者は左程でもないが、此帝都の中に五六年乃至十年を送る學生は全く憐れなものだ。何處の學校でも收容し切れるだけ多數の學生を收容して居るから、其群居の狀態は宛然貧民窟の其れと同樣である。教場が學生數に比して狹いのは已むを得ぬとして、其教場の不潔なることは驚く許りである。學生の中には下駄を穿いて教場に入るものが少なくないから、教場は衞生上から見ても危險な場所と考へられるやうになつた。學校內には學生のため別に食堂の設備がないから、教場內で辨當を喰べて居るものがある。更に運動の設備といふことを考ふれば、これ又不完全極つたものである。さらば學生のために何か娛樂の方法があるかと言へば、これ又何ものもない。殊に男女の學校は各獨立して居るから、男女が交際し得る機會もない譯である。東京の學生が滔々としてカフエーや其他の歡樂場に出入するのは決して偶然でない。

今日の學生を不健全なる快樂から救濟するためには健全なる娛樂を與へることが必要であると信ずる。然し彼等の生活を愉快ならしむるためには、根底から今日の學校生活を改造しなければならぬ。さて此改造は如何にして實現し得べきかといふに、私は運動の設備を以て娛樂の中心とするより外ないと考へる。然し運動の設備を完成するには多くの土地を要するのであるから、東京市內に在る學校は何等かの方法を講じて郡部に廣大なる土地を求め、其處に學校町を建設するのが得策である。

私が大學町として先づ思ひ浮べるのは太平洋岸に在るスタンホード大學と英國のオツクスフオード大學である。大學敷地の廣大なることに於てスタンフオード大學に及ぶものは他に有るまいと思ふ。同大學は鐵道王スタンフオードが獨力で設立した大學であつて、パロアルトといふ人口一萬許りの都會は全く大學のために出來た町である。大學の建物を中心として其周圍に擴がれる幾萬町歩の敷地は運動場や農園のために充分これを使用することが出來る。オツクスフオードも人口二三萬を有する大學町である。大學の敷地はスタンフオードには及ばないけれども、運動場の設備は遺憾なきまでに完成して居る。私は將來東京の附近にも模範的學校町が建設せられることを信ずるが故に、學生々活といふ見地から私の理想とする所を遠慮なく述べて見たいと思ふ。勿論金錢の制限はないものとして私の計畫を披露する。

學校の敷地は學生數によりて加減すべきであるが、若し學生を五千人位とすれば、敷地として少くとも十萬坪はなくてはならぬ。尙ほ將來學校の周圍に一千家族位のものが住居することとになるとすれば、一家族に平均百坪を要するとして更に十萬坪

の土地を準備することが必要である。學校は大體學校町を管理すべきものであるから、學校自らが地主であることは便利である。且つ十萬坪から生ずる地代は學校の經費を補足するといふことにもなるから、最初からこれを學校の所有地とすることには何等の反對もあるまい。

學生生活の中心となるべきものは言ふまでもなく運動である。運動は體育であると同時に娛樂である。更に娛樂は運動家自身のものであるのみでなく、又見物人のものであることを考へなければならぬ。運動が學生にとりて一般的娛樂となればカフェーに出入するが如き要求は漸次なくなるに相違ない。よし左樣でなくとも學校は高壓的にこれを禁止することが出來る。何となれば學生全體に健全なる娛樂が與へられて居るからである。オックスフォード大學では午前を授業、午後を運動、夜分を社交若くは豫習に費すことになつて居る。午后は二時頃から五時頃まで學生總出で各種の運動をやる。若し何等の運動をもしない學生があれば、彼は早晩學生達から制裁を加へられることを覺悟しなければならぬ。其結果數千の學生は必ず何等かの運動をやる。從つて廣き土地と完全なる運動設備を要する。

東京の學生中幾割が毎日規則的に運動をやつて居るかといふに、一割にも達して居ないのではないかと思はれる。これは全く設備不充分のためであつて、學生の罪ではない。若しオックスフォード大學の如く、一方には設備を完全にし、一方には學生を督勵することゝなれば、學生は全部何等かの運動をやり、初めて體育及び德育の目的を達することが出來る。前に述べたる如く、學校の敷地が十萬坪であれば、教室、寄宿舍、圖書館、倶樂部等のためには五萬坪で充分だと思ふ。殘り五萬坪を全部運動場として使用すれば、大略左の如き設備が出來ることになる。先づ一萬坪に五十個のテニスコート、一萬坪に二個の野球場、一萬坪に二個の蹴球場、五千坪にトラック、五千坪にバスケットボール及びヴアーレーボール、五千坪にプール、ヂムナジオム、柔道、劍道の道場、弓場、五千坪にホッキー場を設ける。各運動には必要に應じて見物臺を設ける。ヂムナジオムの中には一度に二百人位を收容し得る浴室を設ける。

學校は學校町に對し或程度の警察權を有することが望ましきことである。此町に來つて營業せんとする者は先づ學校の許可を得なければならぬことにする。若しカフェーの如き或は如何はしき營業をなす者があれば學校は何時でもこれを差止めることが出來る。此警察權は單に學校の所有地のみでなく、學校敷地の中心から十町とか二十町とかに及ぶことゝすれば更に都合が好い。外國では法律を以てこんなことを規定して居る例もあ

るが、我國でもこれが實行されることになれば、學校のため、どんなに便宜であるかも知れない。

次に私の考へて居るのは寄宿舍である。人物教育といふ立場から見れば寄宿舍といふものは絕對的に必要だと言ひ得る。實踐倫理の講義で靑年の德性を涵養することが出來るように考へたのは昔のことで、今日は時代が全く變つて居る。道德は言論でなくして、私共の生活に根抵を置かねばならぬ。教場で學ぶよりも寄宿舍に於てこれを體得すべきである。從つて寄宿舍は衞生的に且つ住心地のよき建物であることを要する。兵營の如きものではなくて、家庭らしきものであることが望ましい。寄宿舍の周圍には庭園を設け、出來ることならば學生に園藝趣味を養はせたいものである。殊に注意すべきことは三度々々の食事であつて、少くとも食費だけに二十五圓乃至三十圓を徴收することにしなければならぬ。全體學生は食費を節約せんとして却つて不經濟に陷つて居る。彼等は下宿屋或は寄宿舍に於て常に粗食をして居るから、間食をしたり、料理店などに出入することが多い。充分に食慾を滿足せしめて居ないといふことが、學生を墮落せしむる大なる原因となつて居るから、父兄は此點に於て充分に考へることが必要である。

然し五千人の學生を全部寄宿舍に收容することは容易ではあるまい。殊に寄宿舍の設備が完全であり、且つ食費が比較的高價であれば、學資の乏しき者は寄宿舍に入ることが出來なくなる。此二つの理由から學校の附近に公認下宿を許可することは差支なきことゝ思ふ。但し下宿は寄宿舍と同樣の規則に從はねばならぬことを條件とする。例へば寄宿舍が十時を以て門限とすれば、下宿も亦此規則を遵守するといふが如きである。若し下宿がこれを守らなければ學校は其認可を取消すことになるから、結局下宿は其營業を停止されることになる。オツクスフォード大學では寄宿舍に居る者も下宿に居る者も若し門限に遲れることがあれば、科料に處せられることになつて居る。

勿論嚴重なる規則を以て學生を取締ることは餘り望ましきことではない。寄宿舍をして品性陶冶の場所たらしむるには出來るだけ自治制度を實行することが必要である。學生が自ら協議の上で決した規則に服從することが出來れば、學校としては單に大體の監督を爲すだけで充分である。

學生の修養法として今一つ私が述べて見たいと思ふのは學生及び教師が合同して購買組合(寧ろ消費組合と稱するのが適當であらう)を設立することである。學生が食堂に於て要する食料品は言ふまでもなく、文房具及び其他の日用品も全部これを卸賣商人から買ひ入れ、これを組合附屬の賣店にて賣捌くことに

する。これは單に經濟上有利であるのみならず、學生はこれによりて實務に關する經驗を得ることが出來る。更に學生の手によりて週刊の大學新聞が發行さるべきことは言ふまでもない。

學生が勉強しなければならぬといふことは人間が呼吸しなければならぬといふのと同じく餘りに當然過ぎることである。然し現在の教育法は眞に學生をして學問を好ましめるといふ結果を來して居るのであらうか。私はこれに對して大に疑いを懷いて居る。現在の教育法は學生をして學問に對する趣味を養はしめて居ないようである。學業は終生卒業すべきものではないと私共は考へて居る。然し多數の學生は學校を卒業すると同時に學問をも卒業するようである。兎に角現在の大學は其教授課目と教授時間が多きに過ぎる。其上に馬鹿らしい試驗制度が依然として行はれて居るのだらう。多數の學生に取つて學問は樂學にあらずして苦學である。學問に生涯に亘りて爲すべきものであるから、何も學生時代に極度の勉強を強いる必要はない。オックスフォード大學生は午前中だけ授業を受けて午后は殆んど全部運動のために費して居る。彼等には二ケ月以上の夏休暇と、一ケ月以上のクリスマス休暇と、更に一ケ月以上の春季休暇がある。然しこれは必ずしも私共の所謂休暇ではない。學生は各教師の指定する參考書五六冊を擁して山なり海なりに出かけて行く。彼等は飽迄も樂學するのである。

大學町に住居する學生が女人禁制といふピュリタニックな生活をなすことはどんなものであらう。私は大學生活を考へる時どうしても此問題を除外することが出來ない。太平洋岸の米國は勿論中部地方に於ても男女共學といふことは殆んど原則であるかの如く考へられて居る。私は明治三十八年の頃ローサンゼルスから程遠からぬポモナ大學を訪問したことがある。教場は勿論、食堂に於ても男女が打混じて坐して居るのを見た。殊に驚いたのは一棟の大なる寄宿舍が壁を以て二つに仕切られ、一方が男子、一方が女子の爲に用いられて居ることであつた。男女は相遠かることによつて危險が增し、相近づくことによりて危險が減ずるといふことは動かすべからざる眞理である。私は男女共學によりて我國の大學町にも新しき生命と新らしき道徳が發生するであらうと信ずるけれども、これを論ずるのは時機が尙ほ早いやうに考へるから、暫らく控へて置く。

大學町は決して空想でない。明治大學が率先して小金井附近に新しい發展を試みるといふことも傳へられて居るが、私は其外に紹介すべき一つの實例を有して居る。數年前設立された羽仁氏の自由學園は女子教育のために新生面を開いたものであることは漸次世間に認められるやうになつたのであるが、此度一

大飛躍を試みることになつた。現在の學校敷地は狹隘であつて、充分なる運動設備をなすことが出來ない。これがために近頃武藏野電鐵線田無驛附近に於て十萬坪の土地を購求することになつた。然し羽仁氏の考へでは決して自由學園を移轉するのでもなく、さらばと言ふて運動設備のためだけで土地を求めたのでもない。勿論各種の運動設備をなすと共に園藝に必要なる設備をもなす。更に二三の教室を建築し、毎週一回乃至二回各組の生徒をして交る〴〵其教室で學科を修めしめ、其他の時間は運動と園藝に費し、一日の田園生活を送りたる後歸宅せしむるといふ仕組である。學校用地としては二萬五千坪を使用し、七萬五千坪は希望者に分讓することになつて居る。自由學園の關係者及び其紹介者には割引がある。其割引價は一坪最高十三圓五十錢最低十圓八十錢であつて、若し此分讓地が全部賣却されることになれば、學校用地二萬五千坪は無代價で自由學園の所有となる譯だ。現在の生徒數百七十名に對して二萬五千坪の土地は充分である。毎週一回乃至二回宛學生が終日土に親しみ運動に親しむ効果は必ず大なるものがあるに相違ない。私は自由學園の試みが學校町に進む第一歩として重大なる意義を有することを認むると共に、大都市の中に窮屈なる存在を續けて居る各種の學校が何れも郊外に出でゝ自由に大氣を呼吸し得る日の來らんことを切望して止まない。

學生氣風論

千葉龜雄

學生がカフエイに入り浸る。女給を奪ひ合つたり、醉つて喧嘩をしたり、……そこでカフエイを取締ると共に、學生の風紀を警察で取締る、と云ふやうな話があつた。警察が、警察令に沿ふ範圍で、カフエイを取締るのは勝手である。が、それによつて、學生風紀の肅正まで手を及ぼさうとするのは、これは全然餘計な世話だ。出來るものでも無し、またそんなところま

で、警察が世話をする必要も無い。

一體、都市の學生から、カフェイを奪つて何が殘されてあると云ふのだ。そこには理想的な青年寄宿舍も無い。娛樂と云へば、皆な高價だ。その間にあつて、一番安易で安價なものがカフェイだ。カフェイが、近代學生に缺き得ない、弛緩機關となつたのは當り前な話だ。何分血に熱する若人達だ、たまには喧嘩もするだらう。美くしいウエイトレスに、胸の血潮の躍ることもあらう。これもたまには止むを得ないでは無いか。機關が大きくなれば、何だつてそこには缺陷も出て來る。その缺陷はどこまでも絶滅するが好い。が、そんな事を差引いても、カフエイが學生に與へる、比較的清潔な、また安易な効果は爭へない。喧嘩するが惡ければ、喧嘩が當り前だと思はせるような、社會の暴力沙汰を先づ絶滅せよ。ウエイトレスの墮落が惡ければ、學生だからと云う、經濟上の保證と、行先きの身の振り方の安全までを、纒の勘定書きの中へ入れて、肉を賣るような女性の無知と、經濟上の他力主義を先づ絶滅せよ。

が、高々カフェイなどまでにも、うるさく干涉することからが、已に日本の到所に見る干涉主義空氣が、昔から見て、一向稀薄にならない事を暗示して居るものだ。殊に日本の文部省などは、澤山の役人が、いかに學校に干涉するかの、法令案出の外には、何等の職能をも持たぬもののように見える。いかに自由に彼等學生を解放して、自成の完人を作り上げようかなどは、恐らく夢にだも見ないものらしい。

元來風紀の意義が何か。とかく取締る人間など云ふものは、個人の生活から、別に隔離された道德律があつて、それを個人が、時所に應じて適用し得るものと考へるらしい。生活人と、道德人を別のものに考へる、こゝに誤謬がある。現代の理法では、いかに生きるかゞ道德することだ。故に、道德人たらしめようとするならば、先ず彼をして、解放された完人たらしめよ。その完人たらしめる途の方は絶對に閉いで置いて、作りつけの風紀などでばかり押へ付けようとしたつて、何ら生きた作用をする譯のものでは無い。

で、たとへば現代の學生が、そうした干涉の袋づまりの中に喘えいで居るにせよ。なほ、われ等は、彼等が、自律の完人として、自分を自分で處置すべきものだと考へる。少くとも中學生以上の學生は、自成自律を期待しても良い可能性があるものだと我等は思惟する。で、もし彼等がその人間たる事に對して、申し譯のない罪惡を犯したとする場合は、其の罰は直ちに自身が引受けねばならぬものだと思惟する。もちろん、それは、世間に云はれる墮落、もしくは法律的犯行よりも、もつと深いもの

を云つてゐるのだ。そしてわれ等はその場合、直接の責任を、家庭や、學校に歸するやうな、通俗習慣にどこまでも同意し得ないものだ。

で、風紀問題などは、大した問題では無い。そこで現實の學生氣風に還るならば、そこにもまた、我等を痛感させる多少の現象がある。

一つは、學問することを、直ちに職業問題に結び付けさせる觀念だ。それを指して今日の教育が、職業教育だと云ふやうな見方は當らない。たゞわが國の國民生活狀態が、止み得ずに、そうした結果を見せて來るのだ。もちろん、職業することが、生活と別なものだとか、學術と違つたものだと云ふ譯では無い。たゞ、彼等が、一枚の卒業證書だけに注意を集めるだけで、何を、いかに學ぶか、また學んだかに對しては、大した注意を拂はない、たゞ三年なり、四年なりのコォスが、一日も早く明ける事を待ち焦れて居る。たゞ、退校されぬだけのそれぞれの途を步むだけで、その長いコースを、大した有用な、もしくは集注した研究目的に向けない。こうした傾向は、一に卒業證書による、職業の獲得を目的とするからでなければならぬ。その反證として、わが國の青年が職業についてから後に、書籍をも、學術研究をもふり捨てることの冷淡さは、實に驚ろくべきものがある。我國書籍の賣行きが、青年學生の年齡を購買者の大部分とし、壯年から老年に到る階級が、夥しい飛躍的遞減を示して居るのはその爲だ。もし一國の文化の高上が、國民知識の集積で測るべきものならば、わが國に於けるような、知識學の飛躍的不平等は、決して好ましいものではない。と云つて、學校の修業が、使用人たる外に方法の無いわが國の現狀は、それをどうともし得ないとしても、どうせ卒業證書を獲るのである。何を學んでも損になるものはないから、やはり與へられただけのすべての學課を、片つ端から咀嚼して行くのが兩善の途では無からうか。

風紀問題が、大して問題にならぬ事は前にも云つたが、それに近來の學生の風紀は、概していはゆる不健全になつてるとは思へない。たゞ官學において、割合に世間種になる學生を出すことが少ないのに、私學に、それが多い事は注意すべき現象である。それもまた、日本の歷史が養つた觀念で、官學が、組織に於ても、學生に對する制度でも、可なり周到に出來て居る。私學がそれより著るしく劣る。それが官尊民卑のわが國民をして、事實的に、官學の一組織をなほ完全にさせ、迷信的に、官學を崇拜せしめる。そこで官學に居る學生の誇りが、勢ひ彼等

の自省心を刺戟する。私學は、それに比べて劣るように思はせる。元來、官學私學の差別があるべき筈が無いのに、そんな差別觀念をいつまでも存置させるのは、誰の罪でもない、國民自身の事大精神の罪である。で、私學に在る學生をして、いくらか自省心を鈍らせ、世間種を多くするような事も、また國民が自ら刈られねばならぬ收穫である。

たゞわれ等の堪えられぬ公憤は、學生階級の一部においての、頹廢的享樂に對する耽溺氣分の浸潤である。思ふに現代において、中學以上の學校に入り得るものは、先づ、經濟的に撰ばれた、特權階級と云つても宜しいであらう。そこでそうした學生には、拔き難いブルジョア意識に噛まれ、資本主義的特權權威に誇りを感ずるものがある。彼等は自身達が、飢えず、凍えず、學術研究に耽り得る幸福を獲るために、何萬の有力な青年で、中學の教育さへも受けられぬものが社會の底に存在するかを知らねばならぬ。けれども、彼等の哲學は、商業的自由競爭の論理の上に立つ。虐げられるものは、その運命だと觀ずる。そして自分達は自分達の享樂を勝手にする。或ひは、また、現代の社會的意識までに思惟が屆いたにしても、生活は一つの實感である。實感の無い共鳴は空虚である。そこで、無産階級の意識を持つと云ふ青年や學生が、實生活においては、少しも無産階級氣分を含まぬところの、全くの特權階級意識に浸つて居るような矛盾が、ここに起つて來る。藝術に、趣味に、諸種の耽溺において、それがどこにある。さうした氣分が、相應手びろく現代學生の一部の生活に、浸潤して居ることは事實だ。傷ましい矛盾だ。それが、有産階級から生れた學生だからと云つては可けない。學生であるからこそ、もつと社會の現實を凝視せよと云ふのだ。そして、潰崩しつゝある階級の、頹廢的氣分から先だつて解放されねばならぬと云ふのだ。

次に女學生階級にいたつては、家庭から文部省までが、總掛りで、全身の神經を、たゞ風紀問題だけに集めて居る。處女性と貞操の安全それだけが全體の護符だ。そしてそれを促がすための、知識の注射などは全く忘れて居る。そこで、その無知から、彼等の期待を裏ぎるものが、度々現はれて來るが、こうなると彼等はもうどうすれば好いかわからない。手頃の滑稽書である。

が、概して、男性學生が、女性に對する觀念は、また女性征服時代から、いくらも隔たつて居無いように想へるのであるがどうであらう。文明は、いたる處に神經や情緒の刺戟を胎んで居るが、殊に若い女性の大つぴらな魅味が、男性を索きつける魅力において、わが國においては、現代ほどの大きな發[illegible]が

開かれた事の恐らく無いであらう。それは、青年學生の描く文藝の大部分が、若い女性の戀を主題として居るのでもわかるし、ことに、昔風のプラトニックな戀的憧憬が薄れて、むき出しな、肉體禮讃の多いことにも理解されるのである。そこに潜む戀愛喜劇、悲劇は、想ふに、可なり大量なものであるらしいが、もとよりそれが圓滿に結婚の實を結んだものなら、大した話題とならない。たゞ破綻や悲劇として現はれたものから見れば、これを跡づけるものは、大抵の場合、やはり、男性の女性征服習性と、女性の人間的無知である。

學生と社會運動

赤松克麿

一

學生が近代の社會運動の陣頭に立つて、花々しい活動をするのは、其の國の勞働階級の自覺が低く、また有力なる知識階級團體の存在しないことを示すものである。そしてまた此の現象は後進國に多いやうである。後進國に於て、世界思潮の動きを最も鋭敏に感ずるのは、勞働階級にあらずして知識階級である。此の知識階級の中で、何等生活上の屈托もなく、情實的な拘束もなく、生一本に、純情のまゝに、行動し得るのは青年學生の群である。そして勞働階級は未だ目ざめず、成年知識階級も尚ほ社會的力を築き得ない時に當つて、血の氣の多い彼等青年學生の一群は起つて社會運動の中堅をなすに至るのである。

我國の如きは現在、殆んど知識階級の指導を要しない程度に發達した勞働組合があり、フェビアン協會、政治研究會、社會思想社等の如き、それ〲相當に社會的力を持つた壯年知識階級の團體があつて、組合運動にしても、政治運動にしても、思想運動にしても、學生が中堅勢力となつて活動する餘地は全く無いと云つてよい。併し乍らかつて我國に於ても、學生が社會

運動の表面に立つた時代が短いながらも存在した。歐洲大戰直後の思想的激動の時代にあつて、勞働組合の勢力は弱く、且つ組合の指導精神は徴温的であり、堺山川氏等一派の社會主義者もまだ復活の域に達せず、其他力ある知識階級の團體も存在しないときに當つて、帝大、早大等に在學した一部の鋭感な學生達は奮起して社會運動の渦中に投じたのであつた。併し其の期間は至つて短かく、大正七年と八年の二個年位のものであつた。勞働組合は急激に發達し、其の思想的水準も高まり、社會主義者其他の壯年知識階級の運動も活潑となつてきたので、學生の社會運動は方向を轉換して、學生界內部の啓蒙運動若くは勞働者敎育に對する補助運動となつた。

二

今、大正七八年頃に起つた學生社會運動を回顧して見れば、大正七年の政治季節に、早大の一部學生が普選運動を行ふて、官憲の猛烈な壓迫を受けたことがあつた。同年の十二月には帝大に新人會が生れた。新人會は最初自由思想討究を目的として、石渡春雄、宮崎龍介、私の三人が發起して作つた。三人とも綠會辯論部の委員であつたが、辯論部の委員八名(各出身高等學校代表)の中に、思想上右翼と左翼を生じ、左翼が我々三人であつて、それが辯論部の空氣に慊らないで、別派として新人會を組織したのであつた。此の新人會は間もなく麻生久君等の木曜會と合同してやはり新人會と稱した。木曜會は、我々より一二年上級であつた麻生、棚橋、山名、岡上、佐野、河井、岸井等の諸君が新人會の如く公然たるものでなく仲間同志で社會問題を談論し討究した一グループであつた。新人會の會合は頻繁に行はれた。目白の合宿所で、帝大の學生控所で、本鄉のカフエーで、米暴動があり、ロシヤ革命があり、獨逸革命があり、同盟罷工は激増し、民主主義や社會主義の言論は非常な活氣を帶び、明日にでも社會的大變動の幕が切つて落されるのではないかといふやうな異常な豫感に唆られた時分なので、我々の會合も冷靜に落ついて理論の研究に耽るといふよりも、如何にして日本の階級鬪爭を指導し、如何にして日本の社會的變革を一日も早く成就すべきかを議論の焦點にしたのであつた。

我々の胸底に漲る熱意は「人民の中へ」であつた。我々の獻身的熱情を刺激したのは、十九世紀に於けるロシヤ青年知識階級の「人民の中へ」の運動であつた。社會主義や無政府主義の書物と共に、ツルゲネーフなどのロシア小說が愛讀され、話題の種となつた。麻生君の如きは、ロシア的情操を最も多分に有し、其の革命家的風格と詩人的情熱とを以て夜明け前の氣分に

淩る青年學生を魅惑したのであつた。

三

新人會の實行的熱意は遂に表面に現はれた。佐野、山名、棚橋君等は勞働者街の月島に居を構へて、勞働者の組織と宣傳に着手した。宮崎君や私等は、亀戸、日暮里方面に於て同じく勞働者の組織と宣傳に從つた。今日の關東地方評議會所屬東部合同勞働組合、總同盟所屬城北合同勞働組合の如きは、新人會によつて最初の礎は置かれたのであつた。我々はまた我々の統制する勞働組合の同盟罷工を指導した。今から思へば隨分無鐵砲な戰術によつて戰つたのである。大正八年の四月頃だつたと思ふが、麻生、山名、石渡、波多野、門田、私などの一群が、雨の中を亀戸へ行き、或る小さな寺を借りて附近の勞働者を集め、各々沈痛な語調を以て階級鬪爭を宣傳し、會堂の中が一種悲壯な空氣で包まれ、我々も亦名狀しがたい感慨を抱いて、深夜の泥濘にまみれながら歸つたことがあるが、今思へば可成りロマンチツクなシーンであつた。

當時、東京市電從業員によつて日本交通勞働組合が組織されたが、新人會は其の發會式當初から、熱心に之を援助し、多くの演説會や講演會には缺かさず出席した。組合長たる中西伊之助君が、演壇で我々を紹介するとき「新人會の大學生諸君はロシヤの大學生と同じ理想を持つて活動するものである」と述べたことを覺えて居る。其の頃の新人會の活動は、一般の勞働者に對してさうした印象を與へたやうであつた。

我國の代表的勞働組合たる友愛會を如何にすべきかといふことは、其頃我々の間の一個の大問題であつた。麻生君等はかねてから、友愛會を戰鬪組合にするがために種々畫策し、棚橋君は使命を帶びて司法官から轉じて友愛會に入つたのであつた。併し棚橋君は會内で不愉快な日を送ることが多かつた。友愛會を如何にすべきか？此の問題が日向の新人會本部で日夜議せられた。或る人々は友愛會に見切りをつけて、別に我々の力で勞働運動を起さうではないかと主張し、他の人々はあくまで友愛會を我々の手で改造しなければならぬと主張した。私は後の論者で、それがためには麻生君が此際決意して友愛會に投ずべきだと主張した。遂に麻生君は東日記者から轉じて友愛會役員となつた。麻生君棚橋君は友愛會内部で活躍し、我々は外部から之を援助した。かくして友愛會は次第に更生を遂げて行つた。

大正八年の十月、國際勞働會議の勞働代表問題で勞働界に議論沸騰し、遂に友愛會信友會等の主催で、桝本反對の大示威運動が行はれたが、新人會は其の組織にかゝるセルロイド工組合

を率ひて之れに參加した。このとき新人會員たる三輪、河西、嘉治、林君等十名ばかりの制服制帽の一群は、社會の非常な注目をひいたのであつた。

四

新人會が生れてから、しばらく立つて早大に高津正道君等を中心とする民人同盟會が生れ、それが分派して和田巖君、淺沼稻次郎君等の建設者同盟が生れた。高津君は更に曉民會を作つて、新人會が學生内部の運動にとゞまらうとする頃に、最も實行慾に燃ゆる急進知識階級の團體となつた。

新人會、建設者同盟、曉民會は、各々特色を以て社會運動に貢獻したが、新人會は比較的勞働組合運動と關係を有し、建設者同盟は農民運動と關係を有し、曉民會は社會主義運動と關係を有すると云へやう。

既に述べたやうに學生が社會運動の表面に立つことは、大正七八年を全盛期として、次第に下火となつた。學生運動は他の社會運動に對する自己の職分を自覺して來た。そして一般學生に對する啓蒙と宣傳に主力を注ぐことになつた。大正十一年九月には、一高、三高、五高、七高、佐賀高、浦和高、新潟高の七高等學校に於ける社會科學研究學生の聯合たる高等學校聯盟が成立した。同年十一月七日には、全國學生聯合會が創立した。當時之れに加盟した重なるものは、新人會（帝大）文化同盟（早大）七日會（明大）、社會批判會（日大）、社會思想研究會（早高）、七日會（女子醫專）、社會思想研究會（一高）、社會問題研究會（三高）、R、F會（五高）、鶴鳴會（七高）、文化會（新高）等であつた。學生聯合會は、其の職分に應じた種々なる活動をして來たが、大正十三年の九月、大阪高工の學生が市電從業員の罷工破りをしたことに反對運動をしたのを機會に、東京に第一回全國大會を開き、左の諸事項を議定した。

一、名稱を學生社會科學聯合會と改むること。
二、新組織を採用し地方聯合會を作ること（關東、關西、東北）
三、教育事業を組織的且つ有效ならしむるために研究の課目並びに課程を設定すること。
四、學生運動の目的に應ずる出版事業を行ふこと
五、研究會未設校に擴張運動を行ふこと。
六、勞働者教育運動の促進。

昨年に於ける學生社會科學聯合會の重なる事業は、學生罷業破反對運動、國際非戰デー參加、軍事教育反對運動、勞働者教育運動等であつた。昨年十二月に於て、五高の社會思想研究

が文部大臣の名によつて解散されたのを切つ掛けに、全國高等學校の社會科學研究會（二十五校中研究會のあるもの二十三校）が一齊に解散命令を受けた。學生運動の目覺ましい活躍は、時代思潮に置き去りにされた文部當局を戰怖せしむるに足るものがあつた。

五

財界の不況は俸給生活者を過剰にし、之を生活不安に陥れる。我國資本主義の凋落的傾向は、今後益々知識階級の生活不安を濃くするであらう。此の暗影は學生に反映して、學生の思想を反資本主義的に導くであらう。併し乍ら學生が社會運動の陣頭に立つて、恰も現代の支那の社會運動の如き狀態を呈することは、社會運動の順當なる發達から見て、喜ぶべきことではないと考へる。勿論、斯くの如き狀態を呈するには、然かるべき必要の事情は存在するが、それは決して社會運動の理想形態ではない。近代の社會運動は根抵に於て經濟鬪爭である。それは觀念の鬪爭でなくして生活の鬪爭である。知識階級中學生階級は、觀念を偏重し、浪漫的なる情調を憧憬する傾向を有する。彼等の頭には、動もすれば革命が藝術化され、階級鬪爭が方程式化される。それは彼等の立場が現實生活を遊離して、自由奔放に觀念の世界を飛び翔けるからである。さうした心理狀態に陥り易い學生が、社會運動の中堅を成すとか又は社會運動の一單位を成すとかいふことは、決して社會運動の健實なる發達を期する所以ではない。かつて學生として社會運動に加つた我々仲間の經驗から見ても、其れを痛切に感ずる。要するに學生の運動は、學生内部の啓蒙運動、或は軍事教育反對運動や大學擁護運動の如き教育界自體の改善運動、勞働者教育に對する補助運動の如き範圍を出づべきではない。此の範圍を出づることは、學生自身を誤るのみでなく、社會運動そのものをも誤ることになる。（六月十日）

大學の社會機能と現在大學制の不完全

杉森孝次郎

一　學校の基礎的存在理由

學校は、現代に於ては、立派に社會組織の一部だ。それは、社會組織の構成要素としての制度、組合、慣習、無組織的協力のどの一とつから見ても、立派にそれの一種だ。

例へば、官學、私學といふことばですらもが、學校が或制度であることを、他の多くの事を意味すると共に意味する。また學校自身が一組合であることは明白だ。學生かたぎ、教授かたぎ、校風、これらですらもが、學校が慣習の世界に或特殊の位置を占めてゐることを想起させるに足る材料だ。學生間、教授間、學生と教授との間の諸關係が、無組織的協力としての部分を持つことはいふまでもない。

學校が、社會組織の立派に一要部として發達することは、社會または文化が、それの內包と外延に於て發達するにしたがつて必然の現象だ。どうしてかといふに、人類の子供は、産み落とされたまゝの狀態に於ては、全然野蠻人だ。しかるに、發達した文化は、その野蠻人の自然の經驗によつては、到底、單にそれを習得するだけのことすらしえられない。特に組織された方法が、それだけの目的を達するためにすら必要だ。その組織された方法が即ち學校だ。わかい野蠻人を、すくなくとも老いたる文化人程度の文化人にしあげ、また成るたけその程度以上の文化人にしむけるために、學校が必要とされる。

二　大學の社會的機能

大學は、現代の事實として、學校體系の世界に於ける最高位にある。或ひは、それは、學校過程の最終期を形成する位置にある。したがつて、そこでは、老いたる文化人が、わかい野蠻人を、成るたけその文化人以上の文化人にしむける努力が代表的努力として期待される。判斷、意志、行動、單なる結論としての知識、單なる熟練としての技術等が、大學に於ては、充分にそれの理由を問はれる。この關係上、大學に於ては、研究及び批判の自由が特に强調される。愛知、愛眞の本能及び理性が、かくして、大學生活に於ては、最も保護、解放されべき目的物となる。

すなはち、小學校は、認識生活に於ける感覺、知覺、知覺の單なる再生的觀念程度に比される。中學校及び高等學校は、特殊科學が意味する範圍の概念に比される。大學は哲學に比される。大學は、實に、哲學といふことばの最も正しい用方にしたがつて、哲學的であるべきものだ。有意義に、そして充分に、抽象的であることが大學の生命だ。

敢ていふまでもない事のやうではあるが、進歩は知を條件とする。そして知は抽象を條件とする。もしも大學さへもが充分に抽象的でないならば、また充分に抽象的であることをその社會の制度及び慣習によつて許されてゐないならば、それは、その社會は、全體として、充分に進歩的でないことを意味する現象だ。

三　學問教育本位の職業教育

善き社會組織にあつては、無職業の壯年者はあるべきでない。即ちなんらかのかたちに於ける社會的生産に、社會價ある生産に、すべての壯年男女は從事すべきだ。勿論、育兒も、家政も一職業だ。藝術の生産も、知識のそれも、同樣にそれだ。

職業教育は低級であり、學問教育は高級だといふ理由はすこしもない。學問は、それが高級であればあるほど、それにはいよいよ社會價がある。それには即ち職業價がある。そして、職業は、それに、それの知識に、理由の意識としての學問が完備してゐるほど、いよいよ職業としての資格に於て完全する。

されば、學問教育といふ概念も、職業教育といふ概念も、それを充分に哲學的に理解しまたは構成すれば、その內のどの一方だけを選んでも、大學の看板としての資格に於て充分だ。

しかし、それがさうあるゆゑに、現代の大學制には、その點からしても、多少の改設が望ましいものだとして構想される。現代の學制にあつては、大學に於ける職業教育意識と學問教育意識とが、組織的に一全體として經營されず、亂雜に、無政府的に、混沌として多少相和し、多少相鬪ふ狀態に置かれてゐる。けれども、兩者は、結論として相隔離させられべきものではないが、方法に於て全然無差別いな無識別であることをば許さない。

大學內に、學問目的部と職業目的部とを機能別的に別設し、學生の自由選擇を一條件として、その兩部に從屬することも、その內の任意の一方に專屬することも出來るやうに、その兩部の時間割を組織することも一案だと考へる。そして、その場合、その學問目的部に於ては、研究を唯一の目的とする。したがつて、その部に學んだからといつて、就職に直接の功果を持つなんらの特典をも學生は得ない。例へば開業醫の免狀をも、辯護士や文官の特權をも、學校教員たる制度的資格をも、かれは得ない。

この部は、したがつて、教師の選擇をも、制度的特權獲得の目的からしては全然自由になすことが出來る。またこの部は、試驗をも、その目的のためにはすこしもせずに濟む。

四　教授永任制及び專有制の廢、改設

そして、すくなくともこの部について考へる限り、教師の永任制をば、無理なしに、そして勿論有益に、避けうるがゆゑに、避けなくてはならん。通則としては、三年間契約あたりが適當かと考へる。向ふ三年間の契約で學校は教師を招用する。滿期以前の適當の早さに於て、學校が再び向ふ三年間を一教師に乞ふことは、かれが謝絕することゝ共に、自由だ。

一年契約では、教師と學生とが、學問的及び人格的に相知る機會が足りなすぎる。また、教師の方からいへば、學生に、勿論教育的に、適應した講義や指導を、經驗と反省によつて精練する機會もない。同じ科目にしても、二年目あたりから呼吸とコツと責任の完備したものになる可能がある。これを犧牲にする損失は、勿論、同時に學生の方から見ての損失でもある。また經營者の立ち場から考へても、一年契約は過忙でもある。

ついでながらの注意だが、教師たらんとする人の方から、たとひ手を廻はしてなりとも、學校へ招用を求めいでることは、初任を目的とする場合でも、重任を目的とする場合でも、制度的及び慣習的に極度に否定する方針を取ることが、學生のためから考へれば無論だが、學校のため、また教師志望者自身のためから考へても、すくなくとも大學の場合にあつては、極度に必要だ。どうしてかといふに、學者の志と、さういふ方法とは、事實上、また理論上、決して一致しない。學者は、實に、この關係に於ては、傳統的、習俗的に期待される處女のやうであることが至當だ。たとひ內心に情はあつてさへも、逃げまはらないまでも、進んで追つかけべきではない。さうしないことによつて、學校も益し、かれ自身も實は益する。學者としては、たとひ婚意はあつても、求婚されない限り、それを機會として却つて精進するなり、他に活躍の世界を求めまたは造るなりすべきだと思ふ。自分の方から學校へ求婚するやうな學者は、結局、御用學者、阿權學者、阿世學者、學以外の世界に於ける昇進、榮達を目的とする學者、即ち假りにかれに知識や學殖はあるとしてさへも、なほかつ底なき玉の盃學者であるほかないといふ、深い困難がすくなくともそこにはある。英國あたりに於て、學の進步に貢獻したほどの學者が、しば〱、教授でなかつたことは、單に偶然の現象とばかり見去るべきものではあるまい。教授たることを必要とする學者といふ概念は極めて難産だ。

教授を永任制にしないならば、教授たる人の經濟生活が成り立たないといふ心配は、永任制以外に制度、慣習を新設し、發達させることによつて解決されべきものだと思ふ。さうでない

ならば、手段が目的を凌駕する。

大學は、直接には學生を目的とすべきものだ。それは、直接に、具體的には學生を目的とすることによつて、學生の目的であるべき學問を、それの保存及び進歩を、即ち代表的には進歩を、目的とすべきものだ。大學當事者にとつての、他のすべての興味は、また考慮は、この目的の支配下に選擇もされ、組織もされることを理想とする。

大學は學生を、學生は學問を、そして學問はそれ自身の進歩を目的とすることによつて社會の進歩を、したがつて同時に文化の進歩を、目的とすべきだといふ公理的規範に忠實であるためには、教師永任制改廢は明白に不可避だ。

大學にあつては、殊にすくなくともそれのうちの學問目的部にあつては、教師の選擇を、組織された、責任ある學生の意見と意志によつても相當部分的に、決定する制度が望ましい。敢て相當部分的にといふ。どうしてかといふに、經營者及び教師團も、勿論その權利及び責任を分有すべきであるのみならず、一學校の中心責任者が、かれまたはかれら自身の特殊の教育理想、教育目的を達成するための方法として、その學校が創設されまたは維持される場合がありうる。そして、かゝる場合には、かれらは、かれらの判斷に忠實でないことは出來ないからだ。かゝる場合に、經營者の意見と學生の意見とが、相當の討議、協議をかさねれば必ず一致點を見いだしうるとは限らない。その一致點を見いだしえなかつた場合には、學生は、屈從するか、退學するかすることが、經營者をして辭任せしめることよりも順當だ。

勿論、現制は教師永任を明示してはゐまい。しかし、教師三年契約の如きをも決して明示してゐない。この點は、それゆゑに、後者を明示するでなければ、事實上、現に世界の諸大學が例示する如く、永任制的に傾く必然がある。

一學校が、即ち各學校が、それぞれに、教師を專有することも、それが學校の積極的意志にもとづく現象である限り、大學の目的に充分に忠實な制度または慣習だとはいへない。學問を目的とする學生の、即ち學校の立ち場から考へるならば、學問的、教育的見地から判斷して有價値な人の教導をば、すべての學生が完全に享樂しうることが理想でなくてはならん。ただ、時間、空間、精力、整理等の事情に餘儀なくされて、事實上、各學校が、教師を專有する結果に終はる不可避は相當に考へられる。しかし、もしもそれが制限として意識されてゐ、目的として意志されてはゐないならば、その不可避も、現在よりは輕減されるにきまつてゐる。それは、常に、極小限化される位置

を保つにすぎないものとなる。

學生の、或制限下に於ける、自由移動は、ドイツあたりにもすでにその例がある。原則としては、教師のそれも保護されることが一層進んだ方法だ。ただ、教師は、學生ほど自由移動を、たとひそれが制度としては保護されてゐてさへも、享用することの出來ない幾多の事情を持つ。しかし、制度としてはそれが保護されてゐれば、現在よりは、學者と學生との接觸の機會が増加するにきまつてゐる。

學問よりも抽象的なものはなく、大學よりも抽象的な制度及び組合もなかるべきだから、某教授は某大學のものだといふ事實は、現在のやうに、單純に當然至極視されべき性質のものではない。それは、實に、學生、經營者、教師の各者によつて、一様に、成るべく極小限化する責任ある、大學の目的に對する一とつの制限的事情として意識されべき性質のものだ。

學生は、學問を目的とする純素として扱はれねばならん。さうするならば、かれは、すくなくとも學問的に價値あるすべての書物を、讀みうる限り廣く、讀むべきである如くに、學問的に價値あるすべての學者を、聽きうる限りあまねく、聽くべきだといふ原則が、原則としては成り立たないことは出來ない。實行に於ける制限は、その原則の出來るだけ充分な實現を意味するものでなくてはならん。

交通機關が發達した。いよ〳〵發達し行く、今日、學生と學者との公的、即ち學校に於ける接觸の機會は、決して學生、學者、學校經營者が、充分にそれを利用してゐる程度のものだとはいへない。都市的、國内的、國際的の各範圍に於て、その餘地は多少とも廣く開けてゐる。

五　夜學の發達

夜學の發達が希望される。晩の七時から九時への二時間ぐらゐを使つて、晝間は職業に從事するすべての人々が、及び學校に學ぶ人々さへもが、勿論相當に必要な制限下に、自由に入學し、利用しうる學校の社會的發達が希望される。なぜそれが希望されるかは、多くの明確なる理由によつて答へられる。その内の比較的に極めて小さな一とつとしては、現存學校の硬化、無能、墮落、專制等の諸危險及び諸害惡を、それによつて多少とも制限しうるといふにある。

六　學校自治の發達

學校は、對外的には、校長を責任者として、自治、勿論充分に社會的責任及び良心ある自治を極度に發達させなくてはい

ん。直接には文部省及び政府からのそれ、及び學校によつては地方行政權からのそれを。それは發達させなくてはいかん。そして、この目的を達成するための方法としても、教育者組合の發達が最も必要だ。生徒がなにを聽き、なにを讀み、なにを書くべきかが、外部から專制的に決定されることは、教育の最も悪意義に於ける不獨立だ。

學校は、勿論、內部的に、また各部的自治を發達させなくてはいかんことはいふまでもない。

七　社會進步の一原動力としての大學

大學が社會進步の一原動力であることは、近代に於て、一とつの、通則的ではないが、いちぢるしい現象だ。目下の支那の場合も、決してその例外ではない。

そも〱社會進步は、殊に制度改革的意義を顯著に有するそれは、常に、知識專業者の個人及び階級にそれの第一步を踏みいだす。わが維新は明白にその一例だ。アメリカの奴隷解放も、ボストンその他の知識專業者に發端した。英國の婦人解放は男性のミルによつて最も有力に發唱された。佛革、露革、いづれもそれの唱道者を知識專業者に見いだした。

これには、勿論、必然の理由がある。現制によつて惠まれてゐる階級は、かれら自身の習性及び利己性に支配されて、改制を唱へいだす、もしくは眞劍に、正直に意志することが出來ない。他面に於て、現制によつて虐げられてゐる階級は、やはり、かれら自身の習性及び姑息的私情に支配されて、さうすることが出來ない。

社會が大學を持つことの利益は、實に、あらゆる意味に於て、それ自身の進步に源泉づけることにある。大學のこの社會的機能を、いかに完全に理解し、實現するかは、しかしながら、勿論、大學以外の社會部分のみの聰明によつては決定されない。それは、勿論、大學としての社會部分の聰明によつても決定される。こゝに社會及び大學の、實は協力することを賢明とする、一責任がある。それは、しかし、眞の協力でなくてはいかん。それは、いはゆる妥協であつてはいかん。

支那の排外罷業擾乱の意味と日本の位置

高橋龜吉

一 はしがき

最近、支那に於ける邦人經營の紡績工場に於て、勞働爭議頻發し、しかも、その多くは『暴動』化して排日運動を叫ぶに至つた。

斯くて、上海に於て、その排日示威運動中の學生が、治安維持の任に當れる租界英人警官のために射撃せられ、若干名の死傷者を出すに及んで、事件は一轉して、一般在留外人就中日英人に對する暴行となり、進んで、反帝國主義的ゼネラルストライキ、及びボイコットが宣戰せらるゝに至つた。斯くて、上海は一時戰時狀態に陷り、次で外人經營の一切の企業に使用の支那人は、ボーイ、子守の如きに至るまで同盟罷業し、その數、數十萬人に達すと稱せられる。加ふるに、支那商店は何れも罷市を行ひ、波止場人夫は働かず、ために、上海の經濟活動は玆に全く休止することとなつた。のみならず、いまや、この反帝國主義的運動は、已に上海より支那全土に波及し、乃至は波及しつゝあつて、現在及び將來に於ける支那對各國の經濟及政治關係に一大問題を提供しつゝある。就中、日本の如く、支那と隣接し、政治及經濟上、他の如何なる國に對するよりも密接な利害關係を有する國にとつては、この支那の排外罷業擾亂を如何に取扱ひ、この經驗を將來のため如何に利用し、如何なる對策を樹つべきかは、此際最も愼重に、最も聰明にお互ひに研究すべき重大問題である。蓋し、今度の支那の排外罷業擾亂の經驗は、日本の朝野に對し、色々の意味に於て、多大の教訓を與へるものだと信ずるからである。

さて、以上の如き觀點から、今後の支那の排外罷業擾亂を考察するに當り、先づ、われ／＼の研究すべき根本點は、その排外罷業擾亂の原因及責任の歸屬如何である。それの如何な

り、それの實際に即して、始めて、この運動に對する我が改良の對策は定め得られるからである。所で、いま、今度の排外罷業擾亂の原因及その責任の歸屬如何を知るには、先づ、何故に初め罷業が起つたか、而して、その罷業が『暴動』化したかを大略調べる必要がある。次で、その罷業、即ち一の個人會社とその使用職工との私的勞働爭議が、何故に日本全體を敵視する排日運動化し、それが遂に一般外人を敵視する反帝國主義的政治運動にまで進展したかを究めねばならぬ。

二　罷業勃發の事情

邦人紡績工場に於ける罷業の頻發――それの「暴動」化――それの排日運動化――最後に一般的な反帝國主義的運動への進展、と云ふ事件の經過に見て、今度の支那に於ける排外罷業擾亂の原因を、或は專ら露國の煽動に出るとなし、或は之を支那人の非文明的無智蒙昧の罪に歸するものが少くない。果してさうであらうか。いま今度の排外罷業擾亂の口火となつた去る二月八日の上海内外綿會社（邦人經營）工場の同盟罷業の直接原因を見るに、該罷業を親しく視察調査せる久留弘三氏は、之を左の如く報じてゐる。（協調會發行社會政策時報五月號）

『二月二日第八工場で十二才になる女工が午前五時頃疲れたあまり椅子によりかゝつて即ち居眠りをしてゐた、ところがこれを發見した日本人の監督は、矢庭に其の小女を足蹴にした、そのため小女は腿に傷を受けた、傍に働いてゐた男工達はこの暴狀を見て騷いだが、殊にその小女の姉にあたる女工が其不法を難詰したところ、其監督は姉の頬をも強く打つたのである、再度の暴行にたまりかねて他の男工が一齊に喧騷したが、會社はそれ等の職工を不良職工として解雇して仕舞つた。そこで粗紡課では七人の代表者を擧げて解雇職工の復職を迫つたところ、會社はこの嘆願に一顧をも與へず、それ等の代表者を工部局の手に渡して仕舞つたのである。こゝに於て一般職工の憤慨と、解雇職工に對する同情とは糾然として集まり、殊に解雇せられた職工は或は無頼の徒とかたり、或は社會主義的思想を抱ける學生と伍して、二月九日第八工場及第五工場を襲撃し、或は日本人の社員を毆打し、機械器具類を手あたり次第に破壞し、驚ろき騷ぐ職工を威嚇して就業を阻止し、こゝに爭議の口火を切つたのである。』

要するに、日本の職工長が、無暗に支那職工を毆打し、會社又此の…………し來つた邦人側一般の非行に對する、支那職工積年の恨が、茲に、爆發するに至つたものである。然るに罷業は、日たゝく間に邦人紡績六社、三萬餘人に擴大するに

至るや會社側は大狼狽を始め、其の原因を深く省る所なく、直ちに、之を………の煽動の罪に歸し、罷業の強壓を我が政府に請ふて支那官憲に嚴重交渉せしめた。斯くて、一方には官憲の壓迫により、一方には支那總商會の調停により、二月二十五日表面上一先づ事件は解決した。しかし乍ら、實際に於ては、事件は一時休息した迄であつて、次の罷業は早晩起らさるを得ない事情にあつた。

と申すわけは、なる程、罷業のキツカケは邦人監督の支那職工毆打にあつたが、しかし乍ら、其の外に、當時彼等をして容易に罷業に走らした經濟的原因が、已に發育し切つて、どうしても殼を破らねばならぬ位地にあつたからだ。即ち、銀價、銅價の下落による物價騰貴の生活難がそれである。試みに、いま上海の物價指數を見るに、左の如く、勞働者の生活費に最も關係多き穀物の指數は、昨年五月の一三二・七に比し今年四月は一六三・七を示し、此間三三%餘を暴騰してゐる。

上海物價指數表

	大正十三年五月	大正十四年四月	大正十四年三月	大正十三年八月
穀物	一三二、七	一六三、七	一五二、九	一四四、六
其他ノ食料	一六四、二	一四五・九	一四七・七	一五一、九
總平均（其他共）	一五四、三	一五九、三	一六〇、三	一四八、八

斯く、支那勞働階級が、物價騰貴のため、賃銀引上げ運動を起す外なき經濟事情にあつたことは、上海邦人紡績罷業後、最近の罷業擾亂勃發以前に於て、次の如く、支那の各地に、内外人何れの經營たるを問はず、待遇改善を主とする罷業の續發したことによつて、更に最も雄辯に語り得る。

支那罷業錄（四月）

（一）廣東タイラー（二）南京車夫（三）廣東生糸工場女工、（四）山東膠濟鐵道四方機廠（五）濟南在留歐米人使用支那人（六）廣東粤漢鐵道、（七）青島邦人紡績工場（八）上海浦東埠頭苦力

然るに、二月の上海邦人紡績工場罷業の解決は、左の如く、これ等の點即ち經濟的要求については、會社側は之れを全然一蹴せるのみならず、その他の點に於ても、少からず彌縫的解決に頼つてゐる。即ち、職工側の要求は左の八項であつたが、

一、職工の毆打を禁止すること

二、賃銀を一割増すこと

三、賃銀を二週間毎に支拂ふこと

四、解雇者を復職せしむること

五、罷業中の賃銀全額を支拂ふこと

六、強制貯金を廢止すること

七、濫に職工を解雇せざること
八、逮捕職工を釋放すること、

之に對し、妥協の結果は（一）に對しては職工は總て從來通り優遇す、若し虐待の事情あれば、工場主に陳情し公平に處理することに改め、（三）は其のまゝとし、（六）は賞與貯金は勤續滿五年に達するものには之を拂渡すこと、在勤五年未滿にして解雇されたる者には平常成績のよきものに限り之を拂渡すこと、他の（二）（四）（五）（七）（八）の五項は撤回することであつた。しかも、此の條件にて實際に協議の纏まつたのは、內外棉會社のみであつて、その他の諸會社は、この條件に對し異論を有するものあり、結局、無條件にて解決の姿となつたのだ。

然かし乍ら、斯樣な條件にて、斯樣な××××にて、就中國を異にする勞資の間に於て、事件が解決し得たと考へるが如きは餘りに日本の資本家の勞働運動に對する理解の無いことを表明するものである。蓋し、武力で敵を降參さし、敵を踏みニヂツた講和條約は、たまく〵、更に激しい次の戰爭を導くものに過ぎない如く、斯の如き日本紡績業者の强壓は、益々、支那職工側の敵愾心を煽り、更に、新たな鬪爭を培ふものに外ならないからである。果然、五月六日、內外棉工場に於ては、再び怠業による爭議が起り、それが罷業となつたが、會社は更に之を强壓せんとして、遂に、內外棉第七工場に於て、罷業團は印度巡査のため射擊され、三名の危篤者を出し、內一名は死亡するに至た。之れ、今回の罷業が、遂に一般的排日運動乃至暴行を生むに至つた元因である。斯樣な我が在支資本家の無理解は又、青島に於ける邦人紡績罷業に於ても亦看取せられる所であつて、例へば、五月九日一應罷業は、日支官武合同の調停と云ふ名によつて强壓せられたにも拘はらず、再び罷業起り、遂に、職工の工場占領となり、支那軍隊の武力强壓となり、死傷流血の後ち、武裝的終熄を告げたのであつた。

三　罷業の排日運動化せる譯

邦人紡績工場の罷業理由、及びその罷業が當該會社に對する暴動となつた理由については、以上の如く、我が紡績會社側に少からぬ責任あることは之を否み得ない。併し乍ら、それが、一般的な排日運動化したる理由如何。

思ふに、支那の邦人紡績罷業が、一般的排日運動化した理由は三つある。（一）…………………………（二）……………………………………………………（三）………………………………………………（一）については、別項に於て述べ、玆には專ら（二）について一瞥する。

（二）在支日本人の支那人に對する…………、一度支那に足を踏み入れた識者の誰しも眉をひそめる所である。されば、已述の如く、我が紡績會社の邦人監督が、支那職工を…………、在支日本人の對支那人觀から云へば、…………事ではない。それだけに、一工場に於て一支那職工の受けた侮辱虐待は、直ちに全支那人が全日本人から受けた侮辱虐待と響くのである。我等内地にゐる日本人は、在支日本人にこの欠點あることを先づ勘定に入れねばならない。無論、斯樣なことは、日本人ばかりでなく、歐米國民にもあることであつて、本國に於て本國人に接すれば何れも極めて善良の紳士であるにも拘らず、殖民地乃至は半殖民地に於けるその國人は何れもその土人を家畜の如く虐待してゐるものである。が、兎に角、われ／＼はいま、在支日本人の受ける迫害に同情すると共に、先づ、彼等の支那人に對する待遇が、支那人…………とを看過してはならぬ。現に、在朝鮮日本人の鮮人虐待は、甚…………又、内地に於ても、所謂特殊部落人に對する故なき侮辱壓迫は、水平運動の勃興によつてのみ、漸く跡を絶ちつゝある。われ／＼は、内地に於て水平運動に同情する如く、それと同じ理由によつて、又、これ迄故なくして侮辱壓迫せられ來つた支那國民の、今度の——及び最近年に於ける——排日運動に同情せざるを得ないわけだ。事實、最近年に於ける支那の此の種の排日運動は、よく、我が日本人就中在支日本人の支那に對する故なき侮辱及壓迫を矯正し、日支が直に融合し親善し得る基本條件を漸次に具現する作用をなしつゝある。雨降つて地固る。支那に於ける排日運動を、斯樣にわれ／＼日本人が解してのみ、その排日運動のよつて以て生れた日支親善の障碍を除去し得るのである。自然、われ／＼は、支那の排日運動のために日支の關係を決して悲觀しない。悲しい出來事ではあるが、しかしこれで直に日支の提携し得る日が却つてそれだけ早まると樂觀するものである。

次に、罷業が一般的排日運動化するに至つた今一つの直接原因は…………。彼等は去る二月の罷業當時に於て、その責任の少からぬ部分が彼等にあることを省ることなく、罷業の擴大するや、狼狽して、…………手段をとつた。

元來、日本の紡績會社及び在支日本人が、上來述べたるが如き待遇を支那人に與へておきながら罷業が起り、排日運動が、

起ると、これを他に煽動者あつて始めて起ることだと考へるが如きことが、そもそも、余りに無反省な我まゝな、しかも傲慢な考方であるが更に甚、秩序維持の範圍を越へて、正當な勞働運動の要求まで、日本政府の力によつて之を彈壓すると云ふことは、會社に代つて、罷業勞働者に對し、日本全體が相手になることを宣言したものである。斯る事情の下に於て、支那勞働者及民衆が、一個の會社に對する罷業を、一般の排日運動にまで進展せしむるは洵に自然であると云はねばならない。それと共に、われ／＼は日本の一人として、在上海邦人紡績會社が、自己目前の利益を擁護するに急にして、そのため、輕卒にも、……………、日本全體の利益と、日支親善とを犧牲にして恥ぢざる不謹愼なる態度を、鼓を打つて責めざるを得ない。

四　排日運動より反帝國主義的運動へ

五月三十日、嚢に内外棉紡績罷業の當時、不隱の宣傳ビラを撒布せる二名の學生の公判が開かれた。之を機會に、學生及勞働者は盛大なる示威運動をなし、單に排日宣傳ビラのみならず、一般に對する反帝國主義的宣傳ビラを撒布した。例へば紡績罷業問題に關するもの丶外、(一)帝國主義の打破即ち日英米各國の横暴を攻撃せるもの、(二)日貨排斥、(三)列國の支那侵略を列記し民衆の奮起を喚起せるもの、(四)日本人の支那人虐殺（上海及青島に於ける）等共重なるもので、外に工部局の道路擴張、印刷令（支那人に對する言論取締令）埠頭增稅案等に極力反對してゐる。即ち、この時に於て、内外棉紡績罷業に端を發せる上海に於ける運動は、排日運動より已に全般的な反帝國主義運動に進展せることを看取し得る。

然るに、この全般的反帝國主義運動の火勢に油を注ぎ、更に運動を激化さす事件が突發した。即ち、右の示威運動の餘勢が、路傍演説となり、之に對し租界の警察官（在留外人の組織する警察）が解散を命じたるも聞かざるや首謀者と目された數名が、租界警察に引致された。之に激昂せる示威運動者は、之を取返さんとしたので、外人警官は十數名の印度人及支那人巡捕に一齊射撃を命じたので、忽ち修羅場を現出し、四名即死を出し、六名を傷け（内二名死亡）、外に通行者十六名を傷け（内三名死亡）、尚ほ檢束者三百五十餘名に及んだ。以上は無論新聞電報によるものであるが之によつて看取し得ることは、群集が激昂の余り、秩序を亂せることだけは明かである。然し乍ら、何と云つても、武裝なき群集である。之を威嚇するために發砲したものとしては、××××

××××××。この事件に對し、支那外交總長が外交團に抗議して『……該學生等は何れも青年子弟にして、熱心なる愛國者である。而も、當時武器を携帯せざるを以て、その行爲の性質如何を問はず、斷じて暴徒とすべきものに非ず。然るに、租界の警官は、適當の方法をとつて平和に解決せんとせず、突然激烈なる手段を用ひた。これ實に人道及び正義の上より見て、容るゝ能はざる處にして、その全責任は當然租界官憲の負ふべきものとす……』と云へるは　之を…………。少くとも、如何にその外人警官と雖も　白人の斯種示威運動者に對しては到底斯る過激手段に出でないことだけは明である。

兎にも角にも、この學生射殺事件は、支那全土の民衆を激昂さし、而して租界警官の實權が英人にある故を以て、排斥運動の中心目標は、日本から日英兩國に向けられ、更に全般的反帝國主義運動を惹起した。即ち、本文の冒頭に略述せる上海擾亂其他各地の排外運動の勃興がそれである。

五　反帝國主義運動の勃興

如何にも、今回の白熱化せる支那の排外擾亂の直接動因は、以上の如く、上海租界警官が、示威運動中の學生を射殺せる事件である。併し乍ら、實は、この學生射殺事件は、已に支那全土に瀰漫せる反帝國主義的氣運に、有力な口火を切つたと云ふ迄であつた。思ふに、利己的な、しかも日本に多大の反感と競爭心とを持つてゐる傲慢なる在支英人が、その實權の下にゐる租界警官をして、單なる排日運動を抑壓せんがために、示威運動者に一齊射擊をやる程、それ程力瘤を入れる筈がない。假りに、排日運動を抑壓せんとする好意を持つてゐたとしても（それが頗るあやしいが）、そのため、支那人の反感を購ふが如きことをなすには、彼等は餘りに打算に長じてゐる。しかも、尚ほ、示威運動に對して、學生を射殺する迄の斷乎たる强壓手段を採つた所以は、その運動が已に全般的な反帝國主義運動と化し、その槍玉に、盛んに英國が擧げられ、且つ、租界の計畫に反對運動を起してゐたからであると考へられる。このことは、前項に已述せる、當時の宣傳ビラから少し注意すれば誰にも容易に看取し得ることだ。

自然、右の學生射殺事件をキツカケに、いき、支那全土に勃興するに至つた、全般的な排外運動の眞相を知るためには、遡つて、支那に反帝國主義運動の旺んになるに至つた、根本事情を瞥見する必要がある。

そもく、支那の反帝國主義運動が旺んになるに至つたの

は、歐洲戰爭中の夫の民族自決主義に端を發したものであるが、しかし、それが最近、急激な進展を見たるわけは、トルコの反帝國主義運動の成功、並に、所謂相互平等を原則とした、露支、獨支兩協約の締結等に刺戟せられたことにある。如何にも、此の氣運を看取せる支那の政黨が、之をその政綱にとり入れ、之を宣傳しつゝありと云ふことは事實である。しかし、これを以て、政黨が之を政爭の道具になしつゝありと見るは皮相の見である。われ等は明治二十七年の條約改正に成功する迄、朝野を擧げて、いま支那が行ひつゝあると略ぼ同じ運動を、擧國一致の努力の目標としてやつて來たではないか。支那の政黨が、之をそのモツトーとなし得たことは、たま〳〵、支那に擧國一致の目標を與へ得る時期の熟せる證であつて、恰も、明治廿七年條約改正迄の日本が緊張しきつた努力を續け得た如く、いまや、支那もその時期に近づきつゝあるものと見るべきである。

さて、支那人の云ふ所の反帝國主義運動とは何か。その運動の急先鋒たる『京報』が昨年七月十五日「一切不平等條約廢止に關し、國民的大同盟組織を急告す」と題せる長文は、最もよく之を說明するものである。いまその要旨を次に掲げる。

「我國(支那)國際上の地位が益々低下するのは、各國の凌辱と侵略が益々甚だしい爲めである。それには固より支那國民側でも反省しなければならぬ點もあるが、要するに支那に於ける政治上、經濟上各種施設の停滯、人心の荒廢、國運の凋落は數十年來列强が支那を脅迫して種々不平等條約を締結したことに起因する。其最も明白なる一例は關稅條約である。則ち支那から輸出する粗製品、或は原料品は、輸出先で任意に稅率を增加されるが、支那への輸入品は奢侈品ですら從價百分の五を課せらるるに過ぎぬ。之れを英米に於ける支那茶の稅率三割に比すれば、正に一と六との比である。此等の不平等待遇によつて、支那は當然收得すべき關稅を收め得ず、國家の利益に主權を毀損する所の高利外債を借らねばならなくなつた。されば支那の外債は數十年來各國が支那に收むべき關稅の變形であるとも言ひ得るのである。又巨額の內債も大部分外債の元利支拂に對する借換へから生じたものであることを記憶せねばならぬ。仔細に考ふれば支那財政紊亂の原因は不平等な關稅條約にあるのである。之れを社會經濟方面から見ても、支那の工商業の不振は外國貨と自由競爭が出來ず、何時までも原料國の地位を脫し得ない爲めである。而して之れ亦唯一の不平等な關稅條約の故である。則ち現在の關稅程度は支那の致命傷である。

次に領事裁判權、租界、支那駐屯軍に付て言へば、領事裁判

權あるがために、上海會審公堂は世界に類なき暗黒な場所となり、其害を受くるものは領土の主人公たる支那國民である。各國駐屯軍の不合理は言ふまでもない。義和團の野蠻と無識は惡むべきも、此の如きは一時的少數者の稀有の偶發的暴行ではないか。然るに今日支那首府の公使館區域には城を築き砲を据へ、其狀戰時狀態に類して居る。又各國駐屯兵の騷擾は屢々見聞する計であり、軍艦の自由航行によつては、萬縣長沙事件の發生を見た。支那國民が偶々正當防衛により或は挑發せられて外人殺傷事件を起せば、その外人が無頼漢たると、盜賊たるを論ぜず、直ちに多額の賠償問題と惹起する。之れ等は皆不平等條約の然らしむる所ではないか。各國は支那を脅迫して締結した一切の不平等條約を撤廢せねばならぬ。而かも各國は容易に之れを肯かず、今仍ほ内心に侵略の念を藏して居ることは關稅問題の經緯を見ても明瞭である。列強は統一や、裁兵や、内外債の整理等を勸告するが、一たび關稅增徵の根本問題に觸れると、直ちに拒絕して其口蜜腹劍の醜態を露はすのである。要するに關稅さへ增加すれば支那の財政は遂に回復し、一切の外債の整理もつき、隨つて奪はれた主權や利益の回復も容易なのである。いづれにしても吾々は全力を以て一切不平等の條約を廢止することから始めなければならぬ。此見地から今日各國の對支眞意を知り、親善と否との標準を定める爲めには、其國が果して支那に對し不平等條約を廢止するの誠意あるや否やと見るが宜い。それに隨て其國貨を採用するや否やと定めるのである。尚進んで一切不平等條約廢止運動同盟を組織し、全國民を喚醒して種々の對策を講じ、最後の目的を達成するよう努力する事が肝要である」云々

斯様な趣旨に於て、昨年七月十三日、北京中央公園で反帝國主義運動大聯盟會が創立せられ、兩院議員、及華僑實業協進會、北京學生聯合會、國民外交改進會等五十餘團體の代表者二百餘名來會し、宣言書、會則等を決議し、爾後、各地に分會興るに至つた。今回の罷業が、反帝國主義大聯盟會によつて煽動せられ、指揮せられると云ふのは、即ち、この團體の活動である。いま、試に、昨年七月の創立大會に於て決議せし宣言書を次に揭げて、この團體の性質を知る參考に供する。

『反帝國主義同志に告ぐ、吾等は久しく…………………………、苛酷な杳の下に呻吟して居る、今や吾等は奮起して彼等と決戰すべき秋に達した、我等は世界に於ける被壓迫的弱小民族と聯合して、所謂共同戰線を形作らねばならぬ、大聯盟の目的は、

一、帝國主義的侵略政策を撲滅し、支那に對する一切不平等

の條約を廢除すること。

二、内外の團體個人を問はず、大聯盟の趣旨に同情して加盟を希望するものは、すべて同志と認む。

三、我が聯盟は反帝國主義運動以外の事項には一切關與せぬ。

四、……………………………………………………

之れによつて、支那に於ける對外人企業に對する罷業が、容易に、當該國一般に對する排外運動となり、更に又、それが、全般的な反帝國主義的排外運動に進展する思想的背景を理解し得るであらう。

六　日本の採るべき對策

以上に由つて、大體に、今回の支那に於ける邦人紡績罷業の原因、その暴動化せる譯、それが排日運動及び全般的反帝國主義運動化せる所以を述べ、且つ、その反帝國主義運動の性質を大略ながら示し得たことと思ふ。尤も、材料の多くを不完全なる新聞電報に頼らねばならない此際に於ける観察であるから、時に、枝葉の事實に多少の間違があるかも知れぬ。しかし乍ら、以上の觀察を根本から覆すが如きことはないものと信ずる。

扨て然らば、斯樣な觀察に基いて、日本はいま、今回の事件に鑑みて、如何なる對支政策を採るべきであるか。思ふに、その研究の觀點は二つある。(一)は在支企業家乃至商人の立場からであり、(二)は日本全體としての立場からである。しかし、云ふ迄もなく(一)の利害は、(二)の利害と矛盾せざる範圍に於て擁護すべきものである。從つて、今回の事件に鑑み、此際、我が對支政策を定むるに方つては、專ら(二)の日本全體としての立場から、研究を進むべきである。此點、一般の風潮が、我が在支企業家乃至商人の立場から出た運動乃至宣傳を中心として考察せられる傾のあるに鑑み、特に強調するの必要を感ずる。

先づ第一に、支那勞働者階級の要求する待遇改善に對しては、日本の政策としては之に極力援助を與ふべきであつて、決して之を壓迫すべきでない。云ふわけは、いま、日本の産業は、支那の低賃銀なる産業の競爭に負けて、各種の方面に於て、現在の我經濟行詰の主因の一をなしてゐる。現に、紡績業自身の如き、最も多く、この支那低賃銀の壓迫を蒙つてゐる産業の一つである。顧るに、歐米諸國の如きは、自國産業を低賃

諸國の競爭より免かれしむるために、人道の名に於て、國際會議其他の方法によつて、常に、後進國の勞働條件の改善に努力しつゝあることは周知のことである。即ち、之を他の言葉で繰返して云へば、我が在支紡績會社の如きは、事業の引合ふ限り、出來るだけ支那職工の賃銀引上げ運動を促進し、勞働組合の發達を圖ることによつて、本家の內地紡績事業を、支那紡績業の壓迫から救ひ得るのだ。而して又、之を日本民衆の立場から云ふも、支那に於ける勞働條件の改善を見ない限り、日本の民衆の生活は、支那勞働者の競爭のために、今後益々之を低下する外に、生きて行く途はないのである。

さり乍ら、然らば、我が在支資本家が、支那勞働者の待遇を出來るだけ改善することによつて、それだけによつて、今回の如き事件の發生を今後防止し得るかと云ふに決してさうではない。今日の如く、不平等條約によつて、日本が、政治的に支那を壓迫してゐる限り、假令、我が企業家、我が職工に優秀な點があつて、そのために、對支企業の發展を見たりとするも、之を支那人側から云へば、不平等待遇のために、手足を束縛せられて、甘い汁を外人に吸はれると、嫉視反感を喚るが自然である。現に、先に引用せる反帝國主義運動の中心思想は、明かに此處にある。そこで我が對支事業の發展が、支那民衆の嫉視反感を招くことなく、進んでは、却て歡迎せられるに至るためには、是非とも、今日の不平等條約を廢棄して、支那民衆をして、事業の競爭が事實公平に行はれてゐると云ふ信賴を持たしむることを先決條件とする。現にわれ〳〵は、いま、日本に於ても、多くの外人企業を、支那に於けるが如き反感なしに包容してゐるが、（例へば、芝浦製作所、日本電氣、東京電球、ニツポノホン、等枚擧に遑がない程である。）そのわけは、專ら對等條約の下に、實力競爭によつて行はれてゐることにある。

此の外、今日、支那人の對日反感を有する根因の一つは、前記せる所によつて看取し得る如く、日本人就中在支日本人の劣等國人扱の差別的侮辱及び虐待である。日本人の支那人に對する、斯の如き侮辱虐待の事實ある限り、百の日支親善論も、要するに痴人の寢言である。所で、斯くの如き日本人就中在支日本人の支那人侮辱及虐待も、元はと云へば、實は治外法權其他の如き、差別的特權を、政治的に日本人に與へてゐるからである。蓋し人間と云ふ動物は、さうした特別の權力を與へられると、直ちに、之を鼻にかけて、ノサバリ廻る弱點を誰しも持つてゐるものであるからだ。されば一方に、支那に於て、治外法權其他の不平等條約を强奪しつゝありながら、他方に於て、支那人に對し差別的侮辱や虐待を加へるなと注文するが如きは、

恰も猫の前に鰹節を與へておきながら、之を喰ふなと命ずるが如き無理である。この點から云ふも、即時、日本は支那に對する治外法權其他の不平等條約の改正に着手すべきだ。

いかにも、或人は云ふであらふ『對支事業の發展を圖るためには、先づ第一に支那の安寧秩序が信頼せられる程度に迄維持せられねばならない。然るに、今日の支那の現狀に於ては未だその信頼はおかれない狀態にある。之れ尚ほ、治外法權を必要とする所以であつて、現に、我が紡績會社その他の如きも、このため、地代の高きをいとはずして、出來るだけ租界内に工場を設けつゝある有樣である。』と。

さり乍ら、支那に於て、われ〳〵外國人自身が警察の責任を負ひ、安寧秩序の任に當ることは、治安維持に大切の場合、必要の手段をとることが却つて支那民衆の反感を購ひ、却つて、秩序維持の目的を遂せない惧のあることは、今度の事件に於て容易に看取出來る。例へば、靑島に於ては、罷業者の工場占領其他に對し、……………………………………………たるにも拘らずこれが、支那官憲の手によつて行はれたるの故を以て、上海のそれの如き、民衆の排日的激昂と反感とを齎らすことなくしてすんだのである。兎に角、必要なる安寧秩序の維持の責任は、之れを支那官憲に負はしめることが、有事の場合、最も有效に目的を達し得ると云ふことだけは、今回の事件によつて證明せられてゐる。

今回の支那に於ける排日罷業運動に關する我が對策を、日支兩國の將來の親善に導くための解釋と云ふ見地に立つて考ふる限り、——而して、有ゆる事件の最善の解決は、將來の利益に立脚してのみ行はれるものであつて、過去の經緯と云ふが如き小事に拘はるべきでない——我が對支政策は、以上の如き立場に基いて事件を解決する外に途はない。

所で、思ふに、此際、以上の如き對支政策を採用するに方つて問題となる點は、斯くして、支那の反帝國主義運動を援助することが、我が國際政策として、果して可なるや否やであらう。しかし、私は、此の點から云ふも、我が國は、寧ろ此際支那と手をとつて、歐米の帝國主義撲滅の烽火を擧ぐべき位置にあると信ずる。

元來、日本今日の經濟的行詰の原因は、之を國際的に見る限り、歐米の帝國主義のために、豐富なる資源と、有望なる販路とが、白人國家に獨占せられてゐることに在る。いかにも、日本自身、歐米の尻馬に乘つて、……………………………………………………。しかし乍ら、日本今日の經濟的行詰は、斯の如き、チツボケの土地を、如何に完全に、…………

……、これで國際的に解決せられる望は全くないのだ。それよりも、……………………、世界就中東南洋の植民地の解放を、歐米に强要する力が、遙かに有利に、喪ふ處よりも得る所が多大である。然り、少くとも植民地の世界的解放なき限り、日本今日の行詰を打開する國際的方法はないのだ。況んや、今日の支那に於ける反帝國主義運動の趨勢に見て、日本既得の對支帝國主義的位置は、到底永く、之れを今日のまゝに維持することの困難なる事情なるに於てをや。然るに、いま支那に於ける反帝國主義運動は、その味方とせる諸國の中から日本を除き、却つて之を敵も敵、最大の敵の一つに擧げてゐる。斯の如きは、支那の民衆が、一部の日本資本家の利益關係のみに着目して、日本全體としての民衆の利害關係に着目せざる誤解である。我等は日本民衆の名に於て日本の利害が、支那の反帝國主義運動の最有力の味方であることを此の機會に宣言する。併し乍ら、實を云へば、斯の如き錯覺は、從來、一等國とか、五大强國とかの空名を與へられて、御メデタクも有頂天になつてゐた日本民衆の寧ろ專有する所のものであつたのだ。我等はいま、我國現實の行詰の原因に醒めて、その本然の利害關係を覺り、支那の反帝國主義運動と共同戰線に立つべきである。

支那學生運動と共産派

松本鎗吉

永續した靜謐をもち得ない支那人は氣の毒である。昨秋奉直戰で厭やといふ程苦しめられた支那は、今度の上海事件で又も苦惱を嘗めさせられた。上海に勃發した排外的な民衆運動は、どの方面から觀ても洵に容易ならざる問題に相違ない、がしかし民衆運動の中心勢力となつて思ふ存分狂暴を逞しふしたのが無賴の徒でなくて學生團であり、その振り廻した標語が、列強が毛蟲の如く忌み嫌ふ『帝國主義打破』『不平等條約の撤廢』であると云つて今更の如く喫驚色を失するには當るまい。

支那の青少年學徒が國權恢復熱に冒されてゐること、民衆運動の背後に勞農露傳の反帝國主義と共産赤化の魔手が動いてゐることは共に一點疑の無い所である。が此れ等も決して一夜の間に現はれ出た新奇な事態ではない。

尠なくとも支那の最近思潮傾向と所謂學生運動に就いて一通りの理解をもつてゐる人は上海の民衆運動の性質を正解しその成り行きを靜觀し得た筈である。

今更、支那の國權恢復運動についての解說を試みることは厄介な業である。蒔かれた種子は何時か芽を出し實を結ぶ、支那の積弱と支那人の蒙昧を奇貨として、切り取り強盜の如く支那から領土や利權を强奪し、その上支那人を犬猫同樣に侮蔑して來た人々の仕業は不知不識の裡に支那人に排外思想の種子を蒔いたも同樣である。支那人が國家的觀念をもつてゐる限り、强奪された所謂國權を恢復して國家としての支那の體面を全たからしめんと熱求するのは寧ろ當然である。

支那人の國權恢復熱が如何に旺盛であるかを說明する爲めに、わざわざ義和團事件を擔ぎ出す必要はない、辛亥革命以來の支那政府の對外政策の基調をなす者は徹頭徹尾『國權の恢復』である。巴里華府の兩會議に於て支那全權が國權恢復案の通過に狂奔努力したことは世人の記憶にあり〳〵と殘つてゐる

筈である。大正八年の五四運動、十二年の旅大回收運動、昨年の反帝國主義聯盟の成立、今回の上海事件、これ等は皆、支那民衆の胸に燃ゆる『國權恢復』の噴火である。上海の民衆運動も例によつて旬日を出でずして鎭靜に歸するであらうが、鎭靜に歸するといふことは決して國權恢復運動の死滅を意味しない。目的が達成せられざる限り機會ある每に今回の如き無茶な運動は幾十度も繰り返される筈である。

○

清朝時代のことは措く、民國となつて以來支那は幾多の民衆運動をもつた、が支那の民衆運動の殆んど全部は對外問題に基因しその中心勢力をなす者は必ず學生團であつた。學業に專念すべき筈の青少年學徒が常に民衆運動の急先鋒となり第一線に立つて狂暴を働くなどといふことは今日に於ては恐らく支那以外には見られない事象であらう。支那の國狀の然らしむる所ではあるが悲しむべきことである。

支那の青少年學徒が紛亂のどん底にある自國の改善に冷々淡々でありながら、太陽に吠ゆる犬の如く徒らに國權恢復に狂奔するのは解し難い所である、强いて理窟を付ければ、彼等が軍閥の跋扈に因る絕えざる紛亂に愛想を盡かし、國權を恢復することが自國を改善する捷徑と心得てゐるのかも知れない、が理窟はどうでもよい。この機會に先づ支那における學生運動の過去を顧みる。

支那に最初に現はれた學生運動は、あの有名なる『五四運動』である、民國八年五月四日北京大學生を首腦とする北京各學校學生二千餘名は巴里會議における自國の失敗に憤激し『膠州亡矣山東亡矣』の幟旗を押し立てゝ、全市に亘つて一大示威運動を行ひ、親日派の巨頭と目された交通總長曹汝霖、幣制局總裁陸宗輿、駐日公使章宗祥の諸氏を襲擊し、曹氏邸を燒き章氏に重傷を負はし、三氏を共の職から失はしめた。この運動は全國學生に蹶起を促す烽火となり、上海、漢口、廣東をはじめ全支の學生團は北京に呼應して猛烈なる排日運動を起し支那全土は僅か一日にして排日排日貨の聲に被はれて終つた。學生團憤慨の前に野心政客の巧妙なる煽動があり、運動の背後に排日貨によつて利を貪らんとする奸商が潜んでゐたことは勿論である、而して客氣に逸る學生團の意氣は軒昂としてその運動が異常に猖獗を極めたため當路官憲も手の付け樣なく之れを放任した、この運動によつて學生團は一般民衆と當路官憲の共に組し易きを悟り、野心ある政客、社會主義者等は學生團を指嗾し、學生運動を利用することの効多きを知つた。

次に行はれた大規模の學生運動は旅大回收運動である。民

十二年四月、北京政府は日本政府に大正四年日支條約廢棄の交渉を持ち掛けて一蹴せられた。北京政府が此の交渉を提起したのは北京國會の急進的國權恢復論者たる雷殷、胡鄂公、張樹林一派が國會に『日支條約無効宣布案』を提出し國會が一議に及ばず可決して政府に其の實行を强請したに基く、日本政府の一蹴が「五四運動」によつて味を覺えた大學生團の憤激を誘致し、猛烈なる學生運動は一轉して全國に亘る一大排日運動となり、日本は又復非道い目に遭はされた。

この運動も五四運動と同樣、初期の目的を貫徹するには寸効も無かつたが學生運動の威力を中外に宣示し、全國に國權恢復熱を浸潤せしむるに意想外の効果を齎らした。しかしてその必然の結果として些細な問題に迄學生運動を利用、惡用せんとする不屆者が續出し、且つ爾來猫も枘子も國權恢復を口にするに至つた。

五四運動と旅大回收運動とは共に單純なる排日運動ではなく、支那國民の國權恢復運動の一部の表現であることは勿論であるが、兩運動共、その對象が日本一ケ國であつたがために心なき歐米人は單純なる排日運動に過ぎないとなし對岸の火災視して別に深く思念省察する所が無かつた。

支那全國の學生が如何に組織的に根氣よく且つ猛烈に示威運動を行つたとて一旦條約によつて他國の手に歸して終つた所謂國權が容易に返還されるものでない。彼等の運動が常に各都市を擾亂の巷と化しただけで結局失敗に終るのは固より當然である。が彼等と雖も、この邊のことを知らぬではない。知りつゝ之を行ふのである。故に幾度失敗の苦杯を甞めても、否失敗を繰り返せば繰り返す程、支那人の國權恢復熱は益々内に鬱積し、その運動は愈々狂暴化して行くのである。

○

民國十三年は支那の學生運動の方向を轉換せしめた記憶すべき歳である。從前の學生運動は内に多少不純分子が混入してゐたとはいへ大體に於て國家主義を基調とする純然たる愛國運動であつた。が露支國交が恢復され勞農の對支赤化宣傳が支那各地に行はれる共に支那の共産主義者、社會主義者は著しく左傾し、青少年學徒は不智不識の間に過激派的感化を受けて一樣に赤化的傾向をもち始めた。從來の國權恢復運動は國權奪取國に向つて眞正面から國權の返還を要請してその目的を遂せんとし、要請の聽かれざる場合に憤懣を暴行その他の方法によつて霽らすを例としたのであつたが學生思想の變化は從來の運動を生温しとなし運動の目標を『排外』に置き、國權恢復を第二義的のものとなす傾向を生むに至つた。之れ即ち學生運動の赤化

である。學生運動の赤化はとりも直さず民衆運動の赤化である。しかして、この新しい排外思想の勃興は反帝國主義運動を誘致した。而してその反帝國主義運動の大同團結したものが即ち北京に現はれた『反帝國主義運動大聯盟』である。

昨年七月十三日、雷殷、胡鄂公等國會の共產派、北京大學系の共產主義者李石曾、李大釗の諸氏が發起人となり學生團その他五十余の團體を糾合し反帝國主義運動大聯盟を組織し全國の各團體に飛激して參加を求め、同時に各國政府に對し『中國々民は反帝國主義運動の聯盟を創立し、反帝國主義の精神に反し帝國主義列强が中國を壓迫して訂したる一切の不平等條約を廢除し、中國々民をして政治的經濟的一切の自由を取得せしむるを目的とす』と打電し其の態度を宣明した。

反帝國主義運動聯盟の成立は直接全國に反響し、反帝國主義、不平等條約の廢棄は支那に於ける民衆運動の新らしき標語となり、當時廣東に在つた國民黨の共產派は此の新旗幟を翳して沙面居留地の回收關稅自主權の回收に向つて具體的直接行動を企劃し、强硬なる對外罷業を敢行すると共に武力を以て稅關を占領せんと試みた。これ等の新傾向を看取した勞農政府駐支全權は『今に見よ支那の地の上から資本主義の影を拔き去つて終ふであらう』と放言したと傳へられてゐる。過般、上海、青島等にて行はれた日支勞働爭議に於ける支那勞働者の狂暴な振舞は未だ嘗つて見ざる程であつて、その背後には勿論勞農の宣傳者と氣脈を通した支那共產派の指嗾煽動があつたが、一般勞働者の頭が一樣に著しく左傾赤化してゐることを證據立てたものである。

○

學生運動の赤化傾向を增長し且つそれと密接不可分の關係に立つてゐるのは國民黨の共產派である。

辛亥革命以來、孫文氏に統率せられて來た國民黨は數年前までは孫氏の案出した三民主義五權憲法を黨の精神として與黨一致、支那の政治革命の完成に向つて進んで來たが、露國革命以來、孫文氏の思想に一大動搖を來たすと共に、黨の幹部も共產派と非共產派の二つに分れ、共產派は今後の國民黨は無意味なる政治革命より斷然手を引いて社會革命に向つて突進すべしと主張し、非共產派は北方軍閥と協調して政治革命によつて新支那を建設すべしと主張して双方固く執つて讓らず、紛爭に沒頭してゐる間に總理孫文氏は他界し、國民黨は終に分裂して終つた。共產派の首領は汪兆銘、陳獨秀、李石曾、譚平山、李大釗といつた人々であつて何れも共產主義の驍將である、分裂後の共產派は上海と廣東に根據を構へ、社會革命のために『民衆の中へ』

驀進し『反帝國主義』と『不平等條約廢棄』を高調し勞農赤化の轍を踏みあらゆる機會を共產主義の宣傳煽動に利用してゐる。

上海の民衆運動が何の爲めに行はれ、如何なる性質のものであるかは新聞紙の懇切なる報道によつて既に明白となつてゐる、即ち內外棉工場の罷業を煽動した學生の公判が五月三十日上海會審衙門に行はれたる際、上海學生團は拘禁學生の釋放を要求して得意の示威運動を行ひ帝國主義打破、不平等條約撤廢の宣傳ビラを撒布し一般的排外運動の氣勢を擧げんとし南京路にて工部局警察隊と衝突し、警察隊の發砲により即死者三名、負傷者多數を出したため、學生團は狂暴性を刺戟されて暴徒と變じあらゆる暴行を働くに至つたといふのが表面に現はれたる事件の顚末である。

この事件が列强識者の視聽を惹き由々しき問題として取扱はれた所以のものは學生團の目標が一般的排外運動の氣勢を擧ぐるにあつたことと、狂暴の度が異常に非道かつたことと最後にこの事件の背後に國民黨共產派と勞働共產主義者が潜在してゐることが明白に看取され且つ運動そのものが著しく過激派的色彩を帶びてゐたためである。しかしこの運動も一應各都市を風靡した後、從來の學生運動と同樣案外無雜作に落ち付くであらう。故に運動が在支外人の生命財產等に及ぼす損害については左迄憂慮するに當らない。が今後共產派の暗中活躍が益々猛烈となることと、學生團及び一般勞働者の思想が一層左傾赤化するであらうことは今日より豫期して置かねばならぬ。

上海暴動事件と國民黨共產主義者並に勞農共產主義者の干繫を具體的に說明することは只今の所出來難い、ただ此機會に上海暴動の教唆指導の任を勤めた共產主義者として名が出た有名なる共產主義者陳獨秀、汪兆銘兩氏について概略的な說明を加へて未だ兩氏について知る所なき士の參考の一端に供したい。

○

支那將來のレーニンを以て自他共に許してゐる陳獨秀氏の生ひ立ち、共產主義の驍將となる迄に步んで來た道を振り返つて見る度に一種の苦笑を禁じ得ない。

安徽省懷寧縣の素家に生れ、二十餘年勤直に學校教師を勤めた陳氏は、北京大學文科教授となるや志操を一變し流行思想の卸問屋をやり出したのである、どう云ふ風の吹き廻しか、陳氏は一夜の裡に『新思潮の先驅者』に早替りをなし、當時孔教國教問題が起つてゐたので、早速『信教自由』の熱心なる支持者となつて袁世凱その他の時の權力者に喰つてかゝり、次いで儒教道德を槍玉に上げて『忠孝節義は奴隸の道德なり、輕刑薄賦は奴隸の幸福なり、稱頌功德は奴隸の文章なり、拜爵賜第は奴隸の

迷妄なり」といふ過激な語を吐いて世人を吃驚させ更に文學革命論、軍國主義打破論、偶像破壞論、勞働問題、婦人問題等を片つ端しから拉し來つて新奇を衒ひ、社會主義が流行するや直ちに社會主義者と變り、過激主義が論ぜられるや直ぐ之れに共鳴する等、宛として水草を逐ふ遊牧者の如く彼の思想は絕えず變轉してゐた、が民國八年、北京大學に新舊學派の衝突が起るや彼は新學徒の中心人物となつて活躍した、ために舊學派の范源濂等の反對憎惡を購ひ、終に過激主義宣傳の嫌疑の下に、北京大學を追はれ囹圄の人となり、出獄後は立派な社會主義者となり、各地を放浪しつゝ社會主義の宣傳に努め「支那將來のレーニン」を以て稱せられるに至つたのである。後廣東の孫文氏に招聘せられて軍政府の教育委員長となり、盛んに過激急進思想を鼓吹したため全國の急進思想は氏の幕下に集り一時は廣東青年學徒渴仰の的となつた。がこれも永續せず他と衝突して廣東を去り今度は上海で同志を糾合し過激主義の宣傳に努力したため佛國官憲に逮捕され、釋放された時は過激共產主義者となつて居り、最近再び國民黨共產派と握手し共に上海事件の黑幕となつたのである。今日彼を目して將來支那の過激派を背負つて立つ者となすは決して買ひ被つた見方ではない。

陳氏と共にあつて且つ比肩し得る者は國民黨共產派の牛耳を握つてゐる汪兆銘氏である若くして革命主義を奉じ革命の際は孫文、黃興諸氏を補佐して日夜奔走し、遂には北京に潛行し攝政王の暗殺を企て、抑へられて囹圄の人となり徹宵悲憤の涙を鐵窓に濺えた程の熱血兒であつた、後佛國に遊んで西洋の新思想を探究して歸來、孫氏の他界する迄第一の乾兒としてあらゆる方面に活躍して來たが、孫氏の死と同時に非共產派と絕緣して敢然として『共產主義による社會革命』へ身を投じた、彼の思想は主としてクロポトキンを祖述したものであり、率先して勞農共產主義者と氣脈を通じたことは世間周知の事である、現在に於て勞農政府と最も密接な聯絡關係があるのは彼等一派であるといふ世の推斷は恐らく間違ないであらう。

○

兩三年前までは『支那の赤化』は主義者の囈語とされ一般世人は頭から相手にしなかつた。

が愛國的國權恢復運動は一轉して反帝國主義運動となり、再轉して共產主義運動となりつゝある。共產主義者の努力が果してどれだけの效果を擧げ得るか、學生運動が、どの程度迄左傾するかは依然として將來に貽された疑問であるが、支那における軍閥と共產主義者との正面衝突の日が餘り遠くはない樣な氣がする。

觀畫談

幸田露伴

ずつと前の事であるが、或人から氣味合の妙な談を聞いたことがある。そして其話を今だに忘れてゐないが、人名や地名は今は既に林間の焚火の煙のやうに、何處か知らぬところに逸し去つてゐる。

話を仕て呉れた人の友達に某甲といふ男があつた。其男は極めて普通人型の出來の好い方で、晩學では有つたが大學も二年生まで漕ぎ付けた。といふものは其男が最初甚だしい貧家に生れたので、思ふやうに師を得て學に就くといふ譯には出來なかつたので、田舍の小學を卒ると、やがて自活生活に入つて、小學の教師の手傳をしたり、村役場の小役人みたやうなことをしたり、いろ／＼困苦勤勉の雛型其物の如き月日を送りながらに、自分の勉强をすること幾年であつた結果、學問も段々進んで來るし、人にも段々認められて來たので、いくらか手蔓も出來て、終に上京して、やはり立志傳的の苦辛の日を重ねつゝ、大學にも入ることを得るに至つたので、それで同窓中では最年長者——どころでは無い、五つも六つも年上であつたのである。蟻が塔を造るやうな遲々たる行動を生眞面目に取つて來たのであるから、浮世の應酬に疲れた皺をもう額に疊んで、心の中にも他の學生にはまだ出來て居らぬ細かい襞積が出來てゐるのであつた。然し大學に在る間だけの費用を支へるだけの貯金は、恐ろしい儉約と勤勉とで作り上げてゐたので、當人は初めて

眞の學生になり得たやうな氣がして、實に清淨純粹な、いぢらしい愉快と矜持とを抱いて、餘念も無しに碩學の講義を聽いたり、豐富な圖書館に入つたり、雜事に侵されない朝夕の時間の中に身を置いて十分に勉强することの出來るのを何よりも嬉しいことに思ひながら、所謂「勉學の佳趣」に浸り得ることを滿足に感じてゐた。そして他の若い無邪氣な同窓生から「大器晩成先生」などゝいふ渾名、それは年齡の相違と、年寄じみた態度とから與へられた渾名を、臆病臭い微笑でもつて甘受しつゝ、平然として獨自一個の地歩を占めつゝ在學した。實際大器晩成先生の在學態度は、其の同窓間の無邪氣な、言ひ換れば低級で且つ無意味な飮食の交際や、活潑な、言ひ換れば青年的勇氣の漏洩に過ぎぬ運動遊戲の交際に外れることを除けば、何人にも非難さるべきところの無い立派なものであつた。で自然と同窓生も此人を仲間はずれにはしながらも内々は尊敬するやうになつて、甚だしい茶目吉一二人のほかは、無言の同情を寄せるに吝では無かつた。

ところが晩成先生は、多年の勤苦が酬ひられて前途の平坦光明が望見せらるゝやうになつた氣の弛みの爲か、或は少し度の過ぎた勉學の爲か、何か知らぬが氣の毒にも不明の病氣に襲はれた。其頃は世間に神經衰弱といふ病名が甫めて知られ出した時分であつたのだが、眞に所謂神經衰弱であつたか、或は眞に慢性胃病であつたか、兎に角醫博士達の診斷も朦朧で、人によつて異る不明の病に襲はれて、段々衰弱した。切詰めた豫算だけしか有して居らぬことであるから、當人は人一倍困悶したが、何樣にも病氣には勝てぬことであるから、暫く學事を抛擲して、心身の保養に力めるが宜いとの勸告に從つて、そこで山水清閑の地に活氣の充ちた天地の灝氣を吸ふべく東京の塵埃を背後にした。

伊豆や相模の歡樂郷兼保養地に遊ぶほどの餘裕のある身分では無いから、房總海岸を最初は撰んだが、海岸は何樣にも騷雜の氣味があるので晩成先生の心に染まなかつた。さればとて故郷の平蕪の村落に病軀を持歸るのも厭はしかつた

と見えて、野州上州の山地や温泉地に一日二日或は三日五日と、それこそ白雲の風に漂ひ、秋葉の空に飄るが如くに、ぶらり〳〵とした身の中に、もだ〳〵する心を抱きながら、毛繻子の大洋傘に色の褪せた制服、丈夫一點張りのボックスの靴といふ扮裝で、五里七里歩く日もあれば、又汽車で二十里十里歩く日もある、取止めの無い漫遊の旅を續けた。

憫む可し晩成先生、嚢中自有錢といふ身分では無いから、隨分切詰めた懷でもつて、物價の高くない地方、辟澤氣味の無い宿屋〳〵を渡りあるいて、又機會や因緣があれば、客を愛する豪家や、心置無い山寺なぞをも手頼つて、遂に福島縣宮城縣も出抜けて、奥州の或邊僻の山中へ入つて仕舞つた。先生極眞面目な男なので、俳句なぞは薄生意氣な不良老年の玩物だと思つて居り、小說稗史などを讀むことは罪惡の如く考へて居り、徒然草をさへ、餘り良いものぢや無い、と評したといふ程だから、隨分退屈な旅だつたらうが、それでもまだしも仕合せな事には、少しばかり漢詩を作るので、それを唯一の旅中の樂にして、踽々然として夕陽の山路や曉風の草徑をあるき廻つたのである。

秋は早い奥州の或山間、何でも南部領とかで、大街道とは二日路も三日路も横へ折れ込んだ途方も無い僻村の或寺を心ざして、其男は鶴の如くに痩せた病軀を運んだ。それは旅中で知合になつた遊歷者、其時分は折節然樣いふ人が有つたもので、律詩の一二章も座上で作ることが出來て、一寸米法山水や懷素くさい草書で白ぶすまを汚せる位の器用さを持つたのを資本に旅から旅を先生顏で渡りあるく人物に敎へられたからである。君は然樣いふ道を歩いてゐるなら、これ〳〵の處に斯樣いふ寺がある、由緖は良くても今は貧乏寺だが、其寺の境内に小さな瀧が有つて、其瀧の水は無類の靈泉である。養老の靈泉は知らぬが、隨分響き渡つたもので、二十里三十里をわざ〳〵其瀧へかゝりに行くものもあり、又瀧へ直接にかゝれぬものは、寺の傍の民家に賴んで其水を汲んで湯を立てゝ貰つて浴する者もあるが、不思議に長病が治つたり、特に醫者に分らぬ正體の不明な病氣なぞは治るといふことであつて、語り傳へた現の證據はいく

らでも有る。君の病氣は東京の名醫達が遊んでゐたら治るといひ、君もまた遊び氣分で、飛んでも無い用合などをノソノ\と步いてゐる位だたら、とてもの事に其處へ遊んで見たまへ。住持と云つても木綿の法衣に襷を掛けて芋畑麥畑で肥柄杓を振廻すやうな氣の置けない奴、それと其弟子の二歲坊主が居るきりだから、日に二十錢か三十錢も出したら寺へ泊めても呉れるだらう。古びて歪んでは居るが、座敷なんぞは流石に惡くないから、そこへ陣取つて、毎日風呂を立てさせて、遊んで居たら妙だらう。景色もこれといふ事は無いが、幽邃で中々良いところだ。といふ委細の談を聞いて、何となく氣が進んだので、考へて見る段になれば隨分頓興で物好なことだが、わざ〳〵敎へられた其寺を心當に山の中へ入り込んだのである。

路は可なりの大さの溪に沿つて上つて行くのであつた。兩岸の山は或時は右が遠ざかつたり左が遠ざかつたり、又或時は右が迫つて來たり左が迫つて來たり、時に兩方が迫つて來て、一水遥に遠く巨巖の下に白泡を立てゝ沸り流れたりした。或場處は路が對岸に移るやうになつてゐる爲に、危い略杓(マルキバシ)が目の眩くやうな急流に架(カ)つて居るのを渡つたり、又少時して同じやうなのを渡り反つたりして進んだ。恐ろしい大きな高い巖が前途に横たはつてゐて、あのさきへ行くのか知らんと疑はれるやうな覺束ない路を辿つて行くと、辛うじて其の岩岬(イハツバ)に線(イト)のやうな道が付いて居て、是非無くも蟻の如く蟹の如くになりながら辿り過ぎては、ホッと息を吐くことも有つて、何だつてこんな人にも行會はぬ所謂僻地窮境に來たことかと、聊か後悔する氣味にもならざるを得ないで、薄暗いほどに茂つた大樹の蔭に憩ひながら明るく無い心持の沈默を續けてゐると、ヒーッ、頭の上から名を知らぬ鳥が意味の分らぬ歌を投げ落したりした。

路が漸く緩(ナル)くなると、對岸は馬鹿馬鹿しく高い巖壁になつて居る其下を川は流れて、此方は山が自然に開けて、少しばかり山畠が段々を成して見え、粟や黍が穗を垂れて居るかと思へば、兎に荒されたらしい至つて不景氣な豆畠に、も

う態を失つて枯れ黒んだ豆がショボ〳〵と泣きさうな姿をして立つて居たりして、其の彼方に古ぼけた勾配の急な茅屋が二軒三軒と飛び〳〵に物悲しく見えた。天は先刻から薄暗くなつて居たが、サーツといふ稍々寒い風が下して來たかと見る間に、楢や欅の黄色な葉が空からばらばらついて降つて來ると同時に、木の葉の雨ばかりでは無く、ほん物の雨もはらはらと遣つて來た。溪の上手の方を見あげると、薄白い雲がずん〳〵と押して來て、瞬く間に峰巒を蝕み巖を蝕み、松を蝕み、忽ちもう對岸の高い巖壁をも綸心に蝕んで、好い景色を見せて呉れるのは好かつたが、其雲が今開いてさしかざした蝙蝠傘の上にまで蔽ひかぶさつたかと思ふほど低く這い下つて來ると、堪らない、ザアツといふ本降りになつて　林木も聲を合せて、何の事は無い此の山中に入つて來た他國者をいちめでもするやうに襲つた。晩成先生も流石に慌て心になつて少し驅け出したが、幸ひ取付きの農家は直に間近だつたから、トツトツトツと走り着いて、農家の常の土間へ飛び込むと、傘が觸つて入口の檐に竿を横たへて懸け吊してあつた玉蜀黍（タウモロコシ）の二把をバタリと落した途端に、土間の隅の臼のあたりにかがんで居たらしい白い庭鳥が二三羽キヤキヤキヤツと驚いた聲を出して走り出した。

何だナ

と鈍い聲をして、土間の左側の茶の間から首を出したのは六十か七十か知れぬ白髮の油氣の無い、火を付けたら心よく燃えさうに亂れ立つたモヤ〳〵頭な婆さんで、皺だらけの黄色い顏の婆さんだつた。キマリが惡くて、傘を搾めながら一寸會釋して、寺の在處を尋ねた晩成先生の頭上から、じた〳〵水の垂れる傘のさきまでを見た婆さんは、それでも此邊には見慣れぬ金釦の黑の洋服に尊敬を表して、何一つ咎立がましいことも云はずに、

上へ〳〵と行けば、じねんにお寺の前へ出ます、此處は云はゞ門前村ですから、人家さへ出抜ければ、すぐお寺で。

禮を云つて大器氏は其家を出た。雨は愈々甚くなつた。傘を擴げながら振返つて見ると、木彫のやうな顏をして婆さ

んはまだ此方を見てゐたが、妙に其顔が眼にしみ付いた。

――間違に立つてゐる七八軒の家の前を過ぎた。何の家も人が居ないやうに寂閑としてゐた。そこを出抜けると成程寺の門が見えた。瓦に草が生えて居る、それが今雨に濡れてゐるので甚く古びて重さうに見えるが、兎に角可なり其昔の立派さが偲ばれると同時に今の甲斐無さが明らかに現はれてゐるのであつた。門を入ると寺内は思ひのほかに廓落と濶くて、松だか杉だか知らぬが恐ろしい大きな木が有つたのを今より何年か前に斫つたと見えて、大きな切株の跡の上を、今降りつゝある雨がおとずれて其處に然様いふものゝ有ることを見せてゐた。右手に鐘樓が有つて、小高い基礎の周圍には風が吹寄せた木の葉が黄色く又は赭く濡れ色を見せて居り、中ぐらゐな大きさの鐘が、漸く逼る暮色の中に、裾は緑青の吹いた明るさと、龍頭の方は薄暗さの中に入つて居る一種の物々しさを示して寂寞と懸てゐた。これだけの寺だから、屋の棟の高い本堂が見えさうなものだが、それは回祿したのか何様か知らぬが眼に入らなくて、小高い處に庫裡様の建物があつた。それを目ざして進むと、丁度本堂佛殿の在りさうな位置のところに、礎石が幾箇ともなく見えて、親切な雨が降る度に訪問するのであらう今も其訪問に接して感謝の嬉し涙を溢らせてゐるやうに柱の根入りの窩に水を湛へてゐるのが能く見えた。境内の變にからりとして居る譯もこれで合點が行つて、有る可きものが亡せてゐるのだなと思ひながら、庫裡へと入つた。正面はぴつたりと大きな雨戸が鎖されてゐたから、臺所口のやうな處が明いてゐたまゝ入ると、馬鹿にだゞ濶い土間で、土間の向ふ隅には大きな土竈が見え、つい入口近くには土だらけの腐つたやうな草履が二足ばかり、古い下駄が二三足、特に齒の下駄の一ツがひつくり返つて腹を出して死んだやうにころがつてゐたのが晩成先生のわびしい思を誘つた。

頼む、

と、餘り大きくは無い聲で云つたのだが、がらんとした廣土間に響いた。しかし其爲に塵一つ動きもせず、何の音も無く靜であつた。外にはサアツと雨が降つてゐる。

頼む、

と再び呼んだ。聲は響いた。答は無い。サアツと雨は降つてゐる。

頼む、

と三たび呼んだ。聲は呼んだ其人の耳へ反つて響いた。然し答は何處からも起らなかつた。外はたゞサアツと雨が降つてゐる。

頼む。

また呼んだ。例の如くやゝしばし音沙汰が無かつた。少し焦れ氣味になつて、また呼ばうとした時、鼬か大鼠かが何處かで動いたやうな音がした。すると頓て人の氣はひがして、左方の上り段の上に閉ぢられてゐた間延びのした大きな障子ががた〳〵と開かれて、鼠木綿が斑汚れした着附に、白が鼠になつた帶をぐる〳〵と所謂坊主卷に卷いた五分刈では無い五分生えに生えた頭の十八か九の書生のやうな僮僕のやうな若僧が出て來た。晩成先生も大分遊歷に慣れて來たので、此處で宿泊謝絕などを食はせられては堪らぬと思ふので、ずん〳〵と來意を要領よく話をして、白紙に包んだ多少錢（ナニガシ）かを押付けるやうに渡して仕舞つた。若僧はそれでも坊主らしく

しばらく

と、しかつめらしく挨拶を保留して置いて奥へ入つた。奥は大分深いかして何の音も聞えて來ぬ、シーンとしてゐる。

外では雨がサアツと降つてゐる。

土間の中の異つた方で音がしたと思ふと、若僧は別の口から土間へ下りて、小盥へ水を汲んで持つて來た。

マ、兎に角御すゝぎをなさつてお上りなさいまし。

しめたと思つて晩成先生泥靴を脱ぎ足を洗つて導かるゝまゝに通つた。入口の室は茶の間と見えて大きな爐が切つてある十五六疊の室であつた。そこを通り拔けて、一疊幅に五疊か六疊を長く敷いた入側見たやうな薄暗い部屋を通つたが、茶の間でも其部屋でも、處々で足踏につれてボロ／＼と凹んで浮いて居る根太板のヘンな音がした。

通されたのは十疊位の室で、そこには大きな矮い机を横にして此方へ向直つてゐた四十ばかりの日に焦げた赭い顏の丈夫さうなヅク入が、赤や紫の見える可笑しい程華美では有るが然しもう古びかへつた馬鹿に大きくて厚い蒲團の上に、小さな圓い眼を出來るだけ瞬開してムンヅと坐り込んでゐた。麥藁帽子を冠らせたら頂上で踊を踊りさうなビリケン頭に能く實が入つて居て、これも一分刈では無い一分生えの髮に、厚皮らしい赭い地が透いて見えた。そして其の割合に小さくて素敵に堅さうな首を、發達の好い丸々と肥つた豚のやうな濶い肩の上にシツカリすげ込んだやうにしてヒヨロ／＼と風の柳のやうに室へ入り込んだ大器氏に對つて、一刀をピタリと片身青眼に擬けたといふ工合に手丈夫な視線を投げかけた。晩成先生聊かたぢろいだが、元來正直な君子で仁者敵無しであるから驚くことも無い、平然として坐つて、來意を手短に述べて、それから此處を教へて呉れた遊歷者の噂をした。和尚は其姓名を聞くと、合點が行つたのかして、急にくつろいだ樣子になつて、

アヽ、あの風吹烏から聞いておいでなさつたかい、宜うござる、いつまでゝもおいでなさい。何室でも明いてゐる部屋に勝手に陣取らつしやい、其代り雨は少し漏るかも知れんよ。夜具はいくらもある、綿は堅いがナ。馳走はせん、主客平等と思はつしやい、藏海、(假設し置く)風呂は門前の彌平爺にいひつけての、明日から毎日立てさせろ。無錢では

わるい。一日に三錢も遣はさるやうに計らへ。疲れてるだらう。脚を伸ばして休息せらるゝやうにしてあげろ。

藏海は障子を開けて庭へ面した緣へ出て導いた。後に跟いて緣側を折曲つて行くと、同じ庭に面して三ツ四ツの裝飾も何も無い空室があつて、緣の戶は光線を通ずる爲ばかりに三寸か四寸位づゝすかしてあるに過ぎぬので、中はもう大に暗らかつた。此室が宜からうといふ藏海の言のまゝ其室の前に立つて居ると、藏海は其處だけ雨戶を繰つた。庭の樹々は皆雨に惱んでゐた。雨は前にも增して恐しい量で降つて、老朽ちてジグザクになつた板廂からは雨水がしどろに流れ降ちる。見ると簷の端に生えて居る瓦葦（シノブグサ）が雨にたゝかれて、あやまつた、あやまつたといふやうに叩頭して居るのが見えたり隱れたりしてゐる。空は雨に鎖されて、たゞさへ暗いのに、夜はもう逼つて來る。中々廣い庭の向ふの方はもう暗くなつてボンヤリとしてゐる。たゞもう雨の音ばかりザアツとして、空虛に近い晩成先生の心を一ぱいに埋め盡してゐるが、ふと氣が付くと其のザアツといふ音のほかに、また別にザアツといふ音が聞えるやうだ。氣を留めて聞くと慥に別の音がある。ハテナ、彼の邊りか知らんと、其の別の音のする方の雨煙濛々たる見當へ首を向けて眼を遣ると、もう心安げになつた藏海が一寸肩に觸つて、

あの音のするのが瀧ですよ。貴方が風呂に立てゝ入らうとなさる水の降ちる……

と云ひさして、少し間を置いて、

雨が甚いので今は能く見えませんが、晴れて居れば此庭の景色も一ツになつて見えるのです。

と云つた。成程庭の左の方の隅は山嘴が張り出してゐて、其の樹木の鬱蒼たる中から、一條の水が降ちてゐるのらしく思へた。

夜に入つた。茶の間に引かれて、和尙と晩成先生と藏海とは食事を共にした。成程御馳走は無かつた。冷い挽割飯

と、大根ツ葉の味噌汁と、鹽辛く煮た車輪麩(クルマフ)と、何だか正體の分らぬ山草の鹽漬の香の物とぎりで、膳こそは創だらけにせよ黒塗の宗和膳とかいふ奴で、御客あしらひではあるが、箸は黄色な下等の漆ぬりの竹箸で、氣持の悪いものであつた。藏海は世間に接觸する機會の少い此の様な山中に居る若い者なので、新來の客から何等かの耳新らしい談を得たいやうであるが、和尚は人に求められゝば是非無いから吾が有つてゐる者を吝みはしないが、人からは何をも求めまいといふやうな態度で、別に雜話を聞き度くも聞かせ度くも思つて居らぬ風で、食事が澄んで後、少時三人が茶を喫してゐる際でも、別に會話をはづませる如きことはせぬので、晩成先生はたゞ僅に、此寺が昔時は立派な寺であつたこと、寺の庭のずつと先は溪川で、其溪の向ふは高い巖壁になつてゐること、庭の左方も山になつてゐること、寺及び門前の村家のある邊一帶は一大盆地を爲してゐる事位の地勢の概略を聞き得たに過ぎ無かつたが、藏海も和尚も、時々風の工合でザアッといふ大雨の音が聞えると、一寸暗い顔をしては眼を見合せるのが心に留まつた。

大器氏は定められた室へ引取つた。堅い綿の夜具は與へられた。所在無さの身を直に其中に横たへて、枕許の洋燈の心を小さくして寢たが、何と無く寢つき兼ねた。茶の間の廣いところに薄暗い洋燈、何だか銘々の影法師が顧視らるゝやうな心地のする寂しい室内で質素な食事を默々として雨音の聞えるや中で取つた光景が眼に浮んで來て、自分が何だか今迄の自分で無い。別の世界の別の自分になつたやうな氣がして、まさかに死んで別の天地に入つたのだとは思は無いが、何様も今までに覺えぬ妙な氣がした。然し、何の、下らないと思ひ返して眠らうとしたけれども、やはり眠に落ちない。雨は恐ろしく降つて居る。恰も大古から盡未來際まで大きな河の流が流れ通してゐるやうに、雨は降り通して居て、自分の生涯の中の或日に雨が降つて居るのでは無くて、常住不斷の雨が降り通して居る中に自分の短い生涯が一寸挿まれて居るものでゞもあるやうに降つて居る。で、それが又氣になつて睡れぬ。鼠が騒いで呉れたり狗が吠えて呉れ

たりでもしたならば嬉しからうと思ふほど、他には何の音も無い。住持も若僧も居ないやうに靜かだ。イヤ全く吾が五官の領する世界には居無いのだ。世界といふ者は廣大なものだと日頃は思つて居たが、今は何様だ、世界はたゞ是れ

ザアッ

といふものに過ぎないと思つたり、又思ひ反して、此のザアッといふが即ち是れ世界なのだナと思つたりしてゐる中に、自分の生れた時に初めて擧げたオギヤァ〳〵の聲も他人の〔力〕地（キアット）云つた一聲も、それから自分が書を讀んだり、他の童子が書を讀んだり、唱歌をしたり、嬉しがつて笑つたり、怒つて怒鳴つたり、キヤア〳〵ガン〳〵ブン〳〵グツ〳〵シク〳〵、いろ〳〵な事をして騒ぎ廻つたりした一切の音聲も、それから馬が鳴き牛が吼え、車ががたつき、汽車が轟き、汽船が浪を蹴開く一切の音聲も、板の間へ一本の針が落ちた幽かな音も、皆殘らず一緒になつて彼のザアッといふ音の中に入つて居るのだナ、といふやうな氣がしたりして、シテ靜かに諦聽すると分明に其の一ツのザアッといふ音にいろ〳〵の其等の音が確實に存して居ることを認めて、アヽ然様だつたかナ、なんぞと思ふ中に、何時か知らずザアッといふ音も聞えなくなり、聞く者も性が拔けて、そして眠に落ちた。

俄然として睡眠は破られた。晩成先生は眼を開くと世界は紅い光や黄色い光に充たされてゐると思つたが、それは自分の薄暗いと思つてゐたのに相異して、室の中が洋燈も明るくされてゐれば、又其外に提灯なども吾が枕邊に照されてゐて、眠に就いた時と大に異なつて居たのが寢惚眼に映つたからの感じであつた事が解つた。が、見れば和尚も若僧も吾が枕邊に居る。何事が起つたのか、其の意味は分らなかつた。けゞんな心持がするので、頓には言葉も出ずに起直つたまゝ二人を見ると、若僧が先づ口をきつた。

「御やすみになつてゐるところを御起しして濟みませんが、夜前からの雨が彼の通り甚くなりまして、溪が俄に漲れて

まゐりました。御承知でせうが奥山の出水は馬鹿に狭いものでして、もう境内にさへ水が見え出して參りました。勿論水が出たとて大事にはなりますまいが、此地の溪川の奥入は恐ろしい廣い緩傾斜の高原なのです。むかしはそれが密林だつたので何事も少かつたのですが、十餘年前に悉く伐採したゝめ禿げた大野になつて仕舞つて、一トダ立しても相當に溪川が怒るのでして、既に當寺の佛殿は最初の洪水の時、流下して來た巨材の衝突によつて一角が毀れたため遂に破壊して仕舞つたのです。其後は上流に巨材などは有りませんから、水は度々出ても大したことは無く、出るのが早い代りに退くのも早くて、直に翌日は何の事も無くなるのです。それで昨日からの雨で、溪川はもう開きましたが、水は何の位で止まるか豫想は出來ません。しかし私共は慣れても居りますし、此處を守る身ですから逃げる氣も有りませんが、貴方には少くとも危險——は有りますまいが餘計な御心配はさせたく有りません。幸なことには此庭の左方の高みの、彼の小さな瀧の落ちる小山の上は絶對に安全地で、そこに當寺の隱居所の草庵があります。そこへ今の内に移つてゐて頂きたいのです。わたくしが直に御案内致します、手早く御支度をなすつて頂きます。

ト末の方はもはや命令的に、早口に能辯にまくし立てた。其後について和尚は例の小さな圓い眼に力を入れて瞬開しながら、

膝まで水が來るやうだと歩けんからノ、早く御身繕ひなすつて。

と、追立てるやうに警告した。大器晩成先生は一トたまりも無く浮腰になつて仕舞つた。

ハイ、ハイ、御親切に、有難うございます。

ト、少しドギマギして、顫へて居はしまいかと、自分でも氣が引けるやうな弱い返辭をしながら、慌てゝ衣を着けて支度をした。勿論少し大きな肩から掛ける鞄と、風呂敷包一ツ、蝙蝠傘一本、帽子、それだけなのだから直に支度は出

來た。若僧は提灯を持つて先に立つた。此時になつて初めて其の服裝を見ると、依然として先刻の鼠の衣だつたが、例の土間のところへ來ると、そこには簑笠が揃へてあつた。若僧は先づ自ら尻を高く端折つて簑を甲斐甲斐しく手早く着けて、そして大器氏にも手傳つて一ツの簑を着けさせ、竹の皮笠を被らせ、其紐を緊しく結んで與れた。餘り緊しく結ばれたので、口を開くことも出來ぬ位で、隨分痛かつたが、默つて堪へると、若僧は自分も笠を被つて、

サア、

と先へ立つた。提灯の火はガランとした黑い大きな臺所に憐れに小さな威光を弱々と振つた。外は眞暗で、雨の音は例の如くザアツとして居る。

氣をつけてあげろナ。

と和尙は親切だ。高々とズボンを捲り上げて、古草鞋を着けさせられた晩成子は、何處へ行くのだか分らない眞黑暗の雨の中を、若僧に隨つて出た。外へ出ると驚いた、雨は横振りになつてゐる、風も出てゐる、川鳴の音だらう、何だか物凄い不明の音がしてゐる。庭の方へ廻つたやうだと思つたが、建物を少し離れると、成程もう水が來てゐる。足の裏が馬鹿に冷い。親指が沒する、踝(クルブシ)が沒する、脚首が全部沒する、ふくら脛あたりまで沒すると、もう中々溪の方から流れて水の流れ勢が分明にこたへる。空氣も大層冷たくなつて、夜雨の威がひしひしと身に浸みる、足は恐ろしく冷い、足の裏は痛い。胴ぶるひが出て來て止まらない。何か知らん痛いものに脚の指を突掛けて、危く大器氏は顚倒しさうになつて、若僧に捉まると、其途端に提灯はガクリと搖めき動いて、簑の毛に流れてゐる雨の滴の光りをキラリと照らし出したかと思ふと、雨が入つたか滴がかゝつたかであらう、チユッと云つて消えて仕舞つた。風の音、雨の音、川鳴の音、樹の音、たゞもう天地はザーッと、黑漆のやうに黑い闇の中に音を立てゝ居るばかりだ。晩成先生は泣きたくなつ

た。

ようございます、今更歸れもせず、提灯を點火ることも出來ませんから、何樣せ差して居るのでは無い其の蝙蝠傘をお出しなさい。然樣々々。わたくしが此方を持つ、貴方はそちらを握つて、決して離してはいけませんよ。闇でもわたくしは行けるから、恐れることはありません。

ト藏海先生實に頼もしい。平常は一ト通りの意地が無くもない晩成先生も、こゝに至つて多力宗になつて化毎つて、たゞもう世界に力とするものは蝙蝠傘一本、其の蝙蝠傘の此方は自分が握つてゐるが、彼方は眞の親切者が握つてゐるのだか、狐狸が握つて居るのだか、妖怪變化、惡魔の類が握つてゐるのだか、何だか、サツパリ分らない黑闇々の中を、兎に角後生大事にそれに縋つて随つて歩いた。

水は段々足に觸れなくなつて來た。爪先上りになつて來たやうだ。やがて段々勾配が急になつて來た。坂道にかゝつたことは明らかになつて來た。雨の中にも瀧の音は耳近く聞えた。

もうこゝを上りさへすれば好いのです。細い路ですからね、わたくしも路で無いところへ踏込むかも知れませんが、轉びさへしなければ草や樹で擦りむく位ですから驚くことは有りません。ころんではいけませんよ、そろ〳〵歩いてあげますからね。

ハヽイ、有り難う。

ト全く顚へ聲だ。何樣して中々足が前へ出るものでは無い。

かうなると人間に眼の有つたのは全く餘り有り難くありませんね、盲目の方が餘程重寶です、アツハヽ、ハヽ。わたくしも大分小さな樹の枝で擦剝き疵をこしらへましたよ。アツハヽ、ハヽ。

ト蹴飛め、流石に佛の飯で三度の埒を明けて來た奴だけに、大禰師らしいことを云つたが、晩成先生はただもうビクビクワナ／＼で、批評の餘地などは、餘程喉元過ぎて怖いことが莪になつた時分までは有り得はし無かつた。

路は一トしきり大に急になり且又窄くなつたので、胸を突くやうな感じがして、晩成先生は遂に左の手こそは傘をつかまへて居るが、左の手は痛むのも汚れるのを厭つてなど居られないから、一歩一歩に地面を探るやうにして、まるで四足獸が三足で歩くやうな態になつて歩いた。隨分長い時間を歩いたやうな氣がしたが、苦勞には時間を長く感じるものだから、實際は然程でも無かつたらう。然し一町餘は上つたに違ひ無い。漸くだら／＼坂になつて上りきつたナと思ふと、

サア來ました

と藏海が云つた。そして途端に持つて居た蝙蝠傘の一端を放した。で、大器氏は全く不知案内の暗中の孤立者になつたから、默然として石の地藏のやうに身じろぎもしないで雨に打たれながらポカンと立つて居て、次の脉搏次の脉搏を數へるが如き心持になりつゝ、次の脉が搏つ時に展開し來る事情をば全くアテも無く待つたのであつた。

若僧はそこらに何の爲に居るのだらう。しばらくは消息も絕えたが、やがてガタ／＼いふ音をさせた。雨戶を開けたに相違無い。それから少し經て、チッチッといふ音がすると、パッと火が現はれて、彼は一つの建物の土間に踞つてゐて、マッチを擦つて提灯の蠟燭に火を點じやうとして居るのであつた。四五本のマッチを無駄にして、やッと火は點いた。荆棘か山椒の樹のやうなもので引爬いたのであらう。雨にぬれた頰から血が出て、それが散つて居る、そこへ蠟燭の光の映つたさまは甚だ不氣味だつた。漸く其處へ步み寄つた晚成先生は、

怪我をしましたな、御氣の毒でした。

と云ふと、若僧は手拭を出して、此處でせう、と云ひながら顔を拭いた。蚯蚓脹れの少し大きいの位で、大した事では無かつた。

急いで居るからであらう、若僧は直に其手拭で泥足をあらましに拭いて、提灯を持つたまゝ、ずん／＼と上り込んだ。四疊半の茶の間には一尺二寸位の小爐が切つてあつて、竹の自在鍵の煤びたのに小さな茶釜が黑光りして懸つて居るのが見えたかと思ふと、若僧は身を屈して敬虔の態度にはなつたが、直と區劃になつてゐる襖を明けて其次の室へ云はず闖入せんとした。土間からオツ／＼覗いて見て居る大器氏の眼には、六疊敷位の部屋に厚い座蒲團を敷いて死せるが如く枯座して居た老僧が見えた。蒼色の銅像の如くで、生きて居るものとも思へぬ位であつた。銀のやうな髮が五分ばかり生えて、細長い輪廓の正しい顔の七十位の痩せ枯びた人ではあつたが、突然の闖入に對して、身じろぎもせず、少しも驚く樣子も無く、落つき拂つた態度で、恰も今まで起きてゞも居た者のやうであつた。特に晩成先生の驚いたのは藏海が其老人に對して何も云はぬことであつた。そして其老僧の座邊の洋燈を點火すると、藏海は立返つて大器氏を上へ引ずり上げようとした。大器氏は、慌てゝ足を拭つて上ると、老僧はジーッと細い眼を据えて其顔を見詰めた。晩成先生は急に挨拶の言葉も出ずに、何か知らず叮嚀に叩頭（オジギ）をさせられて仕舞つた。そして頭を擧げた時には、藏海は頻りに手を動かして爐の方の闇を指したり何かして居た。老僧は點頭（ウナヅ）いて居たが、一語をも發しない。

藏海はいろ／＼に指を動かした。眞言宗の坊主の印を結ぶのを極めて疾くするやうなので、晩成先生は呆氣（アッケ）に取られて眼ばかりパチクリさせて居た。老僧は極めて徐かに輕く點頭いた。すると藏海は晩成先生に對つて、

このかたは耳が全く聞えません、然し慈悲の深い方ですから御安心なさい。ではわたくしは歸りますから。

ト云つて置いて、初の無遠慮な態度とはスツカリ違つて叮嚀に老僧に一禮した。老僧は輕く點頭いた。大器氏に一寸

會釋するや否や、若僧は落付いた、しかしテキパキした態度で、彼の提灯を持つて土間へ下り、簑笠するや否や、忽ち戶外へ出て、物靜かに戶を引寄せ、そして飛ぶが如くに行つて仕舞つた。

大器氏は實に稀有な思がした。此の老僧は起きて居たのか、眠つて居たのか、夜中眞黑な中に坐禪といふことをして居たのか、坐りながら眠つて居たのか、眠りながら坐つて居たのか、今夜だけ偶然に此樣いふ態であつたのか、始終斯樣なのか、と怪み惑うた。もとより眞の已達の境界には死生の間にすら關所が無くなつてゐる、まして覺めて居るといふことも睡つてゐるといふことも無い、坐つて居るといふことゝ起きて居るといふことゝは一枚になつてゐるので、比丘たる者は決して無記の睡に落ちるべきでは無いこと、佛說離睡經に說いてある通りだといふことも知つて居なかつた。又いくらも近い頃の人にも死の時のほかには脇を下に着け身を横たへて臥さぬ人の有ることをも知らなかつたのだらう、吃驚したのは無理でも無かつた。

老僧は晩成先生が何を思つて居やうとも一切無關心であつた。

□□さん、サア洋燈を持つてあちらへ行つて勝手に休まつしやい、押入の中に何か有らうから引出して纏ひなさい、まだ三時過ぎ位のものであらうから。

ト老僧は奧を指さして極めて物靜かに優しく云つて吳れた。大器氏は自然に叩頭をさせられて其言葉通りになるよりほかは無かつた。洋燈を手にしてオヅ／＼立上つた。あとは復眞黑闇になるのだが、そんな事を兎角云ふことは却つて餘計な失禮の事のやうに思へたので、其儘に坐を立つて、襖を明けて奧へ入つた。やはり其處は六疊敷位の狹さであつた。間の襖を締切つて、そこに在つた小さな机の上に洋燈を置き、同じくそこに在つた小坐蒲團の上に身を置くと、初めて安堵して我に返つたやうな氣がした。同時に寒さが甚く身に染みて胴顫がした。そして何だかがつかりしたが、斯

く落ついて來ると、□□さんと自分の苗字を云はれたのが甚く氣になつた。若僧も告げなければ自分も名乘らなかつたのであるのに、特に全くの輩になつてゐるらしいのに、何樣して知つてゐたらうと思つたからである。然しそれは藏海が指頭で談り聞かせたからであらうと解釋して、先づ解釋は濟ませて仕舞つた。寢ようか、此儘にして老僧の眞似をして曉に達して仕舞はうかと、何か有らうと云つて呉れた押入らしいものを見ながら一寸考へたが、氣がついて時計を出して見た。時計の針は三時少し過ぎであることを示してゐた。三時少し過ぎて居るから、三時少し過ぎてゐるのだ。驚くことは何も無いのだが、大器氏は又驚いた。チッと時計の文字盤を見詰めたが、遂に時計を引出して、洋燈の下、小机の上に置いた。秒針はチ、チ、チ、チと音を立てた。音がするのだから、音が聞えるのだ。驚くことは何も無いのだが、大器氏は又驚いた。そして何だか知らずにハツと思つた。すると戸外の雨の音はザアッと續いて居た。時計の音は忽ち消えた。眼が見てゐる秒針の動きは止まりはしなかつた、確實な歩調で動いて居た。

何となく妙な心持になつた頭を動かして室内を見廻はした。洋燈の光がボーッと上を照らして居るところに、煤びた額が掛つてゐるのが眼に入つた。間抜な字體で何の語かゞ書いてある。一字づゝ心を留めて讀んで見ると、

橋流水不流

とあつた。橋流れて水流れず、橋流れて水流れず、ハテナ。橋流れて水流れず、と口の中で扱ひ、胸の中で咬んで居ると、忽ち晝間渡つた假そめの橋が洶々と流れる溪川の上に架渡されて居た景色が眼に浮んだ。水はどう〳〵と流れる、橋は心細く架渡されてゐる。橋流れて水流れず、サテ何だか解ら無い。シーンと考へ込んでゐると、忽ち誰だか知らないが、途方も無い大きな聲で

橋流れて水流れず

と自分の耳の側で怒鳴りつけた奴が有つて、ガーンとなつた。

フト大器氏は自ら顧つた。ナンダ、こんな事、とかく此様な變な文句が額なんぞには書いてあるものだ、と放下して仕舞つて、又それから見ると、床の間では無い、一方の七八尺ばかりの廣い壁になつてゐるところに、其壁を何程も餘さない大きな位な古びた畫の軸がピタリと懸つてゐる。何だか細かい線で描いてある横物で、打見たところはモヤ〳〵と煙つて居るやうなばかりだ。紅や綠や靑や種々の彩色が使つてあるやうだが、圖が何だとはサツパリ讀めない。多分有り勝な涅槃像か何かだらうと思つた。が、看るとも無しに薄い洋燈の光に朦朧としてゐる其の畫面に眼を遣つて居ると、何だか非常に綿密に樓閣だの民家だの樹だの水だの遠山だの人物だのが描いてあるやうなので、とう〳〵立上つて近くへ行つて觀た。すると是は古くなつて處々汚れたり損じたりしては居るが、中々叮嚀に描かれたもので、巧拙は分らぬけれども、かつて仇十州の畫だとか教へられて看たことの有るものに肖た畫風で、何だか知らぬが大層な骨折から出來てゐることは一目に明らかであつた。そこで特に洋燈を取つて左の手にして其圖に近々と臨んで、洋燈を動かしては光りの強いところを觀ようとする部分々々に移しながら看た。さうし無ければ極めて纖細な畫が古び煤けて居るのだから動もすれば看て取ることが出來なかつたのである

畫は美はしい大江に臨んだ富麗の都の一部を描いたものであつた。圖の上半部を成してゐる江の彼方には翠色悅ぶべき遠山が見えてゐる、其手前には丘陵が起伏してゐる、其間に層塔もあれば高閣もあり、黑ずんだ欝樹が蔽ふた岨もあれば、明るい花に埋められた谷もあつて、それからずつと岸の方は平らに開けて、酒樓の綺麗なのも幾戸かあり、士女老幼、騎馬の人、閑步の人、生計にいそしんで居る負販の人、種々雜多の人々が蟻ほどに小さく見えてゐる。筆はたゞ心持で動いてゐるだけで、勿論其の委曲が畫けて居る譯では無いが、それでもおのづからに各人の姿態や心情が想ひ知

られる。酒樓の下の岸には畫舫もある、船中の人などは胡麻半粒ほどであるが、やはり樣子が分明に見える。大江の上には帆走つてゐるやゝ大きい船もあれば、篠の葉形の漁舟もあつて、漁人の釣して居るらしい樣子も分る。光を移して此方の岸を見ると、此方の右の方には大きな宮殿樣の建物があつて、玉樹琪花とでも云ひたい美しい樹や花が點綴してあり、殿下の庭樣のところには朱欄曲々と地を劃して、欄中には奇石もあれば、立派な園花もあり、人の愛觀を待つさま〴〵の美しい禽なども居る。段々と左へ燈光を移すと、大中小それ〴〵の民家があり、老人や若いものや、蔬菜を荷つてゐるものもあれば、蓋を張らせて威張つて馬に騎つてゐる官人のやうなものもあり、跣足で柳條に魚の鰓を穿つた奴をぶらさげて川から上つて來たらしい漁夫もあり、柳がところ〴〵に翠烟を罩めてゐる美しい道路を、士農工商樵漁、あらゆる階級の人々が右往左往にしてゐる。綺錦の人もあれば、襤褸の人もある、冠りものをしてゐるのもあれば、露頂のものもある。これは面白い、春江の景色に併せて描いた風俗畫だナと思つて、また段々に燈を移して左の方へ行くと、江岸がなだらになつて川柳が扶疎として居り、雜樹がもさ〴〵となつて居る其末には蘆荻が茂つて居る、柳の枝や蘆荻の中には風が柔らかに吹いて居る。蘆のきれ目には春の水が光つて居て、そこに一艘の小舟が搖れながら浮いてゐる。船は網代を編んで日除兼雨除といふやうなものを胴の間にしつらつてある。何やら火爐だの藥罐だのゝ家具も少し見えてゐる。船頭の老夫は艫の方に立上つて、械に片手をかけて今や舟を出さうとしてゐながら、片手を擧げて、乘らないか乘らないかと云つて人を呼んでゐる。其顏がハツキリ分らないから、大器氏は燈火を段々と近づけた。遠いところから段々と步み近づいて行くと段々と人顏が分つて來るやうに、朦朧たる船頭の顏は段々と分つて來た。膝ツ節も肘もムキ出しになつて居る絆纒みたやうなものを着て、極々小さな笠を冠つて、稍々仰いでゐる樣子は何とも云へない無邪氣なもので、寒山の拾得か叔父さんにでも當る者に無學文盲の此男があつたのでは有るまいかと思はれた。オ

ーイッと呼ばはつて船頭さんは大きな口をあいた。晩成先生は莞爾とした。今行くよーッと思はず返辭をしようとした。途端に隙間を漏つて吹込んで來た冷たい風に燈火はゆらめいた。船も船頭も遠くから近くへ颯として來たが、又近くから遠くへ颯として去つた。唯是れ一瞬の事で前後は無かつた。

屋外は雨の音、ザアツ。

× × × × × ×

大器晩成先生はこれだけの談を親しい友人に告げた。病氣はすべて治つた。が再び學窓に其人は見はれなかつた。山間水涯に姓名を埋めて、平凡人となり了するつもりに料簡をつけたのであらう、或人は某地に其人が日に焦けきつたたゞの農夫となつてゐるのを見たといふことであつた。大器不成なのか、大器既成なのか、そんな事は先生の問題では無くなつたのであらう。

堺利彦傳

堺　利　彦

第四期　二度目の東京時代

(一) 産婆の二階

明治廿八年九月廿一日、廿六歳の私は七十歳の父を奉じて、大阪から東京に着いた。丁度その前後一二個月の事を書きつけた兄欠伸の日記が殘つてゐる。その廿日の項に『夜枯川より電報來る、曰くアス一バンタツと、濱松の宿屋より發したるなり、老體の疲れ玉ひて彼地に休らひ玉へるならん』とある。文體、用語、態度、總べて善く其の時代を示してゐる。そして兄欠伸の態度は即ち亦た弟枯川の態度であつた。廿一日の項には『四時に汽車着す、二人の健康なる姿は我が前に現はれぬ、相伴うて宿に歸り久しぶりに骨肉相酌む』とある。

宿は京橋南紺屋町（今、實業之日本社の在る處）の『梅が枝』といふ産婆の家であつた。石造のガッシリした家で、表に碧梧が二本立つてゐた。二階に部屋が三つあつて、その一つに兄が下宿してゐた。私と父とは其の隣りの部屋にはいつた。今一つの部屋はあいてゐた。つまり我々が二階全部を占領したわけであつた。下には七十幾つになる主人の老婆と、十二三になる低能兒の孫と、顔立は悪くないが、色の蒼白い、氣の拔けた、たまに寂しい笑ひ方をする女中とがゐた。ずいぶん陰氣な家だつた。

『廿二日、午後二時頃より空少し晴れたれば父上の案内して枯川小林も同道にて淺草に遊び一直に飲む』『廿三日、雨をおかし夜出で枯川と共に蕎麥を食ふ』『廿六日夜父上枯川同道にて寄席に行く』『廿九日、觀月枯川と京橋の角に飲む』『二日、夜父上のお供して寄席に行き女義太夫を聞きぬ』父子三人の當分の生活

の見本ぞこれ。

　兄はその時、都新聞の小說記者で、小說を書かぬ時には雜報（謂ゆる艶種）を書いてゐた。月給はたしか三十圓であつた。日記の初めには『九月一日、晴、此日舊曆盂蘭盆會に當る、今年は母上の初盆なれば下宿住居の身ながら心ばかりの魂祭せんとて』など〻殊勝な事が書いてあるが、その全般の生活は放縱を極めてゐた。文人らしい一面を擧げれば『小林と倶に日比谷の原に蟲を聞く、月明かにしておかしさ限なし、其より二人は愛宕下の牛肉屋にて一盃、……蟲鳴くや兵士どもが足のあと、あれも聞く人か木か草か蟲の聲』などとある。その頃、日比谷はまだ練兵場であつた。又『三日、晴、陰曆中秋、觀月の企もありたれど何れも不景氣にて成立たず、……下谷に友を訪ひて日を暮し夕ぐれより同行して淺草に遊び其處にて一盃かたむけ醉に乘じて吾妻橋を渡り月夜の面白さに不知々々堤を步して梅若塚に至りそれより引きかへして竹屋より三谷に渡り眞土の月を見て歸る、初めて墨江の明月を觀て快極りなし、月の秋さくらは猶さへなかりけり』こういふ事をこ〻に書きつけるのは、それがそのま〻、當時に於ける私の趣味を示し、私の態度を示すものだからである。

　更に放縱の甚だしい一面を擧げれば、『一夜十時過、早や寢床に入りたる處へ電報來る、何事ぞと見ればスグコイとばかり記して淺草角町秋月よりとあり、行きて大いに飲み、眠らずして明す』『八日、ふつたり照つたり、遂にぶん流して午後五時歸途に就きしが途中平野にて痛飲、輿に乘じて引返し遂に又一泊、近來の狂體なり』……それより宿に歸り湯に行き終日をぶらつく、其の後の事は記すに堪えず、余は行方不明となりぬ』『十九日、晴、あつし、昨夜より此の日の夕ぐれまで余の行方は猶ほ不分明なり、……夜に入りて余は何處よりともなく歸り來れり宿に入つて世を隔てたる思せり』『卅日、晴、此日は勘定日なれども金大に足らず……午後一時宿を出でたるま〻處々をぶらつき、夜ふけ婆々靜まりて後歸らんと思ふ中、途中にて我と同じく家に歸りかねたる男に出逢ひ、其結果遂に又行方不明分とならぬ』これらが又、私自身の日記としても一向差支のない事ばかりである。

　現にこういふ一項が保存してゐる。『四日、曇、朝のほど未だ臥戶を出であへぬ處へ、昨夜歸らざりし梢川きまり惡く歸り來り怪しき男をさへ伴れたり、如何ともせんすべなければ老婆を起きて辛くも其の男かへしやりぬ』この時私の共犯は白河次郎（鯉洋）であつた。彼は豐津中學以來の有名な秀才で、この時には帝國大學の文科にゐた。年は私より四つ下。

この日記に現はれた人々の名前を見ると、小林蹴月君のが一番多い。それから畑島桃蹊、『外に行き處なし死にでもせねばならぬと云ふ事例の如し』とある。闘如來君の名も毎度出てゐる。『早朝關巖次郎來る、彼は例の如く女郎買の歸なりと號す』とある。坂口德二郎君は、『人夫の頭になつて威海衞に行かんと云へり』とある。その外、筒井年峰、久津見蕨村、磯矢康などの諸君、（蹴月君を除いては皆な大阪以來の知友である。都新聞の人々としては、遲塚麗水、葉山菊醉、岡本甚吉などの諸君の名がある。『都新聞の社長盧來訪、下らぬ事を云うて歸る』は大いに振つてゐる。

それから田川大吉郎君の名が屢々出てゐる。田川君は新たに新聞を出すについて、兄を相談相手の一人と爲し、都新聞には内諾で小説を書かせる事にしてゐた。私がその因緣からして此の新聞に關係する事になつた次第は、前に記した通りである。

かういふ間に、今一つ兄の身の上に事件があつた。『十一日、……妻より手紙來る、悲しさやる方なし』『十六日、……妻の旅費にとて五圓だけこさへたれど、あとの五圓どうしても調はず、此三四日甚だ焦慮、彼はさぞ待ち詫びてあらん、グズ〳〵して居ては此五圓も亦甚だ危し、今度こそは神に誓ふて費すまじ』然し其の誓は破れて五圓の金は果して無くなつたが、私が上京してから、二人相談の上、ヤツトの事で十圓の爲替を國元に送つた。要するに、彼女は親の許を拔けだして來ようといふのであつた。所が、豐津の郵便局がその秘密を彼女の親に漏したので、計畫はスッカリこわれてしまつた。

（二）實業新聞

田川君の新聞の表題は『實業新聞』といふ事に極まつた。日淸戰爭が大勝利に終つて、實業熱が勃興しかけてゐた折柄、新らしく發行される新聞の名として『實業』の二字が撰ばれた事は、如何にも當然であつただらう。然し私はまだそういふ時勢を感じてゐなかつた。そして『實業』の二字を如何にも無趣味だと感じた。私は稍や失望した。然し大阪の落魄の中からヤツト這ひだして來て、兎にかく此の新らしい東京の新聞に籍を置く事の出來たのは、私として頗る得意で無い事もなかつた。而も月給は廿五圓、それも甚だしく惡い方ではなかつた。

實業新聞は、たしか改進新聞の跡を繼いだもので、社は京橋南鞘町に在つた。持主や何かの關係は善く知らなかつたが、何しろ私としては只だ田川君との關係であつた。田川君は主筆であつた。庶務の方には、桐原捨三君などがゐた。桐原君と云へば、改進黨の名士の一人として私の記憶に存してゐた人だが、

會つて見ると、至極貧弱な、何らの旨味のない人物らしく、そして別だん手腕家とも見受けられなかつた。編輯局には古顔の記者として、硬派の井上靈山君、軟派の三品蘭溪君などがあつた。蘭溪君は耳が大ぶん遠くて、小い喇叭の様な物を素早く耳にあてがつては話をしてゐた。蘭溪君の部下と云つたやうな地位に岡本狂綺堂君がゐた。岡本君は後の有名な劇作家綺堂君だが、その時はまだほんの若い、そのくせ頗る老成じみた、小紋の羽織などを着て取りすました、一個の小劇通に過ぎなかつた。それから經濟部には平野君、北川君などといふ腕利が揃つてゐた。田川君の直屬らしい人物としては、廣告部に楠虎臣君があり、編輯部に森一兵衛君と私とがあつた。森君はまだ二十かそこらの、極めて無邪氣な、善く笑ふ大男であつた。その外、政治方面の外勤（その頃の謂ゆる探訪）に如才のない鵜谷天尊君があつた。（それが後に鵜谷聖露などといふエライ名前で、いろ／＼佛教めいた著述をしたり、何やら中學の校長さんになつたりしたのは、私に取つては誠に意外な事だつた。）今ひとり警察方面の探訪に森戸太郎君と云ふ、一見安つぽい人物のあつた事を覺えてゐる。それが後にエライ株屋になつたと聞いたのも、同じく大なる意外であつた

田川君は年の割に成熟した才人で、品行方正のクリスチヤンでもあり、勤勉力行の事務家でもあつた　文章にも著るしい特色もあり新味があつたが（それは一つには、彼が長崎の外國語學校で支那語を學んだ結果ではないかと私には考へられたが）、それよりも寧ろ、彼の本當の技倆手腕は、新聞全體の編輯計畫の上に在つた　實業新聞は確かに新らしい編輯振を以て出現した　私としては、例の文藝趣味からして、餘りそれは感服したわけではなかつたが、然しその新らしい味には打たれざるを得なかつた　實業新聞發刊の月日は記憶しないが、多分十月半の事だつたらう

私は田川君に對する知己の感を以て熱心に働らいた。然し私のかいた小說は、一般の俗受もせず、文藝品としても認められず、如何にも中途半端な、生煮えの物であつたと思ふ。それが終つた時、田川君が『峭拔』の二字を以てそれを評したのは、それが全く、譽めもくさしもならぬ雜物であつた事を想像せしめるに足る。その小說の挿畫が又、新らしくもあり奇拔でもあつたが、餘り受けもしなかつた。筆者は誰あらう（と云つても、當時はまだ大して有名でも無かつた）寺崎廣業君。

小說の外、私は雜報をかいたり、編輯をやつたりしてゐたが、一つ面白いと感じたのは、毎日、各新聞の論說の大要を三行か五行かに書き縮める仕事だつた。それは少し人からも褒め

られたが、自分でも幾らか善く出來ると思つた。それについておかしい事は、各新聞の論説といふ以上、横濱の英字新聞のを除外するわけには行かない筈で、私はずいぶんそれに苦勞した。出來ないと云ふのは殘念で、平氣な顏をして引受けるには引受けたが、ほんの短かい時間に長い英文を讀みこなして、その要點を摘むのは容易でなかつた。然し私は見えと負惜みとでそれをやり通した。お蔭で英語の讀書力を進める爲めには、餘ほどの效果があつた。私は又、英照皇太后の靈柩を送るといふ感想文的の記事をかいて、或る人々から大いに賞められた事がある。それほど私はセンチメンタルな皇室崇拜者であつた。

然し私はどうしても實業新聞が好きでなかつた。一體の空氣が面白くなかつた。八尾新助といふ人が折々社に來てゐた。どういふ關係の人だと聞いた事はないが、多分、出資者の一人若しくは主なる出資者だつたのだらう。或は社長だつたのかも知れない。然し私としては、直接その人と何の關係があるではなし、只だ本屋の主人として名を聞いた事があるだけなのだから、いつも知らん顏をしてゐた。それにその人の、厭にブリ〳〵ふくれた薄あばたの顏、無遠慮に大あぐらをかいたりする野蠻な、傲慢な態度も嫌ひだつた。所が或日、その野蠻な、傲慢な、そして無智らしい男が、『オイ〳〵君』と編輯局の或人を呼びかけて、その名前が分らないので、『オイ、そこのその立つてる新聞記者！』とぬかした。成ほど新聞記者には相違ない。殊に安つぽい新聞記者には相違ない。然し『オイ新聞記者！』と呼ばれるのは堪らない。私は覺えずムカ〳〵とした。非常な侮辱を感じた。然し自分が呼びかけられたのでないから、食つてかゝるわけにも行かなかつたが、私はモウこんな處に居たくないと思つた。つまり、近來の言葉で云へば、成上り者のブルジョアに對する小インテリゲンチヤの反感であつた。

それから間もなく、田川君と誰かとの折合が面白く無くなつた樣子で、多少ゴタ〳〵する氣配が見えてゐたが、そんな事は私に關係がなかつた。然るに或日、田川君が默つて歸つた跡で、井上君か誰かから、『都合あつて田川君は罷められたが、他の諸君はこれまで通り働らいて下さい』と云つた樣な披露があつた。私はそれを聞くと、何か書いてゐた筆を直ぐに投げ棄てて、『僕は田川君と約束してこゝに來てゐるのだから、田川君が罷めたのなら僕も罷めるだけだ』と云つて、そのまゝ席を立つて歸つてしまつた。『そんなら僕も歸る』と云つて、森君も出て來た。好い氣持つたら無かつた。それから又話が跡戻つて田川君も僕等も出る事になつたが、然し壞れかゝつた社の大勢は迚も駄目で、とう〳〵ジリ〳〵弱りに弱つて潰れてしまつた。そ

れが多分、明治卅九年の一月の末から二月の初に掛けての事だつたらう。

田川君と私との間には餘ほどソリの合ひにくい所があつた。田川君が事務的であつたのに對して、私は文藝的であつた。田川君が謹嚴であるのに對して、私は放縱であつた。田川君がクリスチヤンであつたのに對して、私は無信仰であつた。田川君が少年時代から大のスマイルス黨で、自助主義、勤勉主義、努力主義の塊りであつたのに對して、私は學校の教科書の中で、アーヴイングのスケッチブックに一番惚れこんだほどのセンチメンタリストであつた。田川君が曾て歷史上の愛好人物として智謀家竹中半兵衞を擧げたのに對し、私は曾て論語の中の子路を擧げた事がある。そんな風に、田川君と私とは可なり反對の素質を持つてゐた。然し又、何處かに何か一致する點もあつた。實業新聞時代、田川君と、森君と、私と、外にまだ誰かゐたかも知れないが、折々田川君の家に會合してカーライルの『ヒーロー・ウオーシップ』の輪讀をやつたりした。而もそれはたしか私の提案が實現されたのだつた。要するに、田川君と私との交りは、決して新聞社だけの事ではなかつた。その頃、田川君は又、私を植村正久さんの處に連れて行つた事がある。『可なりな論客です』と、田川君は私を紹介した。植村さんは私に讃美歌の本を見せた。『可なりな論客』に對して讃美歌の本は少しおかしいのだが、植村さんの心持は分らない。兎にかく植村さんは、精神とか靈魂とかいふ事について善く考へて今一度來いと云はれた。然し私は再び行くだけの興味を感じなかつた。

（三）落葉社

實業新聞以外、大阪關係以外に於いて、私の新らしく得た第一の友人は杉田藤太（天涯）君であつた。彼と私が廣島臨時議會の時、貧寒なる年少の二記者として初めて相知つた事は前に記した。その時、彼は東京への歸途、大阪に寄つて私の北野の家に一宿したが、後に彼はその一宿についてよく人に語つてゐた。『枯川の家』に宿つて『環堵蕭然』たる二階の六疊に寐せられたが、朝になると、年を取つたおつかさんが味噌汁を拵へてくれて、『サア何んにも御坐んせんがと云つてね、僕はほんとにホロリとしたよ』と。そう云ひながら彼は既に又、少しく鼻をつまらせてゐるのであつた。あゝ天涯、彼は實に人情に厚い、涙もろい、美しい心持の青年であつた。

私は東京に來て直ぐに深く彼と親しんだ。彼は、文章は上手だつたけれども、文人型ではなかつた。寧ろ志士型であつた。彼は杤木縣小山の産として、大いに意氣を尙ぶといふ風があつ

た。一夜、彼と私と二人、芳原に遊んだ。彼は幾許も酒を飲まず、又常習的の遊蕩者でもなかつた。然し彼と私とは、廣島に於いても、東京に於いても、共に足を遊里に入れる事に依つて特にその親しみを増した。その翌朝早く、二人は上野公園の摺鉢山に立つてゐた。彼等は秋風落葉を捲くといふ光景の間に、非痛な顏色をして人生を語り、世事を談じた。天涯は例の鼻をつまらせた聲になつてゐた。枯川も頻りに胞の迫るを覺えた。その時以後、私は彼と、何か生涯の約束をした氣持になつてゐた。それが二青年の相許した交りであつた。

杉田君は永島今四郎（永洲）君の家に同居してゐた。彼等は共に慶應義塾の出身で、今は同じく朝野新聞の記者であつた。私は直ぐに永島君と親しくなつた。永島君は我々より二三年の年長で『溫厚の長者』といふ風があつた。その蒼白い顏と、痩せた細い弱々しいからだとに係はらず、彼は常に友人間の先輩であつた。私は間もなくして深く彼の德風に推服した。永洲、天涯、私はこの二友人を得た事に依つて大いなる力を感じた。

そうした交りの中からして、自然に落葉社といふものが生れた。この社名はたしか私がつけたので、摺鉢山の朝景色に取つたのであつた。落葉社は一つの文藝團體であつた。或は寧ろ一つの俳句會であつた。折々集會して皆がフザけながら俳句を作つてゐた。然し必ずしもそれが主眼ではなかつた。茶を飲み、酒を飲み、飯を食ひ、雜談して相親しむ。その方が寧ろ主眼であつた。つまり一つの友人團體であり、社交倶樂部であつた。私は何かそうした、團體らしいものの一部分として生活する時、いつも非常な愉快と滿足を感じた。

落葉社の人々としては、永洲、天涯の外、先づ蹴月があつた蹴月君の事は既に幾度も記した。それから加藤米司（眠柳）君があつた。眠柳君も大阪から東京に流れこんだ一人で、蹴月君の世話で『めざまし』にはいつてゐた。それから堀成之（紫山）君があつた。紫山君は先きごろ『大阪朝日』を罷めて、元の『讀賣』に舞ひ戻つてゐた。前に記した闘如來君も折々來た。筒井年峰君も來た。欠伸もたまには來た。然し欠伸は、そんな團體などには超然としてゐた。

（四）父の死

多分その年の暮、私は父と共に新富町の駿河屋といふ下宿に移つた。まだどうしても家を持つ準備が整はないのであつた。駿河屋は下宿と云ふよりは寧ろ田舍向の商人宿と云つた樣な恰好で、餘り晴々しない家だつた。そこの奥まつた六疊敷——私は小机を一つ、父は煙草盆を一つ控へたきり、外に道具らしい

飾も何んとなく、屛風すらもなく、掛軸の一つすらもない一室―に、只つたひとり父を殘して外出する時など、如何にも氣の毒な心地がした。（大阪から持つて來た多少の荷物は、まだ停車場に置きばなしにしてあつた。）

然し私はよく外出した。用事の外出ばかりでなく、遊びの外出が多かつた。外で宿つて來る事も少なくなかつた。二人の大きな男の子がありながら、父に寂しい日ばかり見せて置くとは何事だと云つた様な良心の詰責を受けながら、その二人の兄弟が一緒になつて飲みまわつてゐる事などもあつた。父は決して小言も云はず、愚痴もこぼさなかつたが、折々は寂しさうな笑ひ聲をして、疎髯を撫でたりしながら、薄つすりと月のあたる椽側の障子に、梅の鉢の影が映つてゐるのを、丁度繪の様だなどゝ言つて、この上ない物の様に嬉しがつたりしてゐた。又、その椽側の午後の日だまりに、折々小猫がやつて來て、チリチリ、チリ〳〵と、可愛らしい鈴の音をさせて遊んでゐるのが面白いと云つて、友達の遊びに來るほど喜んだりしてゐた。それもまだいゝが、たまに私とふたり向ひあつて膳の上に一本の徳利を置くと、父は大へんにそれを樂しみにして、チビリ〳〵とやるのだつた。そして『困つたものぢやが、どうもこれがうまいのでのう』と云つたりした。

然し近處にはツキアイの家が少なくなかつた。小林君の家は同じ新宿町にあつた。そこには兩親もあり、若い細君もあり、路次の中の小さい家ではあつたが、いつも暖かい善い家庭だつた。兄だの、私だの、ずいぶんよくおつかさんの世話になつて、叱られたり可愛がられたりした。兄は毎月、月給を貰つた時、その中から必ず何程かづゝをおつかさんに預ける約束になつてゐたが、その中、着物を一組こしらへて貰つたきり、預ける方はパタリとやめてしまつた。或る雪の日、私が蹴月を尋ねて行くと、路次の入口に細君が――丸い顔の綾さんが――傘をさして立つてゐた。蹴月君はと云ふと、一昨日から歸つて來ないので、おつかさんが私に尋ねて來いとおつしやるんだけれど、どこを尋ねていゝか分らないと云つて、おとなしい、人の好い綾さんは、降りしきる雪をジツト眺めてゐた。內の子も、よその子も、仕様のない奴等ばかりだつた。

永島君の家は築地に在つた。これも小さい、安つぽい家だつたが、永島君のおだやかな長者ぶりと、若い小千代夫人の晴々しい笑顔とで、いつも小いさな俱樂部の様な、賑かな家庭だつた。況んやそこには、文ちやんといふ少々おしやまな可愛らしい子もあり、杉田といふ面白い同居人もあつた。小千代夫人は五尺二寸ばかりもあらうといふ見事な體格で、それが五尺未滿

の疲せぎすの永島君と面白い反映を爲してゐた。或夜、眠柳君と私と、永島家で遊んでの歸り道に、どこかの町の角で鍋燒うどんを食ひながら、盛んに小千代夫人に對して陸ながらの讃辭を呈した。眠柳君は昂奮してしまつて、天下に永島ほどの果報者は無いと云つて、悲憤慷慨するほどの始末だつた。眠柳も私もまだ獨身だつた。

然し私にも緣談が生じた。それは心ずしも悲憤の結果ではないが、父をいつまでも下宿屋にほつたらかして置くわけに行かないのであつた。それで私は、私のこの境遇を知つて、父の世話をしてやらうといふ女があるなら、どんな人でも構はないといふフレを出した。但しそれは決して、冷淡な、棄鉢な、無責任な態度ではない、一たび結婚した以上、どんな女でも一生涯の妻として心ず深く愛するといふ覺悟である。それが私の論旨であつた。すると友人間で、わけもなく其の候補者を見立ててくれた。それは堀紫山君の妹であつた。紫山君には二人の妹があつた。姉は美知子、妹は保子。そして先づ姉の方から片づけたいと云ふので、それを私に擬する事になつた。この話は主として眠柳君と紫山君との間に成り立つたので、他の諸友人が皆それに贊同し、そして私が早速それを批准した。私は美知子、保子の二人が並んで立つてゐる寫眞を貰つて來て父に見せると、父は大へんに喜んで云つた。ほう、これは中々美しい娘ぢや『俺もこの分なら孫の顔を見るまで生きられるかも知れんぞ。』

所が、それから間もなく、或日、井土靈山君が遊びに來て、父と碁を打ちだした。私は風を引いて寢てゐた。父は機嫌よく、何かおどけた事など云ひながら碁を打つてゐたが、急に考へこんで默つてしまつた。變だなと思ふ中、バタリと横に打ち倒れた。卒中であつた。それから翌日の明け方まで、父は只だ大いびきをかいて昏睡してゐた。足の底にカラシを塗つたり色々したが駄目だつた。私はその父の床にはいつて最後まで一緒に寢た。父の死は明治二十九年一月廿八日であつた。年七十一。遺骸は深川の靈巖寺と云ふに埋葬した。これが封建制度の沒落に遭遇した一武士の生涯の最後であつた。

この時、實業新聞は既につぶれて、私は無職であつた。それでも丁度、紫山君の世話で讀賣新聞に『望郷台』といふ隨筆樣のものを書いてゐたので、それの稿料を貰つて來て僅かに急場の凌ぎをつけた。落葉社の人々は種々の方法を以て葬式その他の費用を分擔してくれた。『落葉社、我父を葬る』と、私は何かに書きつけた。初七日の晩、落葉社の人々が集まつた。靈前に唐紙を展べて寄せ書をした。私は先づ筆を取つて『不孝兒』の三字を題した。せめてそれを以て父に謝罪した心持であつた。

(五) 結婚

去年母を失ひ、それから丁度一年で父を失つた。さしも放縦な私の心も、少し性根づかずにゐられなかつた。悔悟、慚愧の念が頻りに起つた。父の葬式の時、私が外の會葬者と同じ樣に、人力車に乘らうとしてゐると、矢野俊彦君が行きなり私の腕をつかんで『オイ枯川、子たる者が父の柩を送るのに、車に乘るといふ法があるか』と私を叱りつけた。私はひどく恐縮して、徒歩で柩の後についた。良心が既に強い痛みを覺えてゐる折柄、そうした詰責は烈しく私にこたえた。この矢野といふ男は熊本人で、龍谷と號し、日本新聞の記者で、杉田、永島等を通しての知合であつた。さすが熊本人にはマジメなエライ處があると、私は深く彼を尊敬する氣になつてゐた。然し間もなく彼がウソツキであり、ホラフキであり、似せ豪傑であり、食はせ者である事が、友人間に暴露した。威丈高になつて私を叱りつけた所などは、即ち彼が熊本人の最惡のタイプに屬する事を示したものであつた。その後、彼は小詐欺と無錢飲食との常習犯になり、ツイ先ごろ死んでしまつた。

然し矢野龍谷の人物はどうであらうとも、私に對する詰責は道理至極であつた。私はこれらの事を機會として漸く一身の行ひを改めようとする心持になりかけた。そこに丁度結婚が私を待つてゐた。父の爲に求めた結婚が、父の死後直に實現される事になつた。美知子は既に父の葬式にも列してゐた。双方の心の準備は既に全く整うてゐた。只だ私が家を借りて住み込むといふ經濟上の準備が出來にくいのであつた。そこに意外な好音が齎らされた。

築地の二丁目の表通りに石造りの大きな家があつた。それは茨城の人、日辻保五郎君の所有で、日辻君は折々上京してそこに宿るが、平生は書生一人が留守をしてゐるのであつた。そしてその家を私に貸してやらうといふ話が傳はつて來た。それはどうゆうわけかと云ふに、日辻君と同郷の人に相島勘次郎君があつた。相島君は大阪毎日新聞記者として、議會の傍聽か何かのため東京に滯在してゐたが、永島君、杉田君とは極めて親しい間柄で、從つて私とも親しくなつてゐた。そうした關係から相島君が私の爲に日辻君を説いた所、日辻君は固より世話好の愉快な人物の事とて、宜しい、書生を食はせてくれて、そして俺が上京中、飯の世話をしてくれるなら、ロハでこの家の大部分を貸さうと云つてくれたのであつた。

そんなウマイ話は又とない。何しろ表二階が十疊、四疊三疊の三室、外に裏二階に六疊の一室といふ、ずいぶん手廣い家で

ある。眇たる堺枯川の新婚の住居としては、チト似合はしからぬ屋臺骨であつた。然し大は小を兼ねるといふ格言に從つて、私は平氣でその大家屋に住みこんだ。得意想ふべしである。家さへ出來れば、お嫁さんは何時でもと云ふので、早速、黄道吉日を撰んで結婚の式を擧げた。父の葬式が落葉社の葬式であつたとするならば、この結婚式は落葉社の結婚式であつた。そして私は忽然として、生れかはつた樣な幸福の人となつた。

堀家は日本橋濱町に在つた。大人は堀直竹と云ひ、その昔し常陸國下館の藩士で、今は蠣殼町に大弓場を持つてゐるのであつた。紫山君はその長男で、二人の妹の外に二人の弟があつた。家政は豐かといふ程ではなかつただらうが、別だん不自由のない暮しだつたらう。そこの姉娘、年は廿四だがまだ初婚、これまで長し短しで片づきかねてゐたのを、ツトヤ極つて見れば、其の相手は無職無收入の小文士と云ふのでは、蓋し聊か心細かつたらう。尤も、兄の紫山は恐らく、非常に有望な秀才として私を推薦したのだらうが、それにしても花嫁たる者が、來る早々、質を置いて米を買はねばならぬと云ふのでは、少しく避易せずにゐられなかつたらう、然し彼女は、兼ねて紫山が云つた通り泰然として、そんな事には一向平氣らしく、只だ溫良な善き妻であつた。私としては初から、どんな人でも構はない苦であつた。實際、少しの不滿もなかつた。寧ろ十分滿足した。

これで何か新らしい職業の口さへ見つかれば、私の生活は正に一眞面目を呈すべき所であつた。然し新婚の幸福に醉うた私は、只だ茫然として日を過してゐた。所が、そこに又意外な話が一つ持込まれた。征矢野半彌さんが芝佐久間町の旅館信濃屋から手紙をよこして、會ひたいから來てくれといふ事であつた。少年時代から深く敬慕してゐながら、そしてまだ直接には會つた事もない先輩から、こうした招きを受けたのは、私としてどんなに嬉しかつたか知れない。早速行つて見ると、福岡日々新聞の記者として福岡に行かないかと云ふのであつた。征矢野さんは同社の社長であつて、今は衆議院議員として滯京してゐるのであつたが、めざまし新聞や讀賣新聞で私の書いた物を見て、そこは矢張り同鄕のよしみで、私を連れて歸りたいと考へてくれたのであつた。私としては、今ま東京を離れたくはないのだけれども、何しろ眼前の窮迫を逃れる道として、殆んどあいた口に牡丹餠の感もあるので、直ぐに承諾して行く事に極めた。

妻も、あいにく里の母親が重い病氣に罹つたので、東京を離れたくなかつたのだが、然し又一面には、この自然の新婚旅行に對する興味もあつた。落葉社の人々は又集つて私の行色を壯にしてくれた。例の寄せ書きの第一に、永洲が『蜜月行』の三字を大書した。永洲の書は流麗であつた。

演歌流行史（二）

添田唖蟬坊

九　日露戰爭、何から何まで戰爭の歌

土佐の土謡であるヨサコイ節が、流行してゐたが、それがロシヤコイ節になるや、殊に京阪地方が眞ッ先で、大流行になり、舌の廻らぬ子供までが、ロシヤコイ〱など丶異様な節まはしで繰返してゐた。それも輿論の反照であつた。やがて戰端が開かれた。

ロシヤコイ節

△東洋平和に害ありなど丶
無理な理窟をつけ居つた、ロシヤコイ〱
△一天四海をわが物顔に
無禮極まる青目玉　ロシヤコイ〱
△今は堪忍袋の緒さへ
切れて鋭き日本刀　ロシヤコイ〱
△日本男兒が血潮を流せし
遼東半島今いかに　ロシヤコイ〱
△なぜかお前は八方美人
わたしや一筋國のため　ロシヤコイ〱
△花は今だよいざ諸共に
駒に鞍置け日本武士　ロシヤコイ〱
△黒鳩赤将もうかなはぬと
白旗立て丶青い顔　ロシヤコイ〱

開戰後はもう何から何まで戰爭の歌ばかりであつた。欣舞節で「日露開戰の歌」「軍神廣瀬中佐」「戒軍國民」「名譽の戰死」愉快節で「陸戰の連勝」「寂滅節」「うきよ節」等重なるものである。

露國寂滅節

泣き面を蜂が刺すとは露國の狀態(さま)よ、「因果應報寂滅々」軍(いくさ)

は海陸負け續け、馬賊はドシドシ暴れだす、おまけに國では虛無黨が、內亂ゴタ〳〵大騷動「因果應報寂滅々」
　長の年月日の本を、小國なりと侮りて、靑い目玉で嚇しつゝ、暴慢無禮を極めたる。
「甲斐もなく〳〵寂滅々」アレキ死夫（シーフ）が逃げ出す、跡へ拙者がマカローと、ノコ〳〵出て來た御大將、コレも冥土へマカローと、
「軍艦諸共寂滅々」
　黑鳩キンで候と、威張つた勇士も此頃は、苦勞は絕えんと改名し「コレモ間もなく寂滅々」今では駄法螺を吹き盡し、靑息吐息のスラブ族、マゴ〳〵キョロ〳〵したとても、脆く正義の旗風に、もはや野心も水の泡、「因果應報寂滅々」まだこの外に――要害堅固の旅順さへ「笑止千萬寂滅々」正義に勝てる筈なしと、お氣がついたら一刻も、早く降參するがよい、もしもグズ〳〵して居れば「露國全體寂滅々」――などゝいふのもあつた。

　露西亞兵の軍歌（うきよ節）

露西亞兵の歌ふ軍歌をよく〳〵聞けば、「實におへそが茶をわかす」進めや進め諸共に　死なぬ覺悟で進むべし、敵に出逢ふた其の時は「負傷をせぬうち逃げ出だせ」わづかの月給貰ふため、負傷でもしてはあほらしい、死んでは尙更引き合はず、進むは吾等の義務なれど、逃げるは吾等の權利なり、「勝手次第に逃げ出せ」されど婦女を辱しめ、他人の寶を奪ひ取る、事は決して忘るな、軍規もへちまもあるものか、こんな機會（とき）にはあばれ德、强い日本の兵隊に、見付けられたらどん〳〵と、後を向いて進むべし、敵の居らない處へと、方角違ひに進み行け、たとへ吾等は弱くとも「敵に遇はねば負けはせぬ」呑氣じやないかいな。

　この外、在來の小唄までが、新らしい戰爭の文句でうたはれた。それは以下述ぶる通りであるが、そのいづれを見ても、手前味噌の根性が遺憾なく發揮されてゐて、痛快、だ。

　千鳥節

向ふへ見ゆるは露西亞の兵よ（あの憎らしさ）
遺恨重なる靑目玉（腕うなり出す）
明日は微塵にチョイトして吳れん

　博多節

ロシヤも（今度はホイ）よう〳〵……昨年以來（負けたか逃げたか都まで）
無理な仕方と悟り出す
（御使者さんちよいと出て和睦かい）

長崎ぶし

△ロシヤの軍艦なぜ出んじやろか、出られんけんでん、出らりや出るバッテン出られんけん出ん

△コサック騎兵はなぜ來んじやろか、來られんけん來ん、來るバッテン來られんけん來ん

志氣の歌

△國の爲には命惜まぬ神州男兒いつも軍は大勝利、それを無にせぬ善後策、ちよいと賴むは外交官

△つらもいろ／＼かつら馬面大づら小面赤面靴面ふくれ面、つら／＼露助の面見れば、チヨイト泣き面まぬけ面

△けの字さま／＼三毛に眉毛に色けに食ひけ、たわけ呑ぬけ桶に酒、露助は戰に負けつゞけ、チヨイト腰ぬけ大まぬけ

△ボーもいろ／＼むぼうらんぼう泥棒ごぼう武藏坊やら朝寢坊、天びん棒やらケチン坊、チヨイト露助は大べらぼう

東洋平和礎（三勝酒屋作替）

今頃は日本さん、どうはらたてゝござらうぞ、今更返らぬ事ながら、露といふ國ないならば、小村外務も諸國にめんじ、交渉なされし其時に、とくに聞入れしやんしたら、日本さんの不服も直り、戰爭もあるまいに、思へば／＼あの支那が、十年前の戰ひに、一層とられて仕舞ふたら、かうした事はあるまいもの、支那が弱いと言ひながら、不當な露が心ゆえ、丸呑みは叶はずとも、滿洲ほしいと難癖して、是迄居たのが國の仇、今の難儀に競ぶれば、一年前に此露が、退去する氣はエーマア付かなんだ、こらへてたべ日本さん、露シヤ此の樣に悔んでゐると、獨逸佛蘭西目むいても、日本拜む心根を、なほ笑はるゝ許りなり

大津繪

本國を立ち退いて、わしの旗章目にたてば、普通のお船をやつしたて、大連灣や旅順口、五日三日と日を暮し、十日たらずに四十艘、打毀されて殘るは血の涙、金より大事の此のお船、全滅されたも皆日本故、嘸や皇帝さんお腹も立たうが、何事も因果づくじやと、諦らめ下さんせ。

斯うした歌を見てゐると、面の皮が痒くなつて來る樣な氣もするが、タープリンの長篇小說「決鬪」が、露國軍隊の內情を暴露し、敗戰の主因を指摘したものだといふので問題になつたといふ事を倂せ考へると、一種の感興が湧いて來るやうである。

一〇　生活に觸れて行く傾向

三十九年、かの「喇叭節」の大流行である——私しやよつぽどあわてもの、蟇口拾ふて喜んで、家へ歸つてよく見たら、馬車にひかれたひきがへる〳〵（電車にひかれたの方が多くうたはれた樣であるが、鐵道馬車の時代で、最初は馬車であつた。）これ等は眞に大流行といふ可く、當時淺草區北淸島町十七武井方共同出版會から發行したのむき山人（私の別號）作の讀賣ビラ本は非常な賣れ方で、爲に印刷所は夜業をした。發行所は毎朝演歌者が門前市をなす景氣で、一人三百部を望むものに辛うじて百部若くは百五十部を渡した。するとそれは一時間か二時間に賣り盡して又仕入の爲めに發行所へ馳けつけて來るといふ有樣であつた。

その時の利益は莫大なものであつた。これに味をしめて、その時發行所にした武井がネタ屋を始める氣になつたのである。ネタ屋とは、演歌者の材料、即ち出版物を卸す問屋である。從來は材料の小冊子は仲間から出版してゐたのであるが、此時から仲間以外の何でもない者に、演歌者の利益を横取りされる樣になつたのだ。即ち讀賣材料出版屋なる資本家を作つてしまつた。そして質に於て低下した處の多くの演歌者が、勿論長い間に於てゞあるが、その資本家の城砦の爲めの石を一つ一つ積み重ねて行つた。

喇叭節

△倒れし戰友抱き起し、
耳に口あて名を呼べば、ニツコリ笑ふて目に涙、
萬歳唱ふも胸の内　トコトツトツト

△ものに動ぜぬ保昌が
節も妙なる笛の音に、燦く芒のひらめきや
斬りつけ兼ねたる袴だれ　トコトツトコト

△今鳴る時計は八時半
それに遲れりや重營倉、今度の日曜ないじやなし
放せ軍刀に錆がつく　トコトツトツト

△あはれ車掌や運轉手
十五時間の勞働に、車のきしるそのたんび我と我が身をそいでゆく　トコトツトツト

△つらい勤めも金ゆゑの
車掌や旗ふり運轉手、月給はいつも居据りで高くなるのは株ばかり

△轢けばひいたで罪を着る
止めれば止めたで遲くなる、どちら向いても攻撃の中に車掌は板ばさみ　トコトツトツト

△華族の妾のかんざしに

ピカ〳〵光るは何ですえ、ダイヤモンドか違ひます可愛い百姓の膏汗　トコトツトツト

△浮世が儘になるならば

車夫や馬丁や百姓に、洋服着せて馬車に乘せ當世紳士にひかせたい　トコトツト

ラッパ節と同時に「あゝ夢の世や」といふ女學生墮落の歌が流行した。これは神長瞭月の作で、前に欣舞節でうたつて居たが、思はしくないので節を變へて神長一人根氣よく一年あまり廣告販賣して大成功したのが此の頃である。夢の世とラッパ節に續いて三十九年の末から四十一年の三四月頃まで流行した數種をあぐれば、「あゝ金の世」「あきらめ節」「あゝわからない」等である。

あゝ金の世

あゝ金の世や金の世や、地獄の沙汰も金次第、笑ふも金よ泣くも金、一も二も金三も金、親子の中を割くも金、夫婦の緣を切るも金、強慾非道と譏らうが、我利々々盲者と罵しろが、痛くも痒くもあるものか、金になりさへすればよい、人の難儀や迷惑に、遠慮して居ちや身がたゝぬ。

あゝ金の世や金の世や、希望は聖き勞働の、我に手足はありながら、見えぬくさりに繋がれて、朝から晩まで絶間なく、酷使はれて疲れ果て、人生の味よむ暇もない、これが自由の動物か。

あゝ金の世や金の世や、牛馬に生れて來たならば、あたら頭を下げずとも、いらぬお世辭を言はずとも、濟むであらうに人間と、生れた因果の人力車夫、やぶれ提灯股にして、ふるひおのゝくいぢらしさ。

あゝ金の世や金の世や、毒煙燃ゆる工場の、あやふき機械の下にたち、命を賭けて働いて、くやしや鬼に鞭うたれ、泣く泣く求むる糧の料、顏蒼ざめて目はくぼみ、手は皆たゞれ足腐り、病むもなか〳〵休まれず、聞けよ人々一ふしを、現代の工女が女なら、下女やお三はお姫さま。

あゝ金の世や金の世や、物價は高くも月給は、安い辨當腰に下げ、ボロの洋服破れ靴、氣のない顏でボク〳〵と、お役所通ひも苦しからう、苦しからうがつらかろか、つとめにや妻子の腮が干る。

あゝ金の世や金の世や、貧といふ字のあるかぎり、濱の眞砂と五右衛門は、盡きても盡きぬ泥棒を、をさへる役目も貧ゆえと、思へばあはれ雪の夜も、外套一重に身を包み、寒さに凍るサーベルの、つかのま眠る時もなく、軒端の犬を友の身の、家には妻が獨り寢る、煎餅蒲團も寒からう。

あゝ金の世や金の世や、此寒空に此の薄着、堪へ切れない空腹も、なまじ命のあるからと、思ひ切つては見たものゝ年取る親や病める妻、餓へて泣く兒にすがられて、死ぬにも死なれぬ切なさよ。

あゝ金の世や金の世や、憐れな民を救ふべき、尊き教の田にさへも、我儘勝手の水を引く、これも何故お金故、あゝ淺ましき金の世や、長兵衛宗五郎何處に居る。大鹽マルクス何處に居る。

あゝ金の世や金の世や、互に血眼皿眼、食ひ合ひ奪り合ひむしり合ひ、敗けりや乞食か泥棒か、のたれ死ぬか土左衛門、鐵道往生首くゝり、死ぬより外に道はない、あゝ金の世や金の世や。

あゝわからない

あゝわからない／＼、今の浮世はわからない、文明開化といふけれど、表面(うはべ)ばかりじやわからない、瓦斯や電氣は立派でも、蒸氣の力は便利でも、メッキ細工か天ぷらか、見かけ倒しの夏玉子、人は不景氣々々々と、泣き言ばかり繰り返し、年が年中火の車、廻してゐるのがわからない。

あゝわからないわからない。義理も人情もわからない、私(よく)慾に眼がくらんだか、どいつもこいつもわからない。なんぼお金の世ぢやとても、赤の他人はいふもさら、親類縁者の間でも、金と一言聞く時は、忽ちエビスも鬼となり、血眼をむき出して、喧嘩口論訴訟沙汰、これが開化か文明か。

あゝわからないわからない、乞食に捨兒に發狂者、スリにマンビキカッパライ、強盜窃盜詐僞取財、私通姦通無理情死、同盟罷工や失業者、自殺や餓死凍死、女房殺しや親殺し、夫殺しや主殺し、目も當てられぬ事故ばかり、無闇矢鱈に出來るのが、なぜに開化か文明か。

あゝわからないわからない。賢い人がなんぼなんでも、ある世の中に馬鹿者が、議員になるのがわからない、議員といふのは名ばかりで、間抜でふぬけで腰拔で、いつもぼんやり椅子の番、啞かつんぼかわからない。

あゝわからないわからない、當世紳士はわからない。法螺(ほら)を資本に世を渡る、あきれ韮の面の皮、あつかましいにも程がある、其癖藝者に振られたり、弄花に負けたりする時は、青くなるのがわからない。

あゝわからないわからない、今の坊主はわからない、殊勝な面でごまかして、寢言念佛ねむくなる。女をみだぶつ法蓮華經、それもしらがのぢいさんや、ばあさん達が金溜を、はたく心がわからない。

あゝわからないわからない、耶蘇の坊主もわからない、飯も食へない人達に、アーメンソーメンうんどんを食はせるなればよいけれど、聴かせるばかりで何になる、何も食はずにお前等の、まづい說教がきかれよか。

あゝわかないわからない、威張る役人わからない、なぜにいばるかわからない、只ムチヤクチに威張るのか、彼等がいばればば人民が、米搗きバツタを見る樣に、ヘイ／＼ハイ／＼ピヨコ／＼と、御辭儀するのがわからない。

あゝわからないわからない、今のお醫者はわからない仁術なんどといふけれど、本職はおやめでたいこもち、千代萩ではあるまいし、竹に雀の氣が知れん、貧乏人を見殺しに、して居る心がわからない。

あゝわからないわからない、辯護士なんぞもわからない、をだてゝ訴訟を起させて、原告被告のなれあひで、何をするのかわからない、勝つも負けるも人の事、報酬貪る事ばかり、何が義狹かわからない。

あゝわからないわからない、なぜにわれ／＼人間は、互に斯くまで隔離と、朝から晩まで働いて、苦しい目に遇い難澁の、事に出遇れて死ぬよりも、辛い我慢をしてまでも、命を續けてゐるのやら、どう考へてもわからない、何を目的に生存へて、ゐるのかさつぱりわからない、我身で我身がわからない。

以上は非常な長編物で、五十萬部宛以上の賣高を見。

あきらめ節

△地主金持はわがまゝで、役人なんぞは威張るもの、こんな浮世へ生れて來たが、我が身の不運とあきらめる。

△お前この世へ何しに來たか、稅や利息を拂ふため、こんな浮世へ生れて來たが、我身の不運とあきらめる

△苦しからうが又つらかろが、義務をつくさにやならぬもの、權利なんぞを欲しがることは、出來ぬものだとあきらめる

△借りたお金は催促されて、貸したお金は取れぬもの、どうせ浮世はかうしたものと、私しやいつでもあきらめる

△汗を絞られあぶらをとられ、血を吸ひ取られたその上に、投り出されてふんづけられて、これも不運とあきらめる

△長いものには卷かれてしまへ、泣く子と地頭にや勝たれない、貧乏は不運で病氣は不幸、時よ時節とあきらめる

△あきらめなされよあきらめなされ、あきらめなさるが無事であろ、私しや「自由」の動物だから、あきらめられぬとあきらめる

又あきらめ節と同調で、左の字引歌がチヨツト讀賣の好材料

であつた。演歌には流行り出してから賣れるものと新版のまゝ歌詞で賣れるものとがある。これは後者であつた。

滑稽當世字引歌

△「空前絶後」とは「タビ〳〵アルコト」で
「スグコハレル」のが「保險付」
「大懸賞」とは「バカモノツリ」で
「マネコトスル」のが「新發明」

△「戀愛」とは「ダマシテカネトル」ことで
「厭世」とは「ヒヂテツポータツタ」こと
「初婚の處女」とは「デモドリヲンナ」
「容貌普通」は「オバケヅラ」

△「本紺染」とは「オハグロゾメ」で
「大安賣」とは「タカイコト」
「正直者」は「ジセイニアハナイバカ」で
「才子」は「ニダンノデキヌヒト」

△「賃銀勞働者」は「ノーゼードーブツ」
「紳士」は「アソンデクラスヒト」
「小間使」とは「ナイショノメカケ」
「美人」とは「ミナゲヲシタヲンナ」

△「ヤスクカツテタカクウツテモウケル」のは商人
「アブラウル」のは「怠惰者」
「ミヲウツテオシリヲウル」のは「娼妓」
「イノチヲウル」のは「勞働者」

△「馬匹改良」は「トバクノショーレー」
「福引」は「ヨクバリヲダマスモノ」
「名譽」とは「オカネヲタメコム」ことで
「坊主」は「オキヨウノチクオンキ」

この頃、荒畑寒村君が、佐藤悟と一緒に暫らく演歌をやつた。その時、荒畑君から——眞劍に演歌をやらうと思ふからよろしく頼む。歌はズブカラ下手だけれど——云々の手紙を貰つた。然しそれは色々の事情で實現されずにしまつた。

一番長くやつたのは、藤田浪人であつた。佐藤三之丞（焼打事件の佃シノブの甥で、當時苦學して居た、今麴町邊で興信所をやつてゐる）と一緒に可成り續けてやつた。浪人が三崎町、片山潜のキングスレー館に居た時で、其處へ佐藤が一緒にころげ込んでゐた。

演歌者としてゞではないが、山川均氏がよく增稅節をうたつた。大杉が龜戸邊を、私の尻に隨つて來てうたつて見たりした事もあつた。

一一　苦學生から墮落書生へ

次に四十二年、ハイカラ節が流行を極め、爲めに世人は他の各種の讀賣歌をも一口にハイカラ節と稱へた。

ハイカラ節

黄金眼鏡のハイカラは、都の西の目白台、女子大學の女學生、片手にバイロン　ゲーテの詩、口には唱へる自然主義、早稻田の稻穗がサーラサラ、魔風戀風そよ〳〵と。

同時に「男三郎の歌」と「袖しぐれ」（野口曾惠子の歌）とが流行した。――桐の一葉に秋ぞ來て、早や二月も過ぎ去りぬ。獄に在す郎君が身は、如何に淋しき事ならん――此の袖しぐれは曾惠子が獄中の男三郎にあてた書翰を歌にしたものだと傳へられ信ぜられたが、實はその書翰なるものは、赤羽巖穴が曾惠子の心情を手紙の體に綴つて山崎今朝彌の法律新聞に載せたものであつた。それを私が七五調にしたのが袖しぐれの歌である。倉持愚禪君はこの歌をうたつて街を流して歩きながら、いつもこみ上げて來て涙をこぼしたとよく語つてゐた。

當時苦學熱が盛んであつた。苦學生にあらざるものまで苦學生を裝ほつた位だつたが、その苦學熱で、全國から志望者が一度に東京に集まつたかの觀があつた。そして演歌が夜間職業である處から彼等に擇ばれて、一時演歌者の激増に素晴らしかつた。演歌者が袴を穿く習慣や、演歌は苦學生の内職だと解されることや、書生節をいひなされるに至つたのはこの頃から始まつたのだ。

處が、俄然、意外な變展が生じた。それはヴイオリンを持つやうになつた事だ。前の苦學氣質の連中は多く他に走り、單にヴアイオリンを持つて見る事が嬉しいといふ輩が激増した。そして花柳の巷に足を踏み込むと、ヴアイオリンを持つの故に歡迎された。白い女に嬉しがられ樣爲めにのみ演歌者になる。否演歌者の眞似をするのだ。

へうたんの化物とか、錨の目立とか、新樂器に對する惡罵と共に、墮落書生不良少年の聲が演歌者に放たれた。遺憾ながら不良少年の話を裏書する樣な行爲をする樣な者が澤山まぎれ込んでゐたのだ。壓迫は勿論峻嚴に來た。そしてその犧牲は多く眞の演歌者から出されなければならなかつた。

斯るうちに流行は、箱根の山の作替、何だ神田の神田橋、のスカラソング。此處はお國を何百里、の戰友。マガイーソング。ゼーゼー節。と移つて行つた。

マガイーソング

△飛行機睨んで地圖太踏んで、銃劍片手に涙ボロ〳〵、ナン

テマガイ丶ンデセウ

△私しや嫌だよハイカラさんは嫌だ、頭の眞ン中に蝶蝶のつぼ燒、ナンテマガイ丶ンデセウ

△酒は正宗藝者は萬龍、唄は流行のマガイ丶ソング、ナンテマガイ丶ンデセウ

マガイ丶ソングの流行も凄まじいものであつた。これは前に出た小唄思ひ草の語尾を少し訂しただけのもので、思ひ草が既に流行してゐたのを共に棄つて、マガイ丶ソングの大流行になつてしまつた。

ぜー〱節（又は增稅節と謂ふ）

△襖もる風來けりやごんせノーヤ
見せてやりたいナンギナモンダネー
トツアツセー火の車　マシタカゼー〱

△背には子を負ひ太鼓腹抱へノーヤ
それで車のナンギナモンダネー
トツアツセーあとを抑すマシタカゼー〱

△ふざけしやんすな百姓などゝノーヤ
生命つなぐはナンギナモンダーネ
トツアツセー誰のためマシタカゼー〱

一二　演歌の黃金時代

其後の大流行は「むらさき節」であつた。

新流行歌は、當初に於ては只政治運動の具であつた。具であるだけでは私には滿足出來なかつた。そして歌を歌にする可く心懸けて來た。たゞ怒鳴り飛ばすのでなく、ほんとうにうたつて、見たかつたのだ。そして絕えず試み、努めて來たが、私の此の思想が、「むらさき節」に於てはじめて完全に近い發現を見た。

演歌者仲間の不健全な空氣の中に、何とかせねばならぬと喘いでゐた少數の者は、丁度此時、藝術的に精進した。技藝の練磨といふ事が、はじめて眞面目に考へられて來た。さうした間に生れた「むらさき節」は一世を風靡した。從來の一切の流行歌を何處へか閉ち込めてしまつて、むらさき節萬能となつた。そして流行期間も非常に長かつた。當時は此の歌一つさへうたつて居ればよかつた。だから歌詞は無盡藏と言つていゝまで作られた。曰く忠臣藏紫節、曰く義士銘々傳紫節、曰く名劇むらさき節、曰く何、曰く何と次から次へ續々出來て、どし〱歡迎され、賣れ、うたはれた。忠臣藏や銘々傳は俳席で、俳人に練さられたもである。

むらさき節

むらさきの袴さら／＼ホワイトリボン、行先は何處、上野飛鳥山向島　ほんに長閑な花の風　散れ／＼散るならさつと散れ　チョイトネ

△さめ／″＼と泣いてゐるのを寢た振りに、思へばほんに、冷たい仕打をされたとて、思ひ切られぬ身の因果、又も未練の小夜時雨、チョイトネ

△歸るならなんの止めやうとめはせぬ、羽織をきせて、羽織の上から抱きしめて、家の首尾をと目に涙、ばつたり落ちたるつげの櫛、チョイトネ

△しん／＼と更くる屏風の裏田圃、霜降る月夜、月夜鴉が悄らしい、主は今がた寢たばかり、主は今がた寢たばかり。チョイトネ

△君は今駒形あたり降られはせぬか、降るならいつそ、いつそ降るなら夜中から、やらずの雨のざんざ降り、そして止めたい明日の朝、チョイトネ

△三味線の細い音色は新内か、大びけ過ぎの、廓は月さへ冴え渡る、あれも戀故戀がたり、銀杏返しの亂れ鬢、チョイトネ

△目で詫びて、居るのにさした盃を、受けても呉れず、一座の手前もあるものを、人の實意を仇にして、悄やすました嘘烟草、チョイトネ

忠臣藏むらさき節

△改める兜も星の鶴ケ岡、伽羅の香床し、歌にこと寄せ師直が、花の顏世の袖をひく、武藏鐙の横戀慕。（大序）

△殿中に鮒じや鮒じやと雜言過言、鹽谷判官、堪え堪えた勘忍の、緒を切りつけたる後より、止める本藏が口惜しい。（三段目）

△武士の覺悟は豫て白小袖、白木の三寶、いまはの際に大星が、恨みを受け繼ぐ九寸五分、幾度見返る城の月。（四段目）

△提灯の命も消ゆる雨の脚、山崎街道、猪を狙ふた二つ玉、金が敵の定九郎、因果はからまる縞財布。（五段目）

△泣きながら籠にゆらるゝ生別れ、千萬無量、折から來合す朋輩が、つめよせ／＼強意見、切つて見せたる腹の中。（六段目）

△一力に醉ふた／＼のひざ枕、鍔音パチリ、力彌が持て來る長文を、こま／″＼照らすは釣燈籠、上と下との盜み讀み。（七段目）

義士銘々傳紫節

△ほろ酔の、顔も赤垣源藏が、一歩は低く　一歩は高下駄赤合羽、兄の小袖に暇乞ひ、貧乏徳利が置き土産。

△大丈夫の、矢竹心の武林、お家の大事、母が最後の書置も、薄い墨色濃い情、腕がうなつて肉躍る。

△寶松の、松とねぢけた丑五郎、づぶとくぐでん、酒代が欲しさの喧嘩腰、大事の前とて神崎が、かなの證書の筆の跡。

△酒に身も、浮大盡と囃されて、祇園の幾夜、夢はいづくに去り狀を、妻や老母のうしろ影、見送る心の底だくみ。

以上は何れもその二三に止まる。これ等の作者は。増田靜雨、石井珠錦子、川村十牛氏此等と添田凡人である。何れもビラ刷の粗末な讀賣本になつた。かういふはしがきを載せて、——へどのやうな駄文句をおこがましの活版刷、ヤレ唄の改革の刷新のと、歯の浮くやうな熱を吹いても、目くら千人目あき千人、「與駄もその位飛ばせば寧ろ愛嬌だ」とお笑草で世間は濟まうが、濟まぬは自分の贅澤心、ちと垢抜けのしたものをと思ふ折柄、某俳人が寄せられた、昔料理の寂び鹽梅、赤穗の鹽のチトからきなどとは言はぬもの。臥龍窟に於て、喧嘩場——。

兎に角明治四十四年の春から翌四十五年の末まで、至る處チヨイトネ〳〵の聲を聞かざるなき有様に至つた。

當時非常に米價が騰貴して、萬朝報が「米が高い」といふ記事を二三ケ月間連載したが、それより前既に演歌に依て擴められた流行のむらさき節にこんなのがあつた。

△つまらないあゝつまらないつまらない、小作のつらさ、待つてた秋となつて見りや、米は地主に皆取られ、可愛妻子は、飢に泣く。

△風は吹く雨にや降られる錢は取れず、あゝつまらない、ほんに出商賣はつらいもの、これじやお粥も啜れない　といふて投身も出來はせぬ。

△又しても米は騰るし子は出來る不景氣つゞき、家賃にや追はれて暇は出る、家にや妻子が泣きツ面、娑婆に居るのが恐ろしい。

長い間流行を極め、讀賣の好材料となつてゐた男三郎の、ああ世は夢か幻か、の歌も、伊惠子の、桐の一葉に秋が來て、の聲もパツタリ止まつてしまつたのも、マツタク紫節の流行に壓された爲である。

此結果は前の墮落書生云々の雪辱となり、良き意味で演歌者が社會に歡迎された。精神努力の結果だ。不良分子は厭が應でも振落されなければならなかつた。

紫節の流行全盛期を過ぎて演歌者は「ワンダーワールド」と命名し、春爛漫の曲をその儘用ひて滑稽な唄を盛んにうたつた

が、あまり好い材料にもならず、却つて廢れかゝつたむらさき節の方がよく賣れた程であつた。

後、全く紫節がすたつた頃、むらさき節に代ゆべく末派の演歌者が、未成熟な小唄「うかれ草」といふ下田節の作替を出版したが、すぐれたむらさき節をうたつた民衆のもの笑ひとなつただけで枯れ果てゝしまつた。

當分の間、大低の歌が皆紫節の前に顔色がなかつた。そして材料に窮してひどく不景氣に見舞はれた。

四十五年の秋、「乃木大將の歌」と「ちどり節」が少しうたはれた。

一三　紫節の影響をうけた練磨の演歌

流行歌の蓄音器吹込で名を賣つた後條紫雲君が、まだ仲間から素人扱ひにされてゐた頃、上州地方巡業中、地方も亦むらさき節の流行が稍下火になつたので、何か變つた材料を得たいと思ふ折柄、或る藝妓に以前地方にちよつと流行した事のあるどんどん節の話を聴き、その曲を傳授されて、それが浪花節三河屋圓車の節から出て居る事を知り、それに改良を加へ「新どんどん節」と名づけてうたつて見ると非常に歡迎されるので、間もなく東京に戻つて同業者にそれをすゝめた。材料に飢えて居た同業者は爲めに大いに救はれた。後藤君は此の時から仲間に認められ、元祖の故を以て「どん／＼の後藤」と呼ばるゝ樣になつた。

△駕籠で行くのはお輕じやないか、妾しや賣られて行くわいな父さんは御無事で又母さんも、お前も御無事で折々の、音信聞いたりきかせたり、ドン／＼。

これが大いに流行し、更に新作を要望する程の勢力で、私の改良新どん／＼節がある。

△人目忍んだ深編笠も、包みおほせぬ罪科や、黒い小袖に繩かけられて、遂にその身は鈴ケ森、果敢なく消えゆくその淡雪を、紅で彩る小紫、殘る目黒の比翼塚、ドン／＼。

△涙ぬぐふて縋つくらうて、どうでも今日はと又涙、かへす朝寒着せかけ羽織、辛い別れを裏が泣く、つらい別れを裏が泣く、ドン／＼。

浪花節流行の全盛時代であつた爲めでもあらうが、此のドンドン節のまだ廢れもせぬ内に更に奈良丸くづし一名徘やぶし）が流行り出した。そしてどん／＼節は奈良丸くづしの流行に壓されて餘程壽命を縮めた狀態であつた。最初單に浪花節くづしといふて花柳界にうたはれた浮いた調子のものと、讀賣業者にうたはるゝ未成熟なものとであつたが、熟練せる演歌者が、だ

ん／＼改訂に改訂を加へ、遂に日本全國津々浦々まで流行した此の奈良丸くづしとなつたのである。

奈良丸くづし

△さゝやさゝ／＼笹や笹、其角と源吾は橋の上、水の流れと人の身は、あしたまたるゝ寶船

△僕の未來は法學士、君の未來は文學士、よかろ吉原交際はふ、親達やお國で芋を掘る。

△院長はドクトル月給取る、金貸は金貸して利息取る、誰も嫁取り婿取るに、私しや日向で虱取る

△秋が來た來た秋が來た、さぞや都は淋しかろ、おらが在所へ來て見やれ、米の實る木がお辭儀する

△月が出た／＼月が出た、セメント會社の上へ出た、東京にや煙突が多いから、さぞやお月様煙むたかろ

△人は元來裸蟲、米を食ふから米の蟲、パンを食ふからパンの蟲、膏血なめる奴アあぶら蟲

△米は高うても赤ン坊は、ヒヨコリ／＼と生れます、生れたその娘が別嬪で、のろい男を目で殺す

△ほめたからとて戀じやない、笑ふて吳りやるな戀じやない、戀でも色でもないけれど、なぜか私の蟲が好く

△待合茶屋に夜明しで、酒を飲むのも國のため、醉ふては枕す美人の膝、醒めては握る天下の權、税をあげるも國のため、議員買收も國のため

流行歌の中でも、全國一般に急激に流行する程の歌は概して其壽命（流行期間）が短い。奈良丸くづしはあらゆる階級の人々にうたはれ（うたはぬ人のない程に）たが流行期間を過ぎてからはパツタリと誰も口にせぬといふ風に廢れてしまつた。

それから「都節」と「おいとこ節」の作替が讀賣の材料として用ゐられた。都節は流行といふ處まで行かず、却つて古いおいとこ節の作替の方が流行り出した。

都節

△親じや／＼と親風吹かせ、威張りなさるなチョイト／＼親は子供のヤレソレ抜けがらじや、ソレヨさうじやないかネーあなたチョイト／＼

△馬鹿か利口かお客の心、乘せて計ればチョイト／＼すぐに知れますヤレソレ口車、ソレヨさうじやないかネーあなたチョイト／＼

新おいとこ節

△おいとこさうだよ帳場の上に、古い時計が掛けてある、おやぢの頭がてか／＼光る、頭も光れば眼も光る、なるほど頭固さうなデコボコおやぢだ、ソロバンパチ／＼はぢいて

る、見ればさほどの年でもないのに、どうしてあんなに禿げたらろか、酒も嫌ひで女も嫌ひで、はやり唄さへ唄はずに、エンマが鹽干なめたよな顔して、煙管の雁首を、いつもカン〳〵カラ金火鉢で、叩いてちや頭も禿げよかい

△お前正宗わしや錆刀、胸もすくよな聲揚げて、うたふ馬士唄谿間に響き、谿谷の小徑の木が揺れる、ゆれる木蔭にかくれて見えて、お前切れてもわしや切れぬ、白い手拭あね様冠り、赤いたすきに赤い帶、思ひ染めたる染めわけ手綱、しやりん〳〵と鈴がなる、

△おいとこさうだよ浮いた太鼓と、三味が鳴る〳〵灯がともる、宿場通れば行燈の蔭から、かぼちやがまた招く、なんぼ呼んでも家にや女房も、可愛い盛りの子も御座る、どうどうどう手綱をひいて、南瓜なんぞに用はない。

その頃の讀賣ビラ本は、淺草區北清島町の材料屋即ち小資本家、武井傳と岩田專助の二ケ所から出版されて居たのであつたが、武井が廢業して岩田の獨專になつたので、岩田は可成りな横暴振りを見せてゐた。その二階に夜具付一晩六錢で演歌者を置いた。そしてヴアイオリンも一晩幾何かの口錢を取つて貸した。商賣道具のヴアイオリンを借りねばならぬといふのは既に演歌者自身の墮落?を語るものであるが、岩田は屋根代が二晩も滞ると直ちに牙をむいた。

各所に散在する三四十名の演歌者は、その横暴を憤つてゐたが、大正二年の春、倉持愚禪君を中心とする日本俗謠會が下谷山伏町三九に起り、私の新おいとこ節や生さぬ仲の歌等を發行して、一方材料問屋に對抗しつゝ演歌界の刷新に力を注いだ。然し不幸にして經濟關係其他の事情の爲め、翌年の春遂に潰散して再び岩田の獨專となつた。

一四　誤まられたる演歌者の正體

其時山伏町三七の臥龍窟から、小やかな雜誌「狂ひ花」が出た。其誌上に初めて略譜を附して廣く世に發表したのが、後に流行を極めた「眞ッ黒節」と「カチユーシヤの歌」である。カチユーシヤの原歌は島村抱月氏の作歌、中山晋平氏の作曲で、松井須磨子が復活劇でうたふたもの、學生などがボツ〳〵うたひ初めた頃から演歌者がうたひ擴めてあの流行となつた。

マツクロ節

△箱根山、昔や背で越す籠で越す今じや夢の間汽車で越す、
煙でトンネルは　マツクロケノケ

△櫻島、薩摩の國の櫻島、煙吐いて火を噴いて破裂(ハレツ)し、十里
四方がマツクロケノケ

△米で鳴る、陸奥に生れて食へぬとは、嘘のやうだが來て見やれ、いり松蕈薬餅、マックロケノケ

△雨が漏る、雨が漏る〳〵美術館、汚點(しみ)が畫になるその汚點が、職工の涙よ　マックロケノケ

△金ほしや、お金ほしやの空想の、果を足尾の銅山に、カネを掘る掘る　マックロケノケ

△爪彈の、消えて聞えて又消えて、消えて聞えて又消える、邪慳な板塀　マックロケノケ

△進み行く、文明の光か瓦斯電燈、夜を晝にする工夫さん、お前はいつでも　マックロケノケ

この頃から讀賣ビラ本に略譜を附ける樣になつた。然しその後多くの場合、この略譜なるものは頗る不正確な、たゞ申譯に數字を並べてあるのに過ぎぬものであつた。

マックロ節の流行時には、歌詞にもある樣に、櫻島噴火、東北地方大饑饉、照憲皇太后の薨去、等事件が頻發した。

それから、――お前とならばどこまでも、どこいとやせぬかまやせぬ――と、續いて「現代節」「新呉節」である。

現代節

△「新案特許品」よく〳〵見れば、小さく出願中と書いてある、アラほんとに現代的だわネ

△金持はゑらいもの藝者をつれて、自動車飛ばせる慈善會、アラほんとに、現代的だわネ

△新らしい女と言ふてる内に、いつの間にやら親になる、アラほんとに、現代的だわネ

△お淸泡鳴は眞面目な馬鹿よ、痴話喧嘩(ちわげんか)を裁判所へ擔き込む、アラほんとに、現代的だわネ

△甘い言葉もまた冷かしも、覺めたノラには甲斐がない、アラほんとに、現代的だわネ

△從者(おとも)引連れ生徒が通ふ、通ふ先生は腰辨當、アラほんとに、現代的だわネ

△死んだ後での極樂よりも、此世でらくらく生活(くらし)たい、アラほんとに現代的だわネ

新くれ節

△銃を立て、天幕をはりて背嚢が枕、外套被りてチョイトすや〳〵と、妻子に逢ふたるヨツコリヤ夢を見たエ、雨か將た霰か敵の彈　チョイ〳〵

△石ころの、罐詰賣つて儲けた奴が、男爵買ふてチョイト大かい面、惡錢身に付くヨツコリヤ世の中にエ、どうしてマタ小泥棒は身がたゝぬ　チョイ〳〵

△ところ變りや、達磨ざるそば草餅ほたる、振るもなびくも

理學博士 小倉金之助先生著

統計的研究法

菊判總布綴七百七十頁
圖解二百三十個

○定價金五圓參拾錢
○送料 十八錢

社會經濟人口金融貿易財政産業勞働問題研究者必讀の名著として滿天下に推稱せらる

本書は豐饒なる統計材料を基礎として、其間を貫く統計法の精神を、通俗的に而も徹底的に闡明し、統計的研究法の科學的合理性を見出すと同時に、實際問題解決の鍵を與へたものである。

その多方面的にして而も系統あり、平明懇切にして而も徹底的であり、實際材料處理の間深く科學的精神を敎へる點に於て、本書は實に世界空前の試みたるを失はない。

大阪市南區安堂寺橋通三丁目
東京市神田表神保町三十番地

株式會社 積善館

振替大阪二九八一番　振替東京二〇二六六番

賀川豐彦著

死線を越えて 下巻
壁の聲きく時

我家庭になくてはならぬ一夫一婦聖愛の小說

愛の感激であり、靈の生活であり、人格主義を體驗づけた本書が、此の不景氣の空に唯だ一書、飛ぶやうな賣行きを示すはそれは當然の事である。凡百の讀みものの總てが淫蕩を對象として書かれたるに拘らず、本書は實に一夫一婦家庭道德の純愛を基調とし、三角戀愛を排し、陰慘なる修羅場―貧民窟！誘惑多きゴロツキの群――にも感激の生活を徹底せしめた大男子の凱歌である。殊に彼が死を誓つて勞働爭議の陣頭に立ち、震災劈頭救護の最前線に立つた勇氣ある涙ぐましい血の記錄を讀むものは、唯一人として首を上げ得ない。特に彼が唯物主義の弟の爲に捧げた熱烈な唯神主義は讀者の心臟を強く鼓動させではおかない。眞に人格主義の勝利に共鳴する人々、純聖愛の一生に強く生きんとする若き人々の爲に本書を捧ぐる。

四六判上製 定價貳圓八拾錢 送料貳拾壹錢

（上卷）死線を越えて 二百八十四版 定價參圓 送料貳拾壹錢

（中卷）太陽を射るもの 百七十六版 定價貳圓八拾錢 送料貳拾壹錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二番

小泉信三著

價値論と社會主義

定價參圓

送料廿一錢

菊判上製

改訂版出來

經濟學者として、社會學者として多大の尊敬を受けつゝある小泉氏が、社會主義と價値論につき精嚴なる筆致と、嚴格なる推敲の餘りになれる權威と、趣味と實益を兼備せる名著。社會主義を學的に、新經濟學的に攻究せんとする學徒が參考書として大に價値ある書。

改訂版には河上博士との第三回論戰數十頁をも附錄として掲載した。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

チョイト金次第、色と慾とのヨッコリャ此の老婆でニ、どこのマタ間抜けで廢娼論　チョイ〱

△お互ひに、年に不足は少しも無いが、嫁のないのかチョイト唯不足、なんぼ見ぬ振りヨッコリヤしてゐてもエ、つらやマタ目に付く緋縮緬、チョイ〱

——狂つた世界だ……

輕薄な世界だ、傲慢な世界だ、

小人の世界だ。俗物の世界だ、

詐僞師の世界だ、泥棒の世界だ、

何事も考へない世界だ、

無感覺、無神經の世界だ、

慾に向つてのみ勇敢な世界だ、——これは現代節のはしがきである。新くれ節の流行期間も可成り長かつた。そして此時演歌者の材料問屋に對する反抗運動が起つた。新くれ節のはしがきにも現はれてゐる。

△新流行歌の讀賣本即ち「演歌」は我々の一派特有の專賣品であります。

△我々團體は時代思潮につれてさま〲の變化はありましたが、自由民權運動の昔から今日までの長い歴史があるのです。

△近頃無責任なる言行を以て我團體の構成者諸君を欺き似而非なる物を賣るものがありますから御注意を願ひます。——

青年演歌革新會主唱者、石川曲峰、長尾吟月、後藤紅郎、宮島郁芳

然しこの革新運動も不成功に終つてしまつた。何故か？演歌は職業としての性質上、どうしても不良の空氣を醸し易い。即ち惡い意味の放浪性を帶びた、無責任な懶惰者が多く集まるのだ。それ等には單なる職業的團結すら望まれない。尚甚だしくは主唱者の中からさへ裏切者が出る。徹底したデカタニストに會つては如何なるものもネをあげてしまふ。それが演歌者の正體として社會には映ずるのだ。

更に演歌者には赤本屋（駄本出版）といふ敵が居る。彼等は時々の流行歌を出版して非常な廉價で賣り捌く。それが本屋の店や赤本賣に依て民衆にはかれる數は巨大なものだ。演歌者の作歌、作曲、流行に導く、等の努力を無視して、末派の演歌者や裏切者から話にならない樣な金で原稿を買ふ。その原稿たるや勿論ひどいごまかしものであるが、甚だしきに至つては人の作物を其儘失敬する。節操のない不良演歌者以上に惡辣だ。さうして出來た安價な駄本を安價に賣る。その影響は演歌者には痛い。路傍に立つて一生懸命に流行歌を怒鳴る。よると同じ

く並んで店をひろげてゐる赤本屋が勞なくして利を占める事が容易だ。

斯うした中に於ける少數の眞の演歌者の苦鬪こそいたましいものではないか。演歌者は國民的歌謠の供給者だ、從つて指導者の立場にあるのだといふ事を自覺して、寧ろ光榮を感じてその第一線に立つてなんかんと雄圖を劃する者もあつても、足下の恐ろしい泥の波に氣付くと、すつかり驚いてしまふ。さうした氣持で入つた者は直ちに退却してしまふ。演歌に致す努力を、他に向けた方がいゝいふ事になる。一時仲間になつた事がある者で、一流の新聞記者になつてゐる者、雜誌記者になつてゐる者、オペラの作者、映畫の監督になつてゐる者、音樂家になつてゐる者、數へて見れば隨分ある。その中で、何を考へたのか、そんな生活を續けて來た私は、おそろしい愚物でもあるかな。

一五　水兵の歌、新磯節其他

次に全國を風靡したのは「青島節」のナッチョランである。

そのはしがきに——成つちよらん、成つちよらん、成つちよらん世の中だ、成つちよらん節が流行するのは當然だ、そしてその唄の文句がなつちよらん、唄ふ奴がなつちよらん、全くなつちよらん世の中だ、成つちよらん、成つちよらん……當時新聞の狂句子の曰く——ナッチョラン、唄つてるのがナッチョラン——。

青島節

△青島よいとこと誰がいつた、背後禿山前は海、尾の無い狐が住むさうな、僕も二三度だまされた、ナッチョラン

△大黑帽子にペンネント、子供のよだれ掛けアベコベに、風呂敷たゝんで襟飾り、意氣で無邪氣な水兵さん、ナッチョラン

△學校へ通ふてゐる內は、卒業々々と待つてゐたが、卒業して見りやつまらない、なたも氣になる就職口、ナッチョラン

△早く歸つて頂戴と、送る浪さん逗子の濱私しやお客を送る時、背中叩いて舌を出す、ナッチョラン

△親も妻子も振り捨て、私しや兵士になりました、泣き〲三年勤め上げ、歸りや吾が家に雨が漏る、ナッチョラン

青島節は前に流行した奈良丸くづしの變化したもので、誰が作曲したのでもなく、青島守備の海軍水兵等が娯樂の乏しい陣中の慰みにうたつてゐた奈良丸くづしの調子がいつしか變化して、三句目と四句目に面白味がつき、語尾のオサマリがつかぬ

可笑しさに、ナツチヨラン、と戯れたのが遂に陣中の流行歌となつたとのことである。それが青島から歸つた水兵の口より、先づ娼妓、茶屋女、藝者、それから讀賣唄になつて全國一般の流行となつたのである。

次に新磯節が流行した。

新磯節

△沖の眞ン中に白帆が見ゆる、船は帆まかせ帆は風まかせ、
私しやあなたの、心任せになる身じやないか、
△飛んだイタヅラあの宙返り、命ナイルスそれ見たことか、
怪我で、スミスも、梶の鳥眞似ちよとやりそこね、
△都はなれて此の山すまひ、戀も浮世も忘れてゐたが、鹿の、鳴く聲、聞けば昔が戀しくてならぬ
△三浦三崎にどんとつく浪は、可愛い男のありや度胸試し、
のるか、そるかの、一丈五尺の櫓かしわるぞへ
△佐渡の四十九里や昔のことよ、今じやアメリカロシヤまで渡り、弱い、女が、アイラブユーとは豪いもんじやないか
△來るか〱と波止場に待てば、月は朧に灯は紅に、そよと、吹く風、波音ばかりが悲しうてならぬ

後此の新磯節が、新々磯節、學生磯節、滑稽磯節、などゝ様々な名様で様々に調子を變へてうたはれた。それを同時に「新時代節」「バラの唄」が流行り、青柳有美氏の「無い有る節」土岐哀果氏の「新綱の歌」など出來たが、讀賣の材料としてうたはれただけで、一般には行はれなかつた。

新時代節

△添へば我夫添はねば他人ノーヤ
縁は切れもの離れもんじやネー
トコヤツセー是非もないホンマカドン〱
△家も屋敷も人手に渡しノーヤ
今は却つてノンキナモンダネー
トコヤツセー日常取り、ホンマカドン〱

無い有る節

一、無いぞや無いぞや何がない、女の言葉に實がない、浮氣でこねた世辭ばかり
（二唱ホーイホーイヘヘヘラヘー
二、有るぞや有るぞや何がある、ナイチンゲールにエレンケー、海老茶式部に清少納言（二唱）ヒーツプヒーツプフラララー
三、無いぞや無いぞや何が無い、女の頭に智恵がない、泣の涙の愚痴ばかり、（二唱）ホーイーイヘヘヘラヘー
四、有るぞや有るぞや何がある、クレオパトラにキユーリー

夫人、サムマーコートに袈裟御前、（二唱）ヒーツプヒーツ
プフラララー

新綱の唄

一つとや　人と生れて始めから
皆ンな貧乏な筈がない……筈がない
二つとや　震へながらも身につける
冷たい汗の勞働服……勞働服
三つとや　水を呑んでも腹は張る
腹は張つても身にやならぬ……身にやならぬ
四つとや　夜は夜とて麻つなぎ
あすの米さへあてがない……あてがない
五つとや　いつか一度はあんな世に
のらりくらりと遊びたい……遊びたい
六つとや　無理な工面の鴉金
借りた阿呆を泣くばかり……泣くばかり
七つとや　怠け放題なまけろと
やけに呑みこむコツプ酒……コツプ酒
八つとや　やつと命はあるもの丶
あればあるだけ餓鬼の數……餓鬼の數
九つとや　こんな暮しをいつまでも
いつも我が身のいくぢなし……いくぢなし
十とや　とかく分らぬことばかり
分りやこうしちやゐられない……ゐられない

間もなく、「その前夜」の劇中歌、「ゴンドラの歌」が、都離れた東北地方の若い男女の間にうたはれた。同時に東京でも新進の演歌者が二三、うたひ始めたが、何故か東京では反響がなかつた。

一六　演歌組合と小唄式傾向

暫らく演歌を離れ、蟄居してゐた私を訪ふ者があつた。清水、安田二君の演歌者だ。演歌者の組合を作りたいから助力せよ。といふのである。私は、まさか、と思つた。「それは結構なことだ、い丶事だが至難なことだ。」と私は斷つた。然るに二君は再三再四やつて來た。私は二君に信を置けなかつたのか。否、組合組織はもう多年仲間の誰彼に依つて幾度も企てられたが、幾度やつても駄目であつた。無理解無節操、箸にも棒にもか丶らない連中にいつも裏切られて不成功に終つた事實の上から見て、眞に至難なこと丶思ひ込んでゐたからだ。が二君の熱心さは遂に自分を起たしめた。貧乏な私等は、或は安い貸席を借り、或は救世軍の愛隣敎樓上を借りて協議數回、どうやら

こうやら――會員相互の親交を圖り、舊弊を矯正し、智識を交換し、技能の發達、實力の養成、生活の向上を期し、福利を増進する――の主旨の下に、演歌組合青年親交會は成立した。大正七年五月十七日。

處が果して、當初の內こそ一同熱を持つてゐたが、忽ちにして幹事に煙の如く消ゆるものあり、大阪に飛んで行つてしまふものあり、會の仕事は全部の私の肩に架つてしまつた。然し今更乘りかゝつた船で拔く譯にも行かず、自分の仕事として、頼りない少數の幹事を相手に、作歌、編輯、出版、其他一切の雜務を執つた。

演歌者は從來、色々の意味で、官憲からは絕えず壓迫をうけて、地上を右に追はれ左に追はれてゐた。其處で組合の仕事として、讀賣業を公認さす可く運動した。商賣の場所（人を集めてうたふ場所を常に追はれ勝ち）の開放運動もした。何れも成功した。社會一般の誤解も可成り解けたかと思つた。

その頃雜誌「新社會」に掲載した「ノンキ節」が小さなビラ刷にされたが、ほんの一小部分の人がうたふに過ぎなかつた。そのノンキ節が後、ニコ／＼節、城ケ島の雨、金色夜叉になどと共に演歌者の材料になり、盛んに賣れ、盛んにうたはれ出した。

新ニコ／＼節

△お前とならば何處までも、春なれば、花さく上野や向島、ドッコイ手を取りて二人連れ

△いとし姿を見送りて、闇ならば、いつそ未練はあるまいに ドッコイ、どこまでも月が照る

△お前とならば何處までも、戀じやもの、親の身分も忘れ果て、ドッコイ、千葉までも死にゝ行く

ヨカツタネ節

△オイ君見たまへステヤだね、なるほどステキだ春雨に、濡れて色增す青柳の、蔭にチラ／＼蛇の目、そいつはほんとにヨカツタネ

△娘をブンなぐつて追出して、獨りになつたら氣がさめた、それはお前さんがよくないと、易者に意見をされてゐる、そいつはほんとにヨカツタネ

△亭主持つには持つて見たが、兵隊さんだからダメなのよ、一年や二年ぢや歸らない、年が年中留守居番、そいつはほんとにヨカツタネ

ノンキ節

△學校の先生は豪いもんじやさうな、豪いから何でも敎へりや生徒は無邪氣なもので、それもさうかと思ふげな、ア

ノンキだね

△貧乏でこそあれ日本人はエライ、それに第一辛棒强い、天井知らずに物價は騰つても、湯なり粥なり啜つて生きてゐる、ア、ノンキだね

△洋服着やうが靴を履かうが學問があらうが、金が無きやヤッパリ貧乏だ、貧乏だ貧乏だ共貧乏が、貧乏でもないやうな顔をする、ア、ノンキだね

△貴婦人鐵面皮しくお花を召せよと、路傍でお花の押賣りなさる、オメデタ連はニコ〳〵者で購求なさる、金持は自動車で知らん顔、ア、ノンキだね

△萬物の靈長がマッチ箱見たよな、ケチな巣に住んで威張つてる、暴風雨にブッ飛ばされても海嘯を食つても、「天災じや仕方がないさ」で濟ましてる、ア、ノンキだね

△南京米を食つて南京蟲に食はれ、豚小屋見たいな家に住み選擧權さへ持たない癖に、日本の國民だと威張つてる、ア、ノンキだね

△稼いでも〳〵貧する鈍する、神樣佛樣願ひます、安樂に暮して行けるやうに、お賽錢を投げます拜みます、ア、ノンキだね

これ等が青年親交會成立の當時出版された流行歌である。同時に碑文谷踏切番の責任自殺事件があり、その歌が出來たが、これなどは只の事件物の興味としてのみでなく、民衆の心に何をか投じた樣に思ふ。

やがて「生ける屍」の劇中歌、さすらひの歌、酒場の唄（憎いあん畜生）やその作替が盛んに流行り出した。此の頃から流行歌の傾向も一變して來て、多く白秋氏のものや小唄式のものが歡迎される樣になつた。そして昔の樣に、一つの曲節を何年でも根氣よく歌つたのはと大變な違ひで、内容は兎に角、歌曲の數を要求して來た。民衆は歌の上に移り氣になつた。だから部分的や、小さな流行はちよい〳〵生じるが、大流行になる事などは稀れになつて來た。これも其の生活感情に於て小唄式になる可く餘儀ない近代人の心理反照でもあらうか。

一七　新（眞）への努力

豆粕ソング

△高い日本米はおいらにや食へぬ
おいらそんなもの食ずとも、よ
どんな變なもの食はされたとても
生きて居られりやそれでよい

△米は上ろと下ろとまゝよ

外に南京米が無いぢやなし、よ
何をくよ／＼鳩豆もござる
腹はいたんでも辛棒する
△米が高いとて泣くよな奴は
日本男子の面よごし、よ
何をくよ／＼水飲んでさへも
少しやどうかこうか生きられる
△食へるものでさへありや文句言はぬ
どうせ好いたもの食へやせず、よ
うまいまづいは申さぬときめて
今日も豆の粕、明日も粕
△粕だ、粕、粕、おいら米や食へぬ
食へりや此の世が嘘じやもの、よ
何はともあれおメデタい御代じや
生きて居られいやありがたい

日本全國に亘る「米騒動」といふものが起つたのは此の歌の流行り出した頃であつた、次いで流行したのが「イキテルソング」である。流行歌は勿論時代の反映である、が、然し過去に於ては未だ此の「豆粕の唄」の如くハッキリと時代の影の映し得たものは少ない。今日これを見ると、米價及び諸物價の暴騰、成金熱、貧民の増加、勞働爭議と溫情主義、豆粕を食へと言つた田尻鳩豆オヤヂの面、能なし市長、外國米、米騒動當時のこんなものが一度にゴチヤ／＼と目の先に浮動する

イキテルソング

△生きたガイコツが踊るよ踊る
ガイコツどんなこと言ふて踊る、よ
やせた／＼よ外米食ふて痩せた
日本米戀しいと言ふておどる
△日本に生れて日本米が食へぬ
變な話だが嘘じやない、よ
豆のしぼり粕外國米を食ふて
よう／＼露命をつないでる
△日本米は食はいでも日本人はエライ
ヤマト魂を持つてゐる、よ
たとへ外國米のオクビが出ても
やはりエライからエライもんじや
△ほんにエライもんじや生きてる／＼
生きる證據にや動いてる よ
青い顔して目をくぼませて
ヒクリ／＼と生きてゐる

八年初頭、松井須磨子の自殺があつて、哀悼の涙をうたつた。「新深川節」が流行し、續いて「カルメン」の上演頻り劇中歌の「煙草のめ〳〵」「酒場の唄」が流行した。此時親交會は何十年來の讀賣本の醜い形式を脱して新しい編輯を以て出版したのが「カルメンの唄」である。

南の國へ春が來て、緑の風にほろ〳〵と、花が散りますアカシアの、花がちります水の上

空ゆく雲は風次第、生れ故郷をたづねたら、山の彼方を指さして、狹い世間を嗤だろ

風のまに〳〵さすらひの、ジプシー育ちの踊り子が、そのなりはひをたづねたら、野暮なお方と嗤ふだろ

絹の肌着が辷ります。赤いスカート邪魔であろ。煙草工場の女工さん、ちよいと〳〵と呼びかける。

女王(クイン)のやうに美しく、かるたのやうな浮氣もの、ジプシー育ちのカルメンに、實がないとは誰がいふた――

といつた樣な歌詞も新らしい傾向のものであつた。「みどり節」の會員の創作があり、續いて「東京節」の出版をしてその大流行に至つた。鈴辨殺しの「呪の五萬圓」の賣行五六十萬。

東京節

△東京の中樞は丸の內、日比谷公園兩議院、いきな構への帝劇に、厳めし館は警視廳諸官省ズラリ馬場先門、海上ビルデイング東京驛、ポッポと出る汽車何處へ行く、ラメチヤンタラギッチョン〳〵デパイノパイノパイ、パリコトパナ、デ　フライ、フライ、フライ

△東京で自慢はなんですね、三百萬人うよ〳〵と、米も作らず、生活すこと、タヂした市長を仰ぐこと、それにみんなが感心に、市長のいふことよく聞いて、豆粕食ふこと痩せること、シテフサンタラケチンボーデパイノパイノパイ、洋服モツメエリデ、フルイ、フルイ、フルイ、

△東京名物滿員電車、いつまで待つても乘れやしねえ、乘るにや喧嘩腰命懸け、ヤットコサッと空いたのが來やがつても、ダメ〳〵と手を振つて、又々止めずに行きやアがる、なんだ「故障車」かボロ電車メラメチヤンタラギッチヨン〳〵デパイノパイノパイ、パリコトパナ、デ、フライ、フライ、フライ、

機關誌を出したいといふことは、懸案であつたが、八年八月、小雜誌「演歌」第一號を出した。――近來わが讀書業者が官憲其他の誤解をうけ、迫害を蒙るの甚だしきに及んだのは我々の遺憾とするところである。元來讀賣業者なるものは、多年當業で生活して來た純讀賣業者、苦學生及び兼業即ち一定の職業あ

るも、收入不足で生計を支へ兼ぬるもの等で、みな生活の爲めである。食ふためである。即ち立派な職業である。僅かな口實の下に壓するのは誤つた法ではあるまいか。反つて何等かの保護を受けるのが至當ではあるまいか。我々は相當自治策を講じてゐる。その第一がこの演歌組合青年親交會の組織である。以上の理由で、職業として認められたい爲め、去月警視總監に陳情書を提出した。一部の無責任なる輩と同一視されるのは迷惑である人間が食ふこと、いや生きることを防げられていゝものだらうか。我々は尙、社會に之を認めて貰はなければならない、本誌は會員相互の機關であると同時に、社會との連絡機關にしたい、といふ目的で發刊しました。こんな小さなものですが、追々に、といふつもりでやつて行きます云々――これが貧弱なる初號の卷頭文であつた。幸ひにもその反響は可成り大きかつた。そして各方面から色々指導鞭撻を受ける事が出來た。演歌の眞價も大分社會的に認められた。(今にして思へば之は演歌者を認められたのではない。演歌其物がだ)三年間に二十六號まで發行した。其後は「民衆娯樂」と改題して獨立した。これは編輯者のさつき生や同人山路信、私などが、演歌にのみ跼蹐せす、廣く民衆の娯樂問題に考へを及したいため。)

出版物の編輯と印刷には、可成り新らしい道を拓いて來た。然しそれ等は直ちにエセ出版屋の眞似る處となつた。それは隨分と不快なものであつた。變な模倣や甚だしきは全然同じことをやる。全く彼等には創作といふものがない。不快でもあるが又情けない奴等だとも思つた。新らしい道を拓くことに依て、不純分子をも曳き摺つてゐたのだ。

九月頃より「新やなぎ節」が流行した。

一八　演歌者にめぐる春

九年二月、「つばめ節」を創作して、やがてこれが流行になつた。

つばめ節

△柳芽を吹く　イソ〳〵春戀しさに
南の國からハル〴〵と、今年もお世話になりに來た、こちらの姉さん美しい、わけて島田が似合ひます
など〳〵つばめの　イソ愛嬌者

△外套きせかけ　イソ〳〵ホロリと涙
端唄の文句をそのまゝに、障子細目にひき明けて、あれ見やしやんせこの雪に、たとへ年期が増さばとて
なんで歸されよ　イソ去なされよう

△微な調子の　イソ〳〵松ヶ枝透いて

油は長閑なさゞら波、あまの小唄の面白う、沖にや白帆
がちよと見える、白帆何處へ行く波切つて
家じや女房が、イソ泣くだらう

△月の夕にや　イソ〳〵嬶がわめく
花のあしたにや餓鬼が泣く、泣いてもわめいても株は瓦
落だ、サツサ浮いた〳〵浮いた質が、月が流れて倉も浮
く
浮いた〳〵の　イソ仲の町

六月、尼港事件報道されて「涙の手記」なる、石川領事の孃、芳子の手記が歌になつてうたはれた。

此の頃、歌劇の流行歌にも歌劇拔萃などが出て來た。「ダブリンベー」「リゴレツト女心」「デイアボロの歌」「カルメントレアドル」等である。勿論演歌としての作替がその流行を助けてゐる。尚「ドナウ河の漣」とか「夜の調べ」などを演歌の領域に取入れたことも新傾向と言はねばならぬ。

流行に反覆するといふ現象がある。此の場合、新らしい內容を持つこと勿論である。尚一度流行したある歌の歌詞が、違つた歌になつて流行してゐることがある。例へば古い私の「むらさき節」の歌詞が「鴨綠江節」の元唄として紹介されるといつた様な輸入式の時代に折々ブツかつて私は苦笑を禁じ得ないのである。

新トンヤレ節

△皆さん〳〵エンマさんの前に
ピヨコ〳〵お辭儀するアリヤ何じや
トコトンヤレトンヤレナ
あれは米貰つて船貰つて株貰つて
儲けて死んだ亡者と知らないか
トコトンヤレトンヤレナ

△皆さん〳〵停留所々々々に
うよ〳〵してゐるものアリヤ何じや
トコトンヤレトンヤレナ
あれはボロ電車に乗る氣で待つてゐる
氣長な人間と知らないか
トコトンヤレトンヤレナ

△皆さん〳〵おかしな女どもが
お花を賣つてるアリヤ何じや
トコトンヤレトンヤレナ
あれは貴婦人、自分の金を出さずに
慈善をするといふのじや知らないか
トコトンヤレトンヤレナ

△皆さん〳〵東京の街歩いて
一番癪に障るものアリヤ何じや
　トコトンヤレトンヤレナ
あれは飛んで行く自動車がハネ飛ばす
どろ〳〵路のどろだと知らないか
　トコトンヤレトンヤレナ

リゴレット女心の唄

△風の中の、羽のやうに
いつも變る、女心
涙こぼし、笑顔つくり
嘘をついて、欺すばかり
　風の中の、風のやうに
　女心變るよ……あ……變るよ
△株がさがる、株がさがる
小氣よくも、株がさがる
成金共が、泣いて狂ひ
首くゝるも、因果應報
　株がさがる、株がさがる
　小氣味よくも、下るよ、あ……さがるよ
△痩せて痩せて、骨と皮に
なつたものに、飯もくれず
金もやらず、しらばツくれて
説教聞かせ、坊主どもが
だますだます、骨と皮に
なつた者をだますよ、あ……だますよ

ディアボロの唄

△岩に凭れた、物凄い人は
鐵砲片手に、しかと抱いて
歩む顔は、帽子に見えねど
服は天鵞絨、ひらとなびく
　怖や、嵐が吹かうと轟くその名は
　ディアボロ、〳〵、〳〵、ディアーボロ
△慾に限りなき、物凄い人は
石を罐詰に、入れて儲け
火事場ドロボーと、噂されたのも
七十五日よ、金は光る
　怖や、怪しい爵位、轟くその名は
　××××××××××
△お金ある人　自働車に乗るが
お金ない人　テクで歩く

お金ある人　お酒飲みふける
お金無い人　水も飲めぬ
　怖や　はやりうた唄ふ流行のその唄
　デイアボロ、く、く、デイアーボロ

私の肩にかゝる會務は、耐え切れない程の重荷であつた。經濟の切廻し、一般に對する絕えざる運動、(理解と同情を得べく)演歌者の指導、不純分子への對考、更に作歌作曲、出版、事務。(悴のさつき生が意義ある仕事だといふ氣持で一部を擔當して吳れたが。)——さうした苦しみの中にも、幸ひ世評は段々私達の仕事を認めて吳れる樣だし、出版するものも好評でよく賣れた。演歌者は蒼穹の恣に惠まれたかの觀があつた。——

「演歌」誌に載つた會員高木重治君の文の一部を拔いて見る。

演歌者としての私の感想

大正三年の三月某私立音樂學校のヴアイオリン科を卒業し、音樂教授の傍ら今尙演演歌をやつてゐるのは要するに自分の藝術慾を滿たしたいからです。

自分の曲が、黑山の如き聽衆の心に共鳴した時の愉快さは到底小さな舞臺に立つ人達の味ひ得ないことだと思ふ。殊に二三年前から歐米の斯界の名手が續々來朝して各所で妙技をふるふ。一般の民衆に著しく音樂趣味が普及されて、それが私共の周圍に立つ多くの聽衆にも現はれてゐるのですから尙更愉快です。私共が口にする歌に於ても、二三年前迄は在來の野卑な流行節でなければならなかつたものが、此頃では洋曲の拔萃などの方がより多く歡迎される樣になつて、尙曲譜の說明を求められたり、私共に對する言語態度には敬意をさへ持つて居られる樣になつた。

今後の演歌者は、專門的でない迄も、或程度までは音樂の素養を要するし、書籍雜誌などにも一通り眼を通して藝術上の智識も必要であると思ひます。といふ私は總て洋樂からでなければならないといふ譯ではない。在來の我が俗謠の中にも私共の趣味に合致してゐるのも可成ありますが、悲しいことには下らない野卑な唄を附けたり、又それを得意になつてうたつて、それを聽くべくあまりに耻かしいやうな動作を平氣でやつてゐるから、世間より應々惡評を蒙る譯ですが、假令在來の俗謠調でも其歌調と演歌者自身の眞面目な態度に依ては充分世の識者の好感を得る事が出來るのです。一昨年流行を極めた啞蟬坊氏の新柳節や、現在のお國節の如き、實に理想的なものと思ひます。要するに演歌はごくくだけた民衆藝術として向上を計り、演歌者も微々たるものでも民衆を基礎とする藝術家であるといふ確固たる信念を持つて貰ひたい

以上には新らしい傾向に就て語つてあると思ふ。また斯うした氣持の演歌者が幾人か居たことに依て、演歌にめぐつた春の色はさやけきものであつた。

一九 「歌」は盤の上で踊つてる

九年末、私は「お國節」を作つて見た。ところが意外に好評だつたので、遂に全國八十五章作つた。大流行には至らなかつたが、うたへば何時もどん／＼賣れる好讀賣材料であつた。さつき生の長篇「世界一週の歌」も賣れた。何れも演歌としての新らしい試みであり、創作であり、成功をおさめた。

お國節

△常陸の國でノーエ
自慢したいのはノーエ
唄で名高い大洗さん筑波山に水戸の梅
霞ケ浦にノーエ
笠間の稲荷ノーエ
潮來出島の眞菰の中にあやめ咲くあやめ咲く
△上野の國のノーエ
自慢は伊香保にノーエ
草津の溫泉赤城に榛名に、機織バツタバタ
國定忠次ノーエ
高山彦九郎ノーエ
まだあるサイ／＼名物ア嬶ア天下にカラツ風
△越後の國でノーエ
自慢したいはノーエ
英雄でサイ／＼上杉謙信、孝子の傳吉
角兵衛獅子やらノーエ
ゴゼに米搗きノーエ
毒消し賣りでもなんでもかんでも女の肌は雪の國
△越中の國のノーエ
自慢は螢烏賊ノーエ
木曾義仲が火牛の計の倶利伽羅峠よ礪波山
立山權現ノーエ
魚津の蜃氣樓ノーエ
鼻糞まるめて反魂丹かよそれを買ふ奴は
アンポンタン
△丹波の國のノーエ
自慢は丹波栗ノーエ
デカンショ／＼の唄の本元篠山の武者踊り
大江山鬼ケ城ノーエ

酒呑童子はノーエ
　ズツト昔の話であるぞよ今は綾部の大本教

さて苦鬪の裡に組合の三週年が來た。演歌誌は三週年號を出した。兎に角今迄幾度か繰返されたこの運動の内で、初めて長く續いたものであり、相當の足跡も殘した。然しそれが結局不純分子の乘ずる機會を多くしたに過ぎぬとは。

四週年に近く、幹事は殆んど居なくなり、無責任な行爲を敢てする者が增した。讀賣業の公認、場所の開放、世人の歡待、これ等が演歌者を增長させたのである。私は玆で幾度目かの失望を繰返さなければならなかつた。有名無實の組合、會、私は斷然解散を宣言した。――なる樣になるのであらう。――

ところでこれは演歌者の話、流行歌は相變らず次から次へ、レコードの上を轉がつてゐる。

鴨綠江節――安來節――そして船頭小唄の枯れすゝきが流行つたから地震になつたんだとか。復興したから復興節をうたつてる？

最近の演歌及び演歌者に就ては何も語りたくない。たゞ問題の「籠の鳥」に就て一言いふならば――

實際あんな類の唄は、私等だつて決して嬉しく思つてゐやしないのです。赤ン坊の片言にまで、アヒニ、キタ、ノニ――などゝ來ると、眉をひそめるだけではない、眼を耳を掩ひたくなる。然し流行してしまつてからあはてゝ差止める等も滑稽な技だ。又ご立派な學者達が、亡國的な唄だと極力罵倒なさる。然し民衆がもつと立派な唄をもうたひ得る樣にしてやらうとは仰有りもせず、お考へもない。卑しめられた唄と、卑しめられた民衆！――その愚劣極まる小唄の中にすら、總ゆる方面に自由を拒否されてゐる。民衆の苦悶が訴へられてゐるのにお氣付きないのですか。

二〇　三十年前の演歌作者より

此處まで續けられた讀者に、此の一章は全然無意義でもあるまい。

添田君足下、君は僕を御存じでせうか。君無禮の言辭を咎め給ふな。演歌社と添田、何となく僕の知つた添田君である樣な氣がする。果して僕の知つた添田君ならば敢て僕の素性を述べたてる必要はないが、僕は新富町の中央青年倶樂部で演歌の作者として、愉快節や既に故人となつた福島大將が中佐時代に於ける西比利亞遠征旅行をうたつたもの等を處女作として、神田の神保町へ沒落した頃まで關係して居たものです。何うです添田君、僕を知つてゐませうか。

添田君足下、僕は二三年前演歌社から出た何とか云ふ册子で君の名前を見、其の後青年倶樂部時代の舊友久保田六丸今の千代田千城君に逢つて此の話をしたら、それは倶樂部に居た添田君に相違なからう、併し演歌者の添田君は大變長い頤髯がある筈だと多少疑ひを抱いて居た、頤髯、成る程少し疑はしい、添田君、君は僕の知つた添田君でないかも知れぬ。

添田君足下、僕は今演歌社から送られた民衆娯樂と題する雜誌を手にして不圖三十年に近い昔を想起して、涙ぐましい程舊友が懐かしくなり此の突飛な一文を草し、君の左右に呈します。

前橋市上州新報社編輯局に於て　殿江醉郷

◇

拜復。

ほんとに久しぶりでした。僕は添田です。珍らしい御書面に接して懐しい先輩醉郷先生の面影を想ひ浮べて感慨無量といふ奴です。

新富町、神保町當時の人々は殆んど消え失せました。立身出世した者もあるでせう。死んだ者もあるでせう。僕は只一人、二十有餘年を演歌者で通して來ました。

明治三十五年（青森五聯隊の雪中行軍）頃には廣い日本に、東京に、僕と僕に從ふもの一人とたつた二人しか演歌者といふものはありませんでした。然もほんとの演歌の道を歩みました。その故を以て今日では流行歌の元祖とか本家とか言はれてゐます。

さうした生活を續けて來た僕が、殿江醉郷、久田鬼石、久保田江口井戸田村鈴木殊に伊藤のヲバさんなんかを忘れやう筈がない。前橋あたりへ足を入れた事も二三度あつたが、その頃階級意識がハツキリして來て、現社會に對する反抗心が強く燃えてゐたので貴君を訪ねる氣にもなりませんでしたが、「殿江さんは此の新聞にゐるんだ、」と貴社の前にチヨツト立ち止つても見ました。潮田君（月岡清）が桐生で芝居をやつてゐる時、同君からも貴君の話は聞いてゐます。今はその時分の思想とは又變つた點も出來て來ましたし、一度お目にかゝりたいとも思つてゐます。

別封「演歌」舊號中に貴君の作物が載つてゐます。御記憶にあるでせう。寫眞はチヨツト元氣がありさうですが、實物はから意氣地がありません。とりあへず御答へまで。

添田啞蟬坊

殿江　浩様

豫想に違はず僕の知つた添田君であつた。寫眞から雜誌まで添へた御返事に接し嬉しく懷しく拜見御健康の程を喜びました。

御寫眞は髮こそ長けれ昔の面影そのまゝの添田君、夫れを聞傳へとは云ひながら、頭髮茫々などゝ思ひ込んで居た錯覺をお詫び致します。

雜誌に掲載された墮落書生と題するものは確か僕の舊作だと思はれますが、當時どんなものを作つたか、必要に迫られての駄作のみであつたから更に記憶がありませぬ。演歌の綴込みもあつた筈なれど、當地へ來る時皆俱樂部へ置いて來たので今更惜しいなやう氣がします。舊友の消息は殆んど聞くを得ず偶に久保六君に逢ひ、同君の知つた範圍内に於て僕に洩らされるのみです。井戸鐸英君が淺草あたりに高利貸をやつて居るとか聞いて驚きました。

僕も一年に一度位は東京へ出ることもあるから、今度は必らず御社を訪ねて別離以來三十年間の苦心談をお聞きもし、お話しもしたいと其の機會の來るのを、否機會を作るべく心掛けてゐます。

終りに貴誌に寄稿の見える遠藤友四郎君曾て我社に在りて机を共にした方だと思はれます。お逢ひの節はよろしく

殿江　浩

添田啞蟬坊様

二一　あとがき

×

さて長々、べろ〳〵と書き綴つた。讀者諸君に御退屈樣と申し上げたい。私としては、枝葉に及び、横道に外れたがる筆を叱りながら續けた。然し一般讀者には、抽象的な箇所が屢々出て來るので煩讀であつたことと、お詫びをします。私としても意に滿たない點が澤山あるやうです。

×

此の稿を草するに當り、古い記錄や參考を無くした事が惜しまれた。まつたくあの地震には一ぱい食ひました。

×

だが、みんな過ぎ去つた事だ。これはみな昔話だ。燭光の足りない暗い電球の下での、物語りに過ぎないのか——。

南獨大學都市の夏の情景

那須皓

若葉する頃となれば私は南獨チュービンゲンに於ける滯在を憶ひ出す。古城や中世風の建物を載せた丘と綠美しき牧場との間をゆるやかにネッカーの淸流が澱みゆく風光は、チュービンゲンを獨逸に於ける最も美しき大學都市の一たらしめて、その黑森(シュワルツワルト)に近き地位と相俟つて毎年春夏の候には數多の學生を獨逸各地の大學から引き寄せる。そして此等學生は暇さへあれば附近を歩き廻り、稍纒つた時間と金とを得れば背嚢を肩にして三々伍々黑森の野山を彷徨ふ「渡り鳥(ワンデルフォーゲル)」となる。新綠の天地に對する彼等の憧憬は半歳を陰欝な雲空の下に暮らす北國の人にして始めて解し得る所のものである。自分は剛健素朴なる學生々活の中に新獨逸の未來の頼もしさを感ずることが出來た。

私も亦屢々附近の田舎を散歩した。散歩は私に取つて默考の時間でもあり、又全く頭を空虚にして「新しき養ひと新しき血とを自由なる世界より吸ひ取る」時間でもあつた。ネッカー川に沿ひたる公園の橡並樹路(カスタニーンアレー)や、チュービンゲン城を望む町外れの林場は私の日夕親しむ所であつた。其は公園の綠樹の間に華美な彩色の學生帽が隱顯し、夜は學生宿舍の窓の灯影が重なり合つてネッカーに影を映す此の町は、純平たる大學都市であつた。伯林では大學生は何でもないが、此の町では大學生が高雅である。閑寂な學究的な空氣の中に浸つての讀書と散策とは如何に私を悦ばせたであらう。私は又時折りは遠足を試みた。私は時としては農家を訪れ、時としては大學生と共に村の茶店で長閑な半日を過した。そして様々の印象から自分の南獨逸に對する感想を徐々に作り上げて行つた。

散歩して何時も感ずるのは野花の美しい事であつた。日本では秋野を賞美する。裾野を又畦道を彩る薄、刈萱、女郎花は淸楚なる日本の秋の使徒として私共の雅懷を悦ばしめる。併し西洋の五月の野はそれ以上の美しさである。たんぽゝの黄、マー

ガレツトの白を初めとして紅黃白紫一面に野を染めなす風趣は譬へ難きものがある。深緑の森の間から青空を指す教會の赤黑い尖塔を遙かの背景として見渡す限りの綠大野に繚亂たる百花の誇りを心憎くゝ思ふ時、私は靑田に風の戰ぐ日本の田舍の景色を餘りに單調であると考へた。西洋人は日本へ來て美しき野花の乏しきを歎ずるが、牧場の稀なる我國としては止むを得さることである。日本の花に香氣高きもの丶少なきは氣候上の關係に由るのであらうか。路傍の雜草も日本に於て見るが如き粗剛なもの少なく敷いて以て褥となすべく、與へて以て飼料となすべきもの丶多きは誠に羨ましき極みである。

私は彼のウーランドの詩に名高い丘上の寺院より四邊を瞰下した時を想ひ出す。彼れが歌つた如く日光の惠み溢る丶此の谷間に平和に働きて平和に死しゆく農夫の葬送を見る機會を私は持たなかつたが、群羊を逐ふ牧童否牧翁の姿を彼方に指呼するとは出來た。ウーランドの詩を始めて私に教へて吳れたグンデルト先生は丁度其の時日本から歸つてステッツガルトで我國の謠曲に關する研究を纏めて居られた。ウーランドの銅像のあるテュービンゲンの町に日東の孤客として滯在しつ丶あつた私は此奇しき因緣を想ひ乍ら眼下に擴がる南獨アルプの畫幅に眺め入つた。それは小山と森と牧場とがなだらかに重なり合つた暖かい景色であつた。そして所々を赤屋根の人家の集塊が點接した。人家の中より一段優れて高きは云ふ迄もなく寺塔である。此のパノラマの一角、數里の彼方の山の上には舊獨逸帝室に由緒深きホーヘンツォレルンの城が凛々しく聳えて、其の硝子窓が日光に輝いて居る。私は二三回此の城を訪ねたが、何時も蕪村の名吟「絶頂の城頼母しき若葉かな」を想起したのであつた。城よりの眺めの優れたる事、及び城内の清楚にして奢らざる事は私を悅ばしめた。そして所々を赤屋根の人家の塊りが點接した。人家の中より一段高きは云ふ迄もなく寺院の塔である。城の番人として日本へ行つた事のある男が居て何くれとなく話しかけた事は私を驚かせた。世界は段々狹くなる。旅の恥は搔き棄てと云ふ古い格言はもう通用しない。

御城の話しの序でに一言附け加へて置きたいのは夏目さんの倫敦塔を讀むだ人は誰でも知つて居る通り西洋の城は皆石造りで多くは濠を廻らした頑丈千萬なものである事だ。そしてロンドン塔の如く平地に立つて居るのもあり、又バイロンの詩で有名な瑞西のシオン城の如く湖中に立つて居るのもあるが、地形さへ許せば多くは丘の上に聳えて居る。中世の封建諸侯が附近の住民を威服せしめた何よりのシンボルとして今日に殘るものか此の城である。そして何處の城でも概ね地下牢があり、此の

地下牢は石壁の厚さ數尺、日光が僅かに數寸のわれ目より洩れ來ると云ふ陰慘至極なものである。こんな牢屋や其所に具へられた殘酷な拷問道具の數々を見る時何と云つても世の中は進んだものだと思ふ。そして當時此等の迫害に耐へた個人の信念の力强さを今更に想ふ。地下牢と並んで大きな酒藏のある御城が多いのは面白い。これは地獄極樂隣り合せの實例を示す爲めか、それともアメリカ流に飲酒は地獄に入るの門なりと考へたからかは知らぬが、兎も角もテュービンゲンやハイデルベルヒの城の暗い酒藏には直徑何間と云ふような途方もない大酒樽が中世封建諸侯のありし代の榮華を物語つて寂然として横はつて居る。

獨逸各地殊に南獨で眼につくのは至る所小高き丘の上には展望臺がしつらへてあつて遊客に附近の眺望を擅まにせしむる事である。之は日本でも樹立の茂みの爲めに眺望を遮ぎられて居るような所々の山頂にあつて欲しい設備である。必しも參謀本部の三角標のあるような高山でなくとも、又神社を祀つてあるような由緒ある山でなくともよい。在所の小高い所に物見櫓を作り遊歩道を作ることは村に一つの樂しみと誇りとを增す所以であつて靑年會あたりの仕事としても面白いであらう。僅か三四間の展望台が眺望を廣濶ならしむることは意外なものがある。

偖て私は余り永く南獨の野や丘に就て語つた。そこで私は初夏の森……鈴蘭がしめやかに香ほり、靑葉の蔭には幾群かのピックニックの人々が談笑し、而して夕暗には時として鹿の尻毛がほの白く見ゆることある樂しい森とその小鳥とに就て語ることを差し控へよう。私共は急ぎに丘上より遠望せし村へといそがねばならぬ。

村へ這入ると私共は先づ三四間巾の往來の上で子供や鷄が遊んで居るのを見出す。往來を挾むで立ち並ぶは多くは古色蒼然たる二階建の民家である。少し進むと町角の廣場にある古い石の井戸から水が噴き出して居り其處には村娘の二三が水を汲みに來て居る。噴井（ブルンネン）こそは南獨逸から瑞西へかけて田舍の特色を發揮するものである。簡素な槽だけのものもあるし、又裸形の童子や其他樣々の立像を飾りつけたものもある。そして色々な名を有して居る此等噴井は自ら村の經濟的社交的中心を形作る。何となれば噴水の附近には三星旅房とか金獅館とか云ふやうないかめしい名前の旅舍兼居酒屋があつて其所に村の若い衆が滿を引くビールの泡沫中から世間話しのくさぐさが生れて來るから。恐らくは村娘との戀も此の間に生れるであらう。牧草畑の　に忙しかつた夕べ家内中のもの、手傳人等が卓をかこみて、

て置きの手製葡萄酒を汲む宴の席に泊りがゝりの日東の旅客も交つて亭主自慢のワインを吞めぬ口に强いられた事も今となつては懷しき想出の種である。彼等の上に永く幸ひあれよと祈る。

扨て農家はと云へば厩肥を往來に近く積み重ねその側には厩肥の滴りの流れたるを汲み上ぐるポンプが備へてある。鵞鳥がガーガーと鳴いて廻る後を逐うて横に行けば厩に牛や豚が何頭か頭を並べて居る。家の中へ這入れば客間には瀬戸のストーヴを片隅に木の椅子、テーブルなどが宜しく配置してあり、壁には戰死した息子の寫眞が掲げてあるであらう。そして老婆さんは多分ボロの繕ひをして居るであらう。黑パンとバタとで午後の御茶を奬められる時諸君は辭退してはならない。御馳走を無理にも客にすゝめて滿足する田舍人の心理は日本も獨逸も同じである。蝿のたかつたのを我慢して喰べると意外にも其のパンは都の白パンよりも遙かに美味いことを發見する。パンの味よき事、バタの新鮮なる事は主人の質朴なる誇りである。而して君もし歸りがけに二階の寢室に居る親戚の老病人を見舞うならば彼は瘠せた手を伸し、眼をうるませて謝意を表するに違ひない。

自分が僅か許り見た獨逸の田舍人の心理は余りにも日本のそれと相似て居る。只獨逸の田舍人の方がよりゆつたりして居り、より鈍重であるように感じた。生活難の爲めに落付きを失ひつつある我農家は其の持てる最も尊き寶を失ひつゝあるとも云へる。

道傍には處々苹果の並樹があつた。日本に居つた時、西洋人は公德心が發達して居るから路傍の果物を盜まぬどの話を聞いたが、私の見た所では此の路傍の苹果は料理用又は釀造用のものであつて生食するに不適なる品種であつた。卓上用の苹果を植えれば盜まれるからと案内の人が說明して吳れた。又大學生が遠足の時此の余り甘くない苹果を盜み喰うて農民と喧嘩したと云ふ話をも私は聞いた。凡てがかうでないかも知れぬが獨逸瑞西等の果樹園で垣を圍らせるもの多きを見れば、人間は神樣ではなく、人情は東西さまで變りのないものである事を感得する。野路に立つ十字架を負へるヤソの像は我が田舍路を守る石地藏尊のそれと同じ感じを與へるではないか。

西南獨逸の田舍には又所々に立派な工場があつた。そして此等工場は寧ろ附近の農業をより有利ならしむるに役立つて居るように見えた。私は玆に日本の田舍の將來に對して或る暗示を得た。

ウルテンベルグ及びバーデンの南部は有名な黑森である。一

千米突位の山々がゆるく連つて居り樅唐檜の類が黒藍色に之を蔽ふて居る。低き谷間には小川が流れ、流れに添ふて農家があり水車がある。農家中には農閑に種々の木工をなすもの、又日本にも來て居る鳩時計等を作るものなどがある。峯々には各所に質素な旅館があつて夏は避暑客で冬はスキーの客で一杯となる。私は或る日森の中で野宿しつゝ單身旅行を試みて居つたユダヤの青年と道連れになつたが、彼れはパレスティナにユダヤ國を建設する大望に勇み立てる立派な青年であつて大學卒業後は該地に赴くと云つて居つた。又私はホテルで滿員の爲め斷られて止むなく附近農家の中二階に獨乙の一青年と合宿した事もあつた。此の時は床下は厩で山羊がギーギー鳴いて居つた。ギーターなどを肩にした愉快な一行とも森の中でよく出逢つた。黒森はあまり高い山ではないが質素な夏の遊び場所として獨逸人の間に喧傳せられて居る。英人や和蘭人なども多く見受ける。此の黒森の山林經營の合理的であり林道の立派である事は凡ての人を感心させる。

南獨と云つてもバイエルンは黒森地方とは、余程趣きを異にするやうである。殊に瑞西國境に近き地方は夏時雪を帯びたる高嶺峻峯相連りてさながら瑞西そのまゝである。耶蘇一代記劇(パッション・シュピール)を村人が十年目毎にするので有名なオーベル・アンメルガウなども高峯の雪を望むべき山懐ろの僻村である。此の山間に點在せるバイエルンの離宮は誠に山水の勝景を擅まにするものであつた。

想ひ出づるまゝに書けば限りがない。農業の盛んな南獨逸、天然の風光と人情と共に美なる南獨逸は永く懷しき追憶を私の胸中に印して居る。

私が他日再び歐洲に遊ぶ事あらば私は華やな大都會より先づ彼の野を山を訪れるであらう。そしてゲーテの名詩の一節

Jeder Nachklang füllt mein Herz
Froh und trüber Zeit,
Wandle zwischen Freud und Schmerz
In der Einsamkeit.

を口吟むであらう。

「樂しき、また悲しかりし時の憶ひは
我が胸を充たし、
悦びと惱みとの眞中に
寂しくもわれは彷徨ふ。」

わが家

吉植庄亮

けふも來て厩にあそぶ鷄にねもごろの馬や鼻鳴らしつつ

厩に來て馬のかたへに卵生む鷄鳥のくせを愛しく思ふ

わが母の結ひたぶるままに黒髪をまかせて妻のたのしかるらし

母刀自の結ひてたまひし妻の髮壞えしむべしや枕きて寢る夜も

母と妻春の日ながを相寄りてかたらふきけば生るる子のこと

ははそばの母のみぐしのとぼしきをまげにあげつつ妻のねもごろ

ははそばの母につかひて氣苦勞のなきわが妻か常に幼き

わが妻を常に幼くあらせたまふははその母の大きみ心

かくのごと佛におはす母そばもかなしましけり妹脊の道に

かずかずのわがあやまちを知りませるははその母のいや親しもよ

白髮生ふる年になりてもちちのみの父こそばゆし母に比べて

春雨にこもりくらせる庭つ鳥日和をうたふ夕となりて

幽寂の世界

幽寂の境に觸れた時

正宗白鳥

數年前獨りで十和田湖畔へ旅行したことがあつた。青森から秋田の方へ廻つてゐた途中ふと思ひついたので、地理をよく調べもせず、驛夫に大略の道順を訊いただけで足を向けたのであつたが、この驛夫が十和田湖の事はよく知つてゐなかつたことがあとで分つた。大館から秋田鐵道に乘換へて毛馬内で下車すれば、あとは自動車か車で湖水の上の發荷峠まで樂に行けるものを、私は大館から小坂鐵道で小坂の鑛山地まで行つた。其處で一泊して、翌日案内者を雇つて五里の山道を湖水へ向つたが、五月一日であつたのに、その年は雪の多かつた年で、山上には積雪が二三尺もあつて、道が分らなかつた。役にも立たない冒險をすることを後悔しながら、後へ引返す譯には行かなくなつて、日暮頃までかゝつてやう〳〵湖畔の茶店へ着いた。そこの圍爐裏で温まつてから、小舟に乘つて宿屋まで行つたが、その小舟の上でこそ私は、珍らしく「幽寂の境に觸れた」のであつた。

かういふ光景を空想して、昔の詩人は、地獄を離れ淨罪の島へ渡る水路を唄つたのであらうが、詩を缺いでゐる私は、その時の氣持を充分に文字に現はすことが出來ない。山上の湖水と宵月と自分とが融和して一つになつたやうな氣持もした。幽寂の境に徹した時には、歌も句も出るものぢやないやうにも思はれる。

私が旅行中幽寂の境に浸入したのはこの時くらゐなもので、

その外には一度もそんな經驗をしたことがない。近年大磯に閑居して以來、五日も十日も家を出なかつたり、他人と話をすることもなかつたりして、幽寂の境地に身體を置いてゐる譯なのだが、私の心は芭蕉の句にあるやうな氣持になつたことは殆んどないと云つていゝ。五十年間に見聞したこと學んだことは、私をして幽寂の境に快く眠ることを絶えず妨げるのである。先日ラヂヲで本願寺の僧侶の說教を聽いたが、この僧侶は佛教の極意は共存共榮にあつて孤獨主義は邪道であると、社會主義者の說くやうなことを云つてゐたので、宗教も時代相應に煩くなつたものだと思つた。私は少年時代に基督教を學んで、救ひを得ずして無稽な苦しみを得た。文學を學んでも慰めよりも苦しみを與へられた。私が靜かに暮してゐるにしても、それは荒寥たる靜かさであつて、そこに東洋流の詩趣をも佛味をも感じたことがない。

座右には少年の頃から愛誦してゐた陶淵明の詩集があつて、頭腦を休めるために時々讀んでゐるのだが、私の心境は、これ等の詩に含まれてゐる心境とはまるで違つてゐるのである。この頃になつては、淵明の奴、こんなことを唄つてゐても、實際の彼れの生活や心境はこれ等の詩のやうぢやなかつたのではないかと疑ふことさへある。淵明ばかりではない支那の詩人は、幽寂の境を喜んで名利を脫却したやうな氣持を唄ふのが、一つの型になつてゐるので、李白でも白樂天でも私には同じ型を追つてゐるやうに思はれる。その點は日本の俳句も同樣である。

しかし、淵明は支那型を用ふるにしても、詩才に富んでゐて言現はし方がうまい。「採菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有眞意、欲辨已忘言」の如きは、古今の絕唱である。蘇東坡評して曰く「採菊之次、偶然見山、初不用意、而景與意會、故可喜也」と。悠然として南山を見たので南山を望んだのではないと、他の多くの評家も激賞してゐる。欲辨已忘言は、現代作家が文字を弄して主義を鼓吹したり、文字を弄して自己流の眞理を喋々と述立てたりするに比べると、無我の眞諦に達してゐる譯である。「結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏」これを現代語に譯すると、「東京驛近くの丸ノ内ホテルに泊つてゐても、自働車や電車の音が騷がしく響かない。何故だと君は思ふ。心が俗界から遠ざかつてゐるから、この東京の眞中が田舍の果てとなつてしまふのだ」といふ意味になるのだが、私の心境は反對である。初夏の冴えた日が雨後の綠葉を照らしてゐる小庭を玻璃越しに見て、幽かな波の音を聞きながらも、心は快々として樂しまないのである。國家の滅亡も平家物語を讀んで感じてゐれば興味がある。失戀

も小説で讀めば面白い。人世苦も世界苦も哲學や詩歌で讀めば面白いが、自分が實際にそれを痛感してゐる時は、ちつとも面白いものぢやない。淵明のやうにうまい言葉で言現はさうとする餘裕もあるまい。

私は幽寂な境地に身を置いても、心は決して幽寂になり得ないのである。

幽寂の世界

野口米次郎

幽寂の二字を了解しないと日本の文藝は解らない。外面的な景に即しすぎる日本の近代文藝でも、眞實である場面は、幽寂を暗示するものでないものは無い。過去二十有餘年に亘る私の文學生活をふり返つて、いつ私が幽寂の感に打たれたことがあつたかと考へて見ると……さうだ、私は第一に千九百四年の九月の某夜のことを語らねばならない。十二三年の外國生活から日本へ歸つて、始て日本座敷の疊の上で寢た最初の晩の印象は、今日でも到底忘れることが出來ない。私は其日其晩のことを思出すと、あゝ細雨が濛々と降つて居つたなと私はいつも獨語する。

初秋の頃に降るといふよりは煙るといつた方が適當な日本の雨は、世界何處に行つても見ることが出來まい。實以て日本特有の雨と云はねばならない……濕やかな溫い絹糸のやうな雨だ。人は鳥がしつぽり濡れる春雨を賞美する。私もそれを喜ぶものではあるが、秋の雨にはまた一段の幽寂味がある……しかし私はこゝで秋の雨を語る積でない。二十年前の雨の降る日に私は米國から歸つて來て、日本橋に住んで居つた兄弟の家の二階で最初の一夜を寢ることになつた……しかし私は歸朝當時の追憶を語るのでない。私は何を語るのであるか。如何に私が其晩幽寂の感に打たれたかを語るのである。

十八歳以來騷々しい外國生活をして來た私だ、日本の事を殆ど忘れて仕舞つた時分に故郷の國へ歸つて來た私だ……十二

三年間もベッドに寢て來た私が疊の上に寢るとになつた私だ。どんなに勝手が違つたことであつたであらう。横になるにはなつたが、體が痛くて眠られなかつた。それはかりで無く、家のお勝手の方から匂つて來る醬油の臭氣が鼻に付いて仕方が無かつた。天井の裏で鼠が柱を嚙む音がする。又外では雨がしとしとと降つて居る。私が其晩容易に眠ることが出來なかつた大きな理由がある……私はそれを語らねばならない。二階の八疊間でたつた獨り横になつて居ると、部屋の中で靜にすゞしく蟋蟀が鳴いて居るのを聞いた。『日本の大都會東京のどん眞中で秋蟲の歌を聞くことが出來るとは！この位不思議なことがあるだらうか』と私は心の中で叫んだ。この蟋蟀の聲が私に其時齎らした幽寂味は到底言葉で語ることが出來ないものであつた。一體この蟋蟀はどこで鳴くのであらうかと耳を欹てると、それは床の間の掛物の後で鳴いて居るのであつた。掛物には秋の七草の繪が描いてあつた……さうして其後で蟋蟀が鳴いて居るのであつた。雰圍氣はいよ／＼濃厚ならざるを得無かつた譯だ。實際私は其晩一時が打ち二時が打つても眠ることが出來なかつた『あゝ何たる幽寂味が漂つて居る！まるで幽靈のやうに部屋の空氣を占領して仕舞つた』と私は叫ばざるを得無かつた。

私は其時ふと一茶の句を思出した……言葉はどうなつて居るか知らないが、何でも『蟋蟀よお前は一寸向ふへ行つて哭れ、僕は今寢がへり打たねばならないから』といつたやうな十七字である。かう思つて來ると信州に於ける一茶の田舍生活が眼前に現はれて來るやうな感じた。又彼が小さい蝶々や蟋と蟀いつたやうな動物に對する愛だけを見ても、彼が立派に詩人である證據だと思はざるを得無かつた……然し私はこゝで一茶を論ずるものでない。私が語らうとするのは日本に於ける幽味である。

今日の東京は電車である。自動車である。カフエーである。活動寫眞である。然し諸君にして見る眼さへあれば、隨道時所に幽寂の二字を拾ふことが出來る……二十余年前と同樣に。私はまだ日本に幽寂味が亡びないことを喜ぶものだ。これがある限り日本の文藝藝術が眞實な立場を失はないであらうとも云ふことが出來る。前記の蟋蟀が紡ぐ幽寂の世界は、十七字詩のやうに小さい。然しそれは廣い／＼世界へ私共を誘つて行く小さい戸口に比較される。戸口は如何に細小であつても、その後に廣い世界があるので戸口の價値は永久に尊いのだ。幽寂の導く想像の世界位眞實の世界はない。

私はもう一つの經驗を語つて幽寂の價値を諸君に語りたい。時は小十年も以前の夏の一夜。場所は鎌倉圓覺寺地中の奥まつ

た一個所の本堂の椽。古びた禪寺のことであるから、襖は黄ばんで濕氣くさい。夏の晩であるから障子を開放して居る。暗い中から朧に見える外の櫻木は風に搖れる。私はその當時書齋をこの寺へ移して詩に於ける第三期の轉換を考へて居つた。私がその晩十時半か十一時頃であつたであらう……獨り讀書して居つたと思ひ給へ。寺には人間の住んで居る樣子さへ無い位に靜である、言葉通り幽寂である。遠方から聞えて來る鳧の聲に幽氣がある。又床の下から聞える蟋蟀の聲も物さびしい。しかし私が語らうとすることは唯それ丈でない。ランプの光で机に向つて讀書して居ると、私の眼前むしろ頭上を恐ろしく大きな怪物が通過したやうな感じがした。私は頭を上げ周圍を見廻した……なんだ。ランプの火を取りに飛込んで來た一疋の蛾であつた。一寸餘りしかない小さな蟲がどうして怪物のやうに見えたであらうか。

諸君は十二月に入ると夕方の空氣の工合で東から上る月が盥のやうに大きく見えることがあるのを知つて居らう……小さな蟲が空中の巨人の如く其晩私の眼に映じたのも同じ理由からだ。私をつゝむ幽寂の雰圍氣の惡戲であつたと云へる……いふ、惡戲といふ言葉は惡い、幽寂の空氣が私をして想像化して物を見させるに至つたのだ。私は想像のない所に詩が無いと信ずるものである。さうして詩の想像は幽寂の雰圍氣の生む所のものであると信ずる。私共日本人が幽寂の境地に入つて、その雰圍氣を完全に保護したいと希望する所以は、私共は詩を發達させたいといふ希望に外ならない。あゝ幽寂の祝福に觸れて諸君は詩の殿堂に入らねばならぬと私はいふであらう。この幽寂を完全に支配し得た人は即ち大詩人である又大藝術家である。昔の茶人俳人乃至は能役者にして偉大であつた人々は、恐くこの境地に入つた人々である。芭蕉の句を讀んで見給へ……この境地に入つて足元に落ちて居る自然の斷片を拾つたものに外ならない。即ち『足元に何やらゆかしい菫草を眺め、自分の寂しい影をその姿に見出した時、太陽は自分を中心に廻つて居ると信じて背のびした』男に外ならない。

私共は幽寂の境地に立つて詩を發見する即ち眞實な人生を發見する。人生を發見し得る人間は眞實の自我主義者である。人間としての眞價値は幽寂の境地に入つて始めて表現されるであらう。

幽寂感から、沈默へ

小川未明

幽寂の世界は、うす青いロマンチシズムの一つに屬してゐます。その人の心持と、自然のさびしさとが調和された、詩情に他ありません。そして、近代の機械文明から構成せられた大都會の生活には、切り離された世界であつて、むしろ懐古的な、逃避的な、心の感覺ともいふべきものでありませう。同じ、靜かさにしても、靜寂とも名づくるやうなものは、積極的の沈默であつて、むしろ、ある運動を起す前の豫備的現象とも見れば、見られるものであり、この都會の裡にも、しば／＼觸れることのできるものです。

幽寂には、一種の宗教的な分子すら加はり、原始的な、廢頹的な、田園的な、それ等の非運動的な狀態が連想されるのであります。もし、幽でなく靜であれば、私は、そこに、ストライキ前の工場の空氣に於けるやうな、氣味惡き、沈默を想像し得るでありませう。また、暴風雨前の空模様のやうに、何をか期待すると共に、心の不安をも作つてゐる、……これ等は、同じく別種の沈默であります。

うす青い、もしくは、うす黃色い幽寂は、ラフカディオ・ハーンをして喜ばしめた、東洋特有の哲學的な詩情であつて、この場合、これを感覺と見るよりは、詩趣、詩情といつた方が、より適切な言し表はし方ではあるまいか？

香爐に、香を焚いて、匂ひをきゝながら、瞑想に耽るのは、幽寂の世界を慕ふからであります。彼の異國情緒を愛好するロマンチシストは、東洋的な寂味を、よく理解せんとしたのでした。そして、私は稀れにしか、寺院へは行かないが、たま／＼祭式のあつた時分など、寺の境内に入つて、眞に、幽寂を一幅の繪として見るやうに感得するのであります。

眞夏であつても、ひやりとする、廣い寺院の内の空氣に、長い月日の間に染みついた香の薫りが、人をして、超現世的な夢想に耽らしめるに足るものでした。墓畔をさ迷ふことよりも、寺院に來て、私は、より深い幽寂を感ずるのを常とします。な

ぜならば、墓地に眠る人々の中には、自分の知れる作家や、詩人や、いろ〳〵の藝術家や其他の人々があります。その人達について、なつかしい思ひ出をたどると共に、尚ほ、その人の事業、性格、影響の及ぶところなどに關して、批評の念を全く胸の中から消し去ることができないからでした。

——すべての人は、死すべきものなり——と思つても、この嚴肅な虚無と否定だけにては、いまだ人生に對する愛惜の念を全く奪ふに足らない。要するに、墓畔をさ迷つただけでは、いまだ眞の幽寂を體得するに至らないけれど、一たび寺院に來て、靜かに、讀經に耳を澄まし、鐘の音をきく時は、幾百萬里彼方の、四時百花咲きみだれて、慈悲の光りに滿ちたる浄土を夢想して、涙のあふるゝを覺えずにはゐられません。

世俗の塵から離れて、寺の境内には、ひとりさびしく、百日紅が咲き、もはや、うす紫色の花をつけた糸萩が苔のむした地面を拂ひ、そして、林の間を、落日が眞赤に染めてゐるのを見ると、こゝで鳴く、蟬の聲にすら、何等かの啓示を感ずる如く、うたゝ人生のたよりなさに堪へられないのです。

かく、幽寂は、うす青い世界であり、また黄色い、かなしい世界であります。そして、瞑想的であり、消極的であり、哲學的であります。

私は、いま、これを對比するに、靜謐した、不透明な沈默をもつてします。

雨雲が、平野の上を、音をたてずに、水の浸してくるやうに、刻々に呑みつくしてしまつた瞬間でした。木々の葉は、身ゆるぎもせずに、ぢつとしてゐます。そして、岡には、夕顔の花や、黄色な胡瓜の花などが、ちやうど、蝶が、壁に止まつたやうに咲いてゐる。

「いまに、どんな降りになつてくるか知れない?」と、言つて、道を歩るく人々は、雨雲の脚と競爭してゐる時です。この時の靜寂は氣味の悪いものでした。

虎列剌の出た村や、ペストの出た町には、晝の間も、夜になつてからも、一種の沈默が占領して、どことなく魘されるやうな、啞の顔のやうな感じを與へる如く、避病院や、隔離室が、その庭さきに日は照り、雁來紅の花が赤々と咲いてゐるにかゝはらず、常に、靜寂があるのでした。

人間や、自然の不安狀態を包んでゐる靜寂には、かくの如き、動的が感じられます。たとへば、火藥に火を點ずる刹那前の靜寂が、非常に動的だと言はれるからです。近代の藝術は、舊い藝術が、幽寂の境地から出發したものを、やうやく、その歩武を動的な靜寂に換へんとしてゐます。

哲學的から、繪畫的へ——廢頽的から、勃興へ——ロマンチシズムから、新ロマンチシズムへ——。
しかし、この東洋特有の冥想的な幽寂の妙域は、舊文化の發祥地として、永久に、彼の樹間を彩る夕燒の如く、時に、愉悅となつて、私達の血脈に流れるのでした。

——二五、五——

山の湖、野の村

森田恒友

(一)

七八年前に東北の山河を慕つて、岩代會津邊を三四回歩き廻つたことがあつた。始めには其土地の知人に案内されたが、次回からは全く一人で數日づゝの旅をした。湖沼の感じの好きな自分は、あの邊に散在する山湖を、寂しい一人旅に味はふことを欲したからであつた。

人跡稀な山路を、一人旅することは季の如何に係らず寂しいものだが、今迄の私の山旅の感じでは、雪の山路を行くよりは、茫々たる夏草の山路を分ける方が、より遙かに寂しい感をうけるものだ。

裏磐梯に散在する山湖について、私は嘗つて何處かで語つたことを覺へるが、あの邊を歩いたのは故長塚節在世の頃、彼處の檜原湖の話を聞いて遊心動いたのが動機となつたのであつた。

あの高原には、檜原、小野川、秋元などいふ湖の外猶幾多の小湖が、旅人の背を沒する程高く伸び茂る茅原の中に散在し、其何れもがたまさか山雲の影を湖中に投ずる外、訪ふ何者もなきかの如くぢつとして幽まり返つて居るやうに見へる。私が一人で始めて彼處を訪ふたのは、秋であり、路を沒する草を分けてやう〳〵に訪ね當てた小野川湖の畔に立つた時、私は曾遊の山湖に於いて、未だ此湖畔ほどに幽寂の感に打たれたことはなかつた。

一鳥不啼山更幽

といふ句は、此處いふところを詠じたものかどうかは知らぬが、其時私は斯ういふ感じを言つたものであらうと思つた。一鳥啼かず、山に微風なく、湖中深く影ずる一片の白雲は何時までも動かず、私は唯其の幽かさと寂しさとの美感に打たれつつ、とう〳〵其日は手帳を披くこともせずに、日の傾く氣はひに驚いて、川上といふ温泉のある村の宿に引返したことだつた。

裏盤梯の高原に散在する幾つかの山湖は、檜原湖のみが湖畔に靜樹と村家とを有するのみで、他の小湖の畔には大樹も無く人家もない。從つて訪ふ人も極めて稀な山湖であるだけに、彼等は誠に寂しい美しさをもつ山湖なのだ。私は曾遊の彼等を憶ひ起す毎に、あの寂しさをなつかしく思ふ。

總體に山湖といふものは、幽寂の感をもつもの、同じしづかな水であつても、野の沼は人なつかしいものだが、山湖の水は清明にして寂しい。湖上に雨も風もなく、ほんのりと晴るゝ日の彼等のすがたは、太古の如く幽かに寂しい感じをもつ。其幽寂さを最も強く味つたのは裏盤梯の湖畔であつた。

○

晩春初秋の季に、家に籠つて居ると曾遊の山河など憶ひ浮べることの多いものだ。其の憶ひ浮ぶものは、山と言はず野と言はず、彼等の形容でなくて彼等の心のみが憶ひ出される。それは多く華やかなものでなくて、寂しい自然の心のみが浮んで來る。

芭蕉が奥羽の旅中に詠んだ、夏から秋にかけての句を讀む毎に、偉大な自然の寂しさに襲はれる感をもつが、私の曾遊の感によるも、自然の眞の寂しさは、多くは夏から秋にかけての山野に最も深く感ずるやうだ。特別私共畫人の眼に映ずる自然の寂しい美しさといふものは、夏から初秋にかけてが毎も深く心を打たれるやうに感ずる。夏もまだ若葉時の心持は、幽かではあるが靜ましく秋も晩るゝ頃の自然は寂しいが幽かでなくてあわたゞしい。落ちついた美しさ、幽寂の感は、だんまり返つた季節の自然に多くは現ぜられるやうだ。

或る年の夏、秩父に入らうとして寄居の町に近い鉢形といふ村に城趾のあることを憶ひ起し、汽車を棄て、荒川の渡しを越へて、其の寒村へ足を運んだ。今は寂しい其の寒村に殘る城趾は、見る價値もないつまらぬものであつたが、其日は游登りの夏の一日であつて、何だか此の取り殘れたやうな一と村が夢中に在る一村のやうに見られる日であつた。私は城趾のつまらなさに失望して、其處から眞つ直ぐに通ずる路を村に入つたが、

夏の日中のせいか、村中一つの人影もなく、鷄の鳴く音も聞えぬしづまり返つた寂しい村家の並びを、私は不思議に美しく眺めた。

人の住む村でありながら、人氣の無い村の感じは特別寂しい感じがする。それは季節と日和との丁度に合つた爲めに强められた感じでもあつたけれど、野の村の感じには、折々そういふ幽さかと寂しさとに遭遇するものだ。そういふ時の山村に現じられるものは、寂寥といふ語が一番に當てはまる感じが多いが、野の村のそういふ感じには、不思議に幽寂といふ語が適切た感が深い。日を背にした綠樹や人家の色が黒ずんで、しんとして靜まり返つた村の感じを、私は夏から初秋にかけての折々に、見る毎に寂しい美しさに心を打たれる。

夏の一日、武藏野の村を一人歩くと、聳へる大木が街道を暗くして、屋外には一つの人影もなく、其の暗い街道の上に、百日紅の花が乘り出して咲いて居る景を見ることがあり、暗い綠の前に咲く紅い花を美しいと見るが、その美しさは決して晴れ〲しい美しさではなくて、幽かな寂しい美さだ、心に沁み入る幽かな眞の美しさには、何處やら寂しいものがひそまれる。

不思議にも私は今までそういふ感じの多くを、山村に見ることが尠くて、野の村に見ることが多い。

幽寂境

島木赤彦

天子呼び來れども舟より上らず。といふ豪宕ぶりをした李白も「兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山」といふ如き境に入つて詩人の天分を盡し得た感がある。

天の海に雲の波立ち月の船星の林に榜ぎ隠る見ゆ

といふ大袈裟歌を作した人麿も

足曳の山河の瀨の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる

に至つて、はじめて歌の究極所に到達し得た感がある。詩といひ、歌といひ、究まる所は人生の幽寂境に合するにあるのかも知れぬ。萬葉集の歌を雄偉であり豪宕であるとするけれども、その雄偉豪宕も究極する所は多くこの幽寂境に合するやうである。

み吉野の象山のまの木ぬれには許多も
騒ぐ鳥の聲かも　赤人

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くな
る山かげにして　湯原王

一つ松いく世か經ぬる吹く風の聲の清
めるは年深みかも　市原王

あかときと夜鴉啼けどこの山上の木末
の上はいまだ靜けし　讀人不知

大葉山霞棚曳き小夜ふけて吾が船泊て
む港知らずも　讀人不知

の如き、皆その一例とするに足りる。明治に至つて、萬葉ぶりの歌を詠んで最も跌宕を極めたのは伊藤左千夫であるが、その跌宕の究まる所は矢張り人間の幽寂相に合して作者本來の命を伸へ得てゐるやうである。

天地の四方の寄り合ひを垣にせる九十
九里の濱に玉拾ひ居り　九十九里濱

高山も低山もなき地のはては見る眼の
前に天し垂れたり　同じく

下り立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しと
しとと柿の落葉深く

鷄頭の紅古りて來し秋の末や我四十九
の年ゆかむとす

秋草のしどろが端に　物々しく生きを
さかゆるつはぶきの花

今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて
幽けき寂滅の光

の如きがそれである。

思ふに、幽寂相なるものは、天地原始洪荒の相であつて、同時に、天地終焉の眞相でもあらう。木は老い、雲は重なり、石は露れ、山は深くして愈々幽寂であり、人は口髭白を交ゆるころよりこの消息に入り得る。東洋の繪畫に老境を尚び、老手といひ老宿といひ老蒼といふもの、老は遂に近く、又始めに近く、その底が無始無終の寂寥に通ずるに於て貴いのであらう。

この比ろ、齋藤茂吉君と木曾氷ケ瀬に遊んだ。木曾街道から王瀧川に沿つて谿間に入ること七里ばかりである。谿の岩間に

石楠花が咲き、川は、瀞となつて紺碧を湛へ、瀬となつて山に響いてゐる。山は悉く檜山であつて、夜が明けて雲が上り、日が暮れて雲が沈む。雲の中に慈悲心鳥が啼き、夜は佛法僧鳥の啼きわたるを聞き得る。斯る幽寂境に身を置くと、我々の藝術は至る所猶淺いといふ感が多い。

　老は枯ではない。寂は涸ではない。木曾山の木は生き、水は流るゝゆえに、山と樹と水と石と相依つて幽寂の境を成し得てゐるのである。思ふに、天地の始といひ終といふものも亦生でも死でもあるまい。幽寂相といふものも天地と共に生くる永遠の命であらう。そこを東洋の詩人靈人らが多く捉へてゐたやうである。

いろいろ

武者小路實篤

○

自分はもう何位かき損ひをしたらう。もう一歩入ればものになることを知りながら、その一歩が入れない。頭のわるい時は仕方がないものである。

自分の頭は自分の頭であつて自分の頭ではない。自分の生命は自分の生命であつて自分の生命ではない。自分は自分の頭の主であつて主でない。自分の生命の主であつて主でない。自分の頭を自分で勝手に出來ないことがよくある。自分の生命も中々自分の勝手にはならない。

第一自分が自分の主であるか、どうかそれも分らない。自分は自分の言行に責任はもつが、自分が過ちを行はないとか、自分は完全な人間であるとか思ふことはない。自分は自分をよくしたく思ふ。殊になが生きもしたいし、自分の仕事も立派に完成したいし、よろこびも得たく思ふ。そして自分を不幸にしたくないやうに、又他人の不幸の原因に自分がなりたくない。

自分は何にもかも正直に云へる人間ではないが、嘘は出來るだけ云ひたくない。そして嘘を云ふと氣がとがめる。だ

からなるべく愚を云はずにすめるやうに骨折る。

自分はかうすればいゝと云ふことを知つても中々いゝと思ふことは出來ない。しかしそれで自分はくよ〳〵してゐるかと云ふと、至つて呑氣にしてゐる。しかし僕より呑氣者の方が世間には多い。僕は怖いことを知つてゐる。運命に背かれることを恐れることを知つてゐるが、多くの人は平氣で不幸の種をまく、やむを得ずまくのでも賢いとは云へないが、平氣で不幸の種をまくのは鈍感である。

自分はどんな時でも謹みは忘れたくない。自分は人間は恐れないが運命は恐れる。個人に誤解されたつて、又正解されて非難されたつて、それが自分の正體であればやむを得ない。「お前の頭ははげてゐるね。」とか、「君のソバカスは隨分ひどいね。」「君は癇癪持だ。」「君は不精者だ。」「君の描寫はまづいね。」なぞと云はれたつて別に恐れない。又「君の考へはまちがつてゐる。」とか「君は危險思想だ。」「君の考へはなまぬるい。」「君は不道徳だ」と云はれても、自分でそれより他仕方がなければ別に恐れはしない。

相手がまちがつてゐれば相手がわるいだけだし、相手が本當なら自分の實力の不足なのだからやむを得ないと思つて別に云はれたからと云つておどろいて見せるわけにはゆかない。」

だが自分の内の傲りや、自信や、力を失つては困る。

自分だつて他人に非難されて參つた時代もある。腹が空虚になつて、内に力がしなびてくることを感じたこともある。しかしそれはつけやき刄の淋しさで、内から力が生れてくればそんなものははねとばしてしまう。

しかし内から力が出てくれなかつたら困る。自分は自分の力の不足は知つてゐるが、自分の力のます道を歩く間は他のものは恐れない。力を内にます方法は自分の生命をより正しく生かしたいと常に思ふことである。そして他人の生命

が正しく生ることに役立つために常に働くやうに心がけることである。

ごまかしや、自分の生命と交渉のないことに心をつかひすぎるものは遂に內の力が消えてしまう。さうなつてはおしまいである。

○

藝術の形式的運動は、一つのパンをいろ〱の形に燒いて見せたやうなものだ。いくらどんな形をとつても、之を味はふものはその內要は同一のものだと云ふことを知る。質のよさを氣にしない藝術運動は、破滅するにきまつてゐる。パンにいろ〱の味をつけ、そしてパンをうまくやくことは大事である。

藝術にとつて大事なのは材料がこなれてゐることゝ、すべてが統一がとれてゐることゝ、表現が丸彫になつてゐることだ。あとはその人相應のもの切り出て來ない。

下らない人間からは下らないもの切り出て來ない。人間に深みがなければ、その人の藝術にも深かみは出來ない。

主義や形式を變化することにその人の精神の深さの變化しないことは悲しき(?)事實である。

○

昨日築地小劇場でストリントベルク作爛醉を見て今更感心した。舞台裝置は愚であつたが、脚本の力はそれを無視させる力をもつてゐた。幕合の短かいのはうれしかつたが、いろ〱の小細工はない方が遙かにいゝ。橫田のモーリスは力は入れてゐたかも知れないが、怒鳴つて許りゐて含蓄がない。言葉が沈默の領土からも出ず、その人の心のなかゝらも出てゐない。しかしいゝものをやつてくれたのはうれしい。實際築地小劇場が日本物をやらないと云ふことは一つの特色である。偉つた權威のある特色ではないが、今の日本には一つはさう云ふ劇場があつていゝ。日本のものをやらな

い理由についてはよく知らないが、傳へ聞いた處では自分も作家として腹を立てゝもいゝと思ふが、しかし西洋のもの許りやると云ふことはあの劇場としては利口なことである。自分も東京へ出てくるたびに築地にはすゝんで行きたく思ふ。何か教はる、何か刺戟をうける。ストリンドベルクのものが見られたのはよろこびだつた。

陶醉と云ふ作は作者の傑作の一つではないとしても矢張りいゝもので、すごい所がある。運命の調子にのりすぎたものゝ恐ろしさが出てゐる。エゴイストと忍從するものとが出てくる。超人のなり損ひとキリスト教徒的な人物が出てくる。勿論かう云つただけでは作の感じは出ない。運命が個人を飜弄する恐ろしさが出てゐる。子供の死はものすごいが、最後では効果が十分出てゐるとは云へない。男女のもつれあいもさすがによく強く、味深かくかゝれてゐる。調子に何とも云へないいゝ處がある。手とりばやいがふくらみと、圓味と、凄い切斷面が出てゐる。

脚本の精神にもつと叶つた演出が見たかつた。しかしいゝものをたまに見るよろこびを味はへたことをよろこぶ。

○

自分にはわるいくせがある。いゝ癖かも知れないが、悪い癖らしい。それは何か見てゐるとはがゆくなつて來て、自分でやつて見たくなることだ。

先日宮崎市で日本の活動を七つか八つ見たが、その内の四つ程はとてもはがゆい代物だつた。筋がなつてゐない以上だ。すると一寸活動の筋でもつくつて見たくなる。

政治家たちがあまり馬鹿で、ぐずなのを見ても、自分だつたらかうやつてやるがと思ふ。

昨日の芝居なぞ見ても、かうやればいゝのにとはがゆくなると、一寸やつて見たくなる。

それに反して感心しないではゐられないものを見ると安心して、俺なんか出る必要がないと思ふ。その人に任せて安

心してゐられる。

日本にはこのその人に任せて安心してゐられると云ふ人が甚だ少ない。困つたものである。

○

何事でも印象が强いと云ふことは一つの强味である。殊に藝術の世界では印象がキハクと云ふことはよくない。淡いやうで深く强いのは實にいゝものだが、淡はすぎて印象がのこらないのは困る。其處で藝術に個性や、特色が必要だと云ふのも印象の强いと云ふことが必要なのにすぎないと思ふ。

作家でも上手でゐながら印象がよはいといふものがある。話はちがうが劇壇なぞでも印象の强い弱いがある。その點築地小劇場のやうに一處にたてこもつてくりかへし西洋のもの許りやると云ふことは利口なことである。

日本のものを時々やつたら反つて印象がよはくなるだらう。西洋の新しい劇壇の運動には印象の强い中心人物がゐるから、何處の國のものをやつても、その劇壇の印象は統一され、ますく色がこくなり、特色が出るが、築地劇場ではそれは無理と思ふ。日本人のかいたものだつてやりやうによれば面白いものはあると思ふが、それをうまくやつて自分の特色を出して、見物を滿足させることは中々困難と思ふ。

勿論自分はさう云ふ劇團も出てほしく思ふが、印象の弱はい、見たい氣をさう起させてくれないものをつくる位いなら西洋のもの許りやる方がいゝ。

日本の新しいものをやつて、今日本に適當なものがなければ、適當なものを生み出す機運をつくつて日本の新しい芝居を世界的位置にまでもり上げる人の出ることをのぞむ。

築地劇場が中々思ひ切つた試みをやるのは、時々馬鹿々々しすぎたにしても感心してもいゝ。たゞ西洋のものをやる

にしも西洋人も感心する程、すぐれた形式を生み出してほしいものと思ふ。何處か東洋人らしい。

○

何かしやう
何かしやうと
たえず試みてゐるものは
そのこゝろみも
意氣もないものに
まさる萬々，
だがその上に
賢ければなほいゝ
どう〳〵めぐりでは少し困るからね。

○

目的をしつかりつかまへて
その方にぢり〳〵と進むもの萬歲

○

日本の活動を見て一番馬鹿々々しくはがゆいのは女がすぐ自殺することだ。自殺させればすぐ悲劇が出來ると思つてゐる作家は馬鹿である。又自殺さへすれば愛するものが泣かうが悲しもうが、云ひわけが立つと思ふのも馬鹿。第一死

んでまで云ひわけしたいなぞと思ふのも馬鹿。

お前の生命はいくつあるのだと聞きたい。

生命の安賣りはよしてもらいたいものだ。

生きやう生きやうとしてどうしても生きられずに餓え死にしたものには同情が出來る。一寸したことですぐ死ぬなぞと云ふ心がけの奴ははがゆい馬鹿である。

生きろ〲やむを得ず暴力で貞操がけがされたからつて死ぬのは馬鹿だ。生きろ、生きろ、人間の生命は貞操よりも大事である。

女の生命から貞操をとるとゼロだと思ふものは女を侮辱するものだ。自分は男女の嫉妬に同情する。他人に嫉妬させるのはよくないことだ。貞操も男女とも守るに越したことはない。貞操を守るものは美しい。しかしそれが人間の全部と心得るな。その他に人間のなすべきことはいくらでもある。

○

貞操のけがされた女を愛し得ない男はさう云ふ女を愛する必要はないであらう。だが愛し得る男は愛しても一向かまはない。

○

貞操の價値を輕く見すぎるものと、重く見すぎるものとどつちが罪の重いことをするか。

之は疑問である。少くも貞操の價値を輕く見すぎる者のために犧牲者の出ることはあり得ると同時に、貞操の價値を重くみすぎるために犧牲者が出ることは珍らしくない。

自分が貞操を守ることは美しいが、他人に重すぎる貞操の衣をきせて他人の生命を窒息させたり、或は自殺の窮所に追ひこめたりすることは自分はいゝことだと云へない。

そんなことがよくあり得るので、イサドラ・ダンカンなぞの行爲が時に痛快になる。

○

自分は女に好かれない質で隨分助かる。

自分は一方本能的な男であり、世間があまり怖くない男である。そしてある瞬間自分は一事に夢中になると他を忘れる男である。

少くも自分は女の誘惑には非常にもろい男のやうだが、よくしたもので誘惑されたことがない。だから自分は時々誘惑されて見たいと思ふくらいだが、ちやんとしてゐられる。自分の心のおちつきを失なはずにゐられる。そして本當に女に好かれない仕合せをよく感じる。自分の心を清くすることがたやすい。

武郎さんなぞも女に好かれない質に生れてゐたら今時分何か社會的にも立派な仕事をして、今も生てゐられたどらうと思ふ。

自分は性慾の恐ろしさや、女の恐ろしさを十分に知らないのは、女に好かれないからかも知れない。

自分は多くの美少年が誘惑に打ちかてなかつたために大事な時に勉强が出來ず、又その爲身體をこはした人を知つてゐる。自分なんかもし子供の時から誘惑されたら隨分あぶなかつたと思ふ。だから誘惑されやすい資格をもつてゐる人間が女でしくじるには自分は同情できる。せめる資格はない。さう云ふ人は性慾の恐ろしさも、女の恐ろしさも十分に知るであらう。自分は誘惑される資格のないために隨分たすかつてゐる。

女に好かれない男のために萬歳をとなへておこう。あまり氣が利かない役だが。

○

自分に最近始めて逢つた若い男の人が、僕にあつたら僕があまり淋しい顔をしてゐるもので同情（?）したやうな手紙を今日よこした。

自分は別に自分を淋しい人間とも思はないが、自分は淋しくない人間でもない。自分は非常に運のいゝ人間だが、一方孤獨な人間でもある。自分はよき友を實に持つてゐる。その友のことを思ふと愛さないわけにゆかない。自分は友情のありがたみを實に知つてゐる。

自分は又愛する者を多くもつ。しかし自分は常に死と向きあつて生てゐる。人間が死ぬものだと云ふことを自分は實によく知つてゐる。死に神は僕の親しき友よりもな近かくにゐる。自分は自分の仕事に對してもいつも棄身の氣持でゐる。

しかし自分は同時に樂天家である。しかし自分は多くの厭世家の方が自分よりも呑氣ものであることを知る。僕は呑氣になりたい。氣分を靜めたい。緊張することは呑氣になるよりも自分には遙かに容易である。呑氣になるには意識的努力がゐるが、ほつたらかしておけば僕はつい頭が緊張してくる。

自分は呑氣に人と話してゐると頭が解放される。殊に氣らくな女の人と話す時は頭が樂になる。その他は頭がせつばつまつた氣持になる。誰でもさうなるだらうと思つてゐたが、さうでない人もあるやうだ。

しかし自分にはそれがなれつこだから別に苦しいとも淋しいとも思はない。時々特別に淋しい時もありはするが、それはまもなく消える。

又自分は人間に生れたことを不幸とは思つてゐないが、人間に生れなかつたものを不幸とは思はない。

人々は樂天家と云へば呑氣ものと思つてゐる。しかし樂天にもいろ〳〵ある。自分は人類が正しく少しづゝ生長しつゝあることを信じることで樂天的だ。又自分の使命を少しでも果してゆけば、死んでも生ることを信じる點で樂天家だ。自分は知己がいたる所にゐてくれ、又自分の尊敬する優れた心をもつ眞劍な人々がこの地上に生れたこと、生れることを信じる點で樂天家だ。

愛すべきものを多くもつ點で樂天家だ。自分の希望は時々やつけられないことはないがすぐ又目ざめてくる點で樂天家だ。

何か愛すべき人々のために役立つことが出來ると思ふ點で樂天家だ。」

「俺の生てゐることをよろこんでくれる人がある

勿體ないな。」

自分はさう云ふ樂天家である。

○

悔ひあらためた
マリア・マグダレナの美しさ。
それを君は知るか。
マリア・マグダレナが
自殺したらどうだ。

自殺する以上に
人類と神への愛のために
生きたが故に
美しききわみになつたのではないか。
愛する、愛する
マリア・マグダレナ。

○

今日ある人の處で八大山人や、その他支那の山水のいゝものを七八枚見た。ぶつかるものにぶつかつた氣がした。ゆきつくしたものを見た。滿足した。ものたりた。何處かいゝがとか、中々いゝものだとか、ではまだ物足りない。本當にもの足りるものにぶつかれぬのはうれしいものだ。

○

物足りないと云ふ感じ、はがゆいと云ふ感じ許りで生れてゐては心細い。ものたりた、滿足したと云ふ感じも時々は味ひたいものだ。
もう一息、もう一息では心細い。
自分が仕事をするのも、物足りないでは我慢が出來ないからだ。ものを足りたことがしたいからだ。

○

自分にはたしかに名譽心がある。傲りを失なうことはたへられない。虛名も嫌ひではないらしい。他人や社會に賞められるのはうれしくないことはない。しかしそれを目的にして行動をしやうとは思はない。又それを目的として創作をしやうとも思はない。惡口を云はれても自分で滿足するものがかきたい。他人の賞讃の如何に空であるかを自分は知つてゐる。

又自分は金をとることは嫌ひではない。金がほしいと思ふことはよくある。しかしそのために自分の心をまげやうとは思はない。自分の確信をまげるなら死も撰びたいと云ふ氣さへする。金なんか何んだと思ふ。

自分は又女が嫌ひではない。殊に禁慾をつゞけたあとは、あぶない。しかしそのために自分の一生を捧げやうとは思はない。自分は自分の一生を女のことで棒にふらうとは思はない。又女に好かれることを仕事にしやうなぞとは決して思はない。

自分が目的として甲斐のあるものは、自分の仕事の完成と云ふことである。自分の生命の完成と云ふことである。

自分は創作家としては、自分の滿足し切る創作をしたい。もう一步なぞと云ふ感じがなくなる所まで進みたい。人間として、殊に人類の一員としては人類が全部的に完全に生ることを本願にする。

このことだけが、自分の生命をさゝげるに足る。

個人としては自己の生命を生かせるだけ生かし、隣人の生命を尊敬したい。親としては子を完全に育てたい。

自分の慾望の片輪的滿足では、他の自分が滿足出來ない。自己を全部的に滿足させるためには、自己を人格的に築きあげ、神の國を築き上げる方を目ざして進むより他に道はない。神の國、人間の國と云つてもいゝ。その國では各自が各自に許された範圍で自己を全部的に生かせるやうに十分なる設備の出來てゐる國である。

滿足し切れる作品をつくれ、滿足し切れる。他人も滿足し切れる道で、自己の滿足し切れる道をあるけ。自分の人格の完成。

それが出來るまではおちつかない。

○

或る國では女は自分の子の父を撰擇する權利が與へられてゐた。男はその女の權利を拒絶することは出來たが、自分の方から子供の母を撰擇する資格はなかつた。

女は子供を育てる義務はあつたが、子供を育てる間は生活の保證が與へられてゐた。そしてよき子を生み、又育てたものには名譽があつた。その國にも一夫一婦はあつた。しかし金で自分の嫌いな男に貞操を賣るものはなかつた。

その結果はどうだつたか。自分は聞くのを忘れた。

○

自分の尊敬する人間は立派な仕事をする人である。人類に役立つ仕事を直接、間接にし、その人のことを知り、その人の心にふれるとついうれしくなる人である。

人格の高貴は人の心を高貴にする力を持つが故に貴い。他人の心を美しくする力のない何事も仕出かさない品行方正なものは零にひとしい。品行方正そのことは自分の仕事を立派にする力をより多く持つことが出來る點で貴いのだ。自分は老いたる夫婦の圓滿な姿を實に地上最上の美の一つと思ふ。

ホイツトマンの唯一の羨やましがつたものは圓滿な一生かはらない夫婦の愛である。そは讃美すべき平和なものである。お互の愛、無垢の信賴。

しかし人世にとつて家庭は目的にすべきものとは自分には思へない。少くも今の時代では、家庭は人世の港であるとすれば、舟は港にゐるためにつくられたものでないやうなものだ。

男は其處で自分の仕事をする勇氣を得る處だ。女は其處で次ぎの時代の勇士をつくる處だ。

貞操な妻が次ぎの時代の勇士をつくるためにこつ〳〵働いてゐるのを知ることは、男の心を强め、又その妻に對して自分の品行を何處までも謹みたく思ふのは美しき人情である。

そしてそのために心おきなく安心して自分の仕事をしてゆくことが出來、妻子のことを思ふと不安なきよろこびが起る。それは人生の淸淨な幸福である。

しかしその幸福が得られなくとも、我等は自分の仕事だけは忠實にしなければならない。

〇

自分は昨日竹添君の處で見た支那の一つの書、垢道人だつたと思ふ、が頭にこびりついてゐる。本物は矢張りいゝ、そしてがんとしたものにぶつかつた氣がした。

自分は書でも文學でも一つの見方で見る。それは自分の心全部で相手を包圍する。さうするといゝもの程、自分の立場をちやんと持つてゐる。そして自分の心をとり入れてもらさない。悪いものはつかみ處がなく、心のより處がない。自分の心の粗雜な方面だけを受け入れるが、他は素通りする。質のあらいすきまだらけの壺のやうなもので水を入れると皆しみ出てしまうやうなものだ。たよりなくはりあいがない。一寸面白いと思つてもそれだけだ。何かたよりない。いゝものになる程、自分の心を全部的に歡迎してくれ、それを見てゐると滿足する、もの足りない處がない(前にも云つたが)。

自分の心以上に緻密に動いてゐる心にふれる。その心が滿足された世界にぶつかる。だから自分の心も安心してよろこべる。喰い足りないと云ふことがない。略畫だが山がしつかり立つてゐる。そして松木なぞも簡單にかいてあるが生て立つてゐる。畫家の見てゐる山や木や人物がしつくりこつちに感じられる。そしてその心にいさゝかのごまかしがない。自他共に生てゐる。

八大山人も隨分感心した。味では反つて進んでゐる處もあるが、垢道人のはあとでゆつくり見たせいか、印象がのこつてゐる。

その前小林君の處で大雅堂や竹田を見て感心したが、垢道人の心境は更に眞劍な處にぶつかつてゐるやうに思つた。

支那の畫はへんに精神的で、精神がへんに孤獨に生き、人間の魂が相手をもとめてゐると云ふ感じがするのがよくある。こつちの魂を打ちこんでもゆるがない力をもつてゐる。

世界に於て類のない一つの精神の世界を生かしてゐる。支那のいゝ畫をもつと見たく思ふ。先日入札で元信のある畫を見て、タラシワタそのものと云ふ感じを受けて感心した。

それは落ちついた重厚な感じのする世界だつた。心ある人を滿足させるやうな仕事をおちついてしたく思ふ。

○

自分は先日、新しき村に來た人が、「あなたは新しき村の仕事をしたことを後悔してゐるやうな噂をきゝましたが」と云つた。

噂程、あてにならないものはないが、この噂――それは來た人が聞きまちがへたのかも知れないが、――程、まちがつた噂も少ない。

自分はます〳〵新しき村の仕事に眞劍になつてゐる。もう二三年の辛抱でものになる。男子が自分の仕事をやり出した以上、自分の考がまちがつてゐればなほすが、まちがつてゐないことを益々信じる以上はます〳〵希望とよろこびをもつてその仕事をやつてゆく。

しかし新しき村の仕事はそんなに力こぶを自分が入れないでも出來る仕事である。いゝ人が生れ出し、集り出し、村の生活がぴつたりした人がます〳〵ふへて來てゐる。

昨日村の人の手紙だと僕がゐない毎月の例會で、今月は六時間勞働を七時間勞働にすることにきめたさうだ。働く人許りで金を一文もとらずに働く時間をふやす仲間が何處にあるか。七時間勞働は今の世界ではながくないであらうか、しかし僕がゐると六時間で、ゐないと七時間になる。勿論田植がいそがしいからであるが。

月に一圓五十錢切り小遣がもらへず、凡そまづいものを食つて男子（女子も入つてゐるが）の傲りを失なはずに進んで働いてゐる。誰も命令するものもない。制裁もまるでない世界は一寸類がないと思ふ。

こゝ二三年で皆の力で食ひものもよくなり、本なぞも各自今よりずつと買へるやうになると思ふ。天下何ものも恐れない若者の集り。

自分は新しき村があるので安心して東京でも生てゆける。村の仕事がなかつたら自分は心のおちつきのない、故郷を失なつた人間になる。今にものになり出したら。

こんな世界も今の日本でつくり得るものがと云ふことを世界中の人にお目にかけられるとたのしみにしてゐる。

自分は幸福者である。

今に村から十五錢位いで世界の名著を出すことが出來る。印刷器械もそろつた。之からその方面でも面白いことをや

るつもりだ。
元より村は何處までも農業を村らしくやる呼吸をのみこむつもりだ

○

面白いことは
今の世界でも出來るのだ
協力さへ立派に行はれ
適任が適所にがんばつてゐれば。

○

金のいらない、
食ふことに困らない
たえず自分を立派な人間にし
立派な仕事をしやうと心がけてゐる
若者の集りの内から
生れ出るものを見てゐてくれ。

○

上海の暴動が新聞に報道されてゐる。
眞相は知らないが、暴動は無結果に終るまい。しかし暴力がより強く、金のよりある方が勝つであらう。米がうんと

高くなるより他革命はものにならない。市民全體が生活の安定が得られなくなる迄は池になげこんだ石のやうなもので、投げこめるだけ石をなげ込んだあとは、池は何にも起らなかつたやうな顔をするだらう。

正直なことを云ふと、僕はロシヤ人は人間として實にすきだが、ひどい人間も多いが正直ものゝ氣がするが、今のロシヤを支配してゐる猶太人のある人々はどうも信じられない。猶太人にもいゝ人が澤山あるが、ロシヤを支配したがつてゐる人々はあまり面白くなささうだ。利害關係に敏感で、嘘のつき方のあつがましさ。さすがにレニンは正直者の處があつた。支那はロシヤの犠牲になることを自分は恐れる。今のロシヤの政治家達が世界の勞働者や農民の幸福そのものをのぞむ熱情を昔とかはらずに持つてゐるとは自分には思へない。

ロシヤの勞働者や農民の內心の聲を聞くことが出來て、自分の考がまちがつてゐることがわかればうれしい。

少くも支那を本當に愛するものは支那人より他にはあり得ない。支那の勞働者を愛するものは支那の勞働者以外ではあり得ない。お互に利用するのはいゝが、利用されるのは面白くない。元より僕はあまりその方に素人であるから物云ふと僭越しを感じるが。

自分は支那が世界で最も進んだ國として、目覺めてくれることをのぞんでゐる。ロシヤの革命のおともはしてもらひたくない。尤も支那は今隨分むづかしい位置にゐる。幸ひ學生達が團結する力をもつてゐるらしいから、この學生達の力を一つにして、それを最善に生かすことより他に一寸望みがおけない。その學生達がロシヤを崇拜する傾のあることは面白くなく思ふ。自分はクロパトキンの思想は支那で一番行ひやすくはないかと思ふ。中央集權は支那には不適當のやうに思ふ。しかしなんと云つても今の時代では暴力が勢力を得る。金も必要だがそれも暴力に變化出來るからだ。正義も必要だがそれも暴力を破壞する力がない以上暴力には叶はない。

自分達小さい島國の日本に許りゐるものには支那のことを想像するのは不適當だが、支那はまだ平和に生長出來る位置に達してゐないやうだ。何かの形で革命が起らねばならない國らしい。今のやうにたえず國内で戰爭するのではたまらない。又外國から國内で衝動を受けるのは同情する。支那はインドや朝鮮とはちがうから、各國は支那を獨立國として尊敬しなければならない。しかしそれには支那が自分の力でもつと統一がとれ、馬賊や軍隊のバッコを押えつけることが必要だ。

自分は支那がゆく〳〵は張學良あたりの、武力が支那を統一するか、學生達が立ち上るか、どつちかより他に支那の統一は今の處見込がたゝない。勞働者だけでは金がつゞかない。

自分は支那にとつて日本は何と云つても組しやすい國だ。恐ろしいのは英國とロシヤだと思ふ。今の處英國が一番恐ろしい。日本も中々質のよくない處もあるかも知れないが、元々腹のない國である。かう云ふのは日本を輕蔑することになつていやだが、僕は日本は組しやすい國と思つてゐる。何をするかわからない國の手先につかはれてゐるのは恥かしい話だが日本だ。日本には恐ろしい人も、腹の底のわからない人も一人もゐない。無神經者の慾張りが少しゐるだけだが、おどかされゝば、又國民の輿論でどうでもなる、その他氣がいが少しでもある人間はさつぱりしてゐる。支那人が日本人を怖がつていゝのは武力だけだ。だから日本とは戰爭さへしなければいゝ。日本は蛇であつたとしても支那をのむにはあまり小さい蛇だ。英國やロシヤは支那をのむ力をもつてゐる。モウコあたりにたいするロシヤのやり方でも、今度の上海事件にたいする英國の態度でもこのことは感じられる。日本の政府や新聞の態度のシドロモドロとはわけがちがう。

日本も亦支那はどうせのめないのだから、對等國として何處までも支那を尊敬するのが賢いのだ。日本は少數の資本

栄ゝ利益のために闘爭をあやまるのは馬鹿氣てゐる。支那の勞働者の賃銀が高くなるのは日本にとつて損なことではないのである。それに上海は日本のものではないのである。

そして支那は日本の御得意先きなので、日本は支那に嫌はれるのは利口なことではない。之が正義のためとか、人道のためとかならいくら損しても戰ふべき時は戰ふことも必要であらう。しかし利害關係の出來事なら、大きな目で見て、先づ第一に支那の國では支那人の意志を尊重し、出來ないことは出來ないと云ふのはいゝが、高壓しやうと云ふのは面白くない。

支那の學生達は恐るべき國と、恐れるに足りない國とをよく知つて恐るべき國につけ上らす口實を與へないことが必要である。一時的痛快なことよりは支那の未來を考へることが大事である。そのことは支那の人の方が遙かによく考へてゐると思ふが、いくらでも考へる餘地があると思ふ。

少し云ひすぎた所で、見當ちがいがありはしないかを恐れるが、一寸そんな氣がした。自分は支那に大きな望みをおいてゐる。世界にまだあらはれなかつた、人類を救ふに足る思想の持ち主と、その實現者のあらはれることをのぞんでゐる。排斥も一時の方便としてはやむを得ないと思ふ。戰爭をしないことを望んでゐる。日本に馬鹿者の多いことは、日本人として耻ぢ又、あやまりたいことも多い。しかし本當に支那のいゝ處を知り尊敬することの出來る國は日本ではないかと思つてゐる。

日本は實際支那から實に多くのことを教はり、恩をうけてゐる。支那の人種的偉大さを腹の底から知るものは日本人である。日本の馬鹿者は支那を輕蔑してゐるが、日本の賢い人達は支那の目ざめる時に、支那の文明が全部的に再び起き上る時に、實に大なる期待と望みをおいてゐる。

○

自分は支那のことをはつ切り知らずに云ふのは生意氣でもあり、すまない氣がするが、しかし一言したいのは、世界で今度目ざめる國は支那をおいて他はないと思ふからだ。そして支那が自國の特色を失はずに立ち上ることは人類にとつて非常に重大な意味のあることゝ思ふからだ。後なるものは先になると云ふことは本當である。日本は今に世界で最も進んだ國になる使命をもつてゐるとすればその次ぎに更に大きな世界的仕事をなしとげる國は支那でなければならない。次ぎに印度がくるか。未來のことはわからないにしても支那がつぶれるかつぶれないか。今のまゝでいつまでもつゞくか、本當に統一がとれ世界の最も豐かな國の一つとして目ざめることが出來るかは、世界にとり重大な問題である。

支那が强くならず、内はもめぞし、又支那の文明が今のまゝであることを望む國は多いと思ふ。日本もその末席をけがしてゐるかも知れない。しかし本當のことを云ふと支那が盛んになることを望まねばならぬ國はロシヤではなく日本である。英國は論外として。

支那がつぶれたり、各國の管理をうけたりした時、一番見ぢめなのは日本である。支那は日本のために存在するものではない。日本がつぶれても支那にとつて支那は大事にちがいない。しかしこの兩國は共に榮へ得る國である。勿論、ロシヤでも英國でも野心をすてれば支那と仲よく出來るであらう。しかし支那は各國の(その内に日本も入る)利益のために犧牲にされるべき國ではない。しかし今のまゝではその危險がないとは云へない。野心家が三すくみの形だから反つて支那は助かつてゐる。一國(日本は貧弱だから安心としても)一だけだつたら支那はとつくにやられてゐる國である。支那は三すくみを利用して、その内に强大な力を内に養ふべきである。國民の一致のために、排斥思想を利用するのはいゝが、國内の武力の不統一は何よりも支那を苦しめてゐる。國民の一致以外に何にも强いものがなければ又いゝ

が、中々支那はむづかしい位置にゐる。武力統一は實に不愉快なものであるが、支那は今後どう云ふ形をとつて國内の平和を得られるか。ストライキだけでは支那を救ふことは出來ないと思ふ。外國の力をかりることがあつたらそれは致命的である。そして支那は戰亂の巷に化する。

　しかし支那はいつまでも今のまゝではゐまい。何かの形をとつて進みつゝあると思ふ。國民の自覺は何よりも急務だが、己の力を知ることは大事である。時々さわぐのはいゝと思ふが、いゝ時に切りあげて、更によき時をつくり又、待つことが必要だ。國民の教育、自覺、自治の精神と力を養ふことが必要である。武力も國民の輿論には動かされるものだ。

　支那は最も思想の自由な國、思想をとりしまる力のあるものはない國ときいてゐるが、大なる思想家、大なる政治家が現出することで、撰ばれた人が共同し、それが權威ある輿論を形ちづくり、そして排外思想を利用することが賢いやうに思ふ。しかし排外的行爲は深か入りは禁物である。聲を大きくしておいて、敵は他にあることを知らなければならない。國民の力さへませば外國のことはどうでもなる。今支那は外國に戰爭の口實を與へるのは愚である。

　しかしこんなことは自分が云ふまでもないと思ふ。自分のいゝたいのは支那の人類における使命についてゞある。

　支那が力強く起きあがらなければ世界はバランスがとれないのである。

　支那の特色は今後もます〳〵生る力をもつてゐる。エジプトやギリシヤとはちがう。たしかに支那は過去に大きな人類的貢獻をしたが、亡びる國ではない。支那の内に生々としてゐる力は今後の世界にちがつた人生にたいする見方を教へ、ちがつた生活方法、及び味を見せると思ふ。世界は近頃急足に支那の精神のあらはれである文藝を注視し、驚嘆しだした。その眞劍な、精神的な、個人的な、そして人類や自然に直接にふれる生活に、今更に驚嘆しはじめた。支那の

力はその自然から得て來てゐる。勿論それは撰ばれた人々のことではあつたが、あくせくしない。天命をたのしむ態度は人類の未來の生活を暗示してゐる。自然をたのしむ生活。

今の支那の進んだ人間は歐洲の思想、生活にかぶれてゐるが、これ等をとり入れるだけとり入れた曉は、支那は矢張り支那に歸するにちがいない。

其處に故鄕を見出すであらう。

そして人類や、個人が、自分の父なる自然を愛することを知るのは、人類の調和、平和の上に必要なことである。天命をたのしむ平和。個人的な神の愛を認めない、しかし天命をたのしむ人間らしい思想の内に、自然の意志を提み、又それを深く眞劍にたのしむ生活は、歐洲的思想にかぶれたものに新鮮な空氣を與へるであらう。

生活に苦しむ人達にとつて又生活に苦しまなければならない時期においてこのことは無意味に見へるかも知れないが、各自が一定の仕事を得、それを果したあと自由がたのしめ、生活の心配のなくなつた時代には、このことは大きな價値をもつてあらはれて來、人々に新鮮な健康な自他をけがさないよろこびを與へるであらう。

自分は支那が亞細亞にがんばつてゐてくれ、そして廣大な土地をもつてゐてくれることをよろこぶ。日本の救ひは南米でなく南洋でなく、支那の山中にあることを自分は想像する。勿論その時は、日本人が支那人を使用するのではなく、友人とし、兄弟としてお互に尊敬しあつて生活出來る時を夢みる。

今日本人は、少くも心ある日本人は支那のためを本當に考へて行動をとることは必要なことである。一時の利益許りを考へる者は國賊と云つていゝと思ふ。しかし日本人も自覺して來たやうに思ふ。

○

他人とつきあふのに利害關係許り考へるのは馬鹿である。他人の氣持を尊敬することが大事である。そして自分の利益許り考へて他人につきあはうとすれば嫌はれるのは當然すぎる。

○

國家と國家とのつきあいは今の時代では嘘とかけひきが多すぎる。個人と個人、或は會と會との友情の擴大が必要である。

○

こんなことはわかり切つてゐることだが、いろ／＼の悲劇が誤解から起るのは馬鹿氣てゐる。正解から起るのならやむを得ないとも云へるが、誤解から起るのは凡そ馬鹿氣てゐる。

正解すればなほ悲劇が生れると云ふこともあり得ないことではない。しかしそれもなほ本當のことを知れば、お互に同感しあへ、同情しあへ、よく相談をし、調和の道が講じられるはづと思ふが、少しでも得をしたい連中では困る。損さしてやらないと目のさめない連中の多すぎるのは殘念なことだ。

○

何とか云ふ人が昨日今日の新聞に唯物論を通過しない人間の悪口をし切りとかいてゐる。ゲーテもドストエフスキーもトルストイも散々だ。さてそれなら唯物論の洗禮をうけた作家はさぞ偉い人にちがいない。誰かそんなに偉い人が知りたいと思ふ。

現今の世界で最も進んだ人達はその議論をした人に同感するかどうか。

僕はその人が崇拜する人を知りたい。まさかイフクベと云ふ人が大した作家だと云ふのではあるまい。いくら何度水をくゞつても鳥は鵜にならないさうだが、唯物史觀を通りこすと、ともかく人生觀だけは深刻になるらしい。その人の

生活も深刻になるらしい。その深刻人の顔が見たい。ダンテよりは深刻な顔をしてゐるにちがいない。それとも藥の効能にすぎないのか。

一寸からかつて見たくなつたので。いつも偉さうなことを云ふ人の顔を見たく自分は思ふ。自分は人相見ではないが、議論をよむよりは内面生活のあらはれとして嘘のつけない顔を見た方が早わかりだ。

尤も空虚な言葉を見れば、その人の顔も想像が出來るはづだと云ふ人もある。

○

賢い人間をさがして歩く男あり。

逢つたかね。どうかね。當人もともかく賢くないさうだ。

しかし賢い人もせめて文壇に、批評家にと云つた方がいゝ。二三人はゐてほしいものだね。

賢い人の云ふことはともかくはつ切りしてゐるし、よむと敎はることが多いし、こつちの頭もはつ切りしてくる。

馬鹿の云ふことは、よんでも何のことかわからない。へんな頭もあるものだと思ふ。頭の廢物は批評家にするにかぎるでは少し困る。

あんまり困りもしないがね。

○

自分の若い時、今でも若い氣でゐるが、なほ若かつた時は、生長するたびに頭をおさへつけてくるやうに思ふ先輩の感想、評論に腹を立てたものだが、いつのまにか、自分の頭の上には青空切りなくなつたので、征服慾もキハクになつて來た。

たゞ本當のことが云ひたいだけだ。それが云へない時は淋しい。

○

先日ギリシヤのテラコツタを見て、矢張り感心し滿足した。時々人間の手でつくられた滿足し切れるものを見ないと

人間に生れたことは一寸法師の仲間入りをされることのやうな氣がして心ぼそい。なま半かな人間許りが人間では心細い。處が實に胸のすく人間がゐてくれる。古今東西にゐる。先日元信の三幅ついを見た時も滿足したが。さう云ふ氣持を味はふことで自分は生命の洗濯が出來る。

實生活では愛すべき人を多く見るが、藝術では殊に日本の今の藝術では中途半端が多く、さう云ふもの許り見ると少しなさけない。いゝ藝術にふれられない時は、大きな木でも見てすきしておくが、天才の作品を見るのは愉快なことである。

○

齒のいたい時は齒醫者にゆかなければならない。生命の問題は第一として先づ齒をなほす。自分は人類が健全な生長をのぞんでゐる。その意志に忠實にならうと思ふが、時に原理よりもより現實的な問題を政治的な、實際問題としても考へてゆきたく思つてゐる。

自分はその方ではまだ素人だが、今後ますくその方面も考へたい。

しかし自分は目的は忘れない。人類の健全な生長を見ざしてすゝむより他に個人は救はれないことを知つてゐる。

いゝ子を生みたいのも自然の意志として尊敬する。立派な人間に子供をしたがるのもさうつくられてゐる意志にすなほになりたいからだ。この人類の意志に叶ふ自由競爭には賛成するが、その意志に反する自由競爭には反對する。自分は同じ理由で平等主義に賛成し、又惡平等主義に反對する。

自分は人類の生長に害のない行爲には何處までも寛大でありたい。人類の健全な生長に害のある思想や行爲には反對したい。

そして自分の言行をその意志にてらして反省したい。そしてまちがつた時はなほしたい。

なほしたものは人類は放蕩息子を迎へる父のやうに自分達を迎へてくれることを自分は信じてゐるものである。

(二五、六、八、)

虚弱者を強健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは八大醫學博士の御推奬と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的の血強壯增進劑にして人體肝臓中に含まるゝ鐵白蛋酸と同性同臓の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も好愛す。

二、絕對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上强力なる作用をなす

故に急性慢性貧血病、萎黄病、腺病及肺結核其他諸疾患より來る榮養不良並に衰弱、神經衰弱、病後快復期姙婦、授乳婦、産後、虛弱羸瘦者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

補血强壯 榮養增進劑	單味ブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓	大瓶一月分 金三圓
神經性 疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓三十錢	大瓶一月分 金三圓五十錢
腺病質特効 補血强壯劑	ヨードブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓三十錢	大瓶一月分 金三圓五十錢
造血補血 强壯劑	キナブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓三十錢	大瓶一月分 金三圓五十錢
呼吸器系 疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	小瓶半月分 金三圓[illegible]十錢	大瓶一月分 金五圓五十錢

賣捌各地藥店

說明書進呈

發賣元

大阪市東區道修町二丁目（振替大阪一七四一番）

本舗 藤澤友吉商店

東京支店 東京日本橋區本町四丁目

京城支店 京城府西小門町四十二

永世輪廻その他

萩原朔太郎

夢と子供

白晝(ひるま)における、さまざまなる欲望の抑壓が、夜陰の夢に現はれてくる。夢の現實の中で、人々の充たされない欲情が蝙蝠のやうに飛翔してゐるのである。

この悲しき景色が、同じやうに現實の世界に實在してゐる。といふことを、だれもかつて氣付づかなかつたらうか？我々の時代の優生學は、遺傳に就いて皮相の見解しか持つてゐない。親の體質が遺傳するものは、生理上の特色にしか過ぎないのである。個人の本質的な氣質や、趣味、才能等に關して言へば、科學の題目からはづれてしまふ。

ずつと多くの場合に於て、氣質上の遺傳は體質のものと反對する。親と子との相似は、主として生理上の特徴——容貌や、骨格や血液や、病氣や——である。しかしながら心理上では、この關係が反對になつてくる。即ち、概して言へば、多數の例に就いて見る如く、天才の子は凡人であり、英傑の子は痴呆に近い。そしてこの逆がまた事實である。我々の天才の歴史が教へる如く、ベトーベンの父は凡庸なる音樂教師であり、ナポレオンの兩親は言ふにも足らぬ無能の

人物にすぎなかつた。そして一般に知る通り、文學者の父は概して俗物であり、精力家の父は怠惰者であり、敬虔家の父は概ねお人好しである。尚且つ、もつと實證すれば、禁慾家の子には色魔が生れ、嚴格家の子には不良少年が多いのである。

かくこの不思議なる事實は、我々の「夢」に於けると、全じ事情によつて論證し得る。我々の生活が、もしも禁慾を強ゐるならば、不斷に抑壓されたる意識が、夢に於ての悲しき飛翔をする如く、丁度そのやうに、親の內密の欲情が、彼の子供にまで遺傳され、子供の現實の氣質となつてくるのである。かくして敎育者、その他の嚴格家の子供は、概ね放縱無賴の人物となり、精力家の子は怠惰者となり、その他のすべて反對の氣質や才能が子に現はれてくる。

それ故に人々は、彼の子供に於てのみ、彼の內密なる、自らそれを意識し得ない、一の悲しき非望を見るであらう。ああいかに寂しいかな！　子供は我々の Life における、夜陰の悪しき蝙蝠である。それのおびただしき飛翔が、夢の中でさへも、我々の安眠をさまたげる。

永世輪廻

獨逸の、ある荒涼とした地方の岩の上で、詩人ニイチエの頭腦に浮んだ、あの異樣に氣味の悪い思想――永世輪廻の思想――は、次のやうな數理から演繹されてゐる。

宇宙の現實する狀態は、物質分子の一定組合せから成立してゐる。現在する世界は、分子の集合と分散による。或る偶然の組合せ(パーミテーション)數から形成されてる。換言すれば、分子の偶然な方程式が、現にある如き必然の世界を構成してゐるので

ある。所で、宇宙間における分子の質量は一定したもので、増すこともなく減ることもない故に、そのありとあらゆる無限の變化は、無限の組合せの後に於て、いつかは一度、必ずまた同一の數式に回遇せねばならないだらう。もとよりかくの如き事情は、有限の時間における、有限の變化にあつては有り得ない。しかしながら、無限の時間における無限の多樣なる變化――それが宇宙の實相である――に於ては、數理の必然な計算から、事情の正に起り得べきことが推斷されるのである。

見よ！　その時げに萬物は始めに回歸する。何もかも、すつかり同じ狀態がやつてくる。現在、ここにある所の世界が、その時またそこに再現する。かくの如く、現に人々の見てゐる所の建物や、家畜や、樹木や、市街や、その他の物やが、丁度我々の千九百二十三年にあつた如く、ずつと永遠の未來に於て、そつくり同じ狀態でまた目前に現はれてくる。現在、私の隣家に住んでゐる貧しい家族は、想像もできない無限の未來に於て、ふたたびこの同じ場所に居り。同じこの家で、同じ職業で、同じこの生活をしてゐるだらう。そしていま、或る裏街の寂しい角で、私が友人と立話をしてゐる如く、丁度無限の或る壁つた日に、この同じ私が、同じその友人と、同じ街の角で、全く同じ事柄を話してゐるのである。

かく無限の未來に於て、我々のだれもが、すべて今在る如き世界に再生する。そして我々は、今一度、すつかり同一の人生を繰返すのである。この思想からして、人々は再生の希望を失つてしまふ。一般に人々は願つてゐる。私は私として――現在せる自己意識の人物として――ふたたびまた新しく轉生したい。しかしながら次の世には、ちかつて過去の悔恨を反復しないだらうと。しかしながら人がもし生れ變るとせば、事情の法則が、宇宙のあらゆる隅々まで、同一の必然でなければならない。もし異なる事情の下にあつては、決して同一の人物が再生し得ないだらう。しかして一切の

事情が同一であるならば、我々の行爲もまた同一に決定される。換言すれば、今世における吾人の一切の生涯が、來世に於ても寸分ちがはず繰返される。吾人はそれを訂正することもできないし、抹殺することもできないのだ。

この思想における、最も重大な要點は、轉生に關して豫想される「無限の未來」が、實は「瞬間の後」を意味してゐることだ。何となれば死——夢なき眠り——の中では、永遠が一瞬時に過ぎてしまふから。げに吾人は、今日ここに眠り、明日の朝めざめるとき、またふたたび昨日の同じ日課を繰返すべく、運命が豫定されてゐる。かくして同樣に、明日の翌日も翌日も、無限に同し轉生が輪廻され、永遠に業の盡きる時期がない。かく人間の思想し得べき、最も陰鬱な地獄が意味する。「一度起つたことが、今後永遠に起つてくる。」それからして退屈が、生存全體を暗黑にしてしまふのである。

文化におけるあわただしきもの

最も速力の速い高價の自働車には、いつも最も忙がしい人が乘つてゐると思ふか？

閑散からして、文明があわただしくなる。

猿！

恐怖の情緒は、本能の最も原始的なものに屬してゐる。馬や、犬や、鷄や、その他のよく馴れた家畜ですらが、恐怖

の著しい徴候から、全て生れつきの野獸に變つてしまふ。

諸君は、さういふ動物を見たことがないか？たとへば赤色のびらびらする布(きれ)などから、恐怖の不意の發作にかられた馬や、夜更けて何物かの心像におびやかされ、遠くさびしげに吠えてる犬など。

かかる動物の姿ほど、變貌の著るしく異樣のものはない。その鬣(たてがみ)を鬼のやうに逆立て、血ばしつた眼をして疾行する馬の姿は、全然平素の家畜でなくして、生れつきの兇惡な猛獸である。かくの如くにして、恐らくは彼等の先祖が、山野に棲息してゐた。夜陰に遠吠えする犬の姿は――吾人がそれを注意して觀察するならば――犬の常態でなくして、全くむしろ飢餓の狼に類してゐる。即ちその顏は鋭どく尖り、眼瞼は甚しく骨ばり、眼光は青白く光つてゐる。あまつさへその特殊の鳴聲たるや、原野に飢えて叫ぶ狼――それが彼等の先祖である――にそつくりである。鷄に至つては、ほんの一寸とした恐怖から、造作もなく先祖の雉にかへつてしまふ。一枚の赤い毛布が、步足鳥たる彼等を家根の上に飛びあがらせ、その鋭どき羽ばたきと鳴聲との、異樣な變貌を觀察するに充分であらう。

かく恐怖の發作は、すべての進化した動物にまで、彼等の遠い先祖を幻想させ、原始の野蠻の生態に導いてゆく。人間もまたさうであるならば、我々の學者風な興味からして、汝等を不意の恐怖に導き――地震や洪水などで――それによつて汝等の「猿」を見出すべく、あはせて進化論の虚實を試すであらう。

しかしながら人間よ。汝はすでに試驗された！

東洋！

巨大な、夢幻のやうなピラミツトや、妖怪のやうなスフインクスやが、あの熱帶の黄色い砂漠の中に、今も謎のやうに建つてゐる。一方では、ビルマの荒寥とした地方に、途方もなく巨怪な、山のやうな佛陀の涅槃像が横はつてゐる。そして一體に、亞剌比亞(あらびや)から印度、印度から支那へかけて、さま〴〵の怪奇な、得體のわからぬ立像や建物やが並んでゐる。

かくの如き光景は、旅行者にまで、ある唐突な夢に似た、異樣にしてグロテスクな感を抱かせる。これからして東洋の幻想は、一樣に薄氣味の惡い、妖怪的な、阿片の夢のやうなものに考へられる。

東洋！けだしこの言葉の響の中に、我々の知るすべての情感――蜂蜜のやうに甘い音樂や、チユーリツプのやうな美人や、熱病のやうな冥想や、疾病のやうな激情や、桃の花の妖精や、黄色い男の顔や、恐るべき慘虐性や、深遠無比の愛や、最も高貴な品性や、蜘蛛のやうな醜惡や、氣味の惡い魔法への歸依や、佛陀や、聖人や、梵(ブラマ)や、宿命や、そして邪淫と幻覺への非倫理極まる耽溺や――が聽えてくる。

東洋！げにそれは基督教感情の反對である。かしこに咲く花は此所になく、此所に咲く感情の花はかしこにない。およそ東洋的なる情操の根原は、厭人病者のそれのやうに、人間的なるいつさいのものへの嫌忌を示してゐる。あの巨大にして夢幻的なる建築や、怪異にして氣味のあしき種々の佛像は、いかに「人間らしからぬ」異樣なものへの、東方的趣味の熱望を語つてゐるか。支那の文學を見れば、一として構想の怪異を極めないものはない。特にその戲曲等に現はれた英雄や聖人の性貌は、むしろ妖精に近く人間性を超越してゐる。印度、ペルシヤの古代美術は、すべて淫靡にしてグロテスクを極めたものであり、同樣にその文學も怪奇で、非人間的情操の妄語にみたされてゐる。そして支那人、アラビヤ人、土耳古人、印度人等の夢想するユートピアは、概ね妖魔と美人との群にみたされてゐる、非現實的、夢遊病

的の神仙境である。

かく藝術ばかりでなく、宗教も、道德も、おしなべての文明が、東洋に於ては特別である。印度の宗教は、それ自ら超人の道を教へるので、人間性（ヒューマニチイ）の離脱を目的とする。支那の道德は、すべての人間的情慾をいやしみ、人間的臭味を嫌ふことで有名である。聖人であるほど、支那では人間に遠く、羊や鹿の妖精に近くなつて考へられる。或は全く、人間性を超越した神仙の如く思惟される。我々の日本——それは文明的に、半ば支那の屬國であつた。——でさへも、同樣に東洋風の倫理が普遍してゐた。即ち「塵の世を厭ふ」人間嫌ひが、その自體の情操で、何かの高潔な德に屬するものの如く、久しく一般に考へられてゐた。我々の「俗」といふ言葉が、今でも尚、人間的臭氣への賤蔑を意味してゐるほど。

かく東洋の情操は、本質的に「人間的なもの」への嫌惡から出發してゐる。それからして必然に、一方では「人間的でないもの」への崇拜に導かれる。これによつて超人や、英雄や、神仙や、妖怪や、魔法や、咒文や、その他すべての人間らしからぬ異樣のものが考案され、さまざまの怪奇な偶像が崇敬される。そして或は、人の夢によく見る唐突の幻想（いめえぢ）に誘なはれる。すべて東洋風の特色がここに根を有してゐる。あの支那人や土耳古人に特有なる、東洋的の慘忍性と非人道、その暗黑好きの犯罪性、破倫的性向。そして一方では、驚くべき崇高無比な道德があり、超人の底知れぬ高德が、至善と至美の究極する理想を高稱してゐる。しかしてこの兩面の矛盾こそ、ひとへに同じ哲學の裏と表に外ならない。東洋！げにそれは神のやうに氣高く、また獸のやうに醜い、兩面怪異の相貌である。

地球の反對の側に於て、我々はまた西洋を見るであらう。あまりに人間臭く、人間的でありすぎるギリシヤの神々がそこに立つてゐる。そしてあの明るく陽快なる歐羅巴の空と風光とを。げに西洋的なる情操の根原は、全くもつて熱情

的なる、むしろ熱念深き人間性への愛着である。然り、西洋といふ言葉それ自身が、既にヒユーマニチイの情操を感じさせる。そこには何等のグロテスクな巨像もなく、何等の超人間的な宗教や哲學もない。一様は西洋は現實的であり、一様に彼等の趣味は科學的である。そこでは、美術と、文學と、道徳と、文化のあらゆる本質の感情から、ひとへにただ「人間らしきもの」が悦ばれる。

しかしながら、いま彼等のあまりに人間的なる天使が、東洋の怪奇なる偶像にまで、正にその語らうとする所を聽け！　我等は既に人間に飽きた。人間的なものへの好尚が、いかに久しい間、世界の文明を支配して居たとよ！　けれども今、我等の中の移り氣なものが考へてゐる。結局して我々の眼が、どんな道徳と眞理に到達し得たかを。人々は眼をはなち、遠く東邦への旅情にあこがれてゐる。聽け！「基督教の民よ」と、かつてあの聰明なニイチエが叫んだ。「君等の卑賤な唯一の趣味、そのヒユーマニズムを廢へせよ。それからして絶大なる、別の新しき自由の道徳、超人の道がひらけてくる。」

眞實から離れて

自然の「眞實」を描くといふことが、もしも藝術の目的であるならば、女に女のモデルを描かせ、男に男のモデルを描かせなければいけない。その反對は禁じられる。なぜといつて、もし男が女の繪を描くならば、自然の要求からして異性のあらゆる特殊な魅惑――豐滿な腰の肉づきや、優美な足の曲線や、張り出した乳房や、胴の丸みや、皮膚の柔軟さや、その他の女らしきすべての媚態と艶めかしさ――のみを採り取り、ただその點だけを誇張して描くであらう。特

に天才にあつては、誇張が一層ひどく露骨にされる。げに我々の知る如く、男の畫家によつて描寫された婦人の像は、何等現實のものでなくして、全く藝術上に理想化したもの、異性の情慾と趣味とを飽滿さすべく、その點で婦人を誇張したものに外ならぬ。

一方で婦人の畫家たちは、モデルに對してずつと忠實であり、つつしまやかな態度を取つてゐる。婦人の描いた婦人畫は、男子の描いたそれのやうに、決してそんなに張り出した乳房をもつてゐない。それほどに肥大な腰を所有しないそれほどに誇張された胴の丸みや、それほどに優美な曲線をもつてゐない。そして全體に、あまりに蠱惑的な美を持つてゐない。あまつさへ、どこか軟弱で力がなく、だらしのない鈍重さと、無智の薄暗い醜さをも描出してゐる。即ち實際の、現實の婦人がある如く、その如く正直に表現してゐる。

かくの如き眞の寫實主義は、しかしながら何びとにも悦ばれない。何となれば、それが單に「事實」であり、そしてそれ故に、全く以てつまらない存在にすぎないから。より偉大なる藝術品は、事物のより深遠な價値を教へる。しかしながら、より眞實から遠く離れて。

平等主義の由來

「あらゆる人は平等である」といふ思想は、「あらゆる人は平等でない」といふ事實を否定することができない。しかしながらこの思想は、我々の優越感に關する、先入見としての價値を顚換することができる。たとへば昔は、單に貴族が、貴族たる故を以て尊く、平民は、平民たる故を以て賤しいと考へられた。しかしてこの先入見は、何の確たる理由

もなしに、因襲から固く信じられてゐた。丁度我々の自由なルツソオが、これに對して啓蒙すべく、非常な決心をしなければならなかつたほど。

今日我々は、階級制度に對する無意味な尊敬を失つてしまつた。もしも今日、我々が平民であり、農夫であるといふ理由を以て、我々を輕蔑するものがあるならば、我々は昂然として言ふであらう。「人間は平等である」と。或る民族間では、彼等の人種的優越に關して、今日尚一の先入見が殘つてゐる。即ち單に、彼等の皮膚の色が白いといふだけの理由でもつて、先天的に優越な人種であると信じてゐる。それからして他の有色人種の間に、次の啓蒙的標語が叫ばれた。曰く「人間はすべて平等である。」

現代の社會制度は、金力と資本とが絶對の權力を握つてゐる。それによつて貧乏人や勞働者が、何の正當な理由もなしに輕辱され、本質的に社會の劣等種類であるやうに見られてゐる。之れに對して、その全く理由なき偏見にすぎないことが、むしろ正當には、後者の方に優越權のあるべきことが、最近、社會主義者等によつて高唱されてきた。通俗の先入見を啓蒙すべく、彼等の新しき正義が言ふ。「人間はすべて平等であり、平等でなければならない。」と。

かくすべての平等思想は、正當の理由なき、もしくは理由を失つてしまつた。過去の、因襲の、先入見の優越權に對して、その既に無權利なことを主張し、以て不法な屈辱から民衆を救はふといふ、啓蒙的なる正義の精神に立脚する。「その點に關して言へば」平等主義の前提はいふ。「我々は同じ人間であり、したがつて平等である」と。しかしながら、他の點に關して言へば、常に必しも各人の價値は平等でないだらう。たとへば軍人は、軍人たる才能に於て、學者は學者たる智識に於て、天才は天才たる頭腦に於て、何れもすべて他の人々にすぐれてゐる。その點でもつて、彼等が優越を感ずるのは當然である。本質的には、いかなる人間も平等で有り得ない。我々をしてルツソオの逆を言はしめ

よ。——人間は、生れながらにして平等でない。

それ故に、今日一般の俗衆によつて思想されてる、あの漠然たる平等主義——それは次のやうたことを言はうとしてゐる。我々はすべては、だれも等しく同様な肉體をもち、同様な感覺や情緒をもつてる。我々は等しく皆人間であり、それ故に皆ひとしく平等である。——は、畢竟、次のことを言ひ換えたにすぎないだらう。「我々のすべては、哺乳類中の人間科に屬してゐる。その點に關して言へば、あらゆる人間は平等である。」かくの如く、最もノンセンスな思想である。

思想

思想は感情の乾物である。失はれたものは、單に水分と血液ばかりでない。しかしながら永く保存に耐える。——感情は早く消えてしまふけれども。

弟子の忘恩

かつて私は、一人の師も持たなかつた！と言ふのは、一の不遜な傲語にすぎない。よく考へてみれば、我々のだれもが直接や間接に——書物や交遊などで——先輩の感化を受け、幾人かの、不定の師を持つてゐるのである。

無用の情熱

藝術に向つて、その「用」を問ふのは、若い男女に向つて、情交の用を問ふやうなものだ。性慾と創作慾とは、人間の二つの强い情熱。しかしながら、共に無用の情熱である。

春眠情調

日本の詩歌、音樂などに特有なる、あの一種の春眠情調――小春日和の緣端などにおける、白晝(ひるま)ののどかな眠たさや、自然のあらゆる風光に對する、のんびりした惰眠の情調など。それは特に雅樂と和歌のリズムに現はれてゐる。――は、生理上の原因による。民族の體質に事情してゐる。疑もなく、米食の結果であり、ベクーミンBの缺亡によるのである。實驗によれば、それの缺亡が動物を懶惓げにし、懶惰の夢を好むやうにする。支那、印度の米食民族に於ても、この事情はほぼ同一であり、詩文に特別の長閑(のど)けき情調を感じさせる。

最近、我が國の青年間に於ける、肉食の甚だしき嗜好は、體質の改良と共に、藝術の血液にすらも、國粹のものを失はふとしてゐる。

名聲

名聲には、名聲をかち得た人にまで、それの馬鹿々々しく、取るに足らない感をあたへる。それからして、彼はちやつた意味での浮誇を感じ、偉大不遜のものになる。即ち、世に名だたる歴々の人々――大政治家や大文學者――にまで、深い尊敬の情を失ひ、彼等の名譽をさげずみ、輕蔑的に見るやうになる。

世間では、かく名聲の得意が、彼を傲慢にしたと思つてゐる。實は反對のわけだけれども。

家庭的になる

想像力の缺乏から、人はその家庭を愛するやうになつてくる。それが婦人の場合では、生れつきであるけれども。

婦人と安時計

婦人等は、しばしば高價なデリケートなものに考へられてゐる。感じ易く、傷つき易く、その取扱ひにまで、充分細心の注意を要する所の、一の精巧なる物のやうに思はれてゐる。

所で、何といふ誤解であらう。學者の實驗は、悉く之れに反對してゐる。感覺に就いて言へば、觸覺、嗅覺、聽覺共に、婦人のそれは男子より鈍感である。情緒に就いて言へば、婦人の感情は原始的で、動物に類した激情性のものである。それが男子の方では、まれに僅かに、原始の名殘を止めるに過ぎない。生理に就いて見れば、婦人は環境に應じ易く、よく窮乏と饑餓に耐え、病氣に對する抵抗力が非常に强い。一方に男の體質は、ずつと脆くデリケートに出來上つ

てゐる。それは外界の異變に感じ易く、したがつて抵抗力が弱く、僅かの不攝生から、容易に疾病に犯かされ易い。（統計の示す所では、男の死亡率は常に女の上位にある。）中樞神經に至つては、男女の間に最も著るしい相違がある。その組織の精巧なことで、したがつて狂ひ易いことで、男の神經は女と比較にならない。肌の皮膚の如きものすら、見かけの粗野と醜惡にかかはらず、本質的には、概して男の方が纎弱であることが立證される。

要するに男子は、かくすべてに於て精巧な、感じ易い、したがつてまた破損し易く狂ひ易い、纎細でデリケートな仕組みにできた、一の複雜精巧な機械である。反對に女性は、いつさいが簡單な仕掛にできてる。故にまた頑丈で、堅牢で、單純で、容易なことでは破損する憂ひがない。ずつと亂暴な取扱ひが、それの順應に耐えるのである。しかるに驚くべきことは、我々の直感にまで、いつでもそれが反對に感じられる。何となれば婦人は、彼女自身を見せかけるべく、いつも男の前に弱々しく、脆き花のやうに裝うてゐる。げにその外見の風情からは、この上もなく纎弱で、觸れなば傷つかんばかりに思はれる。それからして誤見が生じ、次のやうな不正の推理に導かれる。―すべて精巧なる仕組みのものは、デリケートにして破損し易い。所で婦人等は「弱々しく脆き風情のもの」のものである故に、我々一般が、それの取扱ひに對して、特別に念入りなる注意と丁寧とを强ゐられるほど、それほど本質的に精致でデリケートのもの、男子にもまして高貴なる文化的情操の所有者と考へられる。

見よ！　一のくだらない安價な時計が、その纎弱で、脆く、壞れ易げの見かけの故に、かくして最も精巧な機械と誤まられた！

雅號の由來

普通の場合でいへば、我々の「仕事」は、それ自ら我々の「職業」を意味してゐる。換言すれば、それでもつてパンを買ふために、生計の目的のために、仕事が選ばれるのである。

所で、ある例外的な場合は、仕事が生計のためでなく、金錢やパンのためでなく、ひとへに仕事そのことの意義や興味のために選ばれる。かくの如き仕事は、本質的に言つて職業でない。たとへそれによつて、實際には生計の報酬を得るときでも、動機が始から金錢にあるのでなく、生計のためにやるのでなく、全く彼自身の興味のために、道樂のために、趣味のために、もしくは主張のために、道義心のために、即ち要するに、彼自身の自由な欲情のために、それの滿足を目的としてやるのだから。

かく、仕事それ自體の中に目的をもつ職業？は、今日の言葉で自由職業と呼ばれてゐる。(後に言ふ如く、今日では、僅かに藝術家と政治家とが、それの部門に屬してゐる。しかしながら昔は、醫師や、學者や、僧侶や、教育者やが、すべてこの部類のものに屬してゐた。)彼等の仕事は、その私慾的でなく、また功利的でないことでもつて、一般の俗務と明白に差別されてゐる。その限りでは――正に稱呼されてゐる如く――すべて彼等は、社會の尊敬に價する「先生」である。けれども自由職業は、本來自由職業である故に、多くの場合、それを以て生計の資費を得ることがむづかしい。のみならず、却つてそれの熱誠から、一層の窮乏に陷入つてしまふであらう。

それ故に彼等は、別に生計のためとして、他の世間的職業を必要される。たとへば或る文學者が、一方に遞信省の官吏であつたり、或る詩人が、一方に百貨店の番頭であつたりする例である。かく同一の人間が、一方では商人であり、一方では詩人であることからして、しばしば二重生活の矛盾に惱まされる。何となれば、前の仕事の本質は「できるだけの利益」であるのに、後の仕事の本質は、反對に功利の觀念を超越すること、全くむしろそれを忘れてしまふことに

あるのだから。かうした生活の矛盾が、彼等を惱ましくし、常に次のやうな錯覺を感じさせる。「一方で、私は確かに商人であり、一方ではまた藝術家である。この二面の私は、別個のちがつた人物に屬してゐる。晝間、商店に座つてゐるとき、私は明白に詩人でない。夜、机に向つてゐるとき、私は確かに商人でない。そもそもこの別な生活が、同一の私に屬するだらうか？」

多くの文人や、畫家や、その他の自由職業家に見るところの、あの雅號の由來がこれから出てゐる。即ち一方では、官吏としての、俗人としての××氏があり、一方では文學者としての、詩人としての××氏がある。されば彼の小說によつて、陸軍當局者から譴責されたところの、あの有名な博士が答へた。「軍人としての私は、森林太郎である。しかしながら森鷗外は文學者である。鷗外の仕事のために、林太郎の地位を責めるな。」

かく雅號の來歷は、本來二重生活の矛盾から發明され、後には轉じて、廣く一般に、自由職業者の表標として用ゐられるやうになつた。すべての自由職業——藝術家や、宗教家や、學者や、政治家や——は、それによつて彼自身を、他の功利的な職業や俗物と差別すべく、雅號にまで、特別の權威と自誇を感じてゐた。

しかしながら今日では、次の如き事情によつて、雅號が甚だ時代遲れになり、一般に流行しなくなつた。今日では、純粹の意味での自由職業といふべきものが、殆んど尠なくなつてきた。たとへば教育者の如きも、昔は全然報酬を目的としない所の、單に名譽職としての社會的地位にあつたけれども、今日では明白に一の職業となつてしまつた。學者もまた今日では、パンのための學問を學ぶやうになり、一種の腦力勞働者にすぎなくなつた。宗教家も同樣であり、昔は乞食しつつ道を說いたものが、今では婚禮や葬式の受負業者に化してしまつた。政治家も職業化してきて、彼等の大部分は、それの商賣で生計してゐる。眞に國事を憂へるために、家財をなげうつて奔走するといふ如き好事家は、殆んど

稀有なのである。正義の勇敢者たるべき主義者ですらが、多くはこれを看板にして生計してゐる。醫術に至つては、今日純然たる職業であるが、昔は仁術と稱され、金錢の報酬を目的としない所の、一種の人道的自由職業と目されてゐた。獨り今日に於て、いくぶん自由職業の神聖を保つものは、僅かに一部の藝術家あるのみである。しかしながら内情は、彼等もまた甚だしく物質的になつてしまつてゐる。多くの知名な畫家や文士等は、創作の感興よりも、むしろ金錢の利慾のために筆を取つてゐる。のみならず或る人々は、自らそれを公言してゐる。曰く。藝術は趣味でない。よつて以て生計を支持すべき、生命のための仕事であると。

かく、この現象は、社會の變移する事情が、我々をその窮地に導いたのである。今日のせち辛き世の中では、もはや昔の如き、自由な餘裕ある生活は許されない。我々は、我々の仕事を神聖にし、眞の自由職業でありたいと思つてゐる。しかるに社會の事情は、我々からその「自由」を奪ひ、單に「職業」だけを殘してくれた。藝術や政治が職業化するのは、今日に於てまことに止むを得ないのである。あまつさへ今日では、いつさいのことが分業制度になり、専門的に深く進んでゐる結果、かれこれ同一の人物にして、二つの仕事を兼ねるのが困難になつてきた。我々の時代の藝術家にして、もし商人と詩人を兼ねるならば、その仕事は、兩方共に成功しないであらう。今日、名聲ある作家たちは、概ねその道の専門家として、一途に成功したのである。さうでない人たちは、單に不利益であるばかりでなく、今日の文壇からして、次のやうな非難を浴せられる。「彼の藝術は、商人の片手間仕事である。創作は、彼にとつての餘技にすぎない。彼はアマチュアである。ヂレッタントである。」

かくの如き理由からして、今日では、雅號が甚だ廢つてしまつた。雅號それ自體が、何となく流行おくれであり、その上に不眞面目なるもの、遊戯的のものとさへ考へられてきた。何となれば、それは二重生活の證據であり、恥づべき

デレツタンズムの記標であるから。換言すれば、我々のあまりにせち辛き世の中では、自由職業そのものすらが、その自由の故に嫉妬され、、却つて道樂的のものとして賤辱されるほどである。

されば人々は、彼等の「自由」を奪はれると共に、その特權表標たる雅號を廢してしまつたのである。まづ最初に、醫師がそれを廢めてしまつた。(昔の醫師は、皆その方での雅號を持つてゐた。)次に學者と、教育者とが廢めてしまつた。政治家もまた、近頃では殆んど雅號を用ゐなくなつた。まだ老年の政治家だけが、僅かに昔の名殘りを留めて居る。最後に藝術家――彼等だけが、いくぶん尚自由職業の實を有してゐる。――だけが、或る一部で、今尚、雅號の由來を記錄に留めて居るにすぎない。しかしながら文士の名が、著述業者を意味する故に、やがてはまた、それも消滅するであらうものを。

誤謬からも文明は向上する

禽獸に對して愛をもつ人は、況んや人間に對して愛をもち得るといふことは、一の誤つた推論にすぎない。そこでは、家畜に對してあまりに慈愛深く、隣人に對してあまりに冷酷な貴婦人などが居る。そして通例、彼の庭園に動物園を設けるほどの熱狂家は、家族やその他の人間に對し、極めて冷淡な感情しか持つてゐない。丁度天文學者が、地球の同胞よりも、より多く天界の事件に熱中するやうに。

一方では、可愛らしい小犬の鼻先を、無慘に泥靴で蹴り飛ばすやうな人がゐる。動物に對してすら、こんなにも慘酷である所のものが、況んや人間に對して、どれほどの冷血漢であらうとは、普通に人々が、かういふ場合にする推斷で

ある。しかも諸君は、それを見たことがないか？ 一匹二匹に過ぎない小蟲などを虐殺しながら、それの苦しむのを見せて、彼の幼兒をあやしてゐる多くの慈愛深き父親を。かく、動物に對して冷血な者どもは、概してその子供や妻女に對して、特殊な、本能的に熾烈な愛をもつてゐる。丁度、あの高利貸どもが、債務者に對して慘忍でありながら、その家庭に於ては、常に殆んど子女の愛に惑溺してゐる、善良無比の父親であるやうに。

されば禽獸に對する愛の情操は、人間に對する愛の本質と、或る點でよほどちがつてゐる。しかしながら「愛」の抽象的な概念からは、ひとしく二つのものが同一の本質に屬するだらう。「愛がもし一つであるならば」と、我々の推理の前提が言ふ。「前者の愛を知らないものは、必然的に後者の愛も知り得ない。」(この論理は、支那の孟子によつて實際に使用された。)それからして、動物の愛するといふことが、社會的にも一の美德として考へられ、かつと基督教の精神に適ふやうに思はれてきた。

かく誤つた推理のためにも、我々の道德的情操が發育し、文化が向上してくるのである。

文章がちがふ故に

だれでも外國の思想を譯するときは、それを自分の國の、その當時の文章に書き換えてしまふ。そこで明治開國の始に於ては、西洋の立憲政體や、民法や、法律や、權利義務の思想やが、時代の文章である漢文脈に書き換えられた。たとへば次のやうに。「國法ノ命ズル所、アニ只血税ノミト言ハンヤ。……然リ而シテ、唯々トシテ之レニ從ハザルベケンヤ。

それからして、あの歐羅巴風の政體や社會制度が、本質に於て漢學臭い——と言ふよりも、實は儒教臭い——ものになつてしまつた。當時の書生輩は、一方に佛蘭西の法律を論じながら、一方では支那詩の詩を朗吟し、支那人の理想とする、東洋的豪傑の性情を模倣して居た。この後の感情から、前の思想が論じられ、後の文章から、前の概念が譯出された。さうしてルツソオの民約論が翻譯され、あの過激な自由民權論までが稱へられた。しかしそれが、全く支那壯士的なる慷慨悲憤の情熱と、さうした情調の言語とによつて。

かうした過去の日本は、一の奇妙な觀物（みもの）であつた。西洋の新思想が輸入される所には、いつでも支那の最も古い感情が出しやばつてゐた。歐風思想と支那趣味とは、一の文章の中に融合して、互に分離できないものであつた。されば、あの當時に於て、あのハイカラの立憲政體が、その根本精神にまで、支那の古典思想たる家族主義や、儒教の忠孝思想やを取り入れ、それでもつて國體を固めたことは、當時としての當然事であり、何の不調和でもなく、矛盾でもなかつた。すくなくとも當時の人々は、奇異の感じを抱かなかつた。

今日にしてみれば、しかしながら、我々の文章がちがふ故に。

保護色としての變貌

保護色としても、人はその國土の色になじまねばならない。青草の上の蛙のやうに。

しかしながら、僞態は尚最も有效である。それによつて蜘蛛が、彼の餌食である所の蟻と誤まれる。

民衆の正義とは

民衆の正義とは、富豪や、資産家や、貴族やに對して、利己的なさもしい嫉妬を感ずることである。——いかに？嫉妬ですらが、尚「正義」であるか？

忍從

多數の、粗野で荒々しき人々にまで、忍ぶこと——侮辱や、我慢できない仕打ちなどに對して——が教へられ、それの忍耐が賞頌されてきた。所で今や、ずつと神經質になり、功利的になつてきた人たちには、反對の場合が、決して忍ばないことが、よく教育されねばならなかつた。

忍從は、氣質の荒々しき野性に屬する、過去の殺伐時代の、もしくは粗野な者どもへの、一の古風な教訓である。

戰爭に對する二樣の見解

復讐や、正義やの純な感情が、民衆を戰爭に驅り立てる。丁度我々の個人間で、侮辱への決闘を意志する如く、そのやうに民衆は、彼等の敵國を人格視し、戰爭を倫理化してゐるのである。

一方で、戦争の主動者たる者ども――官僚や、政府や、軍閥や、資本家や――の観念は、ずつとちがつたものに属してゐる。彼等にとつて、戦争は全く打算的に決行される。たとへば領土の野心から、金融上の關係から、人口移殖の必要から、もしくは内亂や危險思想の轉換から、政府當局の都合と虚榮心から、その他のさまざまな事情による利益と損失の合算が、彼等の「戦争への意志」を決定する。そして戦争は、かく功利的打算による投機の外、彼等にまで、何の倫理的意義を有してゐない。正義とか？復讐とか？もとよりこの種の感傷的な言語は、ただ素朴な民衆にだけ、民衆を煽動する目的にだけ、太鼓によつてやかましく宣傳される。

それ故にまた敵國は、彼等戦争の指導者にまで、何ら人格的のものでなく、賭博商法における對手の張り方にすぎないのだ。我々の張り手が、いま互に爭ふものは、ゲーム盤のかけひきであつて、對手の人間そのものに關係しない。もとより彼等は、互に決鬪すべき理由を知らない。況んや憎惡の念もなく憐憫の意志もない。所詮互の敵國は、戦争の主動者にまで、一の運だめしのカードにすぎないだらう。そのやり方で、ペテンと奸策を弄することでは、兩方共に拔目がなく、もちろんの話であるが。

されば戦争の終つた後までも、民衆の間には、尚久しくあの愚劣な興奮――敵愾心を指すのである――の燐火が燃えてゐるのに、一方では、それの煽動者等が、全でケロリとしてしまつてゐる。丁度、ゲームを終つた同志のやうに、彼等は互に笑顔をつくり、次の新しき打算のために、いそいそとして敵に近づき、心底からの親睦を始めるのである。それによつて民衆が、いつでも馬鹿面をし、アツケにとられてしまふ。

宗教の本質

乞食共の、最も多く群がつてゐる場所は、通例寺院の入口である。げに彼等のために、これ以上好適の場所はないであろう。そこに集る人々は、彌陀や如來を拜むところの、信心深く慈愛に富んだものたちである。とりわけ信仰ある婦人たち——彼等は憐憫から心を動かれ易い——は、乞食共にとつての最上の得意でなければならぬ。

かくの如く、果して幾人の人が考へるだろう。全くの道徳的感情——慈悲や憐れみ——から、眞にいくらの錢が投げられるだらう？おそらくは百に對する一もないのだ。多くの慈善者の心をひいたものは、彼等の醜穢なる肉、何かの凶兆でもあるやうな、怪異にして不具な肢體なのだ。そして此等の參詣家らは、言ふまでもなく迷信家である。彼等は本能的、超理性的に、佛罰や鬼神や、その他何物とも知れないものの祟りを恐れてゐる。

所で狡猾な乞食たちは、一方にしつつこく憫みを乞ひながら、一方に例の惡魔を突き出し、それでもつて人の神經に印象をあたへやうと勉めてゐる。それによつて人々——特に若い婦人など——が、恐怖と嫌惡と、そしてごく僅かばかりの憐憫との交錯した、ある特殊な氣分を味はされる。それの強迫觀念から、ほどこしが爲されるのである。

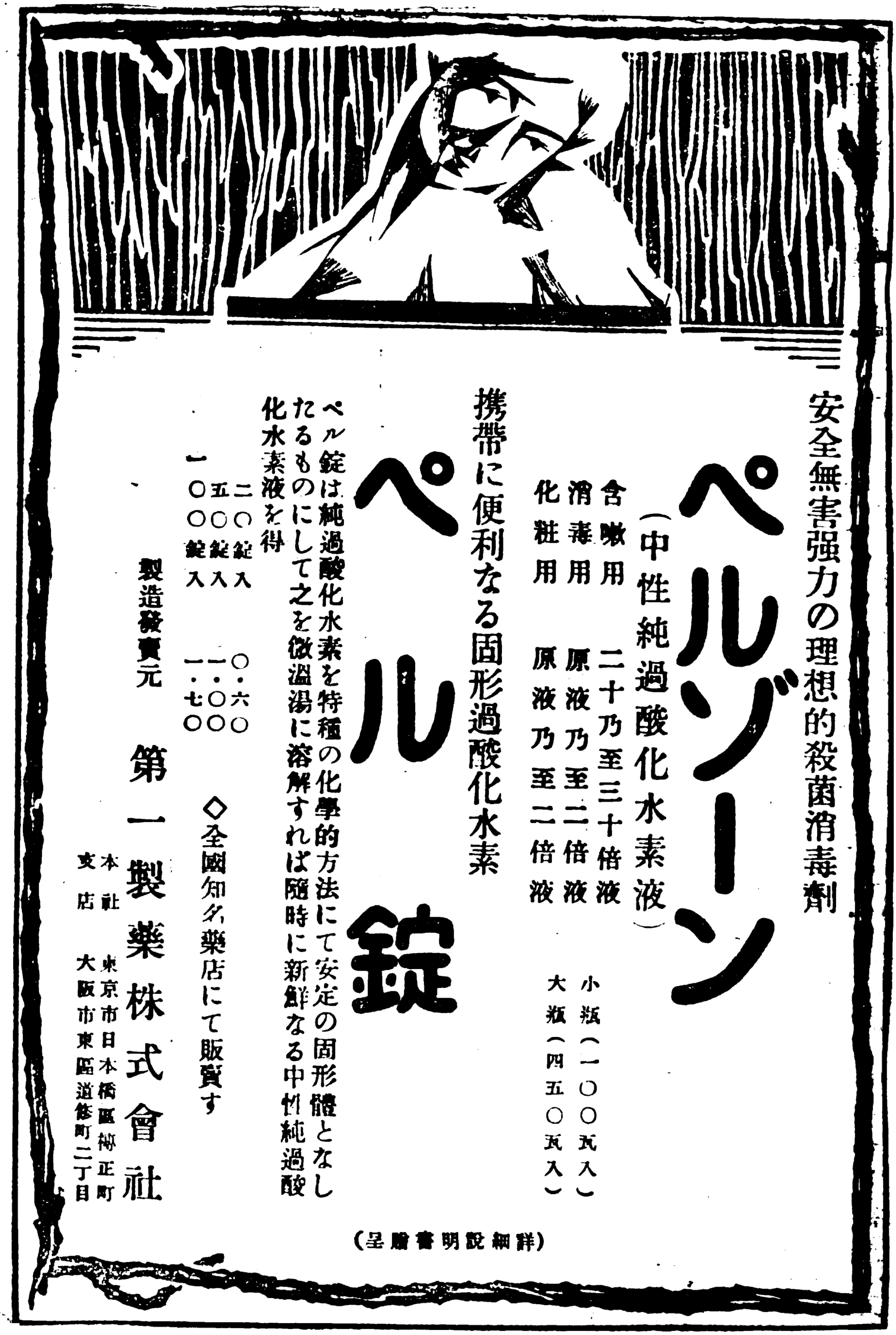
かくの如くして、寺院の乞食等は成功する。より高等な種類の乞食——ごろつきや、押賣りや、育兒院や、廢兵院や、その他の名義による寄附金勸誘者——が、また同樣の手段で成功する。即ち一方で、善人の道德的感傷性を刺激しながら、一方の眼で人を厭がらせ、ある種の復讐を暗示し、そして氣の弱い人たちへの、理由なき恐怖心を刺喚する。同じやうに、より一層高等で、一層深酷な手段が、ある種の乞食どもによつて考へられた。僧侶と、そして宗教の本質がそれである。

不死の自殺

自殺者にあつては、自分を殺すものが、殺さるべき自分に對して、常に觀念上で相對してくる。かく私が私を殺す、自殺するといふことは、私の「表象された自我」に對し、それを「表象する自我」即ち別の私が、他から他から手を下して處決するのである。この後の自我は、いかにしても觀念上に把持され得ない。しかしながら何びとも、この自我の意志なしには、自殺が決意されない故に、自殺者の心理の影には、ふしぎな信仰が推斷される。曰く、私は私を抹殺するしかしながらこの處分するもの——私そのもの——は、死後に於ても自由であり、不滅のものとして實在すると。

所で、自殺の重なる原因は、病氣や、失意や、絶望やであり、望ましからぬ運命が、自己の生存を決定すべく、宣告の避けがたく強制されてることとの自覺にある。それによつて人々は、意志が全く無力であり、自分の欲しないことが、意志に反對して起つてくるのを豫感する。「むしろさうであるならば」と、我々の自由を愛する精神が言ふ。「私の自由意志でもつて、私自身を處分する。」と。それ故に自殺者は、最後の時までも、自分が自分の主人であり、何物の敵——人間であらうとも、社會であらうとも、呪ふべき境遇であらうとも——が、あへて自分を束縛し得なかつたことに浮誇を感じ、その上に自由が永遠の實在たることを、行爲によつて確證しやうと意識する。

されば最も熾烈に自由を愛し、死よりも強く奴隷を憎んだもの、即ち昔の武士道では、自殺が最高の美德と考へられた。反對に意志の自由が否定され、天命的への絶對的服從を強ゐられる所では、自殺が神への叛逆的決意と考へられた耶蘇教と佛教と、その他の宗教がそれであり、就中、加特力教がさうであつた。「自殺の靈魂は不死である。但し地獄に於て。」と、それの教義が宣告した。


安全無害強力の理想的殺菌消毒劑
ペルゾーン
（中性純過酸化水素液）
含嗽用 二十乃至三十倍液
消毒用 原液乃至二倍液
化粧用 原液乃至二倍液
小瓶（一〇〇瓦入）
大瓶（四五〇瓦入）
携帶に便利なる固形過酸化水素
ペル錠
ペル錠は純過酸化水素を特種の化學的方法にて安定の固形體となしたるものにして之を微溫湯に溶解すれば隨時に新鮮なる中性純過酸化水素液を得
二〇錠入 〇・六〇
五〇錠入 一・〇〇
一〇〇錠入 一・七〇
◇全國知名藥店にて販賣す
製造發賣元 第一製藥株式會社
本社 東京市日本橋區榑正町
支店 大阪市東區道修町二丁目
（詳細説明書贈呈）

P-2

改造社出版圖書

著者	書名	定價	送料
芥川龍之介著	沙羅の花	二・八〇	・二〇
菊池寛著	戀愛病患者	一・五〇	・一八
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	一・九〇	・二〇
吉田絃二郎著	運命の秋	二・〇〇	・二〇
吉田絃二郎著	ダビデと子たち	一・八〇	・二〇
吉田絃二郎著	芭蕉	一・六〇	・一八
正宗白鳥著	戲曲 ある心の影	一・六〇	・一八
泉鏡花著	番町夜講	二・〇〇	・二〇
谷崎潤一郎著	戲曲 愛なき人々	二・〇〇	・二〇
谷崎潤一郎著	戲曲 愛すればこそ	一・六〇	・一八
谷崎潤一郎著	新選 谷崎潤一郎集	五・五〇	・三〇
植田壽藏著	藝術哲學	二・七〇	・二四
厨川白村著	苦悶の象徵	一・八〇	・二〇
倉田百三著	超克	二・二〇	・二〇
吉江喬松著	近代文明と藝術	二・〇〇	・二〇
柳澤健著	ジャン・ジョレス	一・五〇	・一八
阿部次郎著	學藝論鈔	二・二〇	・二〇
服部謙造著	ディルタイの哲學	一・八〇	・二〇
朝永三十郎著	カントの平和論	一・五〇	・一八
松本亦太郎著	心理學講話	四・二〇	・二四
桑木嚴翼著	物理學と認識	一・五〇	・一八
河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	二・〇〇	・二〇
宮本英雄著	婚姻の基調	一・五〇	・一八
佛人カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	一・三〇	・一六

福田徳三著	社會運動と勞銀制度	定價二・五〇	送料・二〇
福田徳三著	社會政策と階級鬪爭	定價三・〇〇	送料・二四
福田徳三著	ボルシェヴヰズム研究	定價二・九〇	送料・二二
小泉信三著	價値論と社會主義	定價三・〇〇	送料・二四
桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	定價三・五〇	送料・二四
本庄榮治郎著	日本社會史	定價二・五〇	送料・二四
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	定價・三〇	送料・一二
ヨゼフ・ディツゲン著 山川均譯	無產階級の哲學	定價二・五〇	送料・二二
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	定價二・〇〇	送料・二二
ゲー・ジノヴィエフ著 冨士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	定價・九〇	送料・一四
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	定價一・二〇	送料・一六
山川均著	レーニンとトロツキー	定價一・五〇	送料・一八
昇曙夢著	現代露國の思潮及文學	定價四・八〇	送料・三〇

阿部次郎著	北郊雜記	定價一・九〇	送料・一八
若山牧水著	樹木とその葉	定價二・〇〇	送料・二二
中澤臨川著	嵐の前	定價一・五〇	送料・一六
野口米次郎著	先驅者の言葉	定價一・八〇	送料・一六
長谷川如是閑著	犬・猫・人間	定價一・八〇	送料・一六
堺利彦著	野外劇の一幕	定價一・五〇	送料・一六
高濱虚子著	朝の庭	定價一・七〇	送料・一六
大杉榮著	自叙傳	定價二・〇〇	送料・一八
武者小路實篤著	筆の向くまゝ	定價一・一〇	送料・一六
河東碧梧桐著	二重生活	定價一・二〇	送料・一六
北村壽夫著	幻の部屋	定價一・六〇	送料・一八

發行所

東京芝區
愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番
電話高輪四九九三番

川村貞四郎著 ―増刷と製本に忙殺せる―

ムッソリニとファシスト運動

實力多集運動を以て伊太利全土を統一するの榮冠を贏ち得たるムッソリニは其の信望將に領土の内外を風靡しファシスト運動の威力と共に今や神人として畏敬せらる。曩に著者川村學士はムッソリニを其の住居に訪ね而してファシスト事務所に留まり、時に或は紅塵に醉ひ羅馬及びナポリにファシスト運動を瞥見し各地に其の成跡を歩獵して眞摯を獲得し益々其の興味津々奮然意を決してムッソリニの建設的思想及びファシスト運動を耕稿せるもの本書なり――著者の達觀と其の批判は獨特の才筆により最もか辯に而かも祕密の奥底を公開せらる。

四六判上製函入 ポプリン裝幀
定價壹圓八拾錢（送料十六錢）

改訂五版

治安警察法論

内務事務官 法學士 川村貞四郎・内務省警保局 有光金兵衛共著

菊判上質紙上製 ポプリン裝 三〇〇頁
定價金貳圓五拾錢（送料十八錢）

思想の新潮今や多岐にして民衆動搖彌々危機に在り從て之が取締上該法の運用の適否は直に以て國家の消長に至大の關係を有す益々攷究の要目急なり。而して其法たるや一部の改正を行へりと雖尚論難の焦點に在り故に進運に倶える最も適切なる解説の目的を以て實際的見地より其の蘊蓄を披瀝せり。殊に集會結社、多集運動の意義に違反行爲に説明の細を極む。

高峰博著
勞働心理
定價壹圓八十錢（送料十二錢）

東京高等師範學校教授 範士 高野佐三郎著
劍道
定價七圓（送料廿七錢）

發行所 東京市小石川區水道町 振替東京六四四九番 良書普及會 電話小石川 一〇三五 六四三四



赤い屋根

谷崎潤一郎

1

中山手三丁目で電車を降りて、三の宮の方へ一直線に下つてゐるアスファルトの坂道を歩き出すと、繭子の姿勢には自ら一種の「形」がつき、足はひとりでに弾んで行つた。

今日はあんまりお天氣が好し、それにちやうどお午迄には指環が出來てゐる筈だし、……と、さう思つたら急にその指環が見たくなつて、ふらりと神戸へやつて來たのだが、かう云ふ時に彼女は廻り道をしてでも、此の坂道をスタスタ歩くのが好きなのである。一帶に街が綺麗で、大概な路面はアスファルトで固めてある神戸の中でも、土地の人がトーア・ロードと呼んでゐる此の坂は一番氣持ちがいい。後ろの方には新緑の衣を着けたトーア・ホテルの丘があつて、そこから眞つ直ぐに、恰も白堊で描いたやうにカッキリした道が、海岸へ向つて降りてゐる。海岸の方には、

晴れた五月の青空の下に、明海ビルディングだの、オリエンタル・ホテルだのの高い建物が、角砂糖を重ねた如く遠景の中に際立つてゐる。繭子は此處を歩いてゐると、嘗て一年ばかりを過した上海の街を想ひ浮かべて、今でも彼處に住んでゐるやうな氣がするのである。

運動靴のゴムの踵で平らな地面を音もなく蹈みしめ、調練をする馬のやうな足取りで、すうッ、すうッと、彼女が坂を降りるに隨ひ、兩側の店舗のガラスの面には　その花やかな黄色い服が折々ひらひらと蝶々のやうに映つて行く。――人造絹絲の、つい此の間自分で編んだワンピースに、同じ手編みの絲のスカーフを顋の下へ一と廻り卷いて、殘りをだらりと後ろへ垂らし、花もリボンも飾つてない、此れも共色の羅紗の帽子を被つた姿は、靴と襪とパテント・レザーの帯を除けば、體中が黄色づくめで、商賣柄に似合はない、あつさりとした好みである。彼女は自分の西班牙風の浅青い皮膚が、此のお粗末な手製の服によく映るのを知つてゐるので、散歩と云ふと時々此れを着て見るのだが、今日は出しなに不精をきめて、コルセットを着けてゐなかつた。上衣の下にはほんの一部分、胴の周りにシュミーズがふわふわしてゐるばかり、歩く拍子に粗い絹絲の編み目を透して、風が素肌に沁みる工合が、裸體でゐるのと同じ輕快な感じであつた。此の服裝で、手には一本の、革紐の附いた籐のケーンを振りながら行く恰好は、西洋娘のタイピストが午の休みに運動に出たと云ふ形で、遠目に見たら間違へる人もあるかも知れない。彼女も實はさう見られたい氣持ちもあつて、此の往來を通る時は帽子を眼深に、鍔の先からやや仰向いた鼻の頭と、佛蘭西製のルージュを塗つた唇だけが目立つやうにした。

「番頭さん、此の間の直しはもう出來てゐる？」

坂の中途の、スワン商會の店へ這入ると、兩手で籐のケーンを持つて、膝頭へぶらんぶらん打ッつけながら、だだッ

兒のやうに體を搖すつた。

「ええと、宮島さんのは、あれはたしか、――」

「――今日のお午迄に間違ひなくと云ふ約束だから、出來てゐなければならない筈だわ。ほら、もう二時過ぎよ。」

キラリと小さな腕時計が手頸に光つて、それが番頭の鼻先へ突き出される。

「は、出來てをる筈でございます、ちよつと調べて參りますから、――」

番頭が奥へ引つ込むと、待ち遠しさうに土間を往つたり來たりして、その間も油斷なく、目欲しい物はないかしらんと云ふ風に、陳列棚の寶石を一つ一つ覗いてゐる。「あ、小僧さん、此れはなアに?」と云ひながら、石を手に取つて眺めたりする。此の、閑人らしいお孃さんは、こんな事より屈託のない、結構な身の上なのであらうか?

直しを頼んだ品と云ふのは、五六日前、此の店の窓に飾つてあるアクアマリンの指環を見つけて、直ぐ買ふことにきめたのだが、金の臺の赤ツぽいのが氣に入らないので、もつと黄色い金にするやうに、云ひつけたのである。彼女はそれを、今着てゐる手編みの服にも、今度誂へたオルガンディーの夏服にも、よく調和する色にしたかつた。あんな赤ツぽい金の色では、第一腕時計の金に比べても不釣合だと、さう思つた。

「あら、番頭さん、此れぢやちつとも直つてゐやアしないぢやないの。」

持つて來られた天鵞絨の函を開けると、彼女は氣むづかしく眉をひそめた。

「へえ、――いえ、――それで直つてをりますんですが――」

「うそよ！　やつぱり赤ツちやけてゐるぢやないの！　ほら、」

と、函から摘まみ出して、その服の傍へ喰つ着けて、

「見て頂戴、此の着物の方がずつと黄色いから。——此れと同じ色にしてくれろツて、此の間あんなに云つといたのに、どしうたのよ、一體、……」

「へえ、成る程、——まだ幾分か赤みがゝつてはをりますが、此のくらゐならそのお召し物に映らないことはございません。」

「駄目駄目、此れぢやア厭よ、こんなものが附けられるもんか！」

かう云ふ場合に、鬮子はいつも妙なヂレンマに陥るのである。色の配合や地質の善惡や、詮議がやかましい一方に、買つたとなるとそれを即座に身に着けたい、その日のうちに皆に見せて歩かなければ氣が濟まない、——そんなセツカチな所もあるので、たとへば服の假り縫ひなどでも、何の彼のと文句は云ひながら、三度も四度も仕立て直しをするやうになると、もう欲しい方が先に立つて、ええ構はない、面倒臭いから我慢しちまへと思つてしまふ。それで結局、商人にも馬鹿にされるし、自分も損をするのであつた。

「ねえ、ちよつと！　どうしてくれるの？　もつと黄色く出來ないのかしら？」

「出來ないことはございません、それではもう一度工場の方へ廻しまして、——」

「ぢやア、いつ迄に直るのよ？　あたし、斯う見えても江戸ッ兒よ、上方の人は氣が長くつて、此れだから厭だわ。」

「えへゝゝゝ、いえ、もう決してそんな事は、——早速お直し致しますから、どうか五六日御辛抱を」

「五六日？」

「へえ、來週の水曜日迄にはいかがでございませう、今度こそ間違ひはございませんが、………」

指環は彼女の手の中にある。それを二三度、手放したくはなささうに掌の上でコロコロと振つて、それから小指へ嵌

めて見て、明るい方へ手の甲を向けた。

「でもどうかしら?、そんなに可笑しくはないかしら?」

「ちつとも可笑しくはございませんよ、それでも此の間の金よりは、ずつと黄色くなつてをります。」

「此の腕時計と比べてどう? 違つてゐるやうに見えやしない?」

それを番頭に聞いたところで仕方がないのだが、自分でどうやら滿足が行くまで執拗く尋ねて、

「おやア、まあいいわ、負けといつて上げるわ。」

と、あまり威張つた後なので極まりが惡さうに彼女は云つた。そして空ツぽの函をポッケットに收めて、一旦小指へ嵌めたものは再び拔かうとはしなかつた。

「左樣なら、――四五日うちに又來るわよ、何か耳環にいい石があつたら取つといて頂戴。」

往來へ出ると、彼女はときどき小指の「黄色」を氣にしながら歩いた。もう懷ろには十圓札が一枚だけしかないのだけれど、どうせ今夜は小田切が來るから、百圓か二百圓は大丈夫貰へる。さうすれば明日は又お金持ちになるのだから、此れから元町を一と廻り廻つて、買ひたい物を見つけて置かうか。レーンクロフォードやレア商會にも、新しい夏物が來てゐるだらう。今年もそろそろ、海水服を買つて置かなければならないんだが、……

三の宮の踏切を越えて、電車通りまで出て來た時、彼女はもう一度、「元町へ行かうかどうしようか」と氣迷ひながら立ち止まつて、腕時計を見た。時間はきつちり三時だつた。小田切の來るのは晩の七時か八時だらうし、今から家へ歸つたところで面白いことがあるのでもない。が、事に依つたら「寺本さん」から返辭が屆いてゐるかも知れない。あの人はいつも直ぐに返辭をくれるのだから、もう今日あたりは、午後の配達で屆く時分だ。四角な、厚い、布目の紙の西

洋封筒。それへ「宮島蘭子樣」と、恰も毛筆で書いたやうに、太く、達者に、シッカリと据わつた男らしい字。……その、濃いインキの、萬年筆の手蹟が、彼女の眼の前にチラチラした。萬年筆を握つてゐるあの人の手が想ひ出された。日に燒けて、赤銅色に染まつた手。ガッシリとした骨組の、五本の指にはキャッチ・ボールのたこの出來た、岩のやうに頑丈な手。蘭子はあの手が好きだつた。あの手にむづと鷲掴みにされ、骨がメリメリ碎けるほど、息の根が止まるほど、ぎゆッと抱きしめて貰へたらどんなに幸福だらうと思つた。いつも大學の制服ばかり着てゐるので、體を見たことはないけれど、きつとあの手と權衡の取れた立派な體格をしてゐやしないか？黑々と胸毛の生えた、彈力に富んだ逞しい胴。拳鬪家のそれのやうに肉の盛り上つたたつぷりした肩。强い腕と深い呼吸。……凡べてが健康そのもののやうな、疲れを知らない若々しさと純潔とで、張り切つてゐやしないか？……

「さうだ、今日はお金がないんだし、うちへ歸つてあの人の手紙を見た方がいい。」

元町の方へ二た足三足行きかけてから、矢つ張りさうと思ひ直して、彼女はふいと引つ返した。レーンクロフオードの前を通ると、それでもちよつと立ち止まつて飾り窓を覗いたが、やがて向う側のユーハイムへ寄り、五分ほど椅子に腰かけて、紅茶を飲みながら西洋菓子を三つ四つ喰べてから、上筒井行きの電車に乘つた。

2

蘭子の住んでゐる家は、大阪と神戸の間、阪急電車の西の宮で乘り換へて、あれから寶塚へ行く線の、とある小さな停車場の近くにあつた。電車から見ると、まるで海岸の砂濱のやうな明るい白ッちやけた地面に、可愛い小松の林が續いて、幅は廣いが水はそんなに澤山はない一とすぢの川が、その間をちよろ〳〵と流れてゐる。何でも陰氣なことが嫌

ひで、派手に陽氣にと暮らしたがる彼女は、始めて家を捜しに來た時、此處の景色が氣に入つてしまつた。東京の郊外の黒つぽい土を見馴れた眼には、洗ひ出したやうな綺麗な土の色が珍しかつた。白いのは地面ばかりでなく、川床の沙や、護岸の石崖も白く、ところどころにチラホラ建つてゐる文化住宅の壁も白い。その單調を破るものは、それらの住宅の屋根瓦の「赤」と、林の松の幹の「赤」と、濃い、新鮮な葉の「綠」とがあるばかり。見渡したところ、、此の明快な三つの原色で成り立つてゐるランドスケープは、油繪の具がまだ乾かないでゐるかのやうに生々しく、初夏の晴れた日光の下では、强い照り返しが瞳に痛いくらゐだつた。

或る土地會社が「衆香園文化村」と云ふ名をつけて、此處を經營し始めたのは一年ばかり前のことだが、彼女が移つて來てからでも、彼方の丘や此方の川緣にもう五六軒も家が殖えた。彼女の借りたのは川を南に控へた場所の、疎らな松に圍まれた一軒で、庭から直ぐに石崖になり、水はその下を流れてゐた。外から見れば西洋館で、中へ這入れば日本座敷の家の作りは、天井が低く、間仕切りが多くて案外風通しが惡く、「こんなに松が澤山あつて流れが近いから、夏は涼しうございます」と云ふ土地會社の口上とは勝手が違ひ、聊かそれに乘せられた形もあつたけれど、這入りたてには塗つたばかりの壁の匂ひがしてゐたくらゐ、疊から何から眞新しいのが取り柄だつた。

二階が八疊に六疊の二た間、その外側に打つ通しの緣側があり、階下は湯殿と台所の外に、玄關を加へて三部屋あつて、家族は女主人の彌子と、從妹のお美代と、下女のお元の三人だつたが、時々小田切がやつて來るし、此の頃は又現像技師の恩地が泊まり込んでゐるし、それでなくても彼女と同じ映畫會社に勤めてゐる男とか、キネマ關係の連中とか、ダンス友達とか、誰かしら男ッ氣のないことはなかつた。

「あゝ、暑かつた！　今日は滿着で行つたんだけれど、歩いたら汗を搔いちやつて、――」

蘭子は四時頃に戻つて來ると、ぴーんと三和土へ罅隙が入りさうな音をさせて、玄關の土間へケーンを投げ捨て、埃だらけな靴のビジョウを外しながら云つた。

「お歸んなさいまし、」

と、殆んど聞き取れない程小聲に、口の內で云つて、そこへ出て來たのはお美代である。蘭子より五つ歳下の、今年十八になるのだが、彼女は生れつきの傴僂で、從妹とは云へ何處も蘭子に似たところはなく、顏も體も十四五才で發育が止まつてしまつたやうに、ひねこびてゐた。一昨年の震災で本所の家を燒かれてから、暫く東京で苦勞をした後、今では此處へ引き取られて「姉さん」の厄介になつてゐるものゝ、默つて、むッつりしてゐるだけに神經質で、癇性で、遣りッ放しな蘭子の身の周りの世話を引き受け、普通の小間使の三人前も働いてゐる、蘭子に取つて此れ程忠實な、重寶な女はないのだつた。「あの兒は可哀さうだから、面倒を見ておやり」と、小田切もさう云つて、心づけなどをやつたものだが、そんなお金は一文も使はず、お給金と一緒に取つて置くのを、「美代ちやん、お前十圓ばかり持つてないかい？」と、好い加減溜つた時分になると、却つて蘭子に借りられてしまふ。それでも決して厭な顏はしないで、「いいえ、いつでもいいんですから」と、催促一つするのではなかつた。

「神戸へ行つたら、白いパンツを穿いてゐる人が大分あつたわ。あたしも今日はフランネルを着るから出しといておくれ。」

脫いだ方の片足で玄關へ上つて、片一方の足の先から、ぽんと靴を裏返しに脫ぎ落すと、お美代が「はあ」と云ひながら、直ぐ土間へ降りて、それを拾つて、靴型を塡める。――その間に蘭子は二階へ上つて行つた。

有りつたけの窓が涼しく明け放されてはあつたが、戶外の明るみから這入つたせゐか、部屋の中は、しつとりとし

た、上せた頭を鎭靜させるほの暗さで、川からの反射が、マジョリカの瓶や、本箱のガラスや、机の板や、そのほの暗い中にある物に、しーんと湛へられた水のやうな底光りを與へてゐる。松林の奥で小鳥がちいちい啼きしきるのと流れの音が微かにする外は、何も聞えない。まだ半年とは立たない住居ではあるけれど、さすがに「我が家へ戻つた」と云ふ落ち着いた氣分を、彼女は感じた。そしていつでも、郵便物が屆いたら其の上に載せてある筈の、机の方へ歩み寄つた。

「宮島繭子様」――あの萬年筆の手蹟が、直ぐ眼に這入つた。破るのに骨が折れるほど丈夫な封筒を、急いで切つて、立ちながら讀んだ。――

唯今お手紙を拜見しました、日曜の午後に遊びに來いとの仰せ、誠に有難く存じます。僕もお伺ひしたいのですが、生憎目下北海道から父と妹が京都見物に來てゐますので、折角の御好意を無にしなければならないことを殘念に思ひます。いづれ國の者が歸つてから、又改めて都合のいい日をお打ち合はせした上で、ゆつくりお邪魔に上りませう、その時は大いに御馳走になります、勝手を云つて濟みませんが、何卒惡くお思ひにならないやうにお願ひいたします。

先日京極で「南京情話」をやつてゐました。僕は東京で一度見たことがあるのですが、あの支那服を着て居られるあなたが好きで、又見に行きました。僕はあの寫眞の中のあなたのお顔が、一番――と云つては惡いでせうが、非常に綺麗だと思ひます。あの支那服は實に美しい。寫眞そのものはあまり感心出來ませんが。

では左樣なら。最近にお目に懸れることを重ねて希望いたします。翠香園と云ふ所は大變にいい所のやうにお話で

想像して居ますが、あなたのお宅はどんな所にあるのですか、それを見せて頂ければ光榮に存じます。

「美代ちゃん！」

一と通り眼を走らしてしまふと、再びそれを机の上へ置きッ放しにして、梯子段の下へ甲高く怒鳴つた。

「美代ちゃん、フランネルを出してくれたかい？ それからあの、體を拭くから湯殿へ水を取つて頂戴。」

裸體になつて、白タオルの敷いてある流しへ降りて、冷めたいタオルで體中を擦りながら、彼女は今の手紙の文句を頭の中で繰り返した。……「あなたのお宅はどんな所にあるのですか、それを見せて頂ければ光榮に存じます。」……あの人の手紙はいつもこんなだ、ちやうどあの人の態度の通りだ、遠慮がちで、うぢうぢしてゐて、ちつともハッキリしてくれない。「僕はあの寫眞の中のあなたのお顔が、……非常に綺麗だと思ひます。あの支那服は實に美しい。寫眞そのものはあまり感心出來ませんが。」……それぢやアあたしそのものはどうなんだらう？ 寫眞の中のあたしは好きだが、實際のあたしには興味がないと云ふんだらうか？ 支那服なんぞどうだつていゝ、お世辭や皮肉はあの人の柄にないんだから、もつとスパスパ物を云つたらよささうなものだのに。國からお父さんや妹さんが來てゐると云ふなら仕方がないが、それも何だかアテになつたものぢやありやしない。やつぱりあたしを警戒してゐるんぢやないか知らん？……

顏のお白粉もきれいさつぱりと洗ひ落して、せいせいとして湯殿から上ると、お美代がフランネルの着換へを持つて待つてゐた。繭子に比べて五寸も身の丈の低い彼女は、乾いたタオルを後ろからふわりと懸けてやるのに、せい伸びをした。そして、腰骨の左右にえくぼの這入つた、肉づきのいい背中の水氣を、もう一遍よく拭き取つてやつた。

大きなコップに波々と一杯、汲み立ての水を持つて來させて、それを一と息に飲み乾してから、水浴の後のほとぼり

を感じながら、繭子は二階の縁側の、籐の長椅子に横になつた。それから再び、さつきの手紙を膝の上に展げて、ゆつくりと讀み直した。

此の手紙の主、――寺本と云ふのは、京都の大學の法科に通つてゐる學生なのだが、彼女が彼を知つたのはそんなに古いことではない。地震の後で、京都へやつて來て、岡崎の方に住んでゐた時分、隣りに學生たちの泊まつてゐる下宿屋があつた、――と云ふよりは、さう云ふ若い學生たちを友達にすることの好きな彼女は、その下宿屋があるために、隣りへ住む氣になつたと云つてもいいのであるが、間もなく彼女はどんなキツカケで近づきになつたか、――尤もそんなことにかけては、善く云へばお樣子振らない、惡く云へばづうづうしいたちだつたから、――彼等の下宿へ押し掛けて行つたり、此方へお茶に呼んだりした。學生たちも此のお轉婆な、やんちやな女優を面白がつて歡迎した。黑谷にあつた假撮影所を案內して貰つたり、ロケーションに喰つ着いて行つたりした者もあつた。その頃寺本は下加茂の方に宿があつて、隣りの下宿へ時々遊びにやつて來ては、一座に加はるだけであつた。いつでも斯う、みんなが冗談を云ひ合つてゐるのを「何が可笑しい」と云ふやうな顏つきで、言葉少なに、默つて聞いてゐる、――氣取り屋でもなし、さればと云つてはにかみ屋でもないやうだけれど、何處か氣ぶッせな所のある此の青年を、繭子は始めは、別に好きでも嫌ひでもなかつた。が、或る時彼女が「乘馬の稽古をしたい」と云ふと、「僕でよければ教へて上げませう」と、寺本が云つた。「北海道にゐた時分乘りつけてゐますから、馬なら多少自信があります。」さう云つて彼は、彼女を圓山や壬生の馬場へ連れて行つた。繭子は彼から馬の稽古をして貰つてゐるうちに、此の青年は自分に惚れてゐるんだなと、いつからともなく感づいてゐた。

少しコツケトリーを示してやれば、若い男は大概喜んで自分の用をしてくれるもの、自分のために有らゆる奉仕を

しまないものと、さうきめてゐる繭子に取つては、別段寺本の親切が特別に身に沁みた譯ではないが、それでも向うが惚れてゐるなら、ちよいと浮氣をして見てもいいと云ふくらゐな氣持ちはあつた。それに相手が大學生と云ふ點に好奇心がないでもなかつた。大學の學生とは、知り合ひは澤山あるけれど、まだそんな仲になつた者は一人もない。さう思つて見ると、だんだん寺本の制服姿に心を惹かれるやうになつた。兩手で支へて、馬へ乘せたり降ろしたりしてくれる時の、木で叩いたらカンと鳴りさうな腕の感じ、金ボタンを撥ね飛ばしさうに張つてゐる胸、クリクリとした五分刈りの圓い頭、メルトンのヅボンの下にそれとハッキリ見分けられる脛。せいはかつぷくのいい割りに低く、いくらか喜劇の「デブ公」と云ふ形に、横に太つてゐる方で、脚もOバインに曲つてゐて、――此のOバインと云ふ獨逸語は、寺本が使つたのである。「繭子さん、あなたの脚は日本人には珍しくX型をしてゐますね、さう云ふのをXバイン、僕のやうにOの字なりに開いてゐるのをOバインと云ふのですよ」と、彼は敎へた。――孰方かと云へば不恰好な體つきだつたが、繭子はその體へ、一生懸命に駈けて來てドーンと打つかツて見たい氣がした。畸形の男によく惚れたがる、お面喰ひの彼女は、整つた齒列とぱつちりとした眼ばかりが白い、兵卒のやうな此の男の顏の中に、何か今迄に經驗しない、生き生きとした、淸新なもののあるのを覺えた。しかし寺本はどう云ふ積りか、彼女がたびたびさう云ふ機會を作つてやつても、寧ろそれを避けるやうにした。

或る時、二人で加茂の堤防の上を走らせながら、彼女は云つた。

「寺本さん、一度あたしを遠乘りに連れて行つて下さらない?」

「ええ、よござんす、何處へ行きます?」

「何處か遠くへ、――――一と晩ぐらゐ泊まる積りで、――――」

「はは、そりやア駄目だ、明くる日あなたが足疲れちまふ。」

「足疲れたら、汽車で歸ればよくはなくつて？」

「なあに、日歸りで充分ですよ、可なり遠くへ行かれますよ。」

繭子は不思議に、此の男には氣が置かれた。いつ迄立つても、先が丁寧な言葉遣ひを改めないので、此方もガサツに出る譯に行かない。きつと此の人は憶病なんだ、惚れてゐながらさうなることが恐ろしいんだ、だが恐ろしいと云つたところで、いつかはさうなる、あたしが今にさうして見せる、二人で一度夜を過すやうな折さへあれば、……彼女はコッソリ、さう思ふことに意地の惡い樂しみを感じたが、そのうちに京都を引き拂つて、梨香園に移つてしまふと、又新しい取り卷きが出來、手近な所に相手が見つかり、いつもの氣紛れな性分で、忘れるともなく寺本のことは忘れてゐた。

その寺本に、彼女がふいと會つて見る氣になつたのは、ほんの一と月ばかり前、出張撮影に京都へ行つた時だつた。自分一人だけ早く體が空いてしまつて、ぶらぶら京極を歩きながら、「ああ、さうだつた、こんな時に寺本さんでも呼んでみようか」とさう思つて、カフエ・ローヤルから電話を懸けると、寺本は直ぐ飛んで來た。四月の中旬の、生暖い晩で、寺本の揉み上げからは一とすぢの汗が、その赤黑い頰へかけて濡れてゐた。「まあ、どうなすつて？　大變な汗よ」と云ふと、「いや、お待たせしては惡いと思つて、急いでやつて來たもんですから」と、彼は云つた。酒はあんまりいけないと云ふので、やつとビールを一杯飲んだだけだつた。

「ぢやア、活動でも見に行きませうか？」

「それより圓山を散歩しませんか、夜櫻を見に。」

さう寺本が發議した、そして、二人は京極から圓山まで步いた。

「どうですか、此の頃馬は？」

祇園の石段を上つて、暗い所へ這入つた時に、寺本が云つた。

「ああ、さうさう、此處で始めて寺本さんに敎へて頂いたんでしたつけね。此の頃ちつともやらないのよ、馬なんか近所にないんですもの。」

寺本は默つてゐた。

彼女は故意に、ときどき寺本の手の甲に觸れた。

「寺本さん、あなたちつとも手紙を寄越して下さらないのね、番地をちやんと敎へて置いて上げたのに。――」

「あんまり手紙を上げたりするのも惡いかと思つて、控へてゐました。」

「なアぜ？　どうして惡いの？」

「どうしてと云ふことはないんですが、………ただ遠慮してゐたんですが、………」

「だけども今日は嬉しかつたわ、暫くお目に懸らなかつたから、電話をかけても來て下さるかどうかと思つてゐたんですけれど。」

「僕はあなたには、寫眞でお目に懸つてゐました、京極へ來たのは缺かさず見に行きましたから。」

「あたしの寫眞なんか詰まらないわ、ロクなものはありはしないわ。」

「寫眞の方では、僕は古くから繭子さんを知つてゐますよ、三四年も前から見てゐました。」

こんなことを寺本が打ち明けるのは始めてだつた。

「さうよ？　だつてあたしの古い寫眞は、澤山はないのよ、五六本ぐらゐしか。……」
「でも見てゐますよ、そのうちの二三本ぐらゐは。」
「あなたは寫眞を見ていらしつても、あたしの方は會へないから駄目だわ。寺本さんが活動俳優になつて下さればいいけれど。」
「それぢやア一つ、日活へでも這入りますかね、活劇の時に馬へでも乘る役になつて。」
「だけどあたし、寫眞ぢやアいや、やつぱり本人に會はなければ。……」
歸りに七條まで送つて來たので、「汽車の中が退屈だから大阪まで送つて頂戴」と云ふと、寺本は時間を氣にしながら、それでも大阪へ附いて來た。直ぐに引つ返すと云ふのを、無理にタキシーへ乘り込ませて、長堀カフエで暫くしやべつたが、その間も彼は時計ばかり見てゐた。
「繭子さん、あなたの方は電車は何時迄あるんです？　遲くなりやしませんか。」
「あたしの方は構はないわ、歸れなかつたらホテルへ行つてもいゝんですから。……」
「けれども僕は歸らなくちや。……」
「寺本さんは、何處か大阪にお泊まりになる所はないの？」
「ええ、ありません、それに、孰方しても歸らなくちや。……」
さう云つて彼は、キッチリ十一時半まで附き合つて、京阪電車の最終で歸つた。
制服を着た寺本の姿が、それから折々、何かにつけて思ひ出されて、どうかした拍子に一途に逢ひたくなることがあつた。その後彼女は、四月の末に豫め通知して置いて、又一度京都を訪ねた。二時に停車場で落ち合つて、嵯峨から嵐

山へ行つたが、その日の寺本は今迄になく快活だつた。彼女がそつと、八重櫻の枝を折らうとすると、「こらッ、泥坊！」と云つて威嚇したりした。かと思ふと、忽ちその木へ攀ぢ登つて、見事な枝を折つてくれた。渡月橋からボートで嵯峨の溫泉へ行き、そこで喰べた晩飯も寺本の奢りだつた。「あたし今夜は此の溫泉へ泊まりたいわ。」――その時もその言葉が、つい口元まで出てゐたけれど、なぜか彼女には云ひきれなかつた。それを云ふには、あまり寺本の態度が明るく、晴れ晴れとしてゐた。「ねえ寺本さん、翠香園へ一度遊びに來て下さらない？ 今度はあたしが御馳走してよ」と、彼女は云つたが、寺本は曖昧に「ええ、有りがと」と答へただけだつた。「ではいつ？」と聞いても、「ここンところは忙しいから」とか、「そのうちに是非」とか、何氣なく云つて話を外らした。

此れはと思ふ男があれば逃がしたことはなかつたのに、――ちやうど寶石や着物と同じに、欲しいとなれば自分の物にして見せたのに、寺本に限つてさう行かないのはなぜなんだらう？ 全體あたしは、そんなに此の人に惚れたんだらうか？ 考へて見るとモドカシクもあるが、馬鹿らしくもある。だが此の返辭はどう云ふ積りなのか知らん？ 今度の日曜に來てくれゝば、小田切はゐないし、恩地は夜業で遲くなるんだし、あたしは一日體が空いてゐる筈だし、すつかり手順がついてゐたのに、またあの人は逃げちまつた。一昨日出した手紙の書き方が惡かつたかしら？「御都合が出來たら成るべく早く、二時頃迄にいらしつて下さい。女中が二人居るだけで、氣がねな者は誰も居りませんから」と、さう書いてやつた、その「氣がねな者は誰も居りませんから」が、却つてイケナカツたかしら？ 來てはあぶないと思つたのかしら？ けれどあの人はマサカ譃をつくんぢやあるまい、國のお父さんが來てゐると云ふのは、やつぱり本當なんだらう。いづれ改めて伺ふと云ふんだから、結局來ることは來る氣だらう。まアまア急ぐことはないんだ、そのうちに來てさへくれればいいんだ、來ないと云つても、今度は「いや」とは云はせないから、…………

繭子がそんなことを獨りで思ひつゞけてゐる時、玄關に人のけはひがして、恩地が歸つて來たらしく、

「美ッちやん、姉さんは二階かい？」

と云ふ聲が聞えた。それから茶の間で洋服を脫ぎ、此れも湯殿へ行つたやうな様子だつたが、やがて、

「ああ暑い日だ、此の前の川でボチヤボチヤやりてえ。」

と、猿股一つの素ツ裸で、セルの單衣を肩に懸けながら、梯子段を上つて來た。

3

「どう？ 三ちやん、此の指環を見ておくれ。……」

足音を聞くと、手紙を帯の間に隱して、繭子は恩地の鼻先へ指を示した。

「ふーん、その指環かい？ その石が、ア、ア、アク、アク、……さあいけねえ、何てつたつけな。」

「アクアマリン、……今神戸から取つて來たのよ。石はいいけれど、金の色が赤過ぎやしない？」

「赤かあねえ、それでちやうどいい。高えもんかい？」

「あてて御覽。」

「五十圓ぐらゐか？」

「もつと安いの。」

「ぢやア三十圓。」

「もう少し、もう少し安いの。」

「二十五圓。」
「まあそこいら。」
「何だ、そんなに安いもんか。」
「安くたつて大きなお世話さ、三ちやんに買へやしないぢやないか。」
「へツ、御挨拶だな。」
と、恩地は着物へ手だけ通して、帶は締めずに、椽側へあぐらを搔きながら、
「己もさう云へば、帽子を一つ買ひてえんだがなあ、もうあの帽子ぢや極まりが惡くつて歩けやしねえ。」
「買つたげようか？」
「ああ、買つとくれ、チヤチなんぢや厭だぜ、ステトソンの薄いソフトを買つとくれ。」
「馬鹿云つてらあ、もうみんな麥藁ぢやないか。」
「麥藁なんかお前に買つて貰はないでも、買ふからいいよ。一圓五十錢のを買つて、月に一つ宛ホイにするんだ。」
百人一首のお公卿樣の繪にあるやうに、足の裏と足の裏を合はせて掴わつて、兩手で腿を抱いてゐる恰好は、自分で自分のひよろ長い脚を持ち扱つてゐるかのやう。——色は白いと云ふのではないが、淺黑い肌が却つて人を惹きつける、すつきりとした、筋張らない肉づきの、十七八の少年にも似た優しい骨格を武器にする恩地は、何かと云ふと着物を脫いで體つきを見せたがる。繭子とは可なり古い關係、東京にゐた頃出來た仲で、その後暫く逢つたり切れたりしてゐたのが、地震を機會に上方へ來て再び落ち合ひ、一つ會社に雇はれたのが縒りの戾つた始まりで、此の家を恰も我が家のやうに入り浸つてゐるうちに、とうとう一週間ほど前からずるずるべつたりに居着いてしまつた。——が、久しい馴染で

あるにも拘はらず、かうして見ると此の男だつて今更捨てたものではない、やつぱり可愛い眼をしてゐると、繭子は思つた。ピアニストのやうな器用らしい指先が、ほんのり薄く、着色液のしみだと見えて琥珀色に染まつてゐるのも、寧ろなまめかしい感じがした。俳優になれば二枚目どころに打つて付けの柄であるのに、自分の好きで現像技師をやつてゐる。此の男の氣が分らなかつた。歳は繭子より一つ上か、せいぜい同い歳の筈だけれど、顏にも何處やら子供らしい愛嬌が殘つてゐるのを、自分でもよく知つてゐて、ときどき甘つたれた言葉を使ふところから、社の內部では「喰はせ者」と云ふ評判があつたが、その「甘つたれ」も繭子には決して憎くなかつた。

欄干の外は日が暮れかかつて、流れの音が身に沁みるやうにハツキリ聞える。白ツちやけた地面の色は、夕方はなほ際立つて、仄暗いながらあたり一面に濃淡がなく、小松の幹が一本一本數へられるほど、冴え冴えと明るい。何處か遠くの溫泉宿にでもゐるやうで、繭子はのんびりと、いい氣持ちだつた。寺本のことも苦にならなかつた。たつた今讀んだその人の手紙が、帶の間に這入つてゐることさへ、どうかすると忘れてゐた。寺本なんて面倒な人は駄目なら駄目でいいぢやないか。今日明日のことに行かないものをムキになることがあるもんか。此處にゐる男で澤山ぢやないか。何と云つても寺本さんよりずつとシヤンだし、あたしの性分は何から何まで知つてゐてくれるし、…………………………

「今日は三ちやん、おやぢが來るんだよ。」

「うん、知つてゐる。又階下へ追つ拂はれか、――遣り切れねえなあ。」

お美代が夕刊を持つて上つて來たので、二人の話はちよつと途切れた。

「爪剪鋏はここにあるかい?」

と、恩地は云つて、机の上に置いてあつたヴァニテイー・ケースを勝手に開けて、鋏を取り出すと、その夕刊を緣側

へひろげ、足の爪を剪り始める。

「三ちやん、今夜は二階へ來てくれないか。………」

「どうして」

「その方がいいよ、階下はお美代やお元がゐるもの。………」

「何時頃？」

「二時半か三時頃、———いい時分に梯子段へ電氣をつけるよ、電氣がついてたら上つておいで。」

「何處へ？」

「其處へ。」

蘭子は隣りの六疊を頤で示した。

「いいのかい？」

「——いつもぐつすり寝てしまふんだよ、アダリンを飲ましてやるんだから。」

「そんなものを飲ましても分らねえのか。」

「分りやしないさ、飲ませる法があるんだもの。」

「エゲツないなあ！」

と、此の頃覺えた上方言葉でさう云つて、恩地は鋏の手を止めた。

大島の袷に絽の夏羽織、紬の袴と云ふいでたちに、象牙のノッブのステッキを衝いて、メシヨン・パイプを咬へながら、此の男の癖の、四股を踏むやうな悠然たる歩き振りで、小田切がやつて來たのは、彼れ此れ七時半頃であつた。

「入らつしやいまし。」

と、お美代は玄關に畏まつたが、小田切はたゞ「うん」と云つたなり、いくらか極まりが惡さうにしてすうツと二階へ通つてしまふ。それから間もなく、「お風呂が出來てをりますから」と云ふ知らせに、繭子と二人で一時間近くも湯に這入つてゐる。湯から上ると、再び二階へしけ込んだきり、晩飯の膳を階下から運ばせて、チビリチビリと酒が始まる。が、その間はカタリと云ふ物音も立てず、話聲も洩れないので、呼ばれなければお美代も決して上つて行かない。尤も酒は可なり行けるのに違ひなく、日本酒はめつたにやらなかつたが、食事中にはシヤトー・ラローズかシヤブリーを飲み、食後はチーズを摘まみながら、コニヤックのクルヴオアジエか、シエリー酒を飲むことに極まつてゐた。それでさう云ふ西洋酒の數々は、小田切自身が特別に神戸へ註文して、いつも此の家へ備へつけて置いたのである。

「三ちやん、ちよいと！　三ちやんはゐないかい？」

二階で繭子の頓興な聲が聞えたのは、吉例の如く食後の酒になつてから、又一時間も立つたと思ふ時分である。恩地は階下で、お餘りの鱧のすき燒の鍋を圍みながら、お美代やお元と突ツついてゐる最中だつたが、

「おう！」

と云ひさま、箸を投げ捨てゝ、梯子段の下まで駈けて行つた。

繭子は上から顏を出して、

「三ちやん、あんた御飯は？」

「今たべてゐますが、もう濟みますよ。何の御用です。」

と、下では丁寧な言葉を使つた。

「さう、ぢや、たべちまつたら二階へ來ない？パパさんがあんたに、珍しいお酒を御馳走するツて云つてるの。」

「そりや有りがてえな、御馳走になります。――ぢやア大急ぎで、先へ一とツ風呂這入つちまひます。」

「お湯は後だつていゝぢやないの。」

「なあに直ぐ、――五分か十分、直ぐですよほんとに。醉つ拂ふと這入れなくなつちまふから。」

「醉つ拂ふほど飲ませるなんて、誰が云つたい。」

「あ、いけねえ！　こりや失策（しくじ）つたか。」

「ぐづぐづ云はないで上つておいでよ、ようツたら！」

「へえ、ぢやアお湯は後にします。」

恩地は茶の間へ取つて返して、喰ひかけの飯を掻つ込んでから、ちよつと帶を締め直して二階へ上つた。

「御免下さい、御馳走になりに參りました。………ええと、繭（マユ）ちやん、何とか云つてくれないかな、己アどうも挨拶をするのが拙くつて、………」

「うふふふふ、何云つてゐるのよ此の人は。そんなに改まらないだつて、先から知つてゐるんぢやないか。」

「だけども、………そりやアさうだけれども、………」

「やあ、暫くだつたね、」

と、その時小田切が、やつと重い口を動かして云つた。

「君はいつから此方だね？」

「僕ですか、僕は今年の二月からです。此の間から時々お目に懸つてゐましたが、つい御挨拶をしそびれちやつて、……どうも濟みません。」

さう云つて恩地は、頸ねツこへ手をかけて、ピヨコンとお時儀をして見せる。

「さあ、三ちやん、あんたコニヤックとシエリーと孰方がいい？」

「ええ、孰方でも、………」

「遠慮なんかしないでもいいわよ、折角飲ませるツて云ふんだから。ねえ、パパさん、パパさんから勸めて頂戴よ。」

「うん、ほんたうに遠慮しないで、………」

「ちやア遠慮しません、どうか兩方飲まして下さい、孰方も僕ア飲んだことなんかないんですから。………」

實は内證で猪口に一杯ぐらゐづつ、毒味をしたことはあつたのだが。………

御馳走をするから上つて來いと云つて置きながら、専ら薗子に取り持ちをさせて、小田切は矢張り氣むづかしさうに、さうかと云つて不機嫌でもなく、默つて二人のしやべるのを聞いてゐる。恩地はめつたに人みしりをしない方で、誰にでも可愛がられるのを内々得意にしてゐるのだが、此の人ばかりは氣心が知れないで、多少窮屈な感じがした。一體己と薗公との間を、どう考へてゐるのだらうか、二人の關係を知つてゐるのか知らないのか？ さう思つて見ると、それが彼には腑に落ちなかつた。「さあ、事に依つたら氣が付いてゐやしないかしら？ だけどあたしとおやぢとは二十も歳が違ふんだから、大概なことはあきらめてゐるんだよ」と薗子は云ふけれど、何だか斯う、人の樣子を妙に意地惡く、ちーツと觀察してゐるやうな、あの眼つきが氣に喰はない。それにおやぢだのパパさんだのとは云ふものの、鷹揚

に太つた、品のいい風采は、實際の歳より三つ四つ若く、漸く四十前後としか思へない立派な紳士だ。あれで內實は繭子に頭が上らないで、どんな我が儘でも許してゐるのださうだから、餘程繭公がお氣に召してゐるのだらうが、陰險なのかお様子振つてゐるのか、燒き餅を燒いたと云ふ話もなく、まるで女に征服され切つてゐるところは、あまり鼻の下が長過ぎるやうで、どうもをかしい。東京時代にもいろんな男がおほッぴらに出入りをしたに拘はらず、いつも此の人は何も云はないで、女優を妾にしてゐるんだから仕方がないと云つた風な、太ッ腹をきめてゐた。アダリンを飲まされて知らずにゐるとは初耳だけれど、繭子が目黒に住んでゐる頃、俳優のHやYが矢張り此の人と泊まり合はせて、それに似たやうなわるさをしたことは、のろけ交りに當人どもがしやべつたのを、恩地は聞いてゐる。あの人は幾らか美少年趣味もあるんぢやないか、美少年に接することを喜ぶやうな傾きもあつて、繭子の浮氣を默認してゐるのぢやないかと、一と頃はそんな噂もあつた。恩地が此處へ轉げ込むに就いても「おやぢは美少年が好きなんだよ、三ちやんのこともアレはシャンだッて云つてゐたから、椰やしないよ」と、繭子にさう云はれたからではあるが、それにしても奇態な人だ。かうして面と向つても、ちつとも言葉をかけてくれない。いい歳をして美少年が好きなのも滑稽だから、わざと取り澄ましてゐるやうにも見えるし、腹の中ではづうづうしい奴だと睨んでゐながら、繭子の機嫌を損ねることを慮つて、いやいや好きを装つてゐるやうにも見える。まあそんな事は孰方だつていいや、づうづうしいならづうづうしいと思やがれと、恩地は度胸を極めてゐるのだが、人の顏色を讀むことの上手な彼にも、此の點がハッキリしてくれないと、應對がしにくい。酒を飲まして貰つたつて甘くもない。醉ひが頭へばかり上つて、頸の周りがカッカッと火照つて、變に壓迫されるやうな、息が詰まるやうな氣がする。

「パパさん、パパさんはどう思ふ？　三ちやんとはアちやんと孰方がシャンかしら？」

此れぢやアとても遣り切れないなと思つてゐると、いきなり繭子がそんなことを云つて、チラリと恩地へ横眼を使つた。

「ほら、パパさんはアちやんを覺えてゐない？　目黑にゐる時分、よくやつて來たHツて云ふ兒があつたぢやないの？」

若い男を摑まへて「兒」と云ふのが彼女の癖だつた。恩地も蔭では「兒」にされてゐた。

「うん、………」

「あの兒と三ちやんと孰方がシヤンだらう？　ねえ、パパさん。」

「さあ、孰方かな、………」

小田切はいかにも迷惑さうに、口の中でもぐもぐと云つた。が、同時に非常に好奇心の籠つた、そのくせ妙に臆病な眸で、卓を隔てた男の美貌をコツソリと覗つたが、視線が合ふと直ぐにその眼を外らしてしまつて、繭子の手つきや、足つきや、頰ツぺたや、頸ツたまや、そんなものばかりを惚れ惚れと眺めてゐる。眼つきがまるで舌のやうに貪婪に見える、――――「どうだい此の女は？　實にいい體つきをしてゐるぢやないか、柔かで、つやつやとして、全身が斯う、波のやうにしなしなして、………此れだから己は此の女が好きなんだ」と、恰もさう云つてゐるかのやうに。………

「でも孰方よ？　あたし三ちやんの方がシヤンだと思ふわ。」

「じよ、冗談云つちやア………」

と、恩地は又頸ねツこを摑んで、

「そりやアはアちやんの方がシヤンですよ、僕なんか到底………」

「ウソ云つてらア、背負つてる癖に！」
「アレ、アレ、驚いたなどうも！」
「現像技師なんかさせて置くのは惜しいツて云つてたわよ。」
「誰が？」
「パパさんが、」
「へ？」
と云つた恩地は、その時再び、好奇心に充ちた眼で射られたのを感じたので、ふいと見上げると、不思議にも小田切は、處女のやうに顔を赧くしてゐる。
「さうね、パパさん、パパさんは三ちやんが御贔負ね、いつかさう云つてゐたぢやないの？」
「うん」
と云つたやうではあつたが、恩地にはただ、此の曖昧な人の唇の、かすかに動いたのだけが分つた。

4

「うるさい！　うるさいツて云ふのに又寄つて來る！……」
「だつて、……だつてお前、……」
「何がだつてよ！　馬鹿おやぢ！　此處は戸外からまる見えぢやないか。」
「見えやしない、今頃戸外を通る者はありやしないから、……」

「誰が何處から見てゐるか知れやしないわよ！　あの松林の中にだつて此の頃家が出來たんだから。」

「アレは川の向うぢやないか、……」

「川の向うだつて見えるわよ、戶外が眞つ暗で、二階がこんなに明るいんだもの。」

「ぢやア戶を締めて、……よう！……お美代を呼んで、戶を締めさせて、……」

「いけないわよ、今から戶を締めたら暑ツ苦しくツて仕樣がありやしない。」

「もう十二時だよ、……」

「十二時だつていゝぢやないの、あたしはもう少し此處に涼んでゐたいんだから。」

「お前、そんな薄着で、風邪を引くといけないぜ。」

「引いたツていゝわよ、餘計なお世話よ、パパさんはもつとお酒でもお飲み。……」

　恩地が階下へ行つてから、十分ばかりも後であらうか、籐の長椅子に體を臥ツころばした繭子は、片手を欄干に、片手を椅子の肘つきの外へ垂らしながら、着物の兩前を、ヅボンを穿いてゐるやうに兩脚の間へぴつたりと挾んで、その脚をゆたかに伸ばしてゐた。小田切は緣側と座敷の境の、閾のところに座布團を敷いて、庭の方から見えないやうに長椅子の蔭に蹲踞まつたまゝ、上から垂れた女の掌を握つてゐた。二人きりになつてしまふと此の男はいつでもさうだが、話の間や酒の間に始終繭子の肌の一部を、――彼女がうるさがる時は指の先でも足の裏でも構はないから、――何處かを手で以て撫でてゐないと承知しないのである。もう昔から馴れッこになつてゐるのだけれども、此の頃特にそのやり方がしつツこいから、しつきりなしに蛔が體を這つてゐるやうで、繭子は時々癇癪が起つて來るのだつた。

「さア、その手を放して頂戴ツたら！　いつ迄人の手を握つてゐるのよ！」

「だつてお前、手ぐらゐ握つたて、……」

「厭！ 厭だつたら厭！」

邪慳にさう云つて、無理に振り挽ぎつて、めつたに見せられない品物のやうに、掌を懐ろへ隠してしまふ。すると今度は、籐椅子に添ひながらずるずると下の方へ這つて、足頸に觸り、足の指へムヅムヅと來る。

「まア、此の人は。――犬！ 犬おやぢ！」

ぱつとフランネルの裾がまくれて、女の足は、いきなり小田切の額を蹴つた。が、それでも小田切はまだ止めない。……

仕方がなしに、もうあきらめてしまつた綱子は、勝手に足をいぢらせながら、椅子の上から此の男の頭を見つぶしてゐた。面と向ふとさうでもないけれど、上から見ると、矢張り此の男も歳を取つたのか、頭のまん中が禿げて來てゐる。オー・ド・キニーンを擦り込んだり、ブリアンチンでつやを附けたり、バンダリンで固めたり、いつも髪の毛を氣にしてゐるだけ、何だか悲慘な心持ちもする。さう云へばあの、襟の周りから肩へかけての、ところどころに赤ン坊の手頸のやうな線の這入つた、だぶだぶとしたぶざまな肉づき。あの締まりのない太り方は、もう老人の體ぢやないか。寺本さんや三ちやんの「若さ」の張り切つてゐる皮膚とは、比べ物にならないぢやないか。「おやぢ、おやぢ」と云つてゐるうちに、いつか此の人もほんとうのおやぢになりかけてゐる。だが此の人が此れだけ老けてしまつた間に、あたしだつて歳を取つたんだ。來年は二十四、再來年は二十五、……ぐづぐづしてゐると直き三十になつてしまふ。あたしもいつ迄安

月給で女優商賣をしてゐたくはないんだが、それにしても此の人はどうしてこんな因果な性分なんだらう？　ちやんとしてゐれば立派な人間で、頼りにもなる男だのに、奇妙な癖が幾つになつても止みさうもなく、だんだん激しくなると云ふのは、……

繭子の眼には、椅子の下にゐる男にも、彼女自身にも分らない程の涙が宿つた。彼女はもう一度腹立たしげに、

「馬鹿おやぢ！」

と云つて、小田切を蹴つた。二度も、三度も、蹴つて、蹴つて、蹴りつゞけてゐるうちに、パラパラと頬を傳はつて來たものがあるので、始めてはッと氣が付いたけれど、それを拭かうともしなかつた。

「おやぢ！　あたしにシエリーを一杯おくれ。」

と、彼女は云つた。グラスに酒を注ぎながら、思ひもかけぬその涙に濡れた顔を見上げた小田切は、さすがにちよつとたじろいだやうな、薄氣味の惡いニタニタ笑ひを頬に刻んだ。

繭子は一體、生れつきから浮氣でお轉婆であつたけれどもその傾向を生れつき以上に募らせた者は小田切であつた。四五年前に、上海のカフェエで踊り子をしてゐた十八九の頃、小田切が彼女に惚れたのは、今から思ふとヤンキー式な茶目な動作や、蓮ッ葉で亂暴な口のきき振りや、あの時分の流行りであつた斷髮の頭や、彼女の持つてゐたそんな特長が此の病的な男の嗜好に投じたのである。繭子はそれを、あの時分には氣がつかなかつた。此の男はお金持ちのお坊ッちやん育ちで、女に脆い、甘い奴で、まるであたしに目がないんだと思つてゐた。そして此の男の物になりながら、陰では隨分、好き放題ないたづらもした。此の男を巧く欺して、いいやうに操つてやることが面白くもあり、それほど自分に腕のあることが愉快でもあつた。ところが、それがさうではなく、欺した積りで實は此の男の註文通りに、一種の鑄

型に篏められてゐたのを、――肉體と共に性格までも玩具にされつゝあつたのを、――彼女は近頃、此の男の秘密が次第に分るに隨つて、悟るやうになつたのである。

あれから長年、此の男を旦那にしてゐるけれども、彼女はついぞ「旦那を持つてゐる」と云ふ窮屈を意識したことはなかつた。こんな自墮落な女を圍つて置きながら、此の男は唯の一度も、燒き餅を燒いた例がない。たまに燒くやうな風を見せても、決して心からの嫉妬ではなく、變態な慾を滿足させる芝居に過ぎない。凡べて、此の男のすることは芝居ばかりだ。間拔けでもないのに間拔けな役割を演じたり、欺されてもゐないのに欺されたらしく裝つたり、不斷は立派な男だのに、彼女の前ではわざと意氣地なく、女のやうな泣き聲で哀訴したり、そんな事にのみ或る云ひ知れぬ愉悅を感ずる此の男には、眞面目に人を愛さうとする實意もなければ、眞面目に愛されたいと云ふ願ひもない。「あなた」と云はれるより「おやぢ」と云はれ、手で撫でられるより足蹴にされるのを喜ぶ男。操を立てて貰ふより木偶扱ひにされるのが嬉しい男。一枚目よりも三枚目がいいと云ふ男。――それを彼女は、初めは滑稽に感じたばかりで、却つて都合がいいくらゐに考へたのだが、氣違ひじみた此の男の眼が近頃のやうにムキ出しになると、自分は此の男に惚れられてゐるんでも何でもない、女王の如く振る舞ひながら實は奴隷にされてゐたんだ、煽てられて、圖に乘つて、知らない間に不自然な道具に使はれてゐたんだと、さう云ふ自覺がハッキリして來て、時々ふいと淋しい氣持ちが胸を襲つて來るのである。

お美代が上つて來て、もう一度ちよつと掃き出してから、雨戸を締めたのは一時頃だつた。

繭子はたつた一杯のシエリー酒が利いたのか、慵く、大儀で、お美代がそこらを片附けたり床を敷いたりしてゐる

間、まだ椅子の上を離れようとはしなかつた。

「いや、己はいいよ、姉さんに寢間着を着せてお上げ。」

と、小田切がさう云つてゐる。

潔癖で、身嗜みがいいので、汗臭い感じはしなかつたが、その代りパサパサと脂氣がなく萎びた手足、不正形な、變形に歪んでゐるやうな顔、雀斑の中から覗いてゐる悧巧さうな小さな眼、出つ張つた額と大きな口、あれで呼吸が通ふかと思はれる微かな鼻の孔、――佝僂のお美代は、それでゐて細々とよく働くが、「そんな不具な從妹があるなら世話をしてやり」と、頻りに彼女を不憫がつて、内へ置きたがつた小田切の心も、今では繭子には想像がついてゐた。小田切は始終、獸を飼へと繭子に勸めた。いつか一緒に、道頓堀の松竹座でバーバラ・ラ・マーの「心なき女性」を見た時にも、「お前も猿を飼つたらどうだね」と、彼は云つた、「あの猿がゐるのでバーバラ・ラ・マーが一層妖艶な女に見える、映畫の女優は猿を馴らして置くといいよ」と、繭子が厭だと云ふものを、しつツこく口説いた。さうしてお美代が來てからと云ふものは、凡そ繭子の體に關係した用は、彼が自分でやらなければ此の兒にやらせた。髮を梳くこと、爪を研ぐこと、背中を流すこと、足腰を揉むこと、靴を穿かすこと脱がすこと、……何でも彼でも繭子自身が手を下すのを喜ばないで、精神的の不具者である彼と、肉體的不具者である此の兒とが、女主人の指一本でも煩はす必要のないやうにした。

此の兒もきつと、小田切の道具に使はれてゐるんだ、――と、繭子は思つた、――あたしばかりか、あたしの周りにゐる者は皆道具に使はれるんだ、お美代にしても、はアちやんにしても、三ちやんにしても、……

「姉さん、寢間着をお着換へにならない？」

椅子の後ろへ來て、もう先(さつき)から寢間着を持つて待つてゐるお美代の、口の内で云ふ聲が聞えた。
やつと身を起して、帶を半分解きかけた時、
「あ、さう云へばあたし、……」
と、繭子は急に氣が付いて、お腹の周りや袂の中を探つて見た。寺本の手紙を何處へやつたか、あれきり忘れてゐたのである。
「お湯殿にあつたから收(しま)つて置いたわ。」
お美代が耳元で、一と言云つた。
「ふ」
と頷いて見せたきり、そのまゝずるずると着物を脱いで、後ろで擴げてゐる浴衣の袖へ手を通した……默つてゐながら、此の兒は何でも知つてゐると思ふと、今に始まつたことではないが、繭子は變な不氣味さを覺えた。小田切の秘密も、女主人の胸の中も、さうして自分自身の位置も、もう此の兒にはすつかり分つてゐるのではないか？……
緣側に落ちてゐるフランネルを拾つて、衣紋竹へ懸け、帶を疊んで、
「お休みなさいまし。」
と、お美代は階下へ降りて行つた。
ぼんやり電燈に覆ひを被せた暗がりの中で、アダリンが利いたのか、それとも酒か、小田切はグウグウよく寢てゐる

る。…………

繭子は、ちよつと身じろぎして見た、それから、邪魔になる腕を靜かに向うへ拂ひ除けた。彈みに少し枕からずり落ちたが、何の手答へも感ぜられない。ぽかんと口を開けたまま、頤を垂らして、よだれを出しさうにしてゐる樣子は、たわいもない。

ほんたうに此の男は寢たんだらうか？　此の氣違ひは？――

彼女は暫く、怪しげな寢顏をまじまじと眺めた。

此の男の空寢入りは、隨分人を喰つたものだつた。目黑にゐた頃、HやYが忍んだ時にも、實は此の男は知つてゐたのだ。それがやつぱり一種の芝居で、さう云ふ役廻りにされることが秘密な樂しみだつたのだ。

「僕もああ云ふシヤンは好きだから、内へ置いたらいいぢやないか」と、小田切の方からさう云ひ出して、恩地が近頃泊まるやうになつてから、繭子はときどき此の男にアダリンを飲ました。〇、五グラム　の錠劑を、一つ、二つ、或は三つ、細かに嚙んで、口移しにして、此の男に與へる。すると此の男は喜んで飲む。――多分女に毒藥を盛られる連想を以て飲むのであらう。彼女が此れをしてくれると、明くる日の朝、小田切は何でも彼女の要求を容れた。臨時の小遣ひを出すこともあり、着物を拵へてやることもあつた。それも初めは此の男の方から謎をかけたので、いつからともなく、二人の間に結ばれた契約のやうなものであつたが、繭子に取つても滿更惡い商賣ではなかつた。色と慾との兩方面から、彼女はいつも誘惑されてその手に載つた。

繭子は今夜は、此の男に錠劑を五つも飲ました。それから熱い湯にコニヤツクを交ぜて　それを湯吞みに三杯も口の中へ注ぎ込んでやつたが、そんなにしてもまだ此の男が本當に寢てゐるかどうかは、疑はしかつた。彼女はそつと搔卷

をまくつて、起き上つた。枕もとに据わつて、立て膝をして、足の先で微かに寝顔に觸つて見た。足の崇拜狂である此の男は、しばしば此れで空寝入りを觀破されるのだけれども、此の頃は狡く、陰險になつて、なかなか化けの皮を露はさない。彼女は二三度、足の拇指の腹をあてて、頬ツぺたや脣の邊を、チョツ、チョツと捺した。が、それでも相變らずすやすやと寢てゐる、ぽかんと口を開けて、涎を垂らして、……

その不可解な顔の前から、繭子はじりじりと、憶病な猫のやうに後へ退つた。そして、廊下に出て、梯子段に明りをつけた。

階下で、二つの眼が光つた。恩地が其處にもう腰かけてゐたのである。……

「三ちやん、……」

「…………………」

「あたし、あんたが好きンなつた、前よりずつと好きンなつた、あたしのラヴさんはあんたばかりよ、……よう、三ちやん！」

「う、うん、……」

此の女が今夜はさめざめと泣いてゐる、ハテ、一體どうした加減かなと、恩地は思つた。

「あんた、あたしを捨てちやアいけないよ、いつ迄もいつ迄も、捨てないツて約束しておくれ。……」

「分つた、分つた、分つたツてば、……」

「ぢやア、ほんたうに約束する?」

「うん、」

「浮氣をしない?」

「お前はどうだい?………」

「するもんか、あたしは、——しないとなれば。——」、

「あてにやアならねえ。……」

「あんたさへ浮氣しなけりやア、あたしだつてしやしないよ。あたしはそんな女ぢやないよ。あたしは、あたしは、…

…おやぢのお蔭でこんなに悪くなツちやたんだ。……」

「靜かに、……靜かにしねえか、………お隣りで眼を覺ますよ。………」

「あんた、あたしを可哀さうだと思つてくれない? ハタから見ると仕合はせなやうで、あたしぐらゐ不仕合はせな者はないんだよ。あたしはこんな氣象だから、今迄誰にもしやべつたことなんかないんだけれど、三ちやんが好きになつちまつたら、急に話したくなつちやつたの。いけない? こんなことを云つちやア?」

「明日、明日にしねえよ。………」

「ううん、今夜、………今夜からうしてゆつくり話すの。」

「だつて、聞いてるといけねえからさア。」

「聞いてたツて構あもんか! 聞きたけりや聞かしてやる方がいいんだ、あんな變態性慾おやぢ!………あたし、三ちやんさへ眞面目なら、ちやんとおやぢに譯を話して、切れて貰ふよ。よう、三ちやん、あたしと結婚しておくれよ。」

「月給六十圓ぢやアなア、……顔が干上つてもいい積りかい？」

「あんたが六十圓、あたしが二百圓取るんだもの。それだけで喰べて行かれるぢやないか。あたし　さうなれば贅澤なんかしやしないよ。月給はみんな三ちやんに上げるよ。え、厭かい？　三ちやん。」

何を云つてやがるんだ此の女は？　明日になれば又お天氣が變るんだらう。――

「厭ぢやアねえ、結構過ぎらア。」

「ぢやア、承知かい？」

「う、うん、だけどもお前、………」

「何さ、だけども？」

「………まあ、お前がよく、………もう一度よく、………」

「考へろツて云ふのかい？」

「己より先に、小田切さんと相談をして、………」

「そんな事は分つてゐるよ。ぢや、小田切と立派に切れちまつたら、承知するかい？」

「そりやアする。」

「きつとかい？」

「きつとだとも。」

「ぢやア、ゲンマンしとくれ。」

「うん、………」

「さ、ゲンマンしたよ、いいかい？」

「大丈夫だ。」

「ありがと、ありがとよ三ちゃん、……あたしが泣いたりなんかして可笑しい？」

「可笑しかねえ、……お前にもそんな優しい所があるかと思ふと、可愛いやうな氣がするな。」

「あたしほんとは泣き蟲なんだよ、可愛がつてくれなきやア厭よ。……」

泣けた、泣けた、繭子は果てしもなくしみじみと泣けた、しつかり男を抱き緊めながら。……

6

明け方、お美代が上つて來てそうツと雨戸を繰つた時迄は、とろとろしながら覺えてゐたけれど、冷え冷えとした朝の空氣が這入つて來ると、繭子は直きに、好い心持ちにぐつすり眠つた。

「姉さん、……」

と、障子の外で呼ぶ聲が耳についたのは、それから何時間ぐらゐ後であらうか。

「姉さん、」

と、二度か三度呼ばれた時、

「ふん？」

と繭子は、まだ半分は夢現で答へた。

「姉さん、お客様よ、――」

「だアれ？」

「此處に名刺を持つてゐるの、開けてもいい？」

隣りの部屋から、枕もとの方の襖を開けて、名刺を持つたお美代の手が出た。

「此の人？」

「ええ、」

寺本さんだ、……來られないと云つてゐたのに、どうしたんだらう？　それに今日は日曜でもないのに、わざわざ京都から來たんだらうか？……でもよかつた、來てくれてよかつた、まア嬉しい。……何か譯があるんじやないのか？……繭子は慌てて、疊の上をずるずると手繰つて、男の時計を引き寄せて見た。もう十時過ぎだつた。それにしても此のおやじは？……今朝は十時に大阪へ歸ると云つてゐた癖に、まだ寢てゐる。障子際から日がかんかんと射し込んで來るのも知らないで、顏ぢゆうに脂汗を浮かして、出ツ腹の上へ皺くちやになつた掻卷を横一文字に載せたまま、寢ないでもいい時分になつて、今度こそ本當に眠つたらしい。……

「ぢやア、あたしが今行く。」

寢てゐる男を尻眼にかけて、繭子は素早く跳ね起きると、着物を着換へる、帶を締める、それからちよつと顏を直して、急いで玄關へ飛んで降りた。

「まア！」

「やア、どうも突然お伺ひして、……」

男らしい、そしてシツカリと力の籠つた眼が見上げた。此の間嵐山へ行つた時の通りの、あの快活な寺本だつた。

「まア、ほんとうに！　よく入らしつて下すつたわねえ！」

「今日は親父と妹が有馬溫泉へ行くと云ふので、寶塚まで送つて來たんです。不意に伺つて失禮ぢやないかと思つたんですが、折角そこまで來たもんだから、兎に角お寄りして見ようと思つて、——」

「ええ、いいのよ、あたしちつとも差支へないのよ。」

「でも、會社へ入らつしやるんぢやないんですか？」

「二三日撮影がないんですから、休んだつて構やしないの。ね、寺本さん、ほんとにゆつくりして行つて、——今直ぐ二階を片附けますから。」

「ぢやア、その間僕は、そこらを散歩して來ませうか。」

格子の外の白い地面がギラギラ光つて、それが照り返す土間の中に、例の象牙のノッブのステッキが瀬戸の傘入れに挿し込んである。あ、此れを此の人が見たんだな、さう思ふと繭子は氣が焦つた。

「いいのよ、そんな、散歩なんかして來ないだつて！　ちよつと片附けるだけなんだからほんの三分か五分の間よ」

「さうですか、それぢやア、……」

と云つて、まだ寺本はモヂモヂしてゐる。

「よくつて？　寺本さん、何處へも行つちやいけなくつてよ！　きつと其處に待つてて頂戴。」

もう一度强く念を押して、ピシャリと玄關の障子を立て切つて、

「美代ちやん、二階へ來ておくれ。」

と、さう云ひながら彼女も梯子段を駈け上つた。

「おやぢ！　さア起きとくれ起きとくれ！」

「うう、……ああ、……もう少し、……もう少し寝かして、……」

「寝かしてなんか置けないよ、起きてさツさと歸つとくれ！」

ぽんと枕を蹴飛ばして、耳朶を持つてその重い首を吊るし上げた。

「あいた、痛いツたら！」

「痛けりやア眼が覺めたか？　さアどうだ？　起きるんだ起きるんだ！」

「何だつてそんな……」

「何でもいいから起きるんだつてば！　起きてさツさと着物を着換へて出て行つとくれ！　あたしの大事なお客様が來たんだから。」

「誰？」

「誰だつていいよ、おやぢなんかの知らない人だよ。——美代ちやん、構はないからどんどん床を上げておしまひ！」

「驚いたなア、知らない人なら、己に紹介してくれたら、……」

「馬鹿！　そんな人とは人が違ふよ！　さア、早く着物を着換へておしまひ！」

「まア待つてくれ、顏を洗つて、……」

「顏なんか戸外でお洗ひ！　今日は内ぢやア洗はせないよ。」

「ど、どうして？」

「あの人とおやぢを一つ家ン中に入れて置いちや、あたしの氣持ちが濟まないんだから。——」

「意地はゐにも差支へないのか。」

「何云つてるんだい、今何時だと思つてるんだい、三ちやんなんざ疾うの昔に會社へ行つたよ。蛆蟲！　早く出て行けッたら！」

「だけどもちよつと、ちよつとその人を見たいもんだな。」

「誰が見せてやるもんか、見せたら向うが汚れちまはア。――美代ちやん、あたしおやぢの番をして、茶の間へ連れて行くからね、さうしたらその後でお客様を二階へお通し。――」

「姉さん、此處にまだ、帽子と袴が、……」

「此方へお寄越し。それからお客様を通しちまつたら、おやぢの下駄を庭の方へ廻しておくれ。」

彼女は再び耳朶を待つて引つ張り上げた。

「さアいいか、梯子段を降りる時に口を利くと承知しないぞ。默つて茶の間まで行くんだぞ。さうしないと、もう今度ッから此處の家へ寄せ付けないぞ。」

「ああ、ひどい目に遇つちやつたな。」

茶の間で袴を穿きながら、やつと小田切は口を利いた。

「ひどい目に遇つたつていいぢやないか、それがパパさんは好きなんぢやないか。さア、二百圓置いておいで。」

「百圓に負けてくれてもいいな。」

「いけないよ、二百圓だよ、昨夜あんなにアダリンを飲ましてやつたぢやないか。あたし指環を買つてしまつたし、もう一文もありやしないよ。」

澁々紙入れから出した百圓札を二枚、繭子は引つたくるやうにして帶の間へ挾みながら

「ぢやア、あたしの見てゐる前でお歸り。下駄は其處へ來てゐるから。」

「あ、ステツキ、ステツキ、ステツキを忘れた。」

「ステツキはいいわよ、今度來るまで預かつて置くわよ。」

「なぜ?」

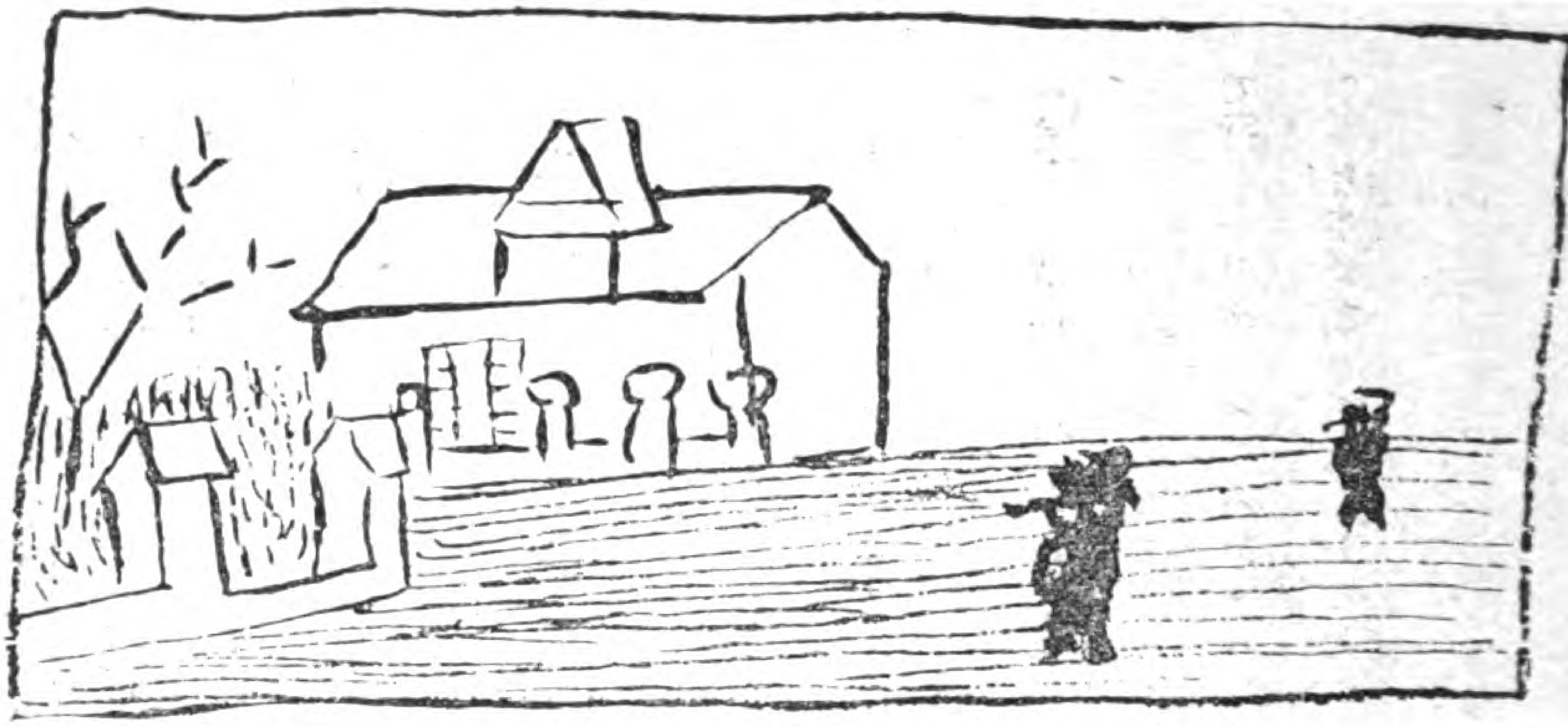
「だつて、先(さつき)玄關にあつたものが、後でなかつたから可笑しいもの。今日はなしで歸つて頂戴。」

這ふ這ふの體で小田切は、茶の間の縁から庭へ降りた。

「まア、寺本さん、大變お待たせしてしまつて、——」

二三分の後、胸をワクワクさせながら梯子段を上つて來た繭子は、川の向うの、松林の中を、停車場の方へ立ち去つて行く小田切の後ろ姿を認めた。ステツキがないので手持ち不沙汰のやうには見えたが、相變らず悠然と、四股を踏むやうな歩き振りで行くあのおやぢを、…………

(大正十四年五月稿)



兼介とその通信

犬養健

上

英語研究學校教師の永山兼介は、英和中辭典の編輯で無理をしたゝめ、過勞から神經衰弱にかゝつた。それはアルフアベットのMの項のあたりからもう徵候が現はれてゐた。

丁度時候もわるかつたのだ。新綠から梅雨に入らうとする時季で、東京は重い蒸々(むしむし)する空に覆はれてゐた。兼介には壓しつけられるやうな頭痛が毎日起つた。彼は頭痛止めの頓服をのまなくては、午後からの目ぶしい教室で、授業を續けることが出來なかつた。夕方空氣が冷え、砂利道に響く遲退(おそび)けの生徒の足音が全く靜まると、彼はやつと生き返つたやうに辭書の仕事に向つた。とにかく藥の利き目でそれだけの精力を保つ事が出來たのだ。

一體、兼介が辭書の編輯といふやうな、勞多くして無味乾燥な仕事を引き受けたのは、それが研究學校の出版事業になつてゐるからだつた。學校は以前から參考書の出版で信用を得てゐたのだ。編者の筆頭に校長の名が擧げられ、實際の仕事を兼介がするので、謂はゞ彼は校長から推薦されたわけだ。だが兼介の方から云つても、その話のあつた際、むしろ進んで引き受ける氣になつた。彼の妻は二度目の懷姙をしてゐた。彼女の初産は重かつた。兼介はそのため、今度はすぐれた專門醫にかけないと不安に思はれた。その上彼は産後の生活費に、相當の餘裕をつくつて置きたかつた。子供達には營養をつけてやりたいと思つた。それから彼自身について云へば、子供が二人になるのを機會に、何處か郊外の書齋に適した部屋のある、靜かな住居に引移りたかつた。兼介は前から或る研究の材料を持つてゐた。三十四といふ齡で、彼は學生時代とは違つた意味で一生の仕事について考へ、そのための焦慮を感じてゐる時期に立つてゐた。

兼介の妻はその子供の營養の點、書齋の點にはすぐに同意して見せたが、自分が特にすぐれた專門醫にかゝるのは何か無駄な事のやうにくど〳〵云ふのだつた。自身をあまりに價値のない者に見過ぎる、その事で彼女はよく良人に癇癪を起させた。彼女は二十五になる、丸顏の、子供らしい頰に少しそばかすのある、平凡な氣の善い女だつた。下町の女學校出で志摩といふ名だつた。

志摩は姙娠中にも不必要な事にまでまめに働いて、良人の叱言をうけた。三月、彼女は不意に早産した。それはまだ寒かつたが春の豫感が庭にも廊下にも、何となしに充滿してゐる夕方だつた。何か物を言つてゐるやうなその獨特の柔かい溫氣が、家のなかの殺風景な混雑と間のぬけた對照をなした。やはり産の具合がよくなかつた。赤ん坊は二十五時間經つて死んだ。丁度前日の出産と似たやうな刻限だつた。兼介は産室に詰めきつてゐる親戚の女達から時々逃れ、椽先や狹い門内をうろ〳〵した。まだ何うといふ印象の少なかつた、果物ぐらゐの大きさの、毛深い赤ん坊の容貌が頭に

こびりついた。彼はそれを考へると、暮れかゝつた往來を人が暢氣に——さういふ感じがした——通るのも構はず泣けて來るのだつた。あの小さいものを燒く事は堪へられなかつた。門燈は前日と同じやうに點り、消毒藥は同じやうに匂ひ、小兒科醫の俥は明日も威勢よく驅けつけて來さうな轍の痕を、玄關のぬかるみに殘して行つた。しかし二十五時間といふ經過がある。これが奇妙だつた。一體時間といふ、人間の頭の創り出した、虚妄に近い不思議なもの丶本體は何だらう。

夫婦は割合に早くあきらめた。普通に言つて臨月の頃、志摩はもう夢のやうに身輕になつて、病院へ後養生に通つてゐた。その細つそりしたネル姿の彼女を見ると、粂介は一種新鮮な——精神的でまた何處か肉情的な——愛情を感ずるのだつた。死は不思議かも知れない、だが生きて物を感じてゐる事はなほ不思議だ、こんな風に粂介は考へた。五つになる長女をもさういふ新らしい眼で見て、彼の子煩惱の感情はまた複雜になつた。

だが一段落つくと、粂介は一時休んでゐた仕事を、それだけ捗らせる必要があつた。彼は夜更しを續けた。晝間授業をしての夜更しなので過勞が重なつた。前に云つたやうに時候もわるかつた。彼はだん〳〵活動力を失つて不氣嫌になつた。彼の事務机の下の屑籠には、妙な桃色をした頭痛藥の包み紙が、毎日欠かさずぽたり〳〵溜つて行つた。自分の飮んだ藥量を默つて計算してゐるものがあるやうで、あまり氣味がよくなかつた。粂介の顏色のわるい事は教員室でも目立つた。そして一番いけないのは、彼が生活に對して能動的な計畫や空想を失ひかけてゐる事だつた。

暑中休暇が來た。粂介は不眠症がひどくなつた。醫者は轉地をすゝめたが、編輯の仕事を持つた保養で、それに適した土地と家とを探すことが第一難關だつた。丁度さういふ時、彼と親しい同僚のSが、信州の或る高原の避暑地にある米國人の牧師の別荘の空いてゐるのを知らせてくれた。その牧師は夏に入つてから急に北海道への說教旅行に招かれた

ので、別荘の借り手の周旋をSに頼んだのだといふ事だつた。空氣、食物、間どり、謝禮、すべての條件がよくて、兼介夫婦は急に氣乘りがした。志摩は避暑地で人なかに出られるやうに、長女のと自分のと、大小の浴衣を至急縫つたりした。

八月の初め、兼介一家は其處へ發つて行つた。平野を通る汽車旅行は賑やかだつた。次女の誕生のために用意した費用が、豫期しない事に役立つたわけだ……

Sの勸めたとほり、高原の淸々しい空氣が兼介に目立つて利いたといふ事だつた。Sに宛てた禮狀に、彼は身體がすつかり恢復するまでは、秋の授業を多少休んでもこゝに滯在すると云つて來た。

暫くしてSへ二度目に寄した便りに、兼介は十枚ほどの洋罫紙に細かく書いたものを同封して來た。それは日記の拔萃ともスケッチともつかない斷片だつたが、兼介の氣持が常態に復しつゝある經過を何となしに物語つてゐた。尋常の報告よりもさういふ氣紛れなものゝ方が、Sに對して適當だと考へたのだらう。古い友達のSは頬笑んだ。彼は謂はゞ快癒期に入つた病人の、最初の爽つぱりした笑ひ聲を聞いたやうに思つたのだ。

以下がその斷片である。

下

私の借りた家は、谷川に向つてだら〳〵と傾斜してゐる榛木（はんのき）の多い林のなかにあつた。はじめ、その家の鍵を預つてゐる荒物屋の主人に伴はれて道路から覗いた時、これは西洋の山番小屋のやうだと思つた。鄙びた具合が氣に入つた。

それは何か痩せた人間を思はせるやうな、縦幅のせまい簡素な二階建だつた。一番近い家までに一町足らずあつて、その痩せた家は周圍の靜かさのために少し受け身になつてゐる案配だつた。此處には山鶯が多かつた。だがその啼き聲はむしろ靜かさの一部をなしてゐた。

私に必要な滋養物――バタや牛乳は、近くに大規模な牧場があつて新らしいのが手に入つた。麵麭は、初めて此處を避暑地に開拓した外人の宣教師達が、村のパン屋に燒き方と竈の作り方とを教へたので、未だに田舍離れしたのが獲られた。さういふ品のある村まで、此處から谷川を越して六七町ある。だが村を中心にして廣い範圍に家が散つてゐるので、用聞きは谷川の此方(こち)へも無精せずに寄つてくれる。緩い傾斜を持つた林のなかの路のことで、自轉車で廻る小僧達は、還りはペダルを踏まずに勢よく飛んで行くのだつた。麥藁帽に觸れた若枝は、鎖(チエーン)の音が五六間先へ行つた後までしなやかに搖れるのだ。三四日して家らしくなつた。

私は二階を書齋兼寢室にした。雨戶がないので、夜寢ながらにして上窓から澄んだ星が見えた。寢台にはスプリングが附いてゐず、その代りに藁編が具合よく張つてあつた。私はやはり夜中に長い間眼を覺してゐる事が多かつた。さういふ時、仰向けになつてゐる私の對象物は、凄いほど黑く澄みきつた空の星だつた。家の位置が丘の中腹にあるので、私と星とは直接に對立してしまふ。星と自分だけになる。病後の私にはいゝ寢台の位置ではないと思つた。私はさうやつてゐるうちに星の無表情に脅かされて來る。

私はそれに抵抗しようとするのだ。だが生活力の多分でない私は矢張り負けて來る。私は結局纖弱い生物になる。私は單純な形の疑問に追ひかけられる。あの大きい無意識界に對して私は何なのだらう。私はどういふ事になる存在なのだらう。

夜の一軒家では形からも音からも妨げるものがなく、私の空想は無制限に誇張され易かつた。それは悪い夢以上の厭な心持だつた。私は夢のなかで脅やかされる場合、長年の習練で今夢を見てゐるのだと覺る事がある。それで幾分か救はれる。その手のきかないほどの差し迫つた夢ならば結局眼を覺ます。ところが今の場合は、私は初めから妙にはつきり醒めてゐるのだ。窓枠は妙にぼんやり明るく照されてゐる。遠くの西洋人の家では犬が繰り返し／＼吠えてゐる。それも亦、何か影のやうなものに心細く脅えてゐる啼き聲だ。私は逼つて來る孤獨な感じから、夢魘された者のやうに知らず／＼呟いたりするのだつた。

朝の食事の際に、單純な私の妻は、牛乳罎やパン皿を明るい卓に整へながら、可笑しさうに私を揶揄ふのだ。

「貴夫、何を寢ぼけて、獨り言いつてらしつたの。あんまり自慢の出來る聲ぢやなかつたわ。わたし可笑しくつて」

彼女は肩を曲げてくす／＼笑ふのだつた。私も苦笑した。そして自分でも、かういふ狀態は早くどうにかしなければいけないと思つた。

半月經つた。仕事の殘りが少なくなると私は幾らか氣輕になり、運動も自然增えた。私は葉のすつかり伸びきつた林のなかで、樣々な方向に分れてゐる路を一人出まかせに歩いた。

前にも云つた通り、私の隣家は一町足らず登つた同じ林の隅にあつた。私は好奇心をもつてよくその前を通つた。無造作な木戸には家の番號しか貼られてなく、平建の母屋は灌木と丈の高い薄とに具合よく隱されてゐた。暫くして、私は其處を借りてゐる人が細井といふ、東京から來た一家だと知つた。五十に近い夫人と、大學と高等學校に行つてゐる兄弟と、十七になるお孃さんとがその家族だつた。

最初私達は村の郵便局でよく出逢つた。私が原稿の出來た分を抱へて、往來から急に影に充ちた局の内に入つて行くと、その兄妹も散歩がてら手紙を出しに來て、受付口に塊つてゐた。外國行の郵便物らしく、そのほか東京の醫院に宛てた封書が私の眼についた。私は彼等の父親が外國に行つてゐて、母親が何かの痼疾で此處へ保養に來てゐるものと想像した。(その想像があたつた。)兄妹はほかの避暑客にくらべて質素な裝をしてゐる方だつたが、それにも係らず何か派手な空氣を持つた、趣味の多い家庭に育つてゐる事が感ぜられた。兄妹はまた同じ通りにある、東京から出張した洋書店の前によく立ち止つてゐた。避暑期の絶頂で白く乾いた村の往來には人が出盛つた。兩側に竝んだ英語混りの看板が目ぶしく光線を吸つてゐた。だが兄妹は其處でも、裾を靡かせて歩き廻つてゐる斷髮の西洋娘、それに似た日本娘、その仲間の若い男達――つまり純白の單衣や、柔かい駱駝織の上着や、生き生きした露はな腕の集りに對して、或る世馴れない、控へ目な團結といふやうな樣子を見せてゐた。知り合ひがなくて手持ち不沙汰なのだ。

私達は直きに郵便局で口をきいた。私が同じ高等學校の出身といふので初めから打ち解け合つた。それまで兄妹は川原づたひに村へ拔け道してゐたのださうだが、親しくなると私の前の坂道から廻つて、椽先きまで立ち寄つたりするやうになつた。私の妻はお孃さんを好きだつた。お孃さんは美人ではなかつたが面長の利潑さうな、そして利潑な感じから來る或る麗しさを具へてゐた。それでゐて子供らしいのだ。男同胞と伴れだつてゐる故か、お孃さんには小學生のやうに心もち大跛に歩く癖があつた。それが顏立ちの利潑さに比べて一種無邪氣な愛嬌をあらはしてゐた。「お――い」から立ち木の向うから私の家へ呼びかけて、お孃さんは男同胞を眞似てゐた。自家では私の小さい娘がそれに答へた。

兄妹は訪ねて來ても、自家にゐる時のやうに互ひに氣輕に話しあつてゐた。その人前を少しも繕はないところ、そしてお孃さんでさへも幾分學問的な匂のする話を混ぜるところ、私には何か新らしい風俗を傍觀してゐる心地がした。細

井の兄妹なぞはさういふ意味で、過渡期の役目をしてゐるのかも知れなかつた。

　或る朝やはり、道から前觸れに聲をかけて、お嬢さんと次男の信二とが椽先まで來た。私は仕事に倦きて、階下の窓で煙草を吹かしてゐた。

「信二さんは何か、醫者に診て貰ひに東京へ行つたんだつて？」

「えゝ、四日ばかり。汽車疲れで今日は眠いんです」信二は前の晩遲く歸つて來たのだ。

「どこが惡かつたの」

「腸。霧で冷えたんです。東京で暑がつたら、やつと療つた」

「嘘よ」お嬢さんが口を入れた。「何でもないのよ」

「自分の病氣でないとからうなんです」信二は妹を小突く眞似をした。私の鼻先でお嬢さんの下げ髮が搖れた。「仲子はエゴイストなんですよ」

「それだつて何も東京へ行くほどの事はなかつたわ。兄はね、妾ちやんと當てゝゐましたの」お嬢さんはしきりと新二を揶揄ひたがつてゐた。私はその口振りから戀事件かなと一寸考へた。「兄はね。――東京でBさん達の作曲學の夏期講座がありましたのよ。丁度この間の三ケ日がBさんの講演の日でしたの。それで兄は母に内密で行つたのよ」

「仲子は音樂のことつていふと、僕を嫉妬してゐるんです」

「たあぜ？妾は公然とおさらひしてもいゝんですもの。――兄はね、音樂にあんまり凝つてはいけないつて、母に禁められてゐますの。それで妾には種んな事、隱してゐますのよ。妾だと母に何でも饒舌ると思つて」

「何だか新二さんは、大變遣り込められていらつしやいますのね」私の妻が、紅茶を持つて來ながら云つた。

「信二さんは作曲をやる氣なの?」

「さうでもないんですけれど」作曲をするといふ事を頭の中で美化してゐるので、さう云はれると信二は少し固くなつた。「でも僕は音樂はずつと續けるつもりです」

「兄さんはあんまり種々なものに手を出し過ぎるのよ。さう何でも一人で出來るわけないわ」

「僕の母はね」信二は明らかにむつとして、私の方へ顏を外らせた。「僕が七月の試驗を休んでしまつて、秋に追試驗を受けなければならなくなつたんで、急にやかましい事を云つてるんです」

「そればかりぢやないわ!」

「お母さんの云ふ通りにしてたら、何にも出來やしないよ」

「でも音樂だけは大變だわ。本當に」

「女は默れ」

私は朝の澄明な空氣のなかで、兄妹の勝手な會話を聞いてゐるのが樂しかつた。私には分つてゐた。落着いた長男の路雄にくらべて、或る若々しい傲慢さを持つた信二は、自分の才能の範圍を今からきめてしまふのが淋しいのだ。彼は文學にも音樂にも哲學にも自分に適した一部分があるやうに感じてゐるのだ。信二はそのために志望を定める――彼の心持から云へば志望を一つに限る――ことが出來ずに迷つてゐるのだつた。私はその焦慮を美しいと思つた。その焦慮は個物の全能を信じかねないのだ。それは新芽をすべての枝から、一面に吹き出させようとしてゐる樹の努力を聯想させた。

――兄妹はこんな會話を時々聞かせに來た。それはいかにも夏らしい交渉だつた。私の家は急に陽氣になつた。私も

それに釣られて、辭書の編輯なぞ早く切り上げて樂しみたい心持が動いた。

九月×日。私はZの殘りの分と、附錄の不規則動詞變化表を濟ませた。それで全部終つたわけだ。

その日、久し振りで私は徹夜して、明け方の四時までかゝつた。秋に入つた山地の常で、濕氣の多い薄明るみが窓硝子を壓してゐた。光りの弱つたランプを目がけて、蛾がしきりと壁に誇張した影を動かしてゐた。私は床にもぐり込んだが、何故か淋しかつた。

もと／＼今度の英和辭典は、在來のものとさう違つた特色を具へてはゐなかつた。それは校長の編輯の方針にも依るが、私の方も義務的にしとほしたのだ。その點私は適任な編輯者ではなかつた。だから一年近くかゝつて仕上げた今も、私には別に明るい喜びは來なかつた。

一體私は氣のいゝ、全力を盡す教員ではなかつた。さうかと云つて私の考へてゐるやうな仕事を完成するには、有り餘る才能と精力と明るい氣持と時間とが要るのだ。私は未に、自分の望んでゐる事と自分に可能な事との不調和を處理出來ずにゐるのだつた。三十四で幼稚と云へば幼稚だ。

私は學校を卒業する頃から、或る長くかゝる研究を思ひ付いてゐた。そして草稿を溜めはじめた。その癖私には研究を中心にした生活に入るだけの大膽さがなかつた。私は知り合の家の桃割れの似合ふ娘――志摩と結婚した。子供が生れた。さういふ變化の間にも草稿は少しづつ、少しづつ溜つた。だが私は研究學校の授業の增えた事を理由にして、その完成には手をつけずにゐたのだ。私は美しい冒險の出來る二十代を無駄に費つてしまつた！そして一番いけないのは、大きい森林のなかの一つの葉の位地を冷淡に見積るやうに、人間生活の進行のなかでの自分の才能の位地を、だん／＼

内輪に見積らうとしてゐる事だつた。私は淋しかつた。それに反抗するだけの火がまだ私の身體にあつた。

私は村の郵便局の横にゐる若い齒科醫が、可笑しなほど精を出してゐる様子を見て、その男が青春を浪費してゐない事をはつきり感じた事があつた。郵便局の内に立つてゐるとよく擧動が見えるのだ。村から五里ほどの北にあるA山の噴火口から、煙がふだんの二倍も出て空一面に流れた夕方があつた。火事のやうな夕燒の日だつた。その時、齒科醫は額に反射鏡をつけた儘、二階から笑ひながらそれを眺めてゐた。赤い光線が反射鏡にきら〳〵映つてゐた。私は感傷的になつた。やはり原稿を投函しに行つてゐたのだ。私は自分の不調和を強く感じて、苦痛とも後悔ともつかない感情から昂奮した。それを今床のなかで思ひ出した。私は不調和の塊りのやうなものだ。

私は暇になつたのだから、皆で村へ出て遊ばうと思つて、兎に角眠る努力をした。これからやり直しだ。明るみの増して來た外へ逃れようとして、蛾が今度は窓硝子を叩いてゐた。それが五月蠅かつた。私は蛾を叩き落してから、やはり疲れてゐたのだらう、四時間ほどぐつすり眠込んだ……

私が暇になつた翌日、細井の一家と二里ほど離れた川べりまで遠足する約束をした。晝過ぎると空模様があやしくなつた。二時ごろ兎に角洋服に着かへて細井の家へ行つた。私の妻は娘と一緒にもう先へ來て、庭に向いた食堂でパンや菓子をせつせと用意してゐた。ところが男達の方はその横手の、山葡萄のからまつた簡單なヴエランダで、氣の抜けた様子をしながら差し向ひになつてゐた。路雄は籐椅子で新聞を擴げ、信二は東京に歸ると直きに追試驗があるので、茶卓に向つてノートを寫してゐた。もう一人加はるといふ川向うの獨逸人の娘はまだ來なかつた。——この二つの部屋の違ひが面白かつた。

「どう？　こんな天氣で行きますか」路雄が新聞から顔を擧げて挨拶がはりに云つた。
「あやしいな。少くも、もう一時間は樣子を見ようよ」信一が私の返事を待たずにかう主張した。
「さう、牧場の右手の雲が氣になるね」
「でも、ころ／＼御馳走も出來ますのよ」私の妻が笑ひながら窓越しに聲をかけた。
「駄目よ、行かなくつちや！　ちつとぐらゐ雨が何なの。雨外套だつて皆さん持つてるぢやありませんか」お孃さんは抗議を申し込みながらも、卵を割つた器に泡立器を突込んで、力まかせに掻き廻してゐた。「それからと――大變ね。もう一度分量を讀んで下さいません？　妾頭がわるいでせう」
「牛乳一合につき砂糖二十匁の割合にて――えゝ、そのなかにお注ぎになつてね――トロ火にかけ、その時に吹き上らうとする時に――厭あね、もうお分りでせう？」
「話だけでも甘味しさうね。不精ばかり云つてる人になんか、やるの止しませうね」
私の妻は只笑つてゐた。
「ねえ、永山さん？妾いゝものを見せませうか」遠足がまだ樂しい齡のお孃さんは、私にも快活に呼びかけた。「縫子ちやん、一寸退いて頂戴な。――これ、永山さん、見覺えなくつて？」
お孃さんは頻に力を入れながら、買つてから十年ぐらゐ經つたらしい古びたアイスクリームの製造器を持ち上げて見せた。
「知りませんね」
「あなたのお家の物置きにありましたの。面白かつてね？」お孃さんは私の妻を振り返つた。「妾ね、この間縫子さんと

這入つて、ちやんと見つけて置きましたのよ。隨分汚かつたんですけれど、今日志摩子さんと持ち出して洗ひましたの。――隨分こゝまで重かつたのね。妾ね、坂のところで仰向けにすべりましたの」

私の妻はそれを思ひ出してゆつくり笑ひ續けてゐた。地味な變化のない生活をして來た彼女は、斯ういふ事が突飛で面白くてならないといふ樣子だつた。

ヴエランダでは信二がノートの寫しで機嫌をわるくしてゐた。

「有賀のノートも當てにならないな」彼はそれを貸してくれた友達を貶（けな）してゐた。「兄さん、これはどう云ふんです」

「エンテレケイア？ アリストテレスの使つた言葉だね？」路雄は弟のノートを覗いて、傍（かたはら）の古代哲學史の參考書をめくりながら說明してやつてゐた。「つまりね――さうだ。質料から形相へすゝむ運動を云ふのさ。それがエンテレケイア、實現なんだ。アリストテレスはプラトンのやうに、イデアを高いところに置いて二元論的に考へたくなかつたのさ。それで質料は形相の潛在態だし、形相は質料の現實態だと見たんだよ。その實現化がエンテレケイアなのさ。ゲーテはこの考へ方の影響を受けたさうだよ」

「一寸其處のところ、頁にしるしをして置いて下さい」眉間を寄せてノートを直しながら、信二が不愛想に云つた。

「うん、裏の頁にいゝ例があるよ。――その椅子に乘りたいんですか？」路雄は、ちよこ〱其處へ出て行つた私の娘を籐椅子に乘せてやつた。「たとへば櫻の種子は潛在態にある櫻なんだ。そして生長した櫻は現實態にある櫻の種子なんだ。そこで、種子が芽をふいて、伸びて、枝を擴げる、その運動がエンテレケイアなんだ。――だけれどそんな所試驗に出やしないよ」

「さうかなあ。縫子さん、こつちの鉛筆をお使ひなさいね。赤と靑と兩方書けていゝでせう？」何處へでも行つて大人

の邪魔をする私の娘に、信二は鉛筆と紙を貸して、その代り萬年筆を返して貰つてゐた。「ねえ、見ていらつしやい。縫子さんにも大いに關係のある事を勉强してゐるんですからね。縫子さんは今に脊が伸びて、ママさんのやうになるんでせう。だから縫子さんはね、耳隱しかなんかの女學生の潜在態なんですよ」

卵をまぜた牛乳が沸騰した。レモン臭い汁がアイスクリームの器械に流し込まれた。そして男達が代るがはる雇はれて、力の要る廻轉器(ハンドル)を廻したり中止したりしてゐるうちに、突然大粒の斑點がヴエランダの板敷に散らばつた。皆「おや〳〵」といふやうな顏を擧げた。遠くで雷が靜かに鳴つてゐる。山葡萄は激しく濡れはじめた。

「雨ですよ。干し物を取りこんで……」

脚氣にかゝつてゐる細井の母親が、中二階のやうな部屋から台所に梯をかけてゐた。表の路を、上着の下にラケットを隱した西洋人の男女が、白靴を大きく動かしながら、水溜りを跳び〳〵馳けて行つた。

「バックマンのお孃さんがいらしつた！」

「何處に。本當！　ドラさん早く」

「遲くなりました」

「今日はドラさん。お濡れになつたでせう？」

「大變遲くなりました。これ、お菓子です」

原色の繪具を思ひ出させる、青く澄んだ眼をした川向うの獨逸人の娘は、ひと通り握手をすると何故か顏を赤くして、女達の後ろの半端なところに突立つた。しぶきのために椽近くには居られなくなつて、皆はヴエランダの奥の部屋に入つた。薄暗かつた。流石にもう出掛けるどころではなかつた。

雷は段々に近いた。暗いほど繁つた庭樹が一齊に揺れ、雨足が太い直線になつて草に落ち込んだ。

「お母さんも降りていらつしやい」中二階に向つてお孃さんが呼んだ。「妾、裏の樅の木が大きいから恐いわ」

「皆さんいらつしやいませ。縫子さん、折角の遠足が臺なしになりましたのね」母親が階段を降りながら挨拶したが、家ぢう雨の音で充滿してゐるので、斷れ斷れにしか聞えなかつた。「大分神鳴りがひどいやうね。金具は兎に角隱して置く方がいゝよ」

「大丈夫ですよ。落ちる率はかへつて、停車場邊の野原の方が多いんだから」

「率だなんて、そんなに此處は落ちるんですか」

「さうですつて、御存知ないの？」お孃さんは、時計其他の金具を布團の下に隱しながら説明した。「去年は五六度も別莊に落ちたんですつて。それが大概煖爐の煙突から傳つて、床で彈んで散るんですつて」

「本當かしら」

「本當よ！煖爐の床に燒け焦げが出來て、それから斜かいの卓にあつたビスケツトの鑵に穴があいてゐた事があつたさうよ。おゝ恐い。もつと此方へ塊りませうよ」

そして皆は兎に角、奥の壁に近いところに車座に集まつた。遠足は見事に失敗した。

人騒がせな夕立の晴れたのはそれから一時間經つた後だつた。高原の雷雨のあとは特別だ。今まで雲に束縛されてゐたと云はんばかりの強い陽が、厚味のある枝々を持つた林に透きとほり、傾斜面にある雜草には日向と陰とが泡のやうに溢れた。お孃さんとドラは私の娘を連れて、裾の濡れるのも構はず東屋に降りて行つた。私達は又ヴエランダに塊つ

た。清々しい風が來た。
「どう、晴れた上はそろ／＼アイスクリームにしようか」
「東京へ行つたくらゐの養生家が、お腹はいゝの？」
「大丈夫ですとも」と信二は母親に答へてゐた。「雨上りは冷えやしませんよ」
「さうだ。折角の勞力を無駄にするのも惜しいな」
「ぢやあ持つて參りませうか」私の妻が男達の顔色を見て立つた。
「いゝえ、どうぞお構ひなく。仲子、仲子。アイスクリームが始まるんですよ。手傳ひにいらつしやい」
「今一寸待つて！」お孃さんが東屋で俯きながら答へた。其處の三人は、信二のを貰つた紙を中心にして、髮を觸れ合はすばかりに塊つてゐた。「今面白いことがあるの。一寸氣を散らさないで頂戴」
「懼れ入ります。志摩子さん」
まだ乾かない卓に、母親と私の妻がアイスクリームの容器や皿を並べてゐた。その時、庭ではお孃さんとドラの活潑な歡聲があがつた。そして三人とも水玉の光つた雜草を搖れさせながら、勢よく此方へ馳け出して來た。
「何の騷ぎなの、一體」
「縫子さんたらね！」お孃さんの明るい顏には妙な昂奮が現はれてゐた。「妾の書いたとほりを眞似して、いま假名をお書きになつたのよ」
「早いね。まだ五つなんだらう」
「縫子さん偉いなあ」

「本當に偉いわ！初めね、妾冗談に片假名をドラさんに敎へてあげてゐたんでせう。さうしたら縫子さんが何時の間にかその眞似して、出鱈目な格好の字を澤山書いていらつしやるのよ。妾驚いてしまつたの。それから妾が試しにお名前を書いてあげたのよ。さうしたら到頭出來てしまひましたの。そして一人で笑つていらつしやるのよ。ドラさんとまるで競爭でしたの」

「どれ。やあ大出來だ。釣合ひがひどく獨創的ぢやないか。皆でアイスクリームのお祝ひをしよう」

私の妻にもお孃さんの感動が感染つてゐた。彼女は活々と兩眉を擧げてゐたが、それから子供らしく笑ひ出した。

「さうでしたの？この間うちから切りと何か出まかせを書いた居りましたけれど……」彼女は、私の態度をチラと見ながら遠慮がちに云つてゐた。

「まあ縫子さん、本當に感心ねえ」母親も一緒になつて愛想よく立ち上つた。「さあ此方へ來て見せて頂戴。どう、縫子さんは冷たいもの宜しいの？」

「えゝ戴かせて居ります」

「縫子さん、もう幼稚園へ行けますよ」信二が美しい雨上りにじつとして居られないで、ヴェランダを彼方此方歩きながら云つた。「だから先刻、ほら、僕が御本の説明をしてあげたとほりでせう？」

空氣が稀薄で、皆の入れ混つた聲が遠くまで明瞭り聞えるやうに思はれた。十町ほどの低地にある停車場では、空身の汽罐車が幾度も小さく出入りしてゐる。何か得體の知れない大きなものが力の過剰を來してゐる、さういふ感じが私にはした。卓には艶々した氷菓が裝はれ、匙が音を立てゝ配られた。風で私達の襟は飜られた。

「うゝ。これあいけない。腹に沁みる。皆はどうだね」―トロふくむだ路雄が後の者を見廻した。

「折角ですけれど、少し冷たいのね」私の妻が例の癖で笑ひ出した。
「これあ晩飯に喰いものを食べて、その後だといゝんだよ」
信二がそんな我儘を云つて、最先に匙を投げ出した。ドラだけが禮儀を守つて、少しづゝ叮嚀に口に入れてゐた。
「實際、歯が痛いやうね」
「着物がやはり濕つて、みんなが冷え込んでゐるんだよ」
「しかし、この前も夕立のあと、街で食べたらう。あの時は甘味かつたがなあ」
だが廣々した眺望のなかで、この失策は何だか可笑しかつた。
「僕も止さう！」路雄も持て餘して皿を置いた。「自分で手傳つたんだから甘味く食べようと思つて、しきりと想像を働かして見たが、やはり駄目だつた」彼は西日で目ぶしい眼をしながら笑つた。「もう晴天の日でなくつちや喰へないね。さういふ時候なんだ。薄が穗を出してゐるんだもの」
「早いな！」信二は何故かむつつりした顔を見せた。「秋になると直ぐに試驗か。だけれどモツアルトのヴアイオリン・コンサートが開かれるな。管絃樂付きのやつを！」

……私達の歸る前日になつた。學校から貰つた休暇はまだ餘つてゐるが、此處は私の娘に涼し過ぎるので、T市まで降りて妻の姉の家に寄らうと思つてゐる。此處では林や丘にある方々の別莊が戸を締めて、陰氣な見かけになりはじめた。――その午後私達は細井の連中に誘はれて、土曜毎に避暑團でやつてゐる家庭向きの活動寫眞を見に行つた。冷々した霧が下りたので、名殘の散歩は中止したのだ。會場はテニスコートの傍りにある倶樂部だつた。私達が這入つて

行くと、窓を暗くした會場では音楽も辯士もなく、廻轉機だけがもうカタ〳〵と音を續けてゐた。霧のために西洋人も大分集まつた。その女達は皆毛織の上着を羽織つてゐた。こゝにも避暑期の終つた感じがあつた。

輕い喜劇が一つあつて、それからアメリカ物の社會劇が始まつた。これはどう見ても取り柄のない淺薄な悲劇だつた。或る年を取つた母親が、酒や投機に溺れてゐる息子を盲目的に甘やかしてゐるのだ。そして彼女は同じ町の人々――閑靜な教會や田舍警官や電車のない大通りや噂好きの女達から成り立つてゐる町の人々の手前を絶えず繕つてゐるのだつた。だが長男は別にそれを感じもせず、たうとう銀行で詐欺をはたらいてしまふ。暇な町は急に活氣づいた。噂の種が出來ると活氣づく町である。だが母親はそれを知つて、自分の行ひのやうに裝ふ。しかし事件はそのために一層惡くなる。――かういふ在り來りの刺戟的な筋に過ぎなかつた。その淬白髮を無雜作に束ねた母親の、生きる事に疲れたやうな仕草が、觀客を結局感傷的にさせてしまふのだ。お孃さんと私の妻はひそ〳〵不平を零しながら、やはり半巾で眼を拭いたりしてゐた。それでも私達は、かういふ寫眞に大抵附き物のハツピーエンディングを豫想しながら、神妙に腰掛けてゐた。どうせ散歩をやめて來たのだ。私達にしても幕の上に笑ひ顏の塊りを見て、霧につゝまれた午後の締めくゝりにした方がよかつた。それに息子には一人、幼な馴染の女友達がある。それが明るい謎なのだ。

だが筋はます〳〵重苦しくすゝむ許りだつた。母親はしまひに毒を呑む。息子が偶然歸つて來てそれを發見する。だが醫師のかはりに刑事が扉を開ける。そして應急手當が見す〳〵遲れる。

「ひどい作り物だね」私は笑つてしまはうとした。

「うん。こんな馬鹿な話があるもんか」信二がやつと堪らへてゐたやうに子供らしく憤慨した。

「本當ね！歸りませうよ」眼を赤くしてゐるお孃さんは、腹癒せをするやうに立ち上つた。「歩いた

方がましだわ」

私達は揃つてぞろ〳〵起つた。その時だつた。機械に故障が起つたのだらう、突然幕が暗くなつてしまつた。—

「おや」

私が最後に見たのは、母親のもう動かなくなつた表情と、肩を大きく揺つて吐息をついた動作の断れ片だつた。その瞬間に途切れたのだ。幕には窓の薄明りがぼんやり達してゐる。——私はほつとした。

そして私の眼には、幕の上の母親自身も安堵の表情にかへつたやうに映つたのだ。大きく吐息をつくと同時に暗くなつた、あの動作の断れ片が私にそんなイリユージョンを起させた。私は母親の休息を感じた。あれでもう解放されたのだと思つた。

玄關の明るみへ出た。霧が少し薄らいでゐた。寂れたテニスコートの隅では西洋人の子供が練習仕合をやつてゐた。今までせゝこましく動いてゐたものが、急に眼の前に失くなつたのは間の抜けた感じだつた。私は生命の止まつた後の靜かさを考へてゐた。田舎廻りの機械の故障が、偶然にそれを現はしてくれたのだ。

私達は歌をうたつたりして、街外れから驛へ行く縣道を歩いた。霧の切れた、絹景峰といふ名の峠の上にぼんやりした月が出た。それは道の兩側に咲いてゐる月見草を大きくしたやうな、夢のやうに軟かい淡黄色の月だつた。寫眞が下らなかつたので私達には一旦押へた散歩慾が急に起つたのだ。五時何分かの急行で歸る客らしく、四五台の俥が先の方を行儀よく揺れながら馳けてゐた。

霧さへ晴れゝば高地の夕方はいつまでも明るかつた。私は、離れ〳〵に花を摘んだり道草を喰つたりしてゐる他の者に、いゝ加減な應答をしてゐた。死が休息だとこんな場所で考へるのが物珍らしかつた。同時に自分がかうやつて物を

感じて歩いてゐる事が、何か不思議に自由な事のやうに感ぜられた。私は得體の知れない自由なものを背つてゐる、それが時間なのだ、かういふ氣がした。私は大きいものゝなかの小さいものだ。それでも暮れかゝつた空氣のなかで、生きてゐる事が妙に自由なものだといふ感情が私を身輕にさせた。

薄の一面に白い土手のなかを、もう明りを點けた列車の長い線が走つて來た。それが急行と入れ違ひになる列車だつた。

「明日は何時なの？」お孃さんが、まだ愛らしく腫れてゐる眼蓋を見せながら、私達に近づいた。

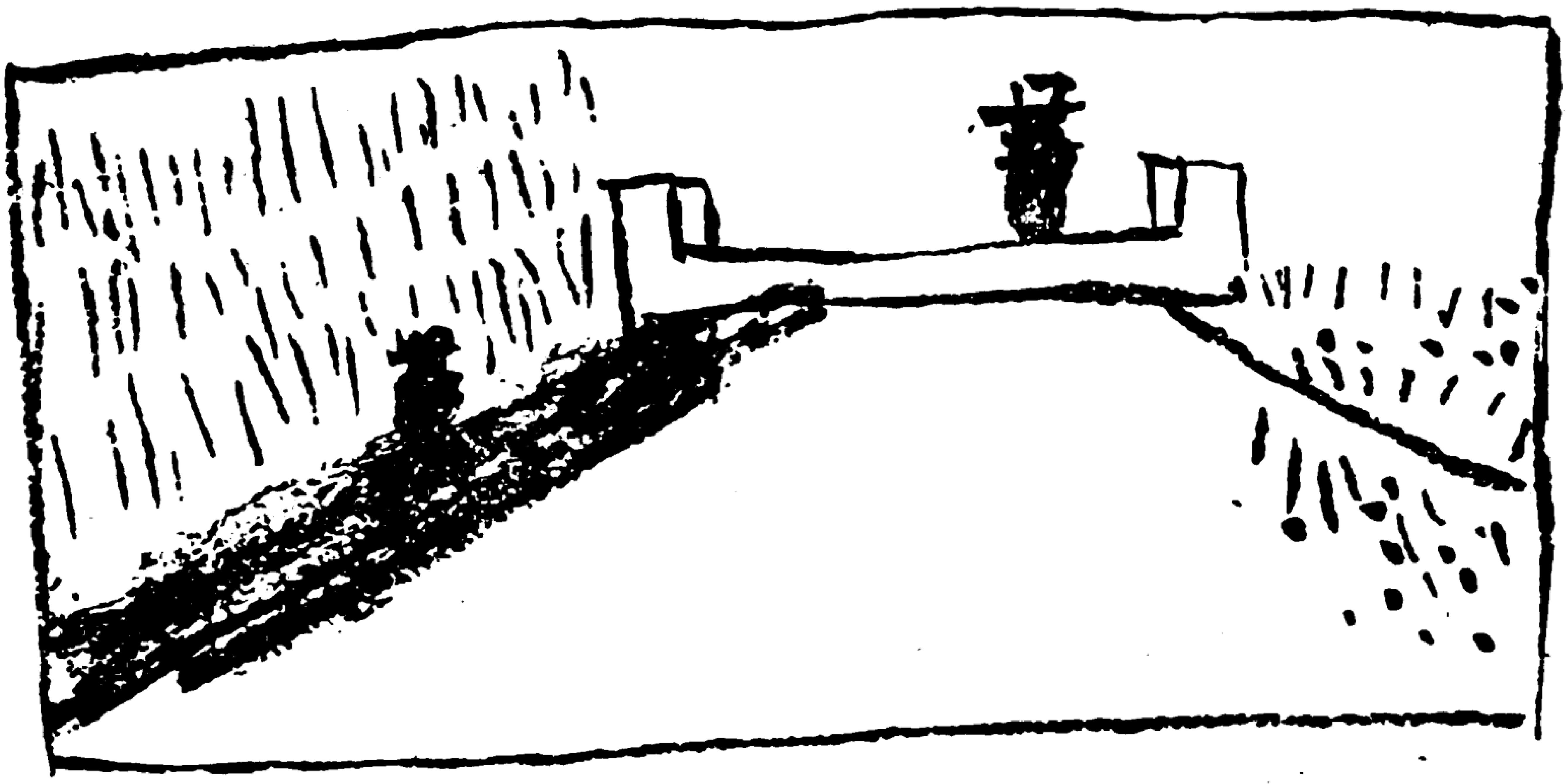
「上野行きでないから、驛へ寄つて調べようかしら」

「さう〳〵、あなた方はTなのね」

「TだとMで乘り換ですね」松蟲草や甘草(かんざう)の咲いた叢へ侵入してゐた信一が、路へ飛び下りて云つた。「惡い時間のに乘ると待たされますよ」

「明日はみんなで送りませうね」お孃さんは停車場通りの橙々色(だい〳〵)の明るみを受けながら、同胞(きやうだい)を振り返つた。「縫子さん、お歸りになつたらお母さまにもつと字々を教はつて、おハガキ下さいね」

私はさういふ頃、例の草稿の整理に手を付けてゐたいものだと思つた。（十四年六月）



ある夜の出來事

近松秋江

お菊は夜半にふつと眼を覺ました。その爲に眼が覺めたのかも知れぬ、すぐ頭の上の二階で、みし〳〵といふ人の足音のやうな音が聞える。お菊は身體中を神經のやうにして、じつと耳を澄ました。

平常二階には夫が一人で寢るのだが、今晩は、大きい方の子供を十日ばかり前から牛込の小兒科の醫院に入れてゐるので、そこへいつて泊つてゐるのだから人の居る筈はないのだが、何だか步く足音がするやうである。お菊は枕から頭を擡げて自分の耳を疑つてみた。昨夕宵の内に女中が戸締りをしたあとを、寢る前に自分でもう一遍見にいつたのであつたが、その時は表の雨戸の輳も下りてゐたし、北口の高い窓もよく落ちてゐた。鼠がよく天井裏で暴れるので、鼠が何か喰べに來てゐるのか。それとも軒の廂を猫でも步いてゐるのか……主人が留守であるだけ彼女は一層氣になるので、幾度となく耳を澄ましてゐるうちに頭はすつかり冴えてしまつた。そしてそつと障子をあけて廊下づたひに階段の上り口までいつてみると、そ

こに階段を照らすための五色の電燈が、たしかに消して置いたのに明々と點つてゐることを發見した。たしかに何か入つてゐるにちがひない！…………さう思ふと彼女は總身にさあツと冷水を打かけられたやうな氣がした。しかし恐い割りに彼女は度胸が据つてゐた。こんな時には、慌てゝ聲を立てたりしては却つてよくないといふやうなことを新聞などで屢々見てゐたので、彼女はそうつと音を立てぬやうにして玄關脇の女中部屋に寢てゐる女中を起しに行つた。

家には三十五六の元氣の好い大年增の女と、十四になる、これも年の割に役に立つ子守とが居つた。それに一昨年生まれた上の女兒と、この二月に生れたばかりの赤ン坊が居るのであるが、皆な女ばかりで男といへば主人が一人きりであつた。

お菊は一旦また緣側づたひに奥の八疊の寢室の方へ忍び足して戻つて來て、そこから襖一つ隔てた納戸の三疊の方へ廻はつて、中廊下から臺處の板の間をつたふて二疊部屋に入つていつた。そして、低聲で、

「おばさん〱！」と二疊一杯に寢てゐる女中を、そうつと揺り起した。二度ばかりさういふと、女中は眼を覺ました。

「おばさん、二階へ泥棒が入つてゐるらしいから一寸起きて下さい。」

お菊がさういふと、女中のお新は「えツ！」といひながら、すぐ眼を覺まして、寢床の上に起きあがつた。

「二階に泥坊が入つてゐるんです。」お菊は低聲に又云つた。

「さうですか！」と、お新は、寢ざめの眼を見張るやうにしてお菊と顏を見合はせた。

「あれ、音がするでせう。…………今階段の下から覗いて見たら、あそこの電燈をつけてゐるんです。」

お新は凝乎と耳を立てゝゐると、なるほど自分のすぐ頭の上で、さあツ〱と足で疊の上を歩いてゐる音がする。さ

う思ふと、彼女も總身にざあッと水を浴びたやうに體中の血が一時に冷えてしまつた。眞青な顔をして、眼ばかり恐怖に慴えながら、

「あゝ、足音がする。…………驚きましたねえ。」といつたが、どうしていゝか分らなかつた。

「御苦勞ですが、そこの交番へいつて、さういつて來てくれませんか。」お菊は抑へるやうな聲でいつた。

「もうや（子守）を起して二人で。」

「えゝ…………」とお新は返事をしたが、さうかといつて、あとに細君一人を殘して二人で出てゆくのも不安であつた。今まで、盜賊の入つたことは新聞で見たり、話に聞いたりしたことはあつたが、それが今面りに自分達の身の上に降つて湧いて來ようとは夢にも思はなかつた。壽命が縮まるやうであつた。

それはお菊も同じ思ひであつた。どんな者が居るか、正體が分らないだけに一層恐怖は強かつた。

「いつて來ませう。」と、お新は勇氣を振ひ起して寢床から起き上がつた。

それから六疊の茶の室に來て、子守のお咲をそうつと揺り起した。

「咲ちやん、二階に泥坊が來てゐるんだからね、一寸起きて頂戴。……聲を立てゝはいけないよ。」

といふと、お咲は、ぱつちりと床の中で眼を開けたが、なか〱確り者なので、寢呆けもせず、そのまゝ默つて起き出てた。

「おばさんと二人で交番まで行つて來て頂戴。」お菊は盜むやうにいつた。

不斷から餘計な口數を利かないお咲は、お菊がさういつても默つてゐた。

お新は氣になるので、

「奥さんお一人で大丈夫ですか。」と念を押した。

「大丈夫ですから、構はずいつて下さい。」

お菊も口ではさういつたが、腹の中では、二人に出て行かれて自分一人の處へ泥坊が降りて來たら、どうしようかと思ふと心細かつたが、今の場合そんなことを云つてゐられなかつた。

お新もお咲も寢卷の浴衣一枚のまゝ、そうつと足音を忍ばせながら、二階の方に階下の動靜が聞えぬやうに、お勝手口や玄關の方から出ないで、奥の三疊の納戸の肱掛窻の戸をそうつと開けて、そこから裸足のまゝ地べたに飛び下りた。そして背戸から井戸端の勝手口の戸を開けて門の外に出た。

お新は、よく新聞などでも見てゐることで、泥坊が一人きりでなく、合棒が外に居つて見張つてゐるといふやうなこともあるから、もし、そんな者でも垣の外に立つてゐたら、どうしようかと、外に出るのも心配であつたが、いゝ鹽梅にそんな者の居る樣子はなかつたが、此の頃の欝陶しい夜の容は、今にも雨の落ちて來さうに、どんよりと曇つて、夜半の冷い風が寢起きの肌に氣味惡く觸れた。今何時ころか、はつきり時刻が分らぬが、空の具合では、まだ夜の明けるまでには遠いと思はれて、そこらの垣根や道の隅に立つてゐる樹木の隅などが眞暗の闇に罩められてゐる。門の外には太い電柱が立つてゐて、そこへ夜中電燈が一つ點つてゐるのであるが、今夜もそればかりは微かにそこらを照してゐる。

自分達がかうして交番に行つたあとで二階から泥棒が降りて來て、奥さんと赤ちゃん一人きりだと思つてどんなことを爲るかも知れぬと思ふと、お新は又しても、交番まで往くにもゆかれないやうな氣がして、お咲と二人で少時門の外に佇んで、二階から階段を下りて來る音でもするか凝乎と家の中の物音に耳を澄ましたが、そんな樣子もない。階段を

つたところに、門の方に向いて、明り取りの高い窓が一つあつて擦硝子が嵌つてゐた。丁度そこの處に階段を照らす電燈が下つてゐるのだが、見ると、なるほど、不斷は消してある電燈が明々とその擦硝子に映つてゐる。泥坊が點したんだなと思ふと、それがひどく不氣味に思はれた。

「さあ、早くいつて來よう。」

と、彼女はお吟を促して、二人は脚の底の痛いのも忘れてそのまゝ四五丁の道を夢中に驅けて阪下の交番にいつて訴へた。

交番の時計は丁度三時であつた。

起きてゐた巡査は、奥の室に寢てゐた巡査を呼び起して、

「今、女が二人裸足で驅けて來たんだ……起きてくれないか。」と聲をかけた。

非番の巡査は早速起き出して一緒に來てくれた。

お菊は、二人を、納戸の窓から外に出して置いて、自分はそのまゝ又もとの寢床に來て、そうつと赤ン坊の傍に寄添ふて横になつた。

いつも傍で一寸動いても、すぐ泣き出すので、今にきつと泣き出すにちがひない。これが泣き出したら困ると思つてゐたが、先刻から好い鹽梅に眼を覺まさなかつた。それで又そうつと、泣き聲を立てさせぬやうに寢てゐる口に乳房を持つていつて含ませた。そして息を殺して眼を瞑つてゐた。

平常家には金のあることはなかつた。主人の經濟がどうなつてゐるかといふやうなことも、彼女には少しも分らなかつたが、その夫の懐にも、いつも切り詰めたゞけの金しか用意されてゐないことは彼女にも大抵知れてゐた。お菊自身の内證金といふやうなものもなかつた。

それでも昨日は晦日の前日なので、その日に餘處から入つて來た金が丁度貳百圓あつた。それは昨日主人が外出してゐる間に他から持つて來たので、自分が預つておいて、夕方主人が歸つて來ると、袋のまゝ夫に渡した。その金は今日朝から家賃その他の諸拂に使つて、殘つた金は夫が懐中にして、今朝自分と一緒に牛込の病院へ往く時持つて出た筈だ。そして牛込で自分の蝙蝠傘などを買つてもらつたり、病院の會計もしなければならぬから夫の手にも殆ど金は殘つてゐまいが、諸拂ひにといつて、自分が預つたゞけの金も、皆な晩までに出てしまつて、蝦蟇口の中にはたつた六錢しか銅貨が殘つてゐなかつた。尙一人二人わづかばかりの拂ひの處を取りに來られたら、明日に延ばして置かなければならなかつた。

金は、そんな譯で少しも有合はさなかつたが、二階には簞笥二棹にそれでも衣類が一杯つまつてゐた。

お菊は息を殺して、じつと眼を瞑りながら、今に二階から、其等の衣類を大きな風呂敷包みにして持つて降りて來るにちがひないと思つてゐた。その簞笥の中には自分の物といつては抽斗一つに入つてゐるきりだが、そこにはまだ反のまゝで仕立てゝゐない冬の物や夏のものなどもあつた。不斷主人は、衣類の出入れなども、みんな自分の手でするので、お菊は抽出の中のことは、どうなつてゐるか少しも知らなかつたが、凝つた金目の物が一枚づゝ鬱金の風呂敷に包んで藏つてあることを知つてゐた。それに主人は、近頃殆ど洋服ばかりを着てゐるので、中には、仕立てたまゝでまだ仕附絲も取つてゐないものもあつた。

主人の留守の間にあれを皆な持つて行かれるのだと思ふと、お菊は殘念で、悔しくつて堪らなかつたが、此の場合、聲を出したりして事を荒立てゝは却つて可くないと思つて、早く交番から來てくれるやうにと、それぱかりを心に念じてゐた。

交番から驅け附けて來る間に、きつと泥坊はもう下りて來るにちがひない、さうしたら爲方ない、やつぱり眠つた振りをして居らうと思つてゐるところへ、先つきの納戸の窓からお新が、小聲で、

「奥さん〳〵。」といつた。

お菊は蘇生したやうに起き上がつて、そつちへいつた。

「お廻はりさんが來て下さいました。……まだ居りますか。」

「えゝ、まだ居ります……」

「それはよかつた。……何處から入つてもらひませう」

「そちらの水口の處を開けるから待つて下さい。」

お菊はもう、少しくらゐ音を立てたつて大丈夫だと思つて勝手口の硝子戸の釘をがちや〳〵拔いた。

そこに背の高い巡査が立つてゐた。

「どうもご苦勞さまでございました。」

「あ、泥坊はまだ往かないかね。」

「まだ居ります。」

それから警官は雜巾を取らして、靴の底を拭いて、そのまゝ二階に上つていつた。お菊もその後から蹤いていつた。

二階には五十燭が點してあるのだが、それは點火してゐないので、階段の上に點つてゐる五燭だけでは壁や襖が光を遮つて座敷の中は眞暗であつた。

五十燭の方は、押入の中に別にスヰッチが備へ附けてあつて、そこから絲を引いて消したり點したりするやうになつてゐた。泥坊は點火しようと思つて、電燈の處のスヰッチを捻つてみたがどうしても點らなかつたので、そのまゝ暗中を模索してゐたものらしい。

お菊が押入れの絲を引くと、ぱつと座敷の中が明るくなつた。

見ると座敷には泥坊は居なかつた。お菊は、どうしたのだらうかと、一寸不審に思つた。あんな騒ぎをして、泥坊が入つたのではなかつたのだとすると、深夜に來てもらつた警官に對して申譯ないと思つた。

そして警官が椽側の方を覗くと戸袋の隅の古新聞を積み重ねてある處へ泥坊が小さくなつて蹲んでゐる姿を發見した。

「こらッ！　貴様は何だ？」

と大喝一聲した。

「こらッ！　其處で何してゐる？」

警官は續けさまにいつて、いきなり其奴の襟頸を捉んで明るい方へ引擦り出した。泥坊はますく\身體を小さくして、

「ご免下さい。」と卑屈な聲を出した。

「貴様、その手に持つてゐるのは何だ？」

お菊は警官の背後から、恐々ながら覗いてゐると、泥坊は片手に庖丁を持つてゐた。それは、どうやら自宅の台處に置いてある菜切り庖丁らしかつた。

そして電燈の明るみに引出されたところをよく見ると、恐ろしい手剛い奴と思つてゐたのと相違して、やつと十九か二十くらゐの青二才であつた。見るから病身らしい、眼ばかりぎよろ／＼とした、瘦せつこけた男で、食べる物も碌に食べてゐないらしい樣子である。それでも洋服を着てちやんと襟飾などをしてゐる。外套の上から皮帶を締めて、警官の前にぺこ／＼頭を下げて「どうぞ許して下さい」といつてゐる恰好つたらない。

「その庖丁は何處から持つて來た？」

「下の臺所から持つてまゐりました。」

「けしからん奴だ。何の爲めにそんな物を持つて來た？」

「どうも相濟みません。……これで簞笥をあけようと思ひました。」

泥坊は小さく畏まつていつた。

「貴樣の內は一體何處だ？」

「大井町です。」

「大井町！……そんな遠方からわざ／＼此處まで竊盜に來たのか。」

泥坊は頻りに頭を下げながら、

「どうぞ許して下さい。兩親が心配しますから。」と、泣面をしていつた。

「とにかく警察まで來い。」

警官は彼を引立てゝ階下に降りて來た。

お新と子守のお吹は、階下の茶の室で先刻から、凝乎と堅唾を呑んで二階の樣子に耳を澄ましてゐたが、やがて警官

に連れ引かれて降りて來た泥坊を見ると、その、餘りに弱々しい樣子であるのに、お新は、何あんだ、こんな奴なら、わざ〳〵裸足で交番まで驅けて行かなくたつて、自分だつて捻り潰してやるんだつたのに、その爲めに三年も壽命を縮めさせられたと思つたら、癪に障つた。

泥坊は又そこに膝を突いて小さくなりながら、今にも泣き出しさうに、

「どうぞ許して下さい、兩親が心配しますから。」

と、又ぺこ〳〵頭を下げた。

お菊やお新は腹も立つが、いかにも蒼々としたその姿を見ると可哀さうにも思はれた。

「あんなに何處もよく戸締りをしてあるのに。一體何處から入つたの？」

お新は怒るやうに訊いてみた。

「そこの便所から入りました。」

泥坊はぎよろんとした眼をしてお新の方をじろじろ見ながらいつた。

彼は入つて來た時臺處から六疊の茶の室を通りながら、そこに小女の寢てゐるのと、境の襖の開いてゐる處から奥の八疊に赤ン坊を抱いて寢てゐる細君の居ることだけは知つてゐたが、も一人他の女の居つたことは知らなかつた。

「あ、あんな處から入つて來たの……」

お新はお菊と顏を見合はして、二人とも噴出しさうになつたが、まだ胸の動悸が鎭まらぬので笑ふこともならなかつた。

「ほんとに吃驚りさせられるぢやないか。」

お新はまだ血の氣の止まつてゐるやうな眞靑な顏をして、何かいつてやりたいやうに云つた。
「どうも濟みません。………どうぞ許して下さい、兩親が心配しますから。」
親のことが餘程氣にかゝると思はれて、彼はそれを何度も繰返していつた。
「お前さん今になつてそんなことを幾らお賴みしたつて爲方がないぢやないか。」
お新はいつた
「とにかく警察まで一緖に來い。」
警官は促した。
「え。」
「逃げると繩を打つぞ。逃げないか。」
「逃げません。」
「ぢや、そのまゝで可い。さあ往かう。」
お菊やお新が先きに立つて、今度は玄關を開けて、そつちへ送り出した。
「どうも御苦勞さまでございました。」
お新はさういつてから、又硝子の格子口を締めて、掛金の棒を差した。
そして茶の室に戻つて來ながら、
「何だ。あんな弱い奴と知つたら、自分一人で捻り潰してやるんだつた。彼奴のお蔭で三年も壽命を縮めた。癪に障つて爲樣がない。」

「あんな奴とは思はなかつた……」お菊もほつとしたやうにいつた。

「後で奥さん一人でどんな目に逢つてゐるか知れないと思ふと、脚の痛いのも忘れて駆けていつた。」

「恐かつたわ、私し。何うしようかと思つた。」

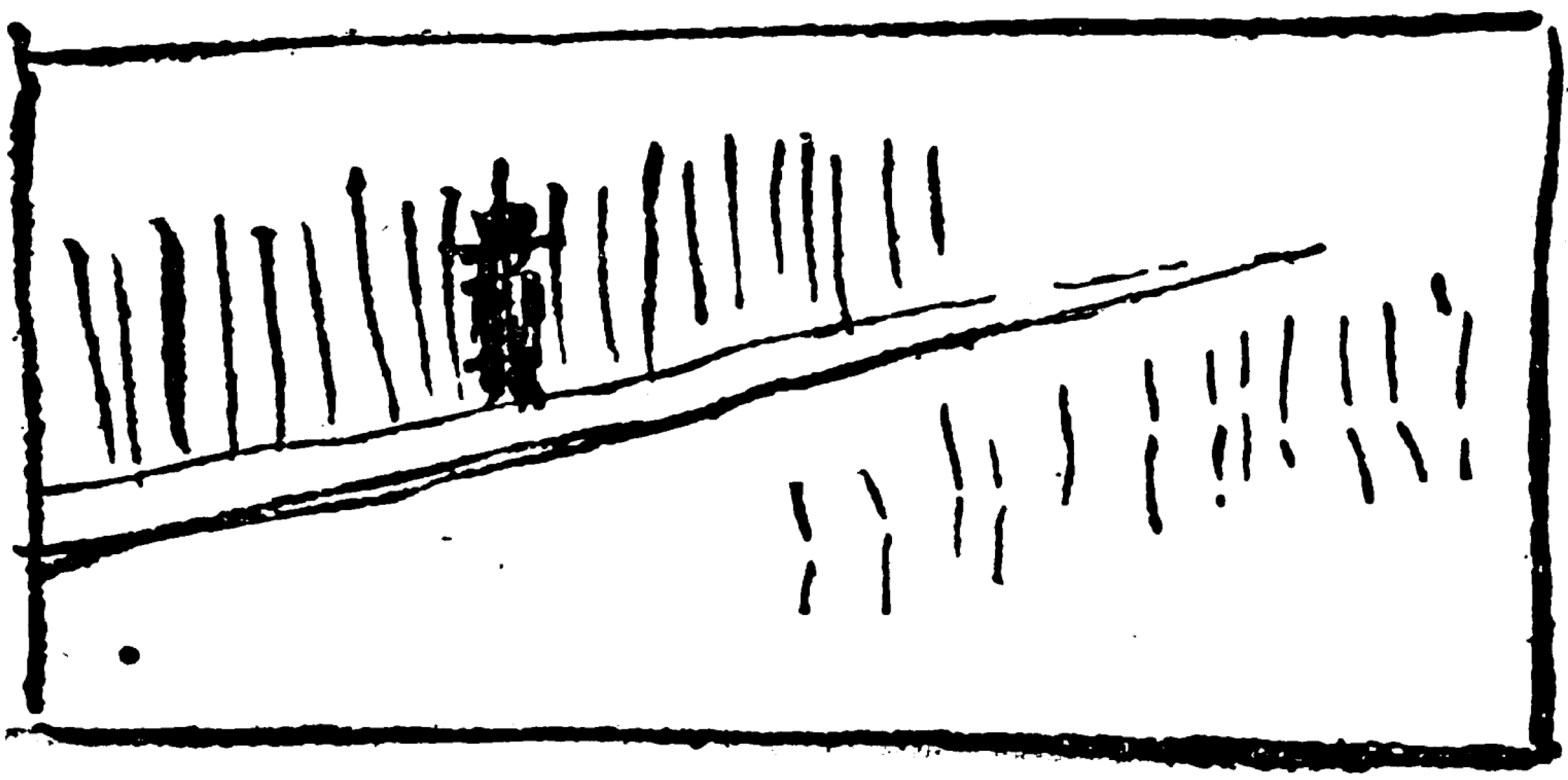
子守のお咲がやつと、はじめて口を利いた。

「もうやちやん、よく寝呆けなかつたねえ。起した時あんたに聲でも立てられると失敗ると思つてゐたら、よく黙つてゐた。感心だよ。」

お菊はいつもお咲に物をいふ時にいふやうに、少しく戯謔ふやうにいつた。

「ほんとうにもうやは確乎してゐる。」お菊は賞讃した。

それから三人は猶ほ暫らくそこに坐つて、昂奮状態に泥坊の話をつゞけてゐた。やがて、まだ一と寝入りする間があるので、ふたゝび寝床に入つたが、たうとう夜の明けるまで眠れなかつた。(おはり)——(六月十二日)



長篇『この三つのもの』（二）

佐藤春夫

二章

「大野はまた何だつて、そんなに北村に慍つてゐるんです」

「それが私にもわかりませんの」お八重は道の眞中の水溜りをよけながら、足早な赤木と一緒に歩くのに骨を折つてゐるのを、赤木は氣がついて自分の歩をゆるめた。お八重は歩きながらまた話し出した「――せんにはあんなに仲がよかつたのでせうここへ來る時にも、大野もゐることだしと言つてここに決めたほどだつたのでせう。毎日のやうに行つたり來たりしてゐたのが、急にかうなつてしまつたのですもの、わたしほんとうに心細いのですわ。どうにかしてもとのやうになつてくれればいいと思つて。大野さんはあのとほりの方ですもの、北村が折れて出さへすればいいのですわ。北村が歸ればきつと自然その話が出ますわ。その時、あなたもさう仰言つて下さいね」

「北村も惱つてゐるんですか」

「え、何だか。大野さんがあんまり判らなすぎるつて」

「ふむ?」

「でもわたし、譯はちつとも知らないのですよ。北村はあのとほりで、私には一言だつて話してもくれませんものね」

「近ごろでもやつぱりさうですか」

「え、え！ 前よりもそれはもつとひどいのです」

お八重のかすかな吐息を赤木は感じた。さうしてこの話題に深入りすることはいけないと氣がつくと彼は煙草を一本吸ひつけながら、お八重の吐息を無視するやうな輕快な調子でひとり言めいて呟いた——

「あ、實によく晴れたものだ」

事實、きのふの雨は一夜のうちにからりと晴れ渡つて、高い空には雲一つなかつた。赤木は出がけに玄關に置いてあつた北村の古ステツキを見つけてそれを持つて來たが、元氣よくくるりと一つ振りまはした。赤木の調子と動作とにつり込まれたらしくお八重も空を仰いだ。

赤木は深く植込んだ前栽のある別莊の並んだこの町通のありさまや、またそれらの門前の細流が昨日の雨で勢よく流れ去るのなどをもう一ぺん見なほしながら、お八重を慰める言葉を言ひたいのを感じた。さうしてそれを憚つた。それは北村に對する遠慮ではなく、寧ろ彼自身のその心持の深さから出てゐた。

道に沿うた水が分れて、と一つの庭園のなかへ導き込まれてゐるのを、赤木は注目しながら、

「いい町だ。きのふ窓から見た時よりもつといい町だ

赤木はちよつと立ち留つて、煙草の吸殼をぽんと水のなかへ投げ込んだ。

「ここがそんなにお氣に召したら」お八重は言つた、赤木の投げたものが浮んで流れしかし直ぐ水中に卷き込まれたのを見ながら「あなたもここへ來てお住みなさいな。わたし、美代子さんとお友達になるわ」

「……」

赤木はものを言はずに歩き出した。

「ね、さうなさいましよ」お八重は重ねて言つた。赤木の深い沈默をお八重は氣がつかなかつた。お八重は人の心を見拔くことのおそい女で、それを北村がいつも一口に馬鹿と言つてゐるのだが。

赤木はやつぱり答へようとはしなかつた。彼はお八重がきのふ窓際で言つたことを思ひ出して、やつと口を利いた——

「あなたもこの町が好きですつて？」

「……」お八重は一つ頷いてみせて「わたし、ここでいいお友達が出來ましたよ。——この方は本當に親切。わたしのやうな者でも一人前におつき合ひして下さるわ。……」話しかけてお八重は、急に氣がついたらしく、今通りすぎたところを振りかへつて唐突なほど晴やかな調子で「あそこ。ユリ子の行つてゐる幼稚園ですよ。え。教會堂」

靜かな廣い通はすぐに盡きて右へ折れると、賑やかな表通りへ出た。そこはAの方へ行く輕便鐵道の停車場や、H溫泉へ通ふ乘合自動車の待合所などの集つた場所であつた。お八重は袂から小さくたたんであつた風呂敷をとり出すと、大野のところへ手土産を持つて行かうといふので、赤木をその店の前に待たせたまま、彼女は一軒の菓子屋へ這入つて行つた。買ひ物をしてゐるお八重の横顏と姿とを赤木はやや遠くからぢつと見てゐた。身だしなみのいいお八重はいつも結ひ立てのやうな丸髷で、それに彼女は今だに彼女のむかしの習慣をすてずに、黑繻子の襟のかかつた着物を好んで

着てゐる。その縞柄の月並なのもおつとりとしたお八重には似つかはしい。着痩がして背は高くないがすつきりと見える。このお八重を一目見て、この女の夫を羨ましいと思ふ者があつても――現にここにもひとり、赤木齊吉が居るのだが、この人の目を引くほど淑やかで美しい彼女がどうしてそんなに不幸な、愛に飢えてゐる者と思へるだらうか。本當に彼女こそ誰からも愛せられていい女なのだ。赤木は、今までの道々に彼女が話したその新らしい知人たちといふのを考へた。その人たちがみんな彼女を愛するのはあたりまへである。彼女はその人たちから針仕事や、三味線を習つてゐると言つたが、赤木はそれだけで、何となくお八重の近ごろの生活に觸れ得たやうな氣がした。家を外にして滅多に歸ることもなく、歸つたからと言つて口一つ利くでもなく、もしたまに物言ふ時には叱られるだけの夫を持つて、たつたひとりの子が幼稚園へ出た留守には、近所の家で朝のうちには三味線をさらつて貰ふ。晝からになると針仕事をする。彼女がどんな事を考へながら古來の愛慾の歌をうたふか、夫や子供の着物を縫ふ針を運ぶか……

人どほりの少くない眞晝の表通の眞中に、赤木はぼんやりと立つて、ふと目の前二三間ほどの向ふにゐるひとりの女をつくづくと哀れに見た。お八重はうしろから凝視されてゐるのを無意識に感じでもしたのか、その中高な横顏をふりむけて、赤木の方を見ながら無意味に笑顏をした。お八重は赤木の表情を見て待ちくたびれてゐると思つた。買ひ物を受け取ると急ぎ足で赤木の方へ歸つて來た。

その賑やかな場所を直ぐ横切つて、山際の町に出ると、間もなくお八重は道の片脇にある急な坂を指さした。風變りなので知られてゐる大野の家といふのは、山上の寺の境内にあつたが、この坂がそこの山門であつた。片側には可なりな大きさの杉なども雜つてゐる。思ひ出したやうにところどころ石段があるが、赤土の坂は昨日の雨に洗はれて、あちこちに出水が吹き出てゐる。

「お氣をつけてゐらつしやい。滑りますよ」

自分が滑りさうになつたのでお八重が注意をした。後から呼びかけたそのお八重の聲がやや遠いのに氣がついて、彼女を待たうと赤木は立ちとまつて振返つた。家々の屋根の上に、くつきり、隈取のやうに二寸ほど海が見え渡つた。青い。

「氣の晴れるやうな眺めだな」

「上へのぼれば、もつと……」

言ひながらお八重はいくらか苦しさうに登つてくる。

山上の大野の家は好かつた。別に門といふやうなものもなく、小さな木戸のなかは雜然と茂つた草花の庭で、咲きおくれた向日葵の小さな花が咲きそめたコスモスのなかに雜つてゐた。その草のなかにはまだ鉋屑などがちらばつてゐて、その新築の洋館といふのはかういふ高いところにあるものとしては背が高すぎたけれども、奇を弄しない形が反つてよかつた。その白いのも爽やかであつた。ひつそりとして麓の町の鷄犬の聲が聞かれた。お八重は二度ほど聲をかけたけれど取次に出る人もなかつた。様子を知つてゐるお八重は、少し奧まつたところにある離座敷の方へまはつて行つた。

「大野さん。大野さん。――いらつしやいますか」

お八重はわざとらしくない程度の作り聲で朗らかに呼んだ。

うしろに竹藪のあるその全く日本風な離座敷のなかに大野は籠つてゐた。彼は偶然にも北村の事を考へてゐた折から、お八重の聲を聞きつけると、急に立ち上つて自分でも氣づかないうちに手荒く障子をあけた。どういふわけでさう氣負

ひ込んでゐたか彼自身も知らない。とぼけたやうな腑に落ちない表情をして、よく肥つた大野は茫漠とした一瞥をお八重と赤木との上に注いだ。その目は小犬のもののやうに人懐つこい。

「や、君か」赤木を認めると大野の童顏にゆつくりと微笑が現れた。「お上り、ね、奥さん」彼は赤木とお八重とに半分づつ言つた。

大野と赤木とは別に深く交つた事はなかつたけれども、お互の仕事の上ではよく理解し合つてもゐたし、北村などのやうな共通の友達もあつてよく噂に上り合つたし、それにこのふたりの性質としては何も改つて挨拶するやうな言葉もなかつた。

「いつ來たの。けふ？」

「いや。きのふ。――君、仕事中ぢやなかつたかい」

「うん。急くことがあるんにはあるだ。だが、出來やしない」

「ほんとうに御邪魔ではございませんの」

「いいや、いいんです。遊ばう。」

大野は重い言葉つきで、ぶつきら棒に、しかしいつも柔和な笑を持つてゐた。赤木は大野の人柄を自分の神經質に引較べて一しほ好もしいものに思つた。この部屋にも落着きを感じた。彼等の無言の對話を解して、お八重も默つて、客のやうに取済して坐つてゐるのを赤木は見た。このお八重さへこの場に居合せなかつたら、赤木は、お八重に對する彼の氣持や、美代子に對する方法や、何もかも大野に話し出しても見たいやうな氣持にさへなつてゐた。

お八重が言ひ出して、大野は赤木を新築の二階へ案内した。大野の言ふとほり家はまだ八分どほりしか出來てゐなか

つた。それでも見晴の最もいい二階の重な部屋一つだけはもう家具も揃つて、大野が時をりに來ると見えて、現に丸い小卓の上には讀みさしの本が開けてあつた。

――實際、大野は好んでこの部屋へ來た。物珍らしさからここへ來て坐ると、いつの間にか彼の不貞な妻に就ての長い回想になり、それが消へ去らない未練から始まつて憤りに終ると、またそこから始まつて未練へ還つて行つた。からしてひとりで、隱れた時を過すにはここが最もよかつた。――

あたりを見まはしてゐる赤木に向つて大野は言つた――やつとここまで出來たんだ。けちのついた家だ。たたき壊して燒いしまはうと一時は思つた。だが大工が承知しないよ。まだ金は半分よりやつてゐないものね」

彼は激しい事を微笑しながら言つた。それがしかし冗談らしくなかつた。赤木は返事の仕方もなくつて默つて立つてゐた。

「ね。ほんとうにいい景色でせう。――大野さんの御自慢……」

言ひながらお八重は少しおくれて二階へ上つて來た。その言葉を機に赤木は露臺へ出ると、お八重も大野もそこへ出て來た。

廣い景色が彼等に展開されてゐた。つきあたりにある近い林――お八重と赤木とがさつきその木の下の路を通つて來た――を中央にして、その梢にかけて右手は海だつたし、左手は山々であつた。このくつきりとした初秋の午後のパノラマは、仔細に部分々々を見るほど豐かになつて來る。遠い山々の皺。岬。水平線に横はつてゐる鮮やかな島。その島の山を雲がつつんでゐるのは、その島にある噴火山のせいだといふことがわかる。光の種がきら／＼と海原に蒔かれてゐる。その海は廣かつたからところどころ潮の色が變つてゐる。手近な丘の畑。竹林。茶畑。それから重つた屋根とそ

の向ふに砂濱。……

「奥さん」赤木はお八重を呼びかけて「あなたの家は、どこらに當るんです」

「さうね。――あそこに」お八重はふり返つて一度赤木の顔をちよつと見てから「一番近くの松原が見えるでせう」

「小さな川見たやうなものがあるあたり?」

「え。あの直ぐこつちですわ。きつと。ね。大野さん」

「あ、さうだらう。あの邊だ」

大野は別のことを考へてゐたから、無頓着に無愛想に答へた。それがお八重に氣の毒に思へたので赤木は言つた。

「あんなに海の近くですか。道理で、夜はよく浪が聞えると思つた」

「え、すぐ裏ですもの、それにゆうべは浪がありましたわね」

ふと三人とも押默つてしまつた。

お八重、

大野、

赤木、

かういふ順序で立つた三人は、そこの欄干の上へ兩手を突いたまゝ、彼等はいづれも前方の風景に目を注いでゐたが、別にそのどこをも今は見てゐるのではなかつた。この自然に對してほんの暫く忘れてゐた事どもを今はまた思ひ出してゐたのだ。――彼等はみなこの晴やかな空を見ずに、彼等の心にかぶさつてゐる密雲を見てゐた。

「奥さん」大野がお八重を呼びかけたのは少し不意だつた。

赤木とお八重とは、左右から無意識に大野の顏を見た。わけても赤木には、大野の聲が太く低く、妙に重々しかつたやうな氣がした。

大野は言ひつづけた「北村君は？　うちにゐましたか。留守？

「ええ、留守ですの、――Yへ行つて」

「よく留守になるなあ。いつ行つたのです」

「おとつ日ですわ」

「困るなあ」

呟くやうに言ひ放つた大野は、急に赤木の方へふり返つた。大野と顏を見合せた赤木の顏には同感の表情があつた。けれども赤木は大野がこの話に深入りしないことを望んだ。それは謂はれのない事ながら、赤木にとつては彼自身の生活に觸れられるかのやうな不安を萌芽した。しかし大野はその重い口をもう一度開いた。

「お雪ちやんは、この頃、見えませんね。ずつとYにゐる？」

「きのふの朝來てゐましたの、夕方になつて急いで歸りましたわ――今日は雨でも朝早くから撮影があると言つて」

「うむ」

「さう、さう。お雪はいつも御宅へ上るんですつてね。おうるさいでせう。騷々しいんですもの。御邪魔な時はおつ拂つて下さいな」

「いいや。なあに。一向」

赤木は吻と安心した。大野の言葉のなかには彼が意識するかしないかは知らないけれども、お八重に暗示するやうな

語氣があるのを、彼女は少しも氣づいたらしくはない。大野もそれ以上深入りしさうにもない。

「ともかくも、さういつても留守では困るなあ」大野は、北村に對する憤とお八重に對する同情とを半々に感じながら、突然、再び赤木を顧みた。「君、何とか言つたらいいだらう。北村に」

大野はごく低い聲に力を入れて言ひながら、赤木の顏を覗き入つた。赤木はまた、大野の瞳を見入つて、思はず太い溜息をした。

――さう簡單に、僕も言へないわけがあるんだ。それにこの女にそんな事が言へるものか。あまり傷々しすぎる。

赤木は口に出さずに、その深い沈默のなかにこれだけの意味を込めたかつた。

その理由は知らなかつたけれども大野は、赤木の當惑の程度を感じた。

「ねえ君」大野はいつもの溫和な口調に返つて、背後の壁を平手でたたきながら「ここは、この外壁は、君、どんな色がいいだらうねえ。かうして白く下塗りしてあるんだが」

「うん。――さ、ね、」――大野の言葉で強い刺戟を受けた赤木の困惑は、ちよつとでは救はれなかつた。赤木は無理に答をあせつた「妻君が急にゐなくなつたのぢや不自由だらうね・君」

言つてしまつてから赤木は、自分の答への實にとんちんかんなのに氣がついた。この、さつきから心の底にあつてわざと言はなかつた大野に對する言葉が、どうしてこの時不意に口を出たか彼自身も知らない。しかし、ちぐはぐな言葉を、大野は別に怪しむでもなく答へた。呻るやうに、

「うん!」

さうして大野は、まるで少年のやうに顏を赤くした。

この時、茶と菓子とを持つた老婢が二階へ上つて來て部屋の扉の外に立つた。

「もうし。ちよつと恐れ入りますが、ここをお開け下さいませんか、――慾ばつて兩手へ一度に持つて來ちやつたものだから」

お八重が聲をききつけて扉を開けた。さうして皆は、部屋のなかの小卓のまはりに座つた。

この老婢は長いことの大野の家に住みついてゐたので、もう家族の一人のやうになつてゐる。さうしてひとりでよく話し出したので、彼等皆もだんだんと世間普通の主人や客らしくなつた。客たちはこの新築の家の長所を先づ讃めてから、庭の少いことを惜んだ。主人と老婢とはその理由を説明して、隣を或る成金に買はれてしまつてどうもならない事やら、この屋敷の方が見晴がいいといふので成金はこちらに庭を別けて與へるどころか、こちらの屋敷まで侵略したがつてゐたことやらを話し出した。赤木は氣がついて、窓からも一度見ると、隣には廣い土地が赤裸(あかはだか)になつて土の色を現はしてゐた。

「今にあそこへ俗な梅林でもこしらへる積りだらう。へんなことをされると堪らないね。向ふじやなほのこと堪らないのかも知れない。こちらから見下されて、こちらの庭のやうな氣がするだらう。それにこの家のせいで山の方があまり見晴せないさうだよ。――この間も笑つたのだが、いづれ、このつきあたりへ立派な門でも出來るだらうが、さうすれやその門から眞直見通しにレンズを向けてこの家の寫眞をとると、ここは眞正面だ。門から庭からすつかりこの家のもののやうにうつるぜ。そいつを一つ畫ハガキにでもするかつて」

皆は笑つた。

大野は建物のあらゆる部分を、浴室から洞方(アン)のやうなところまで案内して見せた。大野よりも老婢の方がうれしげで

得意であつた。最後に大野は客を屋根裏へつれて行つた。彼はそこを童謠の部屋にするつもりだと言つた。小童たちの書物や繪本の小圖書室にし、國々から來る玩具を蒐集したりして、近所の子供たちを集めて幼稚園のやうに遊ぶのだと言つた。童心を求めてゐるこの詩人の自らの慰めとしては面白いに相違ない。

「さうすれば、私もユリ子もお仲間へ入れて下さいな。」

お八重はそんな事を云つた。

赤木は台灣の田舍で物好きに買つた蛙の玩具を思ひ出した。泥で出來た原始的な形で、眼の赤い大きな青蛙が、腹を押す度に喉にある笛でギアく\と鳴く。あの大味な玩具は大野を喜ばすだらう。赤木が思ひ出すまゝを話し出すと、大野が氣がついて彼に旅の話を要求した、話の好きな赤木ではあつたが、少し話すうちに興を失つてしまつた。といふのは、いつの間にか彼等の仲間から放れてその屋根裏の低い窓から外を見入つてゐる物思はしげなお八重が、赤木の目についたのである。

君、何とか言つたらいゝだらう。北村に。

さつきの大野の言葉が、心のなかに刺になつてさゝつてゐるのを赤木は感じた。窓に立つてゐるお八重の後姿を見入つて、赤木はふと美代子の姿を思ひ浮べて、それが彼の心のなかで刻々に鮮やかになりつゝあるを見た――嫌惡の心持で。お八重がもし自分の妻であつたならば、どんなに幸福だらうかといふ假想が、再び赤木の念頭に浮んだ。それは既に一年も前に根ざしてゐたもので、しかし長い旅の間にもうすつかり忘れてしまつてゐたものであつた。かういふ雜念のためにいつの間にか興味がなくなつて旅行談は終つてゐたが、あまりに締めくくりもない話に氣がついた赤木は、一旦噤んだ口をまた開いた、

「――旅も好い。が、一たい僕はそんなボヘミアン・ライフより、落ち着いた書齋の生涯の方がもつと好きなのだ。君は羨しいよ、ともかくもこれだけの家が出來て、これから好きに靜かな生活が出來るのだものね。――それや不足や不滿はいくらもあるだらうが。それもそのうちにはぼつぼつとまた取返しがつくだらうよ。僕もどうにかして平靜な生活を初めたいなあ」美代子の幻を打拂ひながら赤木はさう言つた。

「君もここへ來るといいな。――いくらもあるよ、いい場所が」

「………」

「君は一たいどんなところが好き?」

「僕かい。僕はどちらかといふと、陰氣な、山かげのやうなところがいいよ――毎日見る景色とすれや。それで日あたりのいい溫い――つまり山懷(やまふところ)か何かの………」

「さういふところもいいねえ。あるよ、きつとあるよ」

「――出來る事なら、僕はさういふところで簡素な貧乏な、しかし呑氣な生活がしたいのだ。それが僕の氣質らしい。いや、氣質かどうか知らないが、僕の今の望みだ」

「さういふ生活こそ我々には本當なのだ。北村のやうな氣持は僕には判らぬ」

「本當か僞かは知らないが、たゞ僕はさういふ風に引込み思案になつてゐるのだ。――尤も、今時分からそんな隱居風ぢや仕方がないが」

「でも東京にゐて押合ひをしてゐて何になる。仕方があるかい」

「仕方がないさ。さう言へば。何もかも仕方がないさ」

た。

「仕方がないさ〳〵か」

大野と赤木とは聲を合して笑つた。無意味な淋しいものであつた。それを、お八重は眞面目な顏つきで振かへつて見た。

「理窟はやめて、ここへ來るといいのだがなあ。田舍は、君、いいよ」大野は赤木を說いた「この家を建てた大工はいいんだよ。變つた家を造るのに興味を持つてね。ここだつて滿足に金は拂ひはしないのだ。それでも何とも言はない。尤も金をやらないものだから、先生困るんで、時々金を貰へるところへ仕事に行く。現に今もさうなのだが、その間はここの仕事は休みだ。でもいつまでも休みはしない。いい加減かせいで來てはまたこつちへかかつてくれる。そんな事は君、田舍の人でなけやしてくれまい。うれしよ、ねえ」

「それは面白いね。出來ることなら、僕もその大工さんの恩惠に預りたいね」

「さうしてまた一つ『煙れる田園』を書いて見せてくれるのだね」

大野のこの言葉に赤木は恥を感じた。『煙れる田園』といふのは小說家赤木淸吉の出世作と言はれてゐるものであつた。赤木はその作を一つ力を籠めて書いたきり、その後四年間といふものは何一つ碌な仕事をしてはゐなかつた。たゞジャアナリズムと彼の財布とが要求するまゝに、赤木は書きはしたけれど仕事に專念になるやうな生活を持たなかつたのだ。さうして彼の才能は彼の氣の毒な生活の爲めに壓し殺されつゝあるやうに見えた。大野が無意識に、寧ろその作を賞讚するつもりで言ひ出したとは知りながら、赤木にとつては、それが彼のその後の作品の無價値を論じられたと同じように恥を感じた所以である。

「こゝ、汽車の笛が聞えますわねえ、大野さん」お八重は不意にさう言つた。

「えゝ、聞えますとも。つひこの山のうしろが停車場だもの」

「奥さん」赤木が言つた「北村もう歸るかも知れませんね。ぼつ〳〵失禮しようか」

「さうかい。で、君は今日東京へ行くの」

「いや、多分あすか、あさつて」

「そのうちもう一度ゆつくりくるよ。——歸りにでも」赤木は椅子から立ちながら「僕は一二日東京にゐて、また直ぐ故郷(くに)へ一度歸るつもりなのだからね」

　別れ際に下駄をはきながらお八重は言つた「大野さん。あなたも時たまには宅(うち)へもお出かけ下さつてもいゝでせうにねえ」

「えゝ」大野はいつも訪客に親切なお八重に對して暫く躊躇してから言つた「そのうちに、また自然と行くようになりますよ」

　赤木とお八重とは默つて歩いた。木かげの下の辿りやすい坂を下りる時、お八重が一言、

「辰子さんはどうしてゐらつしやるでせうねえ」

　と言つたきりであつた。

　赤木にはお八重の長い沈默が心がかりであつた。さつきの大野の言葉が、お八重を考へ込ませてしまつたのではないかと思はれてならない。あの露臺での會話の時、お八重は何の變つた樣子もなかつたが、そんなことがすぐ外に現はれるお八重なのだが、今になつて大野の言葉から暗示を感じ出したのではないだらうか。大野はまた何だつてお八重にあんな事を言ひ出したのだらう。これでもまだ氣がつかないかと言はないばかりであつた。いや、あれはお八重に言つた

のではない、俺に言ひたかつたのだらう――赤木はさう思つた。

君、何とか言つたら、いいだらう。北村に。

――それにしても大野のお八重に對する同情は尤もながら、さてさういふ事實をお八重が知ることは果して彼女にとつて幸福を增すだらうか。赤木は曾て、彼が同じ境遇を愼吉によつて明された時の自分を、さうしてまたその後のまる二年に近い間の彼の心の追想をし出した。お八重の足どりのままにゆつくり歩きながら……

* * * * * * *

口を緘ぢたまま何とも言ひ出さない淸吉を見上げて、愼吉はほつと溜息をして「兄さん、何も知らさなかつた方がよかつたか。その點は隨分考へたのだが」蒼白くなつた顏で、目には淚を光らせて愼吉がさう言つた時、淸吉はやつと始めて口を開いた。「いいや」彼は額の油汗を掌で拭いて、その掌をまた着物の膝へすりつけながら、目は讀んでもゐない夕刊の上を辿りつつ「どんな事だつて自分に關係のあることなら知りたいよ。知つた方がいいよ。どんな苦しい事だつて。俺はさう思ふが、知るといふ事それ自身がやつぱり一種の幸福だらう。知らないのが仕合せといふのは、尠くとも哲人の言ふことぢやない。人生の苦痛でも知つて味ふのが幸福だ。――俺はさういふ哲理を信じてゐる。だからお前に知らして貰つた方がいいのだ。言ひ憎いことをよく言つてくれたね」

一つの情景と一緒に、その時彼自身が言つた言葉を、赤木淸吉は思ひ出した。さうしてその言葉は本當だとは思ふが、またさう心がけてゐた彼ではあつたが、その苦痛とはどんなものであつたかはその後の月日とともに、淸吉にもわかつて來た。初めは、何これしきのと思つた荷物が步いて行くうちにだん〳〵重量を發揮するやうに、本當の苦痛とい

ふものは決して歳月とともに消え去るものではない。ただそれに、負けないだけの力を、それを負ふ者が得て來るまでは。さうしてその力はなかなか得られないものなのだ。現に、淸吉はもうそいつを投げ出さうと思つてゐるのだ。

その同じだけの重さをどうしてお八重に背負はせることが出來るだらう。知らないのがいい。何も知らないうちに北村がそつとお八重をこの境界から脱出させなければならない。その方法は北村がお雪を捨てるのが第一だが、もし彼がそれをしないならば、寧ろお八重を捨てる方が今日のこの狀態よりは迥に好いのだ。一たい北村はお八重を少しも愛してゐないと斷言してゐる。機會ある每にあらゆる人に斷言してゐる。それならば勿論、北村はお八重を捨てる方が、北村として本當でなければならない。さうして、それから北村に捨てられたお八重は、それぢや幸福だらうか。幸福を見出すだらうか……。さう、尠くとも今のお八重よりもより不幸なお八重はなからうから……。しかし幸福とはさう客觀的なものではない。お八重は每日泣きながらさうしてお雪と北村との間柄を知りながらでも、北村と同じ家にゐて吐鳴られてゐることだけでも、捨てられるより幸福であるやらも知れない……

赤木は考へつつ歩いてゐるうちに、解らなくなつてしまつた。そのあたりがちやうど敎會堂のあるあたりで、ユリ子の行つてゐる幼稚園だつたので、赤木はうなだれて歩いてゐるお八重を覗き込むやうにして言つた、

「ユリ子ちやんは誰と幼稚園へ行くのですか。」赤木は出がけに女中がふたりとも家にゐて見送つた事を思ひ出したのだ

「ひとりぢや行けないだらうが」

「え？」お八重は赤木の質問を一瞬間理解し兼ねたが直ぐわかつた「お婆さんと一緒に行きますわ」

「お婆さん？お婆さんて、どこの？」

「あ、まだ御存知なかつたのね。私のお母さんよ。本當のお母さんではないの。養母です。さうして本當の伯母さんで

すわ。去年の冬から來てゐるんですよ」

「あ、さう。それはいい。——幼稚園は何時まで」

「三時ですよ、大てい。お婆さんがそれやユリ子を可愛がつて、ちようどいい遊び相手なのですよ」

そこを通り過ぎる時、お八重はずつと門の中を覗き込んだ。植込みのなかの細い道の奥に、子供たちが集つてゐるけはひがした。お八重は改めてもう一度路の前方を見た。女中の光か好みが來るのに行き合はしないかと思つたのだ。北村が歸つたら大野のところへ迎へに來るやうに女中に言ひ置いてある。さつき大野のところで聞いた汽笛の汽車で、もし北村が歸つたとしたならば、もう家へ着いてゐなければならない。女中が迎へに來る筈である。しかし道には、誰の人影もない。明るい日向の道には、櫻の落葉が黄色く敷き散らばつてゐた。近い邸にその枝があつて、路につき出たその枝からは、今も落葉が下ちて來てゐる。……北村の起きるのはいつも晝だ。だから朝のうちに彼が歸らうとは思はないが、起きてから直ぐに來るとすればもう來なければならないのだ。空しく待つてゐる赤木にも濟まない。赤木の電報も見ないか知ら。一たいどこで何をしてゐることやら。お雪もまだ逢はないのだらうか。お八重は考へたくない事をまた思ひ出した。いつか辰子が言つた事、お婆さんが言つた事。さうだ。それをこの人に打明けてみよう。

お八重は顏を上げて、自分と並んで歩いてゐる赤木の横顏を視た。口に出かかつた言葉は、しかし、何も言へない。さうして一つの衝動を急に制したために、お八重の心臟が急にはげしくなり、血が頬に上つた。言ひたい。言へない。言つた方が氣が輕くなる。聞きたい。しかし恐ろしい。愼しみのない事だ。しかし、一度は誰かに言はずにはゐられない。さうして誰かとはこの人より外にはない……

赤木はさぐつて見た煙草の袋がもう空になつてゐたのを、懷のなかでくしや〳〵と丸めた。そのまま懷手をして、歸つてみたら北村がもう來てゐるやうな氣がしながら歩いてゐる。

編輯だより

◇支那の排外運動は意外に瀰漫しつつある。尤も今までも機會のあるごとに試みられたものではあつたが。今度のそれで著しく感ぜらるるのは、これ迄統制力に缺げていた支那勞働者が、組織的になつたことと、共産主義的風潮が支那智識階級を風靡していること、それから支那の青年たちが新支那を創出する運動の宣傳の鮮かに見事なこと等である。

◇陳獨秀は支那新運動の闘士である。段棋瑞は武斷派の棟梁である、しかして兩者とも國家の偉人でもなく、全人道の偉大なる使徒でもない。支那といはず、日本といはず祖國を重からしむる人格の乏しいのは心さびしい。

◇夏は旅がしたい、涼しい旅がしたい。しかし多忙な身にはそれも許されない。せめて古人の涼句韻詠どもひつくりかへして味讀するのが關の山だ、またそうすることに依つて清風がどこからかわいてくる。「病葉に還れ」の聲がかしこ、ここの學生街に聞ゆるのは面白い一現象だ。

◇何といつても芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲」は幽寂の極致をきはめている。彼の俳趣、禪味がなかつたならどうしてこのような神作が出來やうぞ。十七字文學にして滔々數萬言以上の效果をもたらし、文學もここまで來ればならぬとさながらに舌打ちせしめる芭蕉の偉大さに頭が先づ下る。

◇このごろ感じた歌が二首。「山岸に晝を地蟲の鳴きみちて、このしづけさに身はつかれたり」「みんなみの嶺岡山の燒くる日のこよひも赤く見えにけるかも」前者は迢空にして後者は千樫である。この二つの歌の如きは慥かに古歌聖のそれに勝るとも劣るものではない。

◇「社會科學」の生誕に對する讀者の批評は馬鹿によい、創刊號は發行早々にして賣切れ、再版をした位であつた。第二號も充實した内容を以つて發刊された。讀者諸君の適確なる批評がききたい。

◇各大學學生が近年經濟難のため退校したり授業料が納付が出來なかつたりするもの頻々現るるに至つた。先覺者は周到なる考慮を煩はし貰ひたい。

◇「赤い屋根」は近來の力作だ。また幸田露伴氏の「觀獵談」は雨の夕に靜讀するにふさはしい。

◇「改造」の論文欄に每號新進者の執筆をお願するつもりだ。いつでも陳滯の氣を破りたいつもりでいるがいろいろの事情で實行が出來ず赧顏の至りだ。ただ今後は實行を以つて諸君にお目にかかるのみだ。

◇とにかく我誌の論壇に社會によき效果の生れる論策を求めている。眞率の態度で、あまり世の中を茶化したものでないものであつて欲しい。自分の訴へたいものはその動機が純乎潔白であつて欲しい。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	書留共郵税不要
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	書留共郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲各號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾四年六月廿日印刷納本
大正拾四年七月一日發行

（價九十錢）

編輯兼發行兼印刷人　東京市芝區愛宕下町一ノ一　平川貫一郎
印刷所　東京牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

改造社運動叢書

梅澤親光著

（四六判上製）

定價貳圓　送料二十錢

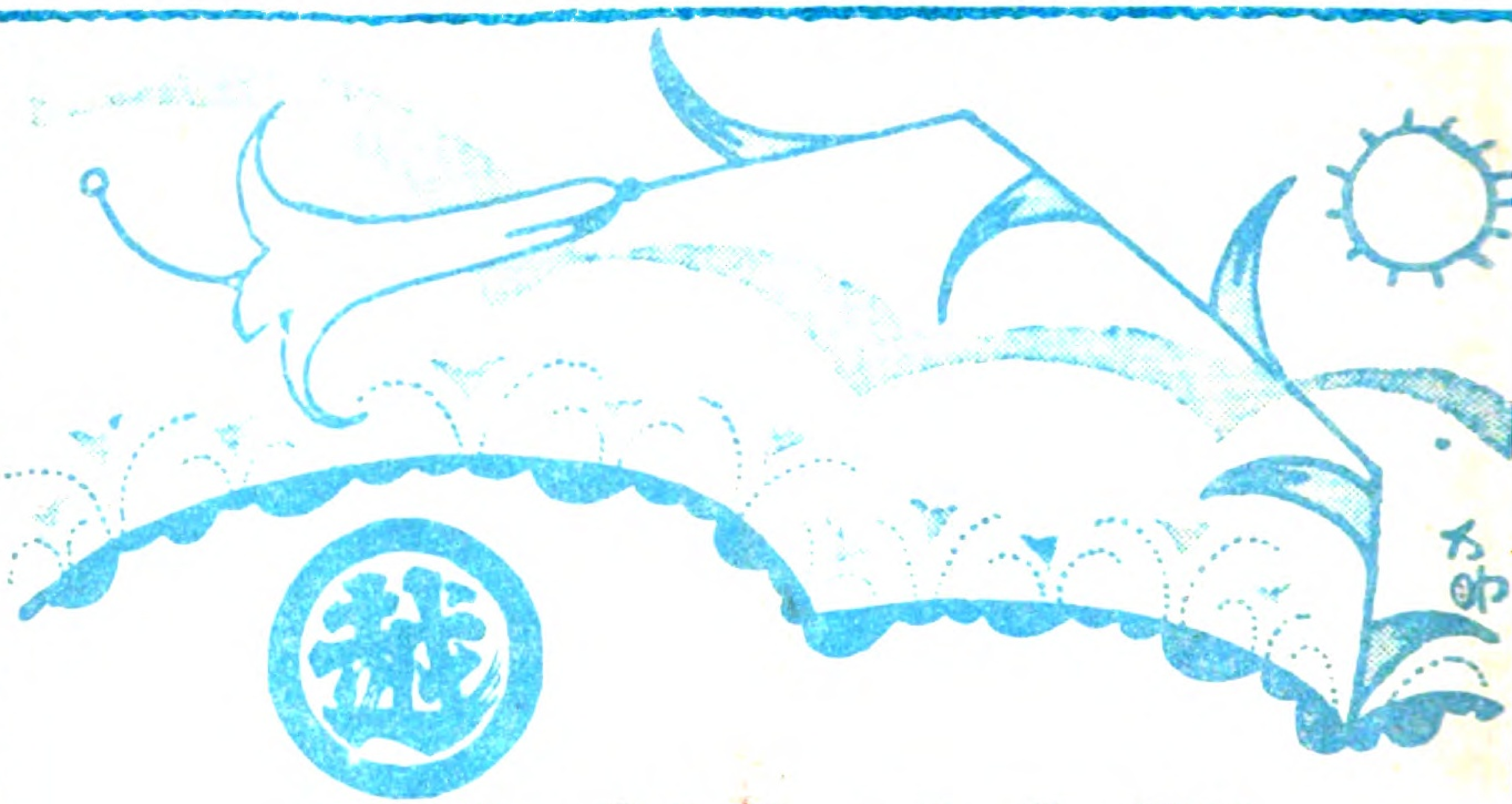
〔改訂版〕

水泳

水泳界の權威梅澤氏が、一般水泳者のためにかいた我國で唯一無二と云つていい遊泳子の好侶伴。今までは水泳が科學的に取扱はれなかつたが、氏は新式の水泳術を科學的に、系統的に纏めて海洋男子のために、大に蘊蓄を傾けた。

著者	書名	判型・定價・送料
熊谷一彌著	テニス	四六判上製　定價二圓三十錢　送料二十二錢
香山蕃著	ラグビー	四六判上製　定價二圓五十錢　送料二十二錢
三宅大輔著	野球	定價二圓八十錢　送料二十二錢
平井左門著	山岳スキー	定價二圓五十錢　送料二十二錢
野口源三郎著	オリンピアへの旅	定價二圓五十錢　送料二十二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京二〇四八



御中元大賣出し

御贈答用には三越の品

御中元の御贈答品は何方様にも喜はれる三越の品を御用ひ遊ばすに限ります。三越では御選擇の御便宜の爲め『御中元大賣出し』を開催致します何卒御用命の程御願ひ申し上げます

七月の三越

- ◆中元格安反物賣出し…一日より十五日まで
- ◆中形浴衣地陳列會…前月より引續き
- ◆夏季用家具新製品陳列會…前月より引續き
- ◆全國メロン品評會…五日より七日まで
- ◆神奈川縣名産品陳列會…十九日より廿九日まで
- ◆白日社主催現代大家新作半折展覧會…十九日より廿三日まで

商品券

御望の品は何とでも御引換が出來ますから贈るに便利、受けて重寶

東京市 **三越呉服店** 駿河町

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

